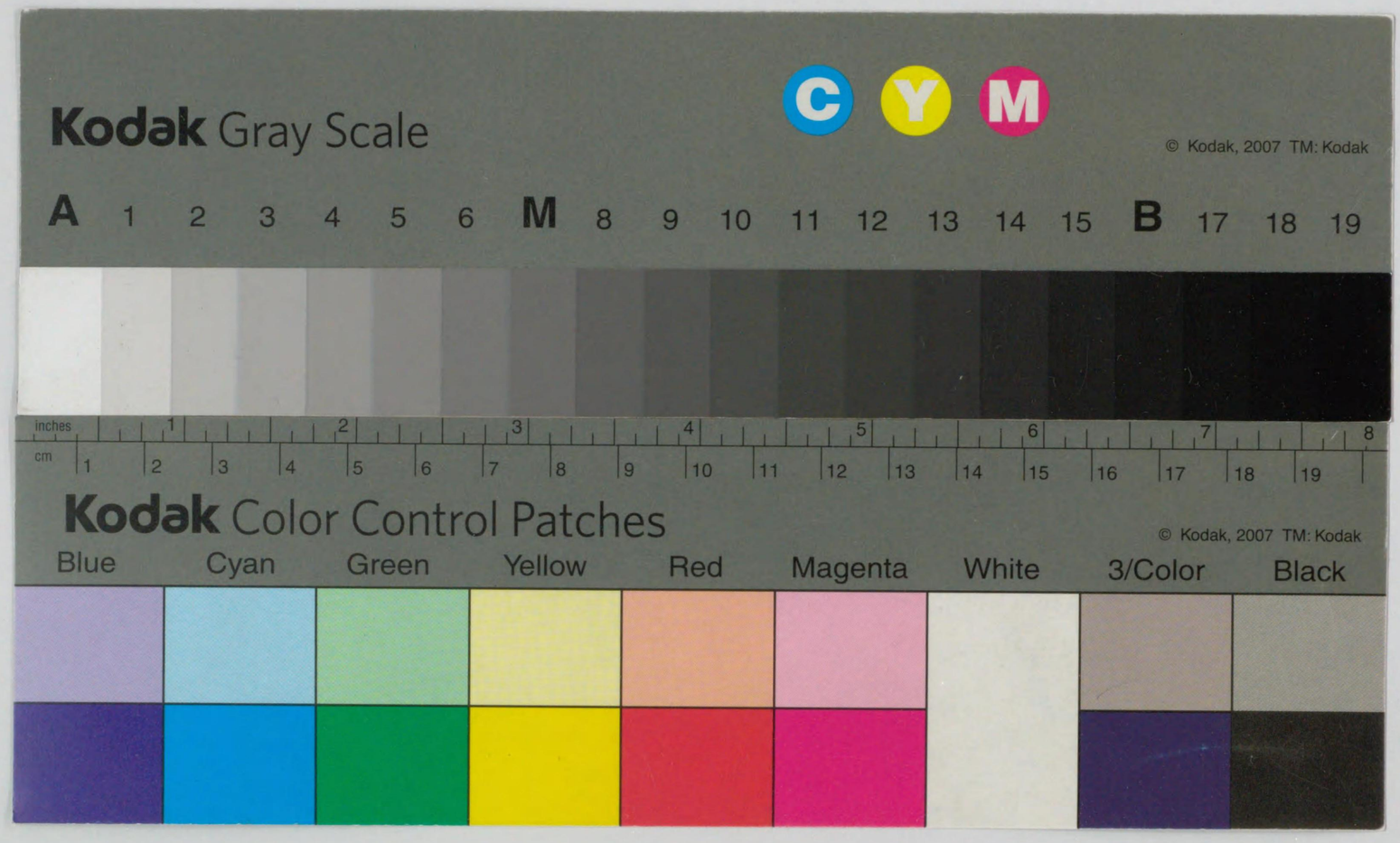

594
594-14
12005015269D6

ㅗㅏ2L-60
2800

編纂顧問　三上參次
編纂主任　佐伯有義

六國史

卷參

朝日新聞社藏版

594-14

續日本紀

卷上

續日本紀

解說

一、書名

續日本紀は、日本書紀に次ぎて文武天皇元年丁酉の年より元明・元正・聖武・孝謙・淳仁(淡路廢帝)稱德・光仁天皇を歷て、桓武天皇延曆十年まで九代九十五年間の恒例臨時の公事・政事・法制・外交・任官・叙位より祥瑞・災異に至るまで、悉く網羅して遺す所なし、之を續日本紀と名づけられしは、日本書紀の續篇といふ意なるが、其の名稱は、延曆十三年の上表には未だ見えず、同十六年の上表中に始めて見えたり、さればかく書名を決定せらるゝまでには、種々の說出で、幾度か論議を經て確定せしものなるべし、其の讀方は、一般にショクニホンギと言ひならへるが、思ふにかく讀めるは、當時の博士等の相議して定めたるが、自ら世に傳はれるなるべく、後の好事家の說にはあらざるべし、然るに之に就きて伊勢貞丈氏の說に、我が朝廷の事漢音を用ふる事は少く、多くは吳音を用ふる例なり、されば此書名も吳音にてゾクニホンギと唱ふ

べし、すべて續の字付きたる和書は、皆漢音にてショクとよまば其下もジツボンとよむべしと云へり、此は一理ある說なれど、物類の稱呼は一つの習慣あるものなれば、道理のみにては推し難く、尙ほ讀み慣れたるまゝにショクニホンギと讀むぞ穩當なるべき、

二、編　修

此の書編修の沿革を考ふるに、全部四十卷完成したるは、桓武天皇延曆十六年二月なるが、是より先前後數回に涉りて編修せられ、幾度か改撰補修を經て始めて成れり、其の沿革の大要は、延曆十三年八月、及同十六年二月の上表に見えたり、十三年の上表は、類聚國史卷百四十七に、

延曆十三年八月癸丑、右大臣從二位兼行皇太子傅中衞大將藤原朝臣繼繩等、奉勅修國史成、詣闕拜表曰、臣聞、黃軒御曆、沮誦攝其史官、有周闢基、伯陽司其筆削、故墳典斯闡、步驟之蹤可尋、載籍聿興、勸沮之儀允備、曁乎班馬迭起、述實錄於西京、范謝分門、騁直詞於東漢、莫不表言旌事、播百王之通猷、昭德塞違垂千祀之炯光、史籍之用、蓋大矣哉、伏惟聖朝、求道纂極、貫三才而君臨、就日均明、掩八州而光宅、遠安邇樂、文軌所以大同、歲稔時和、幽顯於焉祓福、可謂英聲冠於胥陸、懿德跨於勛華者焉、而負扆高居、凝旒廣慮、修國史之墜業、補帝典之缺文、爰命臣與正五位上行民部大輔兼皇太子學士左兵衞佐伊豫守臣菅野朝臣眞道、少納言從五位下兼侍從守右兵衞佐行丹波介臣秋篠朝臣安人等、銓次其事、以繼先典、若夫襲山肇基以降、淨原御寓之前、神代草昧之功、往帝庇民之略、前史□著、粲然可知、降自文武天皇、訖于聖武皇帝、記注不昧、餘烈存焉、但起自寶字、至于寶龜、廢帝受禪、韞遺風於簡策、南朝登祚、闡茂實於徒誦、是以故中納言從三位兼行兵部卿石川朝臣名足、主計頭從五位下上毛野公大川等、奉詔編輯、合成廿卷、唯存案牘、類無綱紀、臣等更奉天勅、重以討論、芟其蕪穢、以撮機要、摭其遺逸、以補闕漏、刊彼此之牴牾、矯首尾之差違、至如時節恒事、各有司存、一切詔詞、非可爲訓、觸類而長、其例已多、今之所修、並所不取、若其蕃國入朝、非管制勅、語關聲敎、理歸勸懲、總而書之、以備故實、勒成一十四卷、繫於前史之末、其目如左、臣等學謝研精、詞慙質辨、奉詔淹歲、伏深戰兢、有勅藏于秘府、

と見え、此の文にて、寶字より寶龜に至る十四卷は、十三年八月に成れること明かなり、其の他の卷々は之に次ぎて、十六年二月に成れること、日本後紀卷五に、

延曆十六年二月己巳、先是重勅從四位下行民部大輔兼左兵衞督皇太子學士菅野

朝臣眞道、從五位上守左少辨兼行右兵衞佐丹波守秋篠朝臣安人、外從五位下行大外記兼常陸少掾中科宿禰巨都雄等、撰續日本紀、至是而成、上表曰、臣聞、三墳五典、上代之風存焉、左言右事、中葉之迹著焉、自茲厥後、世有史官、善雖小而必書、惡雖微而无隱、咸能徽烈絢細、垂百王之龜鏡、炳戒照簡、作千祀之指南、伏惟天皇陛下、德光四乳、道契八眉、握明鏡以總萬機、懷神珠以臨九域、遂使仁被渤海之北、貊種歸心、威振日河之東、毛狄屏息、化前代之未化、臣往帝之不臣、自非魏々盛德、孰能與於此也、既而負扆餘閑、留神國典、爰勅眞道等、銓次其事、奉揚先業、夫自寶字二年、至延曆十年、卅四年廿卷、前年勒成奏上、但却起文武天皇元年歲次丁酉、盡寶字元年丁酉、總六十一年、所有舊案卅卷、語多米鹽、事亦疎漏、前朝詔故中納言從三位石川朝臣名足、刑部卿從四位下淡海眞人三船、刑部大輔從五位上當麻眞人永嗣等、分峽修撰、以繼前紀、而因循舊案、竟无刊正、其所上者、唯廿九卷而已、寶字元年之紀、全亡不存、臣等搜故實於司存、詢前聞於舊老、綴叙殘簡、補緝缺文、雅論英猷、義闡貽謀者、總而載之、細語常事、理非書策者、並從略諸、凡所刊削廿卷、并前九十五年卌卷、始自草創、迄于斷筆、七年於茲、油素總畢、其目如別、庶飛英騰茂、與二儀而垂風、彰善癉惡、傳萬葉而作鑒、臣等輕以管窺、裁成國史、牽愚歷稔、伏增戰兢、謹以奉進、歸之策府、

と見えたり、此の上表と前に擧げたる十三年の上表とにて、其の沿革は知らるれど、頗る複雜にして解し易からざる點も亦少からず、故に年月の順序に從ひて、少しく之を說明せむと欲す、

(一)文武天皇より元明、元正、聖武天皇まで四代五十二年間の史は、夙に編修せられたりしこと、前表(延曆十三年の上表をいふ、下同じ)に『自文武天皇訖于聖武皇帝、記注不昧』とあるにて明かなり、されど之を編修せしめられし年月、及其の人名も詳ならず、其の卷數も何卷なりしか詳ならず、

(二)次に光仁天皇の御代に、石川名足上毛野大川等に勅して、淳仁天皇寶字二年八月より、當代卽ち光仁天皇寶龜八年迄二十年間の史を編修せしめられたり、此の事は、前表に『起自寶字、至于寶龜、廢帝受禪、韞遺風於簡策、南朝登祚、闡茂實於徒誦、是以故中納言從三位兼行兵部卿石川朝臣名足、主計頭從五位下上毛野公大川等、奉詔編緝、合成廿卷』とある是なり、其の年月は伴信友の撰續日本紀次第考に詳ならずとあれど、寶龜九年或は十年頃なるべきかと思はる、其は名足等の編修したるは、上文には起自寶字、至于寶龜と概略を擧げたれど、寶字二年八月卽ち淳仁天皇の卽位より、光仁天皇寶龜八年まで二十年間なりしこと明かなると、名足の經歷を考ふるに、其の右

大辨に任ぜられしは寶龜九年二月なるが、凡そ修史の事業は、太政官の要職にある人之を擔任するは代々の例なれば、名足の任官と、寶龜八年にて筆を止めしとを參考して、其の翌年に修史の勅ありしならむと推定す、此の二十年間の記事は、二十卷に編修せられしが、其の完成の年月は詳ならず、

(三)次に石川朝臣名足、淡海眞人三船、當麻眞人永嗣等に勅して、前に成りし寶字二年乃至寶龜八年の史の前紀、卽ち文武天皇元年より孝謙天皇寶字元年まで六十一年間の事を撰修せしめ給へり、此事は後表(延曆十六年二月の上表をいふ)に起文武天皇元年歲次丁酉、盡寶字元年丁酉、總六十一年、所有舊案卅卷、語多米鹽、事亦疎漏、前朝詔故中納言從三位石川朝臣名足、刑部卿從四位下淡海眞人三船、刑部大輔從五位上當麻眞人永嗣等、分帙修撰、以繼前紀、而因循舊案、竟无刊正、其所上者唯廿九卷而已、寶字元年之紀、全亡不存とあり、寶字二年より寶龜八年迄の史は既に成れるを以て、其の前紀卽ち日本紀の後を承けて、文武天皇元年丁酉より寶字元年まで、六十一年間の史を、修史の事業に既に經驗ある名足を首とし、當時文筆を以て聞えし三船及永嗣の兩人をして、分擔して修撰せしめられたり、然るに文武天皇元年より聖武天皇の御代まで五十六年間の史は、既に編修せるものありしかば之を補修し、孝謙天皇勝寶元年より、寶字二年七月まで十年間の史を、新に編修したるなり、然るに、其所上者唯廿九卷、寶字元年之紀、全亡不存とあれば、實は勝寶八年十二月迄の紀にて、寶字元年より二年八月までの紀は、編修當時より缺け、語多米鹽、事亦疎漏とあるが如く、未だ十分に精選せられざりしなるべし、此の紀奏上の年月も詳ならざれど、名足は延曆七年に薨じ、三船は同四年に卒し、永嗣も延曆二年には既に退官して散位なりしこと下に記せるが如くなれば、延曆二年十月以前に奏上せしこと明かなり、以上三回の修史にて、文武天皇より光仁天皇寶龜八年まで八十一年間の正史は、先づ脫稿したるなり、

(四)然るに石川名足上毛野大川等の編修せし、寶字元年より寶龜八年までの史は、十分に筆削を加へざりし故に、桓武天皇の御代、右大臣藤原朝臣繼繩、民部大輔菅野眞道、少納言秋篠安人等に更に勅して、之を訂正增補せしめ給ひ、元來二十卷なりしを刪定して十四卷とし、同十三年八月撰成りて奏上せり、其の事は繼繩の上表に、故中納言石川朝臣名足、主計頭上毛野公大川等、奉詔編緝、合成廿卷、唯存案牘、類無綱紀、臣等更奉天勅、重以討論、芟其蕪穢、以撮機要、撫其遺逸、以補闕漏、刊彼此之牴牾、矯首尾之差違云々、勒成一十四卷、繫於前史之末とあり、此の十四卷は今の續日本紀卷二十一

より三十四までなり、之に次ぎて寶龜九年より延暦十年まで十四年間の史、卽ち卷三十五より四十までの六卷は、此後引續きて編修し、程なく完成し、延暦十六年以前に奏上せり、故に後表に、自寶字二年、至延暦十年、卅四年廿卷、前年勒成奏上とあり、是は十三年八月に奏上せる卷二十一より三十四までと、卷三十五より四十まで六卷とを合せて記せるものなるが、十三年の上表に、勒して十四卷とすとあれば、十三年八月に奏上せしは十四卷なることいふまでもなく、殘餘の六卷も、前年勒成とあれば、其の翌年十四年頃には撰修を畢りて奏上せしなるべし、然るに伴信友翁の說に、此の六卷は延暦十六年二月、卷一より卷二十まで完成して上りし時に、共に奏上せりと云はれしは、上表文と合はざれば諾ひ難し、思ふに繼繩の薨去は、延暦十五年七月なれば、遲くとも其の以前、卽ち公の在世中に奏上せられたりしなるべし、故に卷三十五より四十までも、卷二十一より三十四までと同じく、每卷の首に右大臣正二位兼行皇太子傅中衞大將臣藤原朝臣繼繩等奉勅撰と書せり、

(五)斯くの如く寶字二年以後の史は、再度の補修を經て完成せしが、文武天皇以後聖武天皇までの史は再び補修せられたれど、未だ盡さゞる所あり、勝寶以後寶字二年七月までの史は、一たび編修せられて、前紀を繼ぎたるのみにて、舊案に因循し、未だ十分なる刊正を加へず、殊に寶字元年の紀は、全く存せざりし故に、重ねて菅野眞道秋篠安人等に勅して撰修せしめ給へり、是に於て、其の補ふべきは之を補ひ、削るべきは之を削りて二十卷とし、延暦十六年二月奏上せり、其の上表に、爰勅眞道等云々、自寶字二年、至延暦十年、卅四年廿卷、前年勒成奏上、但却起文武天皇元年歲次丁酉、盡寶字元年丁酉、總六十一年、所有舊案卅卷、語多米鹽、事亦疎漏、前朝詔故中納言石川朝臣名足云々等、分帙修撰、以繼前紀、而因循舊案、竟无刊正、其所上者唯廿九卷而已、寶字元年之紀、全亡不存、臣等搜故實於司存、詢前聞於舊老、綴叙殘簡、補緝缺文云々、凡所刊削廿卷、幷前九十五年卌卷、始自草創、迄于斷筆、七年於茲、油素總畢とあり、草稿を始めしより斷筆に至るまで七年とあれば、延暦十年に勅撰の命を受け、十六年二月に至り、從來三十卷なりしを刪定して二十卷と爲し、十三年に奏上せし寶字二年以後の上に之を加へたり、今の續日本紀卷一より二十に至る二十卷卽ち是なり、卷二十一以後は、右大臣藤原繼繩編修總裁たりし故に、其の名を卷首に書し、卷一より二十まで二十卷は菅野眞道勅を奉じ、主として之を編修せし故に、卷首每に從四位下行民部大輔兼左兵衞督皇太子學士菅野朝臣眞道等奉勅撰と書せり、斯の如く此の紀の編修は、文武天皇より聖武天皇まで四代五十二年の初稿を除き、光仁の御代に石川

名足等に勅命以來、凡そ二十年の歳月を經て、始めて完成せり、

三、撰　者

次に撰者の事に就きて少しく述べむに、

(一)文武天皇より聖武天皇に至る四代五十二年間、最初の編修に關係せし人の氏名は詳ならず、

(二)寶字二年より寶龜八年に至る二十年間の修史に關係せし人の氏名は、類聚國史に、

故中納言從三位兼行兵部卿石川朝臣名足

主計頭從五位下上毛野公大川

と見えたり、

石川朝臣名足は續紀卅九に、延曆七年六月丙戌、中納言從三位兼兵部卿皇后宮左京大夫大和守石川朝臣名足薨、名足御史大夫正三位年足之子也、寶字中授從五位下、除伊勢守、稍遷寶龜初、任兵部大輔、遷民部大輔、授從四位下、出爲大宰大貳、居二年、徵入歷左右大辨、尋爲參議兼右京大夫云々、延曆初、授從三位中納言兼兵部卿皇后宮左京大夫、薨時年六十一と見ゆ、石川氏は、武內宿禰の子宗我石川宿禰の後にて、名足は其の十一世の孫御史大夫兼神祇伯年足の子なり、祖父石足も從三位左大辨に至り、累代の名家たり、名足が修史の命を蒙りしは、太政官の要職にありしに由れり、傳に延曆七年六十一歳にて薨ずとあるによりて推算するに、寶龜九年に修史の命を受けたりと假定すれば、同年は五十一歳にて、此の年二月右大辨に任ぜられたり、

上毛野公大川は、續紀卷三十五寶龜九年十月乙未の條に、其の名初めて見え、遣唐使錄事とあり、翌年四月辛卯に、授遣唐使錄事正六位上上毛野公大川外從五位下、天應元年五月癸未に、大外記外從五位下上毛野公大川爲兼山背介と見ゆ、大外記に任ぜられしは、十年四月以後、天應元年五月以前の事なり、延曆五年正月外從五位上より從五位下を授けられ、同年六月主計頭に任ぜらる、

(三)次に文武天皇より孝謙天皇寶字元年に至る六十一年間の修史に關係せしは、

中納言從三位石川朝臣名足

刑部卿從四位下淡海眞人三船

刑部大輔從五位上當麻眞人永嗣

等なりき、石川名足は前回の修史より引續きて其の長官となり、淡海三船と當麻永

嗣とは新に其の命を受けしなり、

淡海眞人三船は、續日本紀卷三十八に其傳記を載せ、延曆四年七月庚戌、刑部卿從四位下兼因幡守淡海眞人三船卒、三船大友親王之曾孫也、祖葛野王正四位上式部卿、父池邊王從五位上內匠頭、三船性識聰敏、涉覽群書、尤好筆札、寶字元年、賜姓淡海眞人、起家拜式部少丞、累遷寶字中、授從五位下、歷式部少輔參河美作守云々、除近江介、遷中務大輔、兼侍從、尋補東山道巡察使云々、頗乖朝旨、有勅譴責之、出爲大宰少貳、遷刑部大輔、歷大判事大學頭兼文章博士、寶龜末授從四位下、拜刑部卿兼因幡守、卒時年六十四とあり、當時文人の首と稱せり、

當麻眞人永嗣は、神護景雲元年正月、正六位上より從五位下に叙せられ、寶龜四年從五位上に進む、官は景雲元年七月刑部大判事と爲り、後左右少辨土左守出雲守等を歷任して、天應元年五月、刑部大輔と爲る、延曆二年十月紀に、散位從五位上とあれば、當時は既に退官せりと見ゆ、左右少辨大判事等を歷任して、官務に通じ、亦法律にも精通せしより、修史の任に當らしめられしなるべし、當麻氏は用明天皇皇子麻呂古王の後なり、

(四)次に寶字より寶龜に至る修史に關係せし人々は、

右大臣從三位兼行皇太子傅中衞大將藤原朝臣繼繩

正五位上行民部大輔兼皇太子學士左兵衞佐伊豫守菅野朝臣眞道

少納言從五位下兼侍從守右兵衞佐丹波介秋篠朝臣安人

なるが、藤原繼繩は寶龜十一年二月中納言に任ぜられ、延曆二年七月大納言に進み、同九年二月右大臣に任ぜられ、十五年七月薨ず、年七十とあり、

菅野眞道は、續紀卷四十に、延曆十年正月己丑、東宮學士從五位上菅野朝臣眞道爲兼治部少輔、左兵衞佐伊豫守如故とあり、十三年八月續紀奏上當時には、此に見ゆるが如く、正五位上行民部大輔兼皇太子學士左兵衞佐伊豫守たり、公卿補任に、其祖百濟國人山守之男、初賜津連、寶龜九年二月少內記、(卅八)延曆四年十一月入內、爲東宮學士、八年三月圖書頭、(學士如故)元年七月勅賜菅野朝臣、十一年二月治部大輔、六月民部大輔(兼官如故)十三年正月正五位上、七月從四位下、十六年三月左大辨、廿四年正月參議兼左大辨、大同四年三月從三位、弘仁二年正月致仕、五年六月薨とあり、

秋篠朝臣安人は、續紀卷卅七に、延曆元年五月癸卯、少內記正八位上土師宿禰安人等言云々、於是安人兄弟男女六人賜姓秋篠と見え、同八年大外記に、十年二月大判事に、同五月少納言と爲り、同十五年正月右少辨、同十七年左中辨、同二十四年正月參議

右大辨、弘仁十一年十二月致仕、同十二年正月薨ず、時に年七十とあり、延暦の初年には菅野眞道と同じく少内記にして、同十年には少納言たりき、

(五)延暦十六年續日本紀奏上の當時、之に關係ありし人々の中、其の主たる人は上に述べし眞道、安人、及中科宿禰巨都雄の三人なりき、依りて奏上の當日勅ありて叙位あり、其の他の人々にも叙位ありき、日本後紀卷五に、延暦十六年二月己巳是日詔曰、天皇詔旨良麻止勅久、菅野眞道朝臣等三人、前日本紀與利以來、未修繼在留、久年乃御世々々乃行事乎、勘搜修成氐、續日本紀冊卷進留、勞勤美譽美奈毛所念行須、故是以、冠位擧賜治賜波久止勅御命乎、聞食止宣、從四位下菅野朝臣眞道授正四位下、從五位上秋篠朝臣安人正五位上、外從五位下中科宿禰巨都雄從五位下、癸酉、太政官史生從七位下安都宿禰笠主、式部史生賀茂縣主立長、叙位二階、中務史生大初位下勝繼成、民部史生大初位下別公清成、式部書生無位雀部豐公一階、以供奉撰日本紀所也と見ゆ、眞道安人の事は既に前に擧げたれば、巨都雄以下の事をこゝに述ぶべし、

中科宿禰巨都雄は、續紀卷四十に、延暦十年正月癸酉、少外記津連巨都雄等、兄弟姉妹七人、因居賜中科宿禰とあり、初めは津連と稱す、葛井船氏と同族にて、菅野氏も亦同祖なり、姓氏錄に、中科宿禰菅野朝臣同祖鹽君孫宇志之後也とあり、巨都雄は少外記の職にありしより修史の事に與り、續紀奏上の當時には大外記たりき、編修の功に依り、外從五位下より從五位下に進めり、

安都宿禰笠主は、上に引ける後紀に見ゆるが如く、續紀の編修に關係せるに依りて、從七位下より正七位下に進められたり、安都宿禰は、姓氏錄左京神別に、阿刀宿禰石上同祖神饒速日命六世孫伊香色雄命之後也と見え、山城神別にも見ゆ、

賀茂縣主立主は、同じく後紀に從七位下式部史生賀茂縣主立主叙位二階と見え、編修の功に依り、安都笠主と同じく從七位下より正七位下に進めり、賀茂縣主は、姓氏錄山城神別に、賀茂縣主、神魂命孫武津之身命之後也と見え、世々賀茂別雷神社の神職となれり、

勝繼成は、同じく後紀に中務史生大初位下勝繼成一階とあり、安都笠主と共に大初位下より大初位上に進めらる、勝氏は、姓氏錄山城蕃別に、勝上勝同祖、百濟國人多利須々之後也とあり、

別公清成は、同じく後紀に、民部史生大初位下別公清成一階とあり、編修の功に依り、大初位下より大初位上に進めらる、別氏は、姓氏錄右京皇別に、別公建部公同祖日本武尊之後也とあり、山城皇別には、別公堅井公同祖彥坐命之後也とあり、開化天皇

皇子彥坐命の後なるもあり、其の何れなるか詳ならず、

雀部豐公は、同じく式部書生無位豐公一階とあり、編修に關せしによりて、少初位下に叙せらる、雀部氏は、姓氏錄左京皇別に、雀部朝臣建內宿禰之後也、攝津皇別にも見ゆ、また和泉皇別に、雀部臣多朝臣同祖、神八井耳命之後也とあれば、其の何れなるか詳ならず、

四、異本

續日本紀の類本は、書紀の如く多數ならず、村尾氏考證に、從來世に傳ふる諸本を擧げて、此編校正所ノ據凡有ニ六本一。一曰ト本。卷末皆書ニ延文及應永應長等數字一、又載ニ卜部兼豐及兼凞兼敦兼夏等小跋一、乃卜部家歷世所ノ傳也。二曰永正本。亦出ニ於卜部家一、卷末所ノ署、與ニ卜本一相似而最後載ニ永正十二年老槐散木識語一、老槐散木蓋西三條實隆公別號、則是實隆公借ニ卜部家傳本一所ノ寫也。三曰金澤本。舊係ニ金澤文庫中所ノ收一、余幸得ノ借ニ覽影鈔本一、其本自ニ首卷一至ニ第十卷一、與ニ後三十卷一筆意不ノ同、前十卷蓋後人所ニ補寫一、而每卷首欄外右方題ニ金澤本寫四字一、則疑其補寫所ノ由本亦金澤之舊物歟、將他本耶、並未ノ可ノ詳也、第十一卷以下、每卷首末捺ニ黑文金澤文庫印一。四曰宮本。係ニ伊勢山田鄕豐宮崎文庫藏一、承應年間、文庫書生戮力謄寫、以所ノ納者見ニ跋尾一。五曰鴨本。卷末無ニ識語一、未ノ詳ニ原本所ノ由一、疑出ニ於鴨氏一也、六曰堀本。出ニ於平安堀氏一、每卷首印ニ平安堀氏時習齋藏八字一、卷末載ニ寬永十四年等字及識語一、其下捺ニ重圈印一、印文曰杏庵、案杏庵堀氏名正意、時習齋其曾孫正修別號也と云へるが如く、大略右の外に出でず、而して卜本、永正本は其の實同本にして內閣本も亦同じ、校齋以下校本に所謂官本と稱するも亦別種のものにあらず、五にいへる鴨本、六にいへる堀本氏の二本は今何れに存するか詳ならず、永正本も三條西家に傳はらざるを以て、六本中所在の明かなるものは、卜本卽ち吉田本、金澤本、宮本の三本のみ、其の外に寫本の現存し、予が親しく閱覽したるは、

一、內閣本　二、尾張本
三、薩摩本　四、曾我本
五、淀本　六、谷森本

以上の六本にて、前に擧げたる三本と合せて九本なり、凡そ書寫の年代の順序に隨ひて之を擧ぐれば、

(一)金澤本

書寫の年月は明かならざれど、もと金澤文庫に所藏したる故に、世に金澤本と稱す、

其の年代は推して知るべし、卷一より十までは尾州德川侯爵家に、卷十一より同四十までは宮內省圖書寮に所藏す、考證にも金澤一本、文字精好誤脫亦少、迥出諸本之右とあるが如く、續日本紀古寫本中の白眉たり、

(二) 內閣本

慶長の寫本にして、奧書に據るに永正本の寫なり、卷二に永正十三年閏二月四日書寫了、卷三に永正十二年二月廿二日終書了とあり、以下每卷多くは永正十二年書寫の由を記せるは、三條西實隆公の奧書にて卜部本を借りて書寫せしめられしなり、されば本書は此の永正本を慶長年中に寫したるものなり、

(三) 吉田本

慶長十八年正月、右續日本紀四十冊遂全部之功者也梵舜とあり、梵舜が卜部本を書寫せしめたるものなり、卷九及十の二卷は缺く、

(四) 尾張本

尾張德川侯爵家の所藏にて、奧書に元和八仲夏廿日以實隆公自筆本考了西山期遠とあり、奧書に據るに內閣本と同じく三條西本の副寫なり、

(五) 薩摩本

金澤本の寫にて卷首に薩邸藏書と云る印あり、今帝國圖書館に所藏す、每卷筆者の氏名を明記す、

(六) 曾我本

水戶德川侯爵家の所藏にて、奧書及書寫の年月も無し、內閣本淀本と頗る相似たり、されど亦異なる點も往々ありて、大に參考とすべし、

(七) 淀本

舊淀藩卽ち稻葉子爵家の所藏なりしが、今予の所藏と爲る、奧書なく書寫の年月も詳ならざれど、內閣本曾我本とよく似たる本にて、考證に所謂堀本とも最もよく相似たり、されど亦往々異なる點もありて、同本にはあらず、

(八) 神宮本

舊豐宮崎文庫の所藏なりしが、今神宮文庫に藏せらる、奧書に承應二年三月書寫之とあり、同志の人々分擔して書寫せるものなり、

(九) 谷森本

谷森建男氏(谷森善臣翁の息)の所藏にして、中原職忠の印あり、版本とよく相似たり、書寫の年月は詳ならず、

五、書紀との比較

書紀は、神代及神武天皇より持統天皇に至るまで、四十餘代の正史なるが、續日本紀は之に續ぎて、文武天皇より桓武天皇に至る九代九十五年の正史にて、年數に於ても書紀に次ぎて長く、六國史中の重要なる書なるが、書紀と之を對照するに、其の最も異なるは、御歷代の詔勅卽ち宣命を漢譯せずして、原文のまゝに之を揭載したるにあり、之に據りて當時及上古の事蹟の眞相を明瞭に知ることを得、文學上の裨益も甚だ大なるものあり、書紀の舊套を襲はずして、新に機軸を開きたるは、其の功大なりと云ふべし。次に此の書の編修は、度を累ねて補修せられし故に、文辭も相當に精練せられしなるべし、然るに書紀の如く、漢史の文辭を其のまゝ用ひしものなきは、史料の如何にも因りしなるべけれど、宣命と同じく此の點も亦異なれり。次に制度の沿革を明かにせむが爲に、詔勅官符の類は悉く之を擧げ、政事外交等に就きても、編修上深く留意せられたり、任官叙位に就きても悉く之を列擧せられしは、煩雜なるが如くなれど、當時に於て必要なる事なればなり。だゞ其の事の繁多なる爲に、叙位の文字に誤謬多く、干支を推すに記事の錯簡せるもの少からず、傳寫の誤ならむかとも思へど、必しも然らざるものあり、此の事は比古婆衣にも既に注意したるが、數次の補修を經たる爲に、却てかゝる誤を生じたるにはあらざるか、類聚國史及日本紀略も本書と同じきを見れば、恐くは傳寫の誤のみにはあらざるべし、

そはいづれにもあれ、本史は九代九十五年間、國家の大事を始め、政事・法制・外交等に關する事は、悉く之を網羅して精細に叙述せるが故に、藤原朝及奈良朝時代の事實は、之に據りて明かに窺ひ知ることを得、此時代の正史として、實に萬世に仰ぎ尊むべき貴重なる寶典なり、

校訂
標注

續日本紀

凡例

一、本書は、明暦三年立野春節校訂の版本を以て底本とし、左の諸本を以て校訂せり、

一、古寫本

一	金澤本	卷一より十 尾張德川侯爵所藏	十卷
一	內閣本	內閣文庫所藏	三十卷
一	薩摩本	帝國圖書館所藏	四十卷
一	尾張本	尾張德川侯爵所藏	四十卷
一	曾我本	水戸德川侯爵所藏	四十卷
一	淀本	予所藏	四十卷

符號
(金本)
(閣本)
(薩本)
(尾本)
(曾本)
(淀本)

一神宮本 豐宮崎文庫所藏　四十卷（宮本）

二、校合本

一水戸考訂本　（水戸校本）
一伴信友校合本　（伴校本）
一狩谷棭齋校合本　（狩谷校本）
一山崎知雄校合本　（山崎校本）

三、注釋書

一續日本紀考證 村尾元融　十二卷（考證）
一續日本紀私記 矢野直道　十三卷（私記）
一續日本紀問答 寺村成相　一卷

二、本書の校訂に方りて、底本と校合し、或は參照せる諸書は凡そ左の如し、

一日本書紀（書紀）略稱
一日本後紀（後紀）
一續日本後紀（續後紀）
一文德實錄（文德紀）
一三代實錄（清和紀、陽成紀、光孝紀）
一類聚國史（類史）
一日本紀略（紀略）
一扶桑略記（略記）
一帝王編年記（編年記）
一新撰姓氏錄（錄）
一公卿補任（補任）
一延喜式（式）
一新撰字鏡（字鏡）
一類聚倭名抄（抄）
一箋注類聚倭名抄（箋注）
一類聚名義抄（名義抄）
一伊呂波字類抄（字類抄）

三、訓點は主として底本に據れり、されど誤謬も亦少からざるを以て、之に據り難き

ものは、狩谷校本、山崎校本、及考證等の說に據りて改めたり、宣命の傍訓は、底本施す所完備せざるを以て、主として歷朝詔詞解に據り、說あるものは標注に之を述べたり、

四、其の他校訂標注に關する義例は、大略日本書紀に同じきを以て、こゝに之を略す、

昭和四年五月

佐伯有義識

校訂
標注

六國史第三卷目次

解說……一
凡例……二
續日本紀卷上【自卷一至卷二十】
卷第一【文武紀一・起丁酉年八月盡庚子年十二月】
天之眞宗豐祖父天皇(文武天皇)
卽位前紀……五
元年(丁酉)……九
二年(戊戌)……一三
三年(己亥)……一七
四年(庚子)……
卷第二【文武紀二・起大寶元年正月盡二年十二月】
大寶元年……

大寶二年……二七
卷第三【文武紀三・起大寶三年正月盡慶雲四年六月】
大寶三年……三三
慶雲元年……三八
同　二年……四二
同　三年……四五
同　四年……五二
卷第四【元明紀一・起慶雲四年七月盡和銅二年十二月】
日本根子天津御代豐國成姬天皇(元明天皇)
慶雲四年……五七
和銅元年……六一
同　二年……七〇
卷第五【元明紀二・起和銅三年正月盡五年十二月】
和銅三年……七七
同　四年……七九

同　五年……八五
卷第六【元明紀三・起和銅六年正月盡靈龜元年八月】
和銅六年……九三
同　七年……九九
靈龜元年……一〇六
卷第七【元正紀一・起靈龜元年九月盡養老元年十二月】
日本根子高瑞淨足姬天皇(元正天皇)
靈龜元年……一一五
同　二年……一一七
養老元年……一二三
卷第八【元正紀二・起養老二年正月盡五年十二月】
養老二年……一三三
同　三年……一三八
同　四年……一四六
同　五年……一五四

卷第九【元正紀三及聖武紀一・起養老六年正月盡神龜三年十二月】

養老六年……一六七
同　七年……一七五
神龜元年……一八〇

天璽國押開豐櫻彥天皇（聖武天皇）

神龜二年……一九一
同　三年……一九四

卷第十【聖武紀二・起神龜四年正月盡天平二年十二月】

神龜四年……二〇一
同　五年……二〇五
天平元年……二一一
同　二年……二二五

卷第十一【聖武紀三・起天平三年正月盡六年十二月】

天平三年……二三一
同　四年……二三六

同　五年……二四一
同　六年……二四五

卷第十二【聖武紀四・起天平七年正月盡九年十二月】

天平七年……二五一
同　八年……二五六
同　九年……二六一

卷第十三【聖武紀五・起天平十年正月盡十二年十二月】

天平　十年……二七五
同　十一年……二七九
同　十二年……二八六

卷第十四【聖武紀六・起天平十三年正月盡十四年十二月】

天平十三年……二九七
同　十四年……三〇四

卷第十五【聖武紀七・起天平十五年正月盡十六年十二月】

天平十五年……三一一

天平十六年……三一二
卷第十六【聖武紀八・起天平十七年正月盡十八年十二月】
天平十七年……三二九
同　十八年……三三六
卷第十七【聖武紀九・起天平十九年正月盡天平勝寶元年十二月】
天平十九年……三四五
同　廿　年……三五一
天平勝寶元年……三五五
卷第十八【孝謙紀一・起天平勝寶二年正月盡四年十二月】
寶字稱德孝謙皇帝(孝謙天皇)
天平勝寶二年……三七七
同　三　年……三八一
同　四　年……三八五
卷第十九【孝謙紀二・起天平勝寶五年正月盡八歲十二月】
天平勝寶五年……三九一

同　六　年……三九四
同　七　年……四〇二
同　八　歲……四〇三
卷第二十【孝謙紀三・起天平寶字元年正月盡二年七月】
天平寶字元年……四一三
同　二　年……四四三
扉題字……三上參次筆

卷第一、金本閣本卷の字なし下同じ

續日本紀卷第一

起丁酉年八月盡庚子年十二月

從四位下行民部大輔兼左兵衛督皇太子學士臣菅野朝臣眞道等奉　勑撰

文武天皇　第卌二

天之眞宗豐祖父天皇　文武天皇

天之眞宗豐祖父天皇、天淳中原瀛眞人天皇之孫、日並知皇子尊之第二子也、日並知皇子尊者、寶字二年有勅、追崇尊號、稱岡宮御宇天皇也、母天命開別天皇之第四女、平城宮御宇日本根子天津御代豐國成姬天皇是也、天皇天縱寬仁、慍不形色、博涉經史、尤善射藝、高天原廣野姬天皇十一年、立爲皇太子、

【卽位前紀】○天之眞宗豐祖父天皇、卷三慶雲四年十一月丙午奉誄誄曰倭根子豐祖父天皇とあり一代要記歷代皇紀には天津足根豐大父天皇に作る皇代記亦同じ御諱は輕天武天皇十二年生とあり御名義は天之眞宗は天淳中原瀛眞人天皇(天武)の御嫡統を受繼ぎ給ふ意なり御父草壁皇子は天武天皇の皇太子にましまし其御嫡子にましますに依て眞宗と稱へ奉れるなり豐祖父は天性寬仁にして長者の風ましますに因れる稱へ名なるべし　○日並知皇子、天武天皇の皇子、同紀には草壁皇子尊と記せり日並知は天武紀十年二月に皇太子となり給ひ持統天皇に至るもなほ皇太子として母帝を輔け給ひしに因れる名なり粟生寺鑑盤銘には日並知御宇東宮と見えたるを狩谷望之の說に太子云々雖未嗣皇統其實與天子之尊無異古以帝位比之太陽之精所謂天日嗣是也故當時稱曰日並知御宇東宮與帝相並統御天下也といへり　○第二子、大日本史に蓋以元正帝爲姉故爲第二子とあり　○(注)寶字二年、原本三年に作る卷廿一天平寶字二年八月戊申並に紹運要略に據て改む　○岡宮御宇天皇、紹運要略云草壁皇子號岡本天皇寶字二年追稱天皇爲孝謙四代孫之故也、岡宮は此皇子の坐しゝ宮號なるべし岡本宮は大和國高市郡岡村にあり舒明天皇齊明天皇の宮所なるが岡村は天武天皇の都たりし飛鳥淨御原宮と同郡にて程近ければ此處にましゝしなるべし　○天縱、論語子罕に天縱之將聖とあり天より縱されたる德を有つことなり　○慍不形色、原本慍を温に作る金本閣本曾本等に據て改む　○射藝、支那に所謂六藝の中の弓射ることを最も能くせさせ給ふを云後の諡號を文武天皇と申奉るは此に涉經史尤善射藝とあるに因れり、原本藝を勢に作る金本曾本淀本に據て改む　○立爲皇太子、釋紀に私記曰云云王子枝別記云持統天皇十一年春二月丁卯朔壬午立皇太子とあり、懷風藻葛野王傳に高市皇子薨後皇太后引王公卿士於禁中謀立日嗣時群臣

各挾私好、衆議紛紜、王子進奏曰、我國家爲法也、神代以此典、仰論天心、誰能敢測、然以人事推之、從來子孫相承、以聲天位、若兄弟相及、則亂聖嗣、自然定矣、此外謹敢聞焉、乎、弓削皇子在座、欲有言、王子叱之、乃止、皇太后嘉其一言、定國特閑授正四位、拜式部卿、とあるは此時の事なり

【元年】八月、考證に按八上當有元年秋三字、且提行と云り今便宜に據て別提す

○甲子朔、持統紀十一年八月乙丑朔天皇定策禁中禪位於皇太子とあり此年始て儀鳳曆を用ひられ舊曆と新曆の間に一日の差ありしなり

○詔、西宮記に詔書事、改元改鑄並赦令等類也、臨時大事爲詔、尋常小事爲勅云々、宣命事、神社山陵告文、立后太子任大臣節會任僧綱天台座主及喪家告文類也とあり後には文體に依り詔勅と宣命とを區別したれど續紀時代は未ださる區別なく共に詔勅と云り、詔詞解(以下略して解と云)に宣命といふ目(チ)は續紀卷十に始めて見え、命を宣(ル)よしにて宣とは命を受傳へて告げ聞かするを云なり、繼體紀に宣勅使とあるも勅を宣る使也、古語のにまれ漢文のにまれ勅命をうけ給りて宣聞する事をさして云る目にこそあれ、其文をさしていふ名にはあらざりしを、後世には直に其文をさして宣命といひさるから、宣字をも詔勅のことゝぞ心得ためる、西宮記に別無宣命、或詔書之可宣命、謂之宣命とあるこは又一説を擧られたるにてこれぞ古の意なりけるとあり

○現御神止、明御神また明津神とも書けり、舊の訓にアラミカミとあれどアキツミカミと訓べし、現御神とは天皇は明に見え給ふ神といふ義なり、止ばニテと云むが如し　○大八嶋國、書紀神代紀八洲起元章に云り　○所知、國土人民を大御心にうけ入れて治め給ふ義　○大命、良麻止は附ていふ辭なり、武烈紀に臣をヤツコラマ、顯宗紀に御裔僕をミアナスエヤツコラマなど訓るに同じ意にて、天皇の大命ぞと確かに強めて宣り聞かす意に添へしなり　○皇子等王等、皇子は親王、王は諸王なり、原本王等を王臣に作る、金本曾本淀本に據て改む　○百官人等、諸の官人を云　○諸、皇子等以下の諸にて上に屬く　○聞食、舊訓にキコシメセとあるにてもよけれど下の詔には多くセをサヘと延べてキコシメサヘと訓り熟く承るべしとなり　○詔、ノリタマフと訓むべし、宣命使は天皇の大御言葉を其まゝ宣るにて自ら宣るに非ざればなり、詔詞解の説は穿ち過ぎたり　○高天原爾、原本爾を乎に作る、和銅七年二月紀の詔に據て改む　○事始而、此語は下の天坐神之依之奉之隨と云に係りて、天津日嗣の御事を始め給ふを云　○遠天皇祖、古へよりの御世々々の天皇を申し奉れり　○御世御世、原本御世の二字に作る、解に從て二字を增補す　○中今、後世にはその時々を降れる世、後の世など云を、こゝは當時を盛なる眞中の世とほめたるなり、此語は下の天都神乃御子隨母云々に聞看來と云に係る　○阿禮坐卒、生坐むなり　○彌繼繼爾、次第に相繼ぎての意　○次止、ツギテと訓み天津日嗣知ろしめさむ次第にと云ことなり、下の依之奉之に係れり　○天都神乃御子隨母、天都神乃御子は天照大御神の御子の義にて天忍穗耳命を始め奉り御世々々の天皇を申奉る隨は天照大御神の御子に坐しますまゝにと云義　○天坐神、天津神と云に同じ、天照大御神高皇產靈神を申奉れり　○依之奉之隨、此の國土人民を寄せ授け奉らせ給ひしまに〳〵の義　○聞看來、此三字原本になし解に本紀卷十七、廿一の二詔を證として之を補ひ、こゝに此語なくては上の中今爾至麻氏爾と云る語を承る所なく又次の語へも續かざればなりと云るによりて補ふ　○高御座之業、解に天の御座と云むが如し高とは天を云たゞ高きよしにはあらず天皇の御座は卽ち高天原にして天照大御神のまします御座を受傳へますよしをもて高御座とは申すなりさて高御座之業とは天皇の此御座に坐して天下を治めさせ給ふ御業を申すなりと云り　○倭根子天皇命、倭根子は御世々々の天皇に通へる御稱號なりこゝは持統天皇を申す　○授賜比負賜布、高御座の御業を授け給ひ負せ持たしめ給ふなり　○廣支、此二字原本なし金本閣本曾本淀本に據て補ふ　○受賜利、持統天皇の授け給ひし大命を文武天皇の承り給ふなり　○恐坐氐、今俗に恐入り畏まりなど云と同意、閣本氐を豆に作る氐の俗字なり　○食國、舊訓にケクニとあれどヲスクニと訓むべしヲスは國を治(シ)しめす義なり　○調賜比平賜比、調は物のちり〳〵になれるを一つに纏るを云ひ平は人心を平和にして不平なからしむるを云　○四方食國云々、天皇の治め給ふ四方の國々を治め申せと遣され給へまし〳〵ながらの意、所思行佐久はおぼしめすにて佐久はすの延びたるなり　○

○八月甲子朔、受禪卽位、○庚辰、詔曰、現御神止大八嶋國所知天皇大命良麻止詔、大命乎、集侍皇子等、王等、百官人等、天下公民諸、聞食止詔、高天原爾事始而、遠天皇祖御世御世中今至麻氐爾、天皇御子之阿禮坐卒彌繼繼々爾、大八嶋國將知次止、天都神乃御子隨母、天坐神之依之奉之隨、聞看來此天津日嗣高御座之業止、現御神止大八嶋國所知倭根子天皇命、授賜比負賜布貴支高支廣支厚支大命乎受賜利恐坐氐、此乃食國天下乎、調賜比平賜比、天下乃公民乎惠賜比撫賜卒止奈母、隨神所思行佐久止詔、天皇大命乎、諸聞食止詔、是以百官人等、四方食國乎治奉止、任賜幣留國國宰等爾至麻氐爾、天皇朝庭敷賜行賜幣留國法乎、過犯事無久、明支淨支直支誠之心以而、御稱稱而緩怠事無久、務結而仕奉止詔、大命乎、諸聞食止詔、故如此之狀乎聞食悟而、欵將仕奉人者、其仕奉禮良卒狀隨、品品讃賜上賜、治將賜物曾止詔、天皇大命乎、諸聞食止詔、仍免今年田租雜徭并庸之半、又始自今年三箇年、不收大稅之利、高年老人加恤焉、又親王已下百官人等賜物有差、令諸國每年放生、○癸未、以藤原朝臣宮子娘爲夫人、紀朝臣竈門娘、石川朝臣刀子娘爲妃、○壬辰、賜王親及五位已上食封各有差、

る國司等に至るまでの意、ミコトモチは天皇の大命を負持ちて執務する意　○天皇朝庭云々、解に天皇以下の十字諸本共に百官人等の上にあるは次第の亂れたるにて必ず下の國法といふへ係れる語なり百官人云々と續きては語の條理鑒すされば至麻氏爾の下に移すべきなりと云るに從て移換へたり　○御稱稱、解に彌奬奬の誤なるべしと云り　○務結而、原本結を給に作る次々の宣命に彌結爾云々勤結理云々などあるに據て改む手堅く引締るを云　○故如此之狀乎、原本故の下に細字爾の字あり闕本曾本乎に作る何れも次々に見ゆる宣命の例に據て削る　○欺、解に卷卅一の詔に欺美明美とあるに據てイツシクと訓むべしと云り　○品品、褒め賜び上げ賜ふ等差のあるを云　○田租、孝德紀大化二年に出づ　○雜偽、崇神紀十二年に出づ　○庸、同上　○大稅、賦役令義解に凡官稻之源出自田租卽分爲三一曰大稅二曰粟穀三曰郡稻也とあり令抄に大稅謂正稅也本顯也每國置本顯劵班給作公田輩十束加三把利返納充公用雜稻在此中每國有式數とあり或る數の稻を國每に貯へ置き之を民に貸し其利を收めて元は動かさぬを云　○放生、天武紀五年に注す　○爲妃、卷六和銅六年十一月乙丑貶石川紀二嬪號不得稱嬪とあるに據れば妃は嬪の誤なるべし　○王親、皇親と云に同じ　○五位已上、直冠四階に當れるを追書せるなり

（九月）大神大網造、出自詳ならざれど大神氏の族ならむ大網は攝津國住吉郡大依羅神社に由ありて聞ゆ百足は紀略石足に作る　○自鱉、抄龜貝部に鼈本草云鼈（唐韵云并列反魚鼈字或作鱉加波可女）鼈注に今俗呼壽都保無　○白鹿、治部式に白鹿仁獸也色如霜雪とあり　○勤大壹、大寶元年の制の正六位に當る　○丸部臣君手、原本マロヘと訓すれどワニベの誤ならむ天武紀に和珥部臣君手とあり原本手を午に作る金本並に天武紀及大寶元年紀七月壬辰の條に據て改む　○一吉飡、新羅官十七等の七位

○九月丙申（甲午朔三）、京人大神大網造百足家生嘉稻、近江國獻白鱉、丹波國獻白鹿、○壬寅（九）、賜勤大壹丸部臣君手直廣壹、壬申之功臣也、○冬十月壬午（甲子朔十九）、陸奥蝦夷貢方物、○辛卯（廿八）、新羅使一吉飡金弼德、副使奈麻金任想等來朝、○十一月癸卯（癸巳朔十一）、遣務廣肆坂本朝臣鹿田、進大壹大倭忌寸五百足於陸路、務廣肆土師宿禰大麻呂、進廣參習宜連諸國於海路、以迎新羅使于筑紫、○十二月庚辰（癸亥朔十八）、賜越後、蝦狄物、各有差、○閏十二月己亥（癸巳朔七）、播磨、備前、備中、周防、淡路、阿波、讃岐、伊豫等國飢、賑給之、又勿收貢稅、○庚申（廿八）、禁正月往來行拜賀之禮、如有違犯者、依淨御原朝庭（天武）制、決罰之、但聽拜祖兄及氏上者、

○奈麻、同上の十一等　○務廣肆、大寶の制の從七位下　○坂本朝臣鹿田、木角宿禰の後（記）原本鹿を塵に作る闕本曾本淀本に據て改む　○進大壹、大寶の制の少初位上　○大倭忌寸、天武紀十三年九月連を、同十四年六月忌寸を賜ふ　○土師宿禰、野見宿禰の後（垂仁紀）天武紀十二年十二月宿禰を賜ふ　○習宜連、養老三年五月癸卯中臣習宜連笠麻呂等四人賜朝臣姓（錄右京神別中臣習宜朝臣見ゆ習宜の訓種々の說あれど姓氏錄考證に大和國菅原郷の地名なればスゲと訓べしと云り金本習を榴に作る　○賑給、米鹽を給して飢民を賑恤するを云　○貢稅、貢は受貸不償也とあり人民に貸與せる稅の未だ返納せざるを云　○禁正月往來云々、天武紀八年正月戊子勅制に凡當正月之節諸王諸臣及百寮者除兄姉以上親及己氏　長以外莫拜焉其諸王者雖非王姓者莫拜卑母云々若有犯者隨事罪之と、紀略に禁の下止の字あり　○祖兄、紀略に兄を父に作る　○氏上、通證に後世藤原長者源氏長者卽此とあり氏族制を廢せられても尙其遺風を捨てず一氏の本宗にして官職も亦貴きものを氏上として重むぜられしなり

【二年】（正月）大極殿、皇極紀四年に見ゆ抄居處部に大極殿朝堂院正殿名也、拾芥抄に八省院是也とあり　○一吉飡、原本吉を金に作り飡の下に食の字あり吉は紀略及上文に據て改め食は闕本曾本淀本等に據て削る　○金弼德、原本德の字なし金本闕本曾本等に據て補ふ　○牛黃、厩牧令に見ゆ本草和名下に牛黃生黃（蘇敬注云乍生咀相而得者也散黃（粒如麻豆）漫黃（如雞子黃）團黃（塊形有大小已上四種出蘇敬注）とあり　○馬手、原本馬牛に作る金本闕本曾本に據て改む　○大內山陵、諸陵式に檜隈大內陵飛鳥淨御原御宇天武天皇在大和國高市

（戊戌）二年春正月壬戌朔、天皇御大極殿受朝、文武百寮及新羅朝貢使拜賀、其儀如常、○甲子（三）、新羅使一吉飡金弼德等貢調物、○己巳（八）、土左國獻牛黃、○戊寅（十五）、供新羅貢物于諸社、○庚辰（十九）、遣直廣參土師宿禰馬手、獻新羅貢物于大內山陵（天武）、○二月壬辰朔甲午（三）、金弼德等還蕃、○丙申（五）、車駕幸宇智郡、○癸卯（十二）、賜百官職事已上及才伎長上祿、各有差、○丙午（十五）、賜武官祿各有差、○三月乙丑（辛酉朔五）、因幡國獻銅鑛、○丁卯（七）、越後國言疫、給藥救之、○己巳（九）、詔、筑前國宗形、出雲國意宇二郡、司宜聽連任、三等已上親、○庚午（十）、諸國郡司因詔、諸國司等銓擬郡司、勿有偏黨、郡司居任、必須如法、自今以後不違越、○辛巳（廿一）、禁山背國賀茂祭日會衆騎射、○壬午（廿二）、詔以惠施法師爲僧正、智淵法師爲少僧都、善往法師爲律師、○夏四月壬辰（廿六朔三）、

郡陵墓要覽に高市郡高市村大字野口字王墓にありと云

(二月)宇智郡、考證に郡疑當レ作野と云萬葉一に玉刻内大野云々仙覺鈔に内野大和國宇知郡野也大和志に宇智郡内大野大野村とあり吉野川の北岸なり　○職事、公式令に凡内外諸司有二執掌者一爲二職事一官一无二執掌者一爲二散官一とあり散官に對する稱なり　○才伎長上、釋紀に才伎者錦織衣縫之類と見え技術官なり、長上は分番せず日々出勤して職に從ふものを云　○武官、公式令に五衛府軍團及諸帶仗者爲レ武義解に謂馬寮兵庫等是也とあり　(三月)銅鑛、字書に鑛は金璞也同、礦とあり銅鑛は銅の鑛山より掘出したるまゝなるを云　○給藥、類史に賜醫藥の三字に作る　○銑前國宗形云々、神郡の郡司任用を特定せられしなり宗形郡には宗像神社意宇郡には熊野神社ありて之を神郡と定められたり故に此詔ありしなり、式部式上に凡郡司者一郡不レ得レ併二用同姓一若他姓中无二人可用者一雖二同姓一除二同門一外聽任神郡(中略)者不レ在二制限一とあるは此制に據れり三等以上親とは儀制令に凡五等親者父母養父母夫子爲二一等一(中略)曾祖父母伯叔姨夫姪從父兄弟姉妹異父兄弟姉妹夫之祖父母夫之伯叔姑姪婦繼父同居夫前妻妾子爲二三等一と云　○鉦擬郡司云々、選叙令に凡郡司取二性識清廉堪二時務一者上爲二大領少領一強幹聰敏工二書計一者爲二主政主帳一とあり之に據るべき由を嚴命せられしなり　○山背國、山背を山城と改めしは延曆十三年十一月なり　○賀茂祭日、神名式に山城國愛宕郡賀茂別雷神社(名神大月次相嘗新嘗)同賀茂御祖神社二座(並名神大月次相嘗新嘗)とあり祭日は四月中申西日なり　○會衆騎射、原本會を命に作る類史及紀略に據て改む大寶二年四月亦此禁あり　○壬午、廿二日に當れり、僧綱年表には十八日とす　○惠施、僧綱補任に唐學生小豆氏とあり　○僧正、並に僧都律師を任すること天武紀十二年三月に見ゆ　○智淵、同書に不レ經二律師一、惠輪在俗子　○善往、原本往を徃に作る金本閣本淀本に據て改む同書に元興寺律師始也とあり天武紀十二年に既に律師あれば始とするは非なり　(四月)徠儒、神武紀に見ゆ　○秦氏は錄山城諸蕃に秦始皇帝の後と見ゆ　○香登臣、姓氏錄に見えず、抄國郡部備前國和氣郡香止(加々止)郷あり之に因れるならむ　○文忌寸博士、文忌寸は王仁の後、博士は持統九年三月紀に博勢とあり　○南嶋、多嶼夜久菴美度惑等の諸嶋を云　○芳野水分峯神、神名式に大和國吉野郡吉野水分神社(大月次新嘗)とあり今吉野郡吉野村吉野山上字丹治なる水分山に在り水分神は記に天之水分神國之水分神と見え水戸神の子なり　(五月)田疇、字書に疇は耕治之田也とあり　○大宰府、原本大を太に作る金本閣本曾本淀本に據て改む

近江紀伊二國疫、給二醫藥一療レ之、侏儒備前國人秦大兄、賜二姓香登臣一、○壬寅、遣二務廣貳文忌寸博士等八人一于南嶋一覔二國、因給二戎器一、○戊午、奉二馬于芳野水分峯神一、祈レ雨也、○五月庚申朔、諸國旱、因奉二幣帛一于諸社、○甲子、遣二使于京畿一、祈二雨於名山大川一、○乙亥、遣二使于諸國一、巡二監田疇一、○甲申、令二大宰府一繕二治大野基肆鞠智三城一、○六月丙申、近江國獻二白樊石一、○壬寅、越後國蝦狄獻二方物一、○丙辰、奉二馬于諸社一、祈レ雨也、○丁巳、直廣參田中朝臣足麿卒、詔贈二直廣壹一、以二壬申年功一也、

(七月)公私奴婢、吏學指南に古者以罪沒爲二奴婢一敕有二官私奴婢之限一とあり官衙に使役せらるゝものと個人の所有となれる者とあり　○亡匿、原本已匿に作る淀本に據て改む　○容止、僧尼令に知情容止とありゆるして隱匿し置くを云　○博戲、捕亡令義解に博戲者雙六樗蒲之屬とあり　○與居同罪、考證云居字疑衍　○白鑞、抄寶貨部に錫兼名苑云一名白鑞(和名之路奈麻利)箋注に純錫謂二之砂利一錫雜鉛謂二之須受鉛一斤砂利十兩煉成者謂二之志呂米一皇國古籍所レ云白鑞卽志呂米也とあり　○高橋朝臣、錄左京皇別に阿部朝臣同祖大稻輿命之後也とあり　○石川朝臣小老、大寶二年十一月紀に子老に作る野郡にあり　○基肆、肥前國基肆郡にあり今佐賀縣三養基郡基山村の邊なり　○鞠智、肥後國菊池郡にあり城址は詳かならざれど今同郡河原村大字木庭の城山是なりと云　(六月)白樊石、抄天地部山石類に礬石蘇敬曰礬石(礬音繁此間云閔尺)有二青礬白礬黑礬絳礬黃礬五種一矣箋注に按白礬今俗呼明礬者とあり　○奉馬、臨時祭式祈雨祭に丹生川上貴布禰社各加二黑毛馬一疋一其霖雨不レ止祭馬用二白毛一とあり　○田中朝臣足麿呂、田中朝臣は天武紀十三年十一月紀に見ゆ錄左京皇別に武内宿禰五世孫稻目宿禰之後也とあり

○秋七月己未朔、日有レ蝕之、○乙丑、以二公私奴婢亡匿民間一、或有二容止一不二肯顯告一、於是始制二笞法一、令レ償二其功一、事在二別式一、又禁二博戲遊手之徒一、其居停主人、亦與レ居同罪、○乙亥、下野備前二國獻二赤烏一、伊豫國獻二白鑞一、○癸未、以二直廣肆高橋朝臣嶋麻呂一爲二伊勢守一、直廣肆石川朝臣小老爲二美濃守一、○乙酉、伊豫國獻二鑄鑛一、○八月戊子朔、茨田足嶋賜二姓連一、○丙午、詔曰、藤原朝臣(鎌足)所レ賜之姓、宜レ令二其子不比等承一之、但意美麻呂等者、緣レ供二神事一、宜レ復二舊姓一焉、○丁未、修二理高安城一、天智天皇五年築城也　○癸丑、定二朝儀之禮語具一別式一、○九月戊午朔、以二无冠麻續豐足一爲二氏上一、无冠大贄爲助、進廣肆服部連佐射爲二氏上一、无冠功子爲助、○甲子、下總國大風、壞二百姓廬舍一、○丁卯、遣二當耆皇女侍于伊勢齋宮一、○壬午、周芳國獻二銅鑛一、○乙酉、令二近江國獻一金青、伊勢國朱沙、雄黃、常陸國備前伊豫日向四國朱沙、安藝長

○鑄鑛、鑄の鑛石なり
（八月）茨田足嶋、錄右京皇別に茨田連多朝臣同祖神八井耳命男彦八井耳命之後也とあり
○意美麻呂等者云々、持統紀に葛原朝臣麻呂と見え意美麻呂等も藤原氏を稱せしを舊姓中臣氏に復せしめられしものなり
○高安城、河內國高安（今中河內）郡にあり天智紀六年に注す注の五は六の誤なるべし
○朝儀之禮、朝廷にて行はるゝ恒例臨時の儀式なり

門二國金青綠青、豐後國眞朱、○冬十月庚寅、以藥師寺構作略了、詔衆僧令住其寺、○己酉、陸奥蝦夷獻方物、○十一月丁巳朔、日有蝕之、○辛酉、伊勢國獻白鐲、○癸亥、遣使諸國大祓、○己卯、大嘗、直廣肆榎井朝臣倭麻呂竪大楯、直廣肆大伴宿禰手拍竪楯梓、賜神祇官人、及供事尾張美濃二國郡司百姓等物、各有差、○乙酉、下總國獻牛黃、○十二月辛卯、令對馬嶋治金鑛、○丁未、令越後國修理石船柵、○乙卯、遷多氣大神宮寺于度合郡、○丙辰、贈勤大貳山代小田直廣肆、

（九月）无冠、无冠は無位と云に同じ　○麻續、考證に續下疑脫連字とあり延曆十年二月紀に麻續連廣河あり錄右京神別神麻續連天物知命之後也とあり同族なるべし狩谷氏云續卽績字古鈔本作績と云　○爲助、氏助は此に始て見ゆ　○服部連、兩氏なり錄大和神別服部連天御中主命十一世孫天御梓命之後也、攝津神別服部連燠之速日命十二世孫麻羅宿禰之後也とあり何れなるか明ならず　○廬舍、原本廬を庐に作る曾本淀本に據て改む考證云庐廬之俗省　○當耆皇女、天武天皇々女、天武紀には託基又は多紀に作れり　○周芳、元年十二月紀に周防に作る　○金青、抄調度部圖繪具に本草稽疑云金青者空青之寂上也とあり　○朱沙、同部に本草云朱砂寂上者謂之光明沙箋注に證類本草玉石部上品丹砂條引陶隱居云卽今朱砂也とあり　○雄黃、本草和名に、一名黃食石て名石黃雄黃者地精也金之精也和名岐爾出伊勢國とあり　○常陸國、國字疑くは衍　○綠青、抄調度部圖繪具に本草云綠青一名碧青（綠青俗云祿省）とあり　○眞朱、本草和名に丹砂一名眞朱、抄調度部圖繪具に考聲切韻云丹砂似朱砂而不鮮明者也とあり　（十月）藥師寺、大和國添下郡にあり天武紀九年十一月に注す　（十一月）大祓、大嘗祭を行はせ給はむが爲の大祓なり　○大嘗、神祇令に凡大嘗者每世一年國司行事踐祚大嘗祭式に凡踐祚大嘗七月以前卽位者當年行事八月以後者明年行事とあり　○榎井朝臣、物部氏の同族　○竪大楯、大嘗祭式に石上榎井二氏各二人皆朝服率內物部四十人立大嘗宮南北門神楯戟訖卽分就左右楯下胡床伴佐伯各二人分就南門左右外掖胡床待時開門と見ゆ　○大伴宿禰、高皇產靈命五世孫天押日命之後（錄左京神別）　○枠、狩谷氏云枠卽鉾字蓋古用木造之所謂杠谷樹八尋矛之類是也故變金从木耳と　○尾張美濃二國、尾張は悠紀美濃は主基なり　（十二月）治金鑛、大寶元年三月甲午對馬貢金建元爲大寶元年と見ゆ　○石船柵、越後國石船郡にあり孝德紀四年に注す　○多氣大神宮寺、伊勢國多氣郡にあり原本大を太に作る金本閣本及紀略に據て改む寺は神宮文庫本に據て補ふ　○度合郡、閣本及類史合を會に作る　○贈、曾本賜に作る　○山代小田、天武紀元年に山背部小田に作る姓氏錄に山代忌寸山代直ありその何れなるか詳ならず

【三年】林坊、京師は左右兩京に別ちて北より南へ一條より九條に別ち一條每に四坊あり更に之を保に分てり坊は町と云に同じ
○絁、賦役令義解に細爲絹麁爲絁とあり
○五疋、賦役令に疋は長五丈一尺廣二尺二寸
○綿五屯、同義解に綿二斤曰屯
○布十端、同義解に布五丈二尺曰端
○稻五百束、束は十把にて一束より米五升を得
○桑原加都、天武紀朱鳥元年に侍醫桑原村主訶都授直廣肆因以賜姓曰連とあり重複す一は誤なるべし
○難波宮、攝津國東成郡にあり天武紀十二年十二月に出づ
（二月）雌黃、抄調度部圖繪具に兼名苑云雌黃一名金液（雌黃俗云之王）山有金其精稟則生雌黃耳とあり
○白鳩、治部式に中瑞とす
○錦部郡、河內國の郡名、今南河內郡に入る同郡鳩原村（今川上村大字）

三年春正月壬午、京職言、林坊新羅女牟久賣、一產二男二女、賜絁五疋、綿五屯、布十端、稻五百束、乳母一人、○癸未、詔授內藥官桑原加都直廣肆賜姓連、賞勤公也、是日、幸難波宮、○甲申、淨廣參坂合部女王卒、○二月丁未、車駕至自難波宮、○戊申、詔免從駕諸國騎兵等今年調役、○三月己未、下野國獻雌黃、○甲子、河內國獻白鳩、詔免錦部郡一年租役、又獲瑞人犬養廣麻呂戶給復三年、又赦畿內徒罪已下、○壬午、遣巡察使于畿內、撿察非違、○夏四月己酉、越後蝦夷一百六人賜爵有差、○五月辛酉、詔曰、圖勳之義、肇自前修、創功之賞、歷代斯重、蓋所以昭壯士之節、著不朽之名者也、汝坂上忌寸老、壬申年軍役、不顧一生、赴社稷之急、出於萬死、冒國家之難、而未加顯秩、奄爾隕殂、思寵往魂、用慰冥路、宜贈直廣壹、兼復賜物、○丁丑、役君小角流于伊豆嶋、初小角住於葛木山、以咒術稱、外從五位下韓國連廣足師焉、後害其能、讒以妖惑、故配遠處、世相傳云、小角能役使鬼神、汲水採薪、若不用命、卽以咒縛之、○六月戊戌、施山田寺封三百戶、限卅年也、○丙午、淨廣參日向王卒、遣使弔賻、

○丁未、命直冠已下一百五十九人、就日向王第會喪、○庚戌、淨大肆春日王卒、遣使弔賻、

白鳩を出し、處と云　○巡察使、持統紀八年七月に始て見ゆ　(四月)蝦夷、紀略夷を狄に作る　(五月)圖勳、勳功を計議するを云　○前修、文選離騷に見ゆ前代と云に同じ　○不朽、考證に朽卽朽字古鈔本諸書多用し之と云　○坂上忌寸老、天武紀元年に坂上直に作る　○復賜物、紀略賜を賻に作る　○役君、靈異記に役優婆塞者賀茂役公氏今高賀茂朝臣者也攷證に今昔物語云江優婆塞者賀茂江氏袖中抄亦云俗姓賀茂江公按續日本紀又云養老三年七月上賀茂役首石穗等賜賀茂役君姓同姓也(節略)とあり　○伊豆嶋、扶桑略記水鏡元亨釋書並に伊豆大嶋に流すとあり　○葛木山、大和志に葛城山連亙葛上忍海葛下三郡西隸河州第一峯曰高天原又呼金剛山とあり　○外從五位下、此時未だ此位なし追書せし　○配遠處、刑部式に伊豆爲遠流とあり　○世相傳云小角云々、此事靈異記今昔物語扶桑略記元亨釋書等に載す　○以咒縛之、類史咒の下に術の字あり　(六月)山田寺、大和志に在十市郡山田村一名華嚴寺孝德天皇五年蘇我倉山田大臣建とあり今磯城郡安倍村大字山田に址あり　○日向王、詳ならず　○遣使弔賻、喪葬令に五位以上身喪並奏聞遣使弔とあり　○春日王、木野戸翁云按皇胤紹運錄有施基皇子之子春日王正四位下蓋此

○秋七月辛未、多禰、夜久、菴美、度感等人從朝宰而來貢方物、授位賜物各有差、其度感嶋通中國於是始矣、○癸酉、淨廣貳弓削皇子薨、遣淨廣肆大石王、直廣參路眞人大人等監護喪事、皇子、天武天皇之第六皇子也、○八月己丑、奉南嶋獻物于伊勢大神宮及諸社、○壬辰、賜百官人祿各有差、○壬寅、伊豫國獻白燕、○九月丙寅、修理高安城、○辛未、詔令正大貳已下無位已上者、人別備弓矢甲桙及兵馬各有差、又勑京畿、同亦儲之、○丙子、新田部皇女薨、勑王臣百官人等會葬、天智天皇之皇女也、○冬十月甲午、詔赦天下有罪者、但十惡强竊二盜、不在赦限、爲欲營造越智、山科二山陵也、○辛丑、遣淨廣肆衣縫王、直大壹當麻眞人國見、直廣參土師宿禰根麻呂、直大肆田中朝臣法麻呂、判官四人、主典二人、大工二人於越智山陵、淨廣肆大石王、直大貳粟田朝臣眞人、直廣參土師宿禰馬手、直廣肆小治田朝臣當麻、判官四人、主典二人、大工二人於山科山陵、並分功修造焉、○戊申、遣巡察使于諸國、撿察、非違、○十一月辛亥朔、日有蝕之、○甲寅、文忌寸博士、刑部眞木等、自南嶋至、進位各有差、○己卯、施義淵法師稻一万束、哀學行也、○十二月癸未、淨廣貳大江皇女薨、令王臣百官人等會葬、天智天皇之皇女也、○甲申、令大宰府修三野、稻積二城、○庚子、始置鑄錢司、以直大肆中臣朝臣意美麻呂爲長官、

(七月)多禰、大隅國熊毛郡種子嶋なり原本禰を嶺に作る、天平五年六月紀に據て改む　○夜久、大隅國屋久嶋なり推古紀に掖玖とあり　○菴美、大隅國奄美大島なり齊明紀に海見島に作る　○度感、南嶋志に德嶋舊作度九島國史所謂度感島在永良部北而東北接大海とあり今大隅國大島郡德之島なり又一說には寶七島を云と　○朝宰、二年四月遣務廣貳文忌寸博士等八人于南嶋覓國とあり文忌寸等を朝宰と記せしなり　○中國、我國を中國と書けること始て見ゆ　○弓削皇子、天武天皇々子　(八月)奉南嶋、原本奉の下に于の字あり紀略に據て削る　○大神宮、原本大を太に作る闕本曾本淀本に據て改む下同じ　(九月)人別備弓矢云々、天武紀十三年閏四月詔にも文武官諸人務習用兵及乘馬則馬兵并當身裝束之物務具儲足云々とあり　○天智天皇之皇女、天智紀七年に阿倍倉梯麻呂大臣女橘娘新田部皇女を生むとあり第六皇女なり拾遺は此上に皇女者の三字を補へり　(十月)十惡、謀反謀大逆謀叛惡逆不道大不敬不孝不睦不義內亂を云　(十一月)刑部眞木、原本刑部を利鄭に作る四年六月紀に據て改む　○義淵、元亨釋書に傳あり行基道慈玄昉良辨等の師なり　○哀、紀略に褒に作る集韻に哀同褒とあり　(十二月)大江皇女、天智紀七年に忍海造小龍女色夫古娘の女とあり　○三野、日向國皃湯郡三納鄉あり此の地か　○稻積、大隅國桑原郡に稻積鄉あり今姶良郡に屬すれど詳かならず　○始置鑄錢司、抄職官部に鑄錢司(樹漸乃司)とあり持統紀八年三月黃書本實拜鑄錢司とあれば此に始置とあるはいぶかし內藤廣前の說に持統紀の鑄錢司は臨時に置かれしことにて事竣りて罷められしならむ既に罷めて復置かれしが故に始置と書けるなりと云

【四年】新田部皇子、天武天皇々子

○多治比眞人嶋、天平寶字四年正月紀に志麻に作れり

○靈壽杖、持統紀十年に賜二右大臣丹比眞人奥一杖、以哀致事とあれば重出せしならむ靈壽杖は漢書孔光傳注に靈壽木名似レ竹有二枝節一長不レ過二八九尺一園三四寸自然合二杖制一不レ須二削治一也とあり

○優高年、原本優を優に作る紀略に據て改む

（二月）安房郡大少領云々、養老二年五月紀に割二上總國四郡一置二安房國一とあり當時は上總に屬す安房郡は安房神社の神郡なればこの郡司の任用を特別にしたるなり（二年二月己巳條參照）

（三月）道照、考證に狩谷氏曰一本及日本紀三代格靈異記扶桑略記帝王編年記拾遺往生傳皆照作レ昭可レ從此及三代實錄今昔物語宋史佛祖統記作レ照誤とあり

○卽弔、紀略には卽の字なし恐くは衍

○丹比郡、淀本曾本比を北に作る民部式にも丹比郡とあり丹南丹北の二郡としたるは遙に後の事なり

○船連、欽明紀十四年に王辰爾船連之先也とあり亦姓氏錄に見ゆ

○惠釋、皇極紀四年に見えし船史惠尺なり

○被褥、夜着なり原本褥を裾に作る闕本淀本曾本に據て改む

○隨使入唐、宋史日本傳に孝德天皇白雉四年律師道照求レ法至二中國一從二三藏玄奘一受二經律論一とあり

○玄奘、慈恩寺三藏傳及續高僧傳に詳なり

○飢乏、原本乏を之に作る闕本に據て改む

○禪定、大乘義章に禪此翻爲二思惟修習一心住一緣離二於散動一故名爲レ定とあり六波羅密の一にて梵語禪那の略、靜慮の意に定は其譯名梵漢竝擧げたるなり

○而曰、而の字衍ならむ

○人能弘道、論語衞靈公篇に出づ

○鐺子、抄器皿部に鎗唐韻云鎗(音楚庚反字亦作レ鐺阿之奈倍)小鼎也とあり

○登州、河南道東牟郡に

（庚子）四年春正月丁巳、授二新田部皇子一淨廣貳、○癸亥、有レ詔、賜二左大臣多治比眞人嶋一靈壽杖及輿、優二高年一也、○二月乙酉、上總國司請二安房郡大少領一連任、父子兄弟、許レ之、○戊子、令二丹波國一獻レ錫、○己亥、令二越後佐渡二國一修營石船柵、○壬寅、遣二巡察使于東山道一檢察、非違、○丁未、累勑王臣京畿、令レ備二戎具一、○三月己未、道照和尚物化、天皇甚悼惜之、遣使卽弔賻之、和尚河內國丹比郡人也、俗姓船連、父惠釋少錦下、和尚戒行不レ缺、尤尚二忍行一、嘗弟子欲レ究二其性一、竊穿二便器一、漏汙二被褥一、和尚乃微笑、曰、放蕩小子汙二人之床一、竟無復一言一焉、初孝德天皇白雉四年、隨使入唐、適遇二玄奘三藏一、師受レ業焉、三藏特愛、令住二同房一、謂曰、吾昔往二西域一、在レ路飢乏、無二村可一乞、忽有二一沙門一、手持二梨子一、與二吾食一、吾自啖後、氣力日健、今汝是持レ梨沙門也、又謂曰、經論深妙不レ能二究竟一、不レ如レ學二禪流一、傳二東土一、和尚奉レ教、始習二禪定一、所レ悟稍多、於後隨レ使歸朝、臨レ訣三藏以二所持舍利經論一、咸授二和尚一、而曰、人能弘レ道、今以二斯文一、附屬、又授二一鐺子一、曰、吾從二西域一、自所二將來一、煎レ物養レ病、無不二神驗一、於是和尚拜謝、啼泣而辭、及レ至二登州一、使人多病、和尚出二鐺子一、暖レ水煮レ粥、遍與二病徒一、當日卽差、既解レ纜順レ風而去、比レ至二海中一、船漂蕩不レ進者七日七夜、諸人怪曰、風勢快好、計日應レ到、本國船不肯行、計必有レ意、卜人曰、龍王欲レ得二鐺子一、和上聞之曰、鐺子此是三藏之所施者也、龍王何敢索之、諸人皆曰、今惜鐺子不レ與、恐合船爲魚食、因取鐺子拋入海中、登時船進、還歸本朝、於元興寺東南隅別建禪院而住焉、于時天下行レ業之徒、從二和尚一學レ禪焉、於後周遊天下、路傍穿井、諸津濟處、儲レ船造レ橋、乃山背國宇治橋、和尚之所創造者也、和尚周遊凡十有餘載、有レ勑請還、還住二禪院一、坐禪如レ故、或三日一起、或七日一起、儵忽香氣從レ房出、諸弟子驚怪、就而謁二和尚一、端坐繩床、无レ有二氣息一、時年七十有二、弟子等奉遺教、火葬於粟原、天下火葬、從レ此而始也、世傳云、火葬畢、親族與弟子相爭、欲取二和上骨殿一之、飄風忽起、吹颺灰骨、終不レ知二其處一、時人異焉、後遷都平城也、和尚弟及弟子等奏聞、徙二建禪院一於新京、今平城右京禪院是也、此院多有二經論一、書迹楷好、並不二錯誤一、皆和上之所、將來者也、○甲子、詔二諸王臣一、讀二習令文一、又撰二成律條一、○丙寅、令二諸國一定牧地一、放牛馬、○夏四月

屬す
○和上、上文には和尚とあり
○索之、金本閣本曾本等之の字なし
○合船、原本合を含に作る閣イ本淀本に據て改む
○登時、即時に同じ
○元興寺、大和國添上郡にあり推古紀に出つ
○宇治橋、拾芥抄大橋部に山崎勢多宇治、延喜雜式に山城國宇治橋敷板近江國十枚丹波國八枚以二正税一充レ料云々とあり
○和尚之所創造、狩谷氏云按宇治橋道登所レ造常光寺斷碑靈異記可レ證予作二靈異記考證一辨レ之此云二和尚創造一者誤
○時年、年の字は紀略に據て補ふ
○奉遣敎、敎の字は閣本淀本及紀略に據て補ふ
○粟原、原本粟を栗に作る閣一本に據て改む粟原は大和國十市郡にあり大和志に粟原廢寺を見ゆ今磯城郡多武峯村の大字となる
○鰒、淀本曾本歛に作る鰒は歛の俗字
○和尚、和の字は閣本曾本及類史に據て補ふ

四癸未、淨廣肆明日香皇女薨、遣レ使弔二賻之一、天智天皇之皇女也、○五月辛酉、以二直廣肆佐伯宿禰麻呂一爲二遣新羅大使一、勤大肆佐味朝臣賀佐麻呂爲二小使一、大少位各一人、大少史各一人、○六月庚辰、薩末比賣、久賣、波豆、衣評督衣君縣、助督衣君弖自美、又肝衝難波、從肥人等、持レ兵剽二劫一國使刑部眞木等一於是勑笠志惣領、准レ犯決罰、○甲午、勑二淨大參刑部親王、直廣壹藤原朝臣不比等、直大貳粟田朝臣眞人、直廣參下毛野朝臣古麻呂、直廣肆伊岐連博得、直廣肆伊余部連馬養、勤大壹薩弘恪、勤廣參土部宿禰甥、勤大肆坂合部宿禰唐、務大壹白猪史骨、追大壹黃文連備、田邊史百枝、道君首名、狹井宿禰尺麻呂、追大壹鍜造大角、進大壹額田部連林、進大貳田邊史首名、山口伊美伎大麻呂、直廣肆調伊美伎老人等一撰二定一律令一、賜レ祿各有レ差、○八月戊申、宇尼備、賀久山、成會山陵、及吉野宮邊樹木無レ故彫枯、○乙卯、長門國獻二白龜一、○乙丑、勑二僧通德、惠俊一並還俗、代度各一人、賜二通德姓陽侯史、名久爾貸一、授二勤廣肆一、賜二惠俊姓吉名宜一、授二務廣肆一、爲レ用二其藝一也、○丁卯、赦二天下一、但十惡盜人不レ在二赦限一、

○徙建禪院、三代實錄元慶元年十二月紀に和銅四年八月移二建平城京一と見ゆ
○多有經論、支蕃式に凡禪院寺經論三年一度曝涼省寮僧綱三綱檀越等相共檢校と見ゆ
○楷好、楷は字書に模也式也法也とあり書體の正しく立派なるを云
○並不錯誤、並の字は類史に據て補ふ
○牧地、牧場なり諸國の牧名は馬寮式に見ゆ
(四月)明日香皇女、天武紀に飛鳥皇女に作る
○天智天皇之皇女、之皇の二字は紀略に據て補ふ
○大少位、考證云大寶元年正月紀有二遣唐大位及中位少位一、塙氏曰大少位卽判官位疑佑宰之譌と云
(六月)薩末、薩摩なり
○比賣久賣波豆、詳ならず
○衣評督、衣は薩摩國顯娃(エ)郡なり評督は郡の大領次の助督は少領なり考證に按韓方言綱レ郡爲レ評、梁書新羅傳俗其邑在レ內曰二啄評一、攝體紀背評又天平寶字八年七月紀有二氷高評一、蓋此間因用レ之評

高年賜レ物、又依二巡察使一、奏狀二諸國一、司等隨二其治能一、進レ階賜レ封各有レ差、阿倍朝臣御主人、大伴宿禰御行、並授二正廣參一、因幡守勤大壹船連秦勝封卅戶、遠江守勤廣壹漆部造道麻呂廿戶、並褒二善政一也、○冬十月壬子、施二京畿年九十已上僧尼等絁綿布一、始置二製衣冠司一、○己未、以二直大壹石上朝臣麻呂一爲二筑紫惣領一、直廣參小野朝臣毛野爲二大貳一、直廣參波多朝臣牟後閇爲二周防總領一、直廣參上野朝臣小足爲二吉備總領一、直廣參百濟王遠寶爲二常陸守一、○癸亥、直廣肆佐伯宿禰麻呂等至二自新羅一、獻二孔雀及珍物一、○庚午、遣二使于周防國一造レ船、○十一月壬午、新羅使薩飡金所毛來赴二母王之喪一、○乙未、天下盜賊往々而在、遣レ使追捕、○壬寅、大倭國葛上郡鴨君粳賣一產二男一女一、賜二絁四疋、綿四屯、布八端、稻四百束、乳母一人一、○十二月庚午、大倭國疫、賜二醫藥一救レ之、

督亦見神護景雲元年三月紀及下野國那須國造碑皇大神宮儀式帳又案儀式帳云難波朝廷天下立評時云々新家連阿久良督領礒連牟良助督仕奉督領助督亦謂大領少領也とあり

○衣君、詳ならず

○肝衝難波、肝衝は氏難波は名なるべし

○從肥人等、詳ならず矢野直道氏は從肥一傍訓須比據此肝衝以下蓋爲地名歟といひ考證に從肥人謂從肥前肥後之人也とあれど尙よく考ふべし　○笠志惣領、十月己未の條に筑紫惣領と見ゆ考證云笠俗竺字見龍龍手鑑笠志卽筑紫とあり惣領は伊豫總領周芳總領などに同じく當時大國の國司數國を兼知せしを云　○伊岐連博得、大寶三年二月紀に伊吉連博得に作る類史は岐を支に得を德に作る　○勤大壹薩弘恪、以下十四字類史に據て補ふ　○白猪史骨、原本史を大に金本閣本火に作る類史に據て改む賜姓の事欽明紀廿年に見ゆ　○道君首名、君の字は類史に據て補ふ大彦命の後なり（錄右京皇別）　○狹井宿禰、原本狹を挾に作る金本閣本淀本に據て改む　○鍛造大角、神龜五年紀に鍛冶造大隅賜守部連姓とあり考證に案鍛造和銅四年四月紀作鍛師連曰連曰造未知孰是鍛當作鍛與鑑同新撰字鏡鍛加奴知是也と云り　○山口伊美伎、大日本史氏族志に山口氏出自爾波伎有朝臣姓有宿禰姓有忌寸姓云々と云　（八月）八月、八の上秋の字あるべし　○宇尼備、畝傍山なり　○賀久山、香山なりこゝに御陵あることは詳ならず　○成會山陵、諸陵式に成相墓押坂彦人大兄皇子在大和國廣瀨郡大和志に在平尾村稱王子冢とあれど今其趾なし　○吉野宮、大和志に吉野郡に行宮五所ありと云吉野宮の事は雄略紀に注せり　○彫枯、考證に彫卽凋字五經文字云凋論語及釋文皆作彫とあり　○陽侯史、錄左京諸蕃楊侯忌寸出自隋煬帝之後達率楊侯阿子王也とあり　○賜惠俊、淀本曾本賜の字なし　○姓吉、錄左京皇別吉田連觀松彦香殖稻天皇々子天帶彦國押人命四世孫彦國葺命之後也昔磯城瑞籬宮御宇御間城入彦天皇御代任那國奏曰請將軍令治此地卽爲貴國之部也天皇大悅勅群卿令奏應遣之人卿等奏曰彦國葺命孫鹽垂津彦命天皇令鹽垂津彦命遣奉勅而鎭守彼俗稱宰爲吉故謂其苗裔之姓爲吉氏男從五位下知須等家居奈良京田村里間仍天璽押開豐櫻彦天皇神龜元年賜吉田連姓　○諸國司等、原本諸の上詔の字あり金本閣本及紀略に據て削る　○隨其治能、治は紀略に據て補ふ諸本詔に作るは治の譌なり　○因幡守、考證に因上疑脫賜字　（十月）製衣冠司、原本製を制に作る金本淀本及紀略に據て改む　○波多朝臣牟後閇、持統紀三年四月に羽田朝臣齊に作り注に齊此云牟五閇とあり　○上野朝臣、上の下疑くは毛の字を脫す小足は下文男足に作る　○孔雀、推古紀六年八月新羅貢孔雀一隻と見ゆ　（十二月）薩飡、新羅の官名、十七等の第八なる沙飡なり　○赴母王之喪、字書に赴は告喪也とあり　○追捕、淀本曾本逐捕に作る　（十二月）卷第一、金本閣本卷の字なし原本一の下に終の字あり金本閣本に據て削る下同じ

續日本紀卷第一

【大寶元年】

○受朝、略記朝の下拜字あり

○樹烏形幢、類史烏を鳥に作る宮衛令に凡元日朝日若有聚集及蕃客宴會辭見皆立儀仗また兵庫式に凡元日及卽位構建寶幢者云々從殿中階南去十五丈四尺建烏像幢左日像幢次朱雀旗次青龍旗右月像幢次白虎旗次玄武旗とあり、烏形幢は金銅の烏を臺に居ゑ其周りに纓絡を飾り幢の柄は黑塗幢は五彩の雲を畫けり、日像幢は金塗の丸板に三足の烏を畫き月像幢は銀塗の丸板に銀の兎蟾蜍と月桂樹と瑠璃色の雲とを畫く幢の柄は黑塗丸輪九を以て柄を貫く幢と

續日本紀卷第二

起大寶元年正月盡二年十二月

從四位下行民部大輔兼左兵衞督皇太子學士臣菅野朝臣眞道等奉　勅撰

天之眞宗豐祖父天皇　文武天皇

大寶元年（辛丑）春正月乙亥朔、天皇御大極殿受朝、其儀於正門樹烏形幢、左日像青龍朱雀幡、右月像玄武白虎幡、蕃夷使者陳列左右、文物之儀、於是備矣、○戊寅、天皇御大安殿受祥瑞、如告朔儀、○戊子、新羅大使薩飡金所毛卒、賻絁一百五十疋、綿九百三十二斤、布一百段、小使級飡金順慶及水手已上、賜祿有差、○己丑、大納言正廣參大伴宿禰御行薨、帝甚悼惜之、遣直廣肆榎井朝臣倭麻呂等、監護喪事、遣直廣壹藤原朝臣不比等等、就第宣詔、贈正廣貳右大臣、御行、難破朝、右大臣大紫長（孝德）德之子也、○庚寅、宴皇親及百寮於朝堂、直廣貳已上者、特賜御器膳并衣裳、極樂而罷、○壬辰、廢大射、以贈右大臣喪故也、○丁酉、以守民部、尙

幡との區別は幢は釋名に童也其貌童々然也とあり童々は盛なる貌を云説文には幢字なく古へ橦字を借用ひたり後漢書馬融傳注に橦者旗之竿也とあり倭名抄には幢をハタホコと訓す幡は同書征戰具に考工記云幡（音翻波多）旌旗之總名也とあり釋名に旛幡也其貌幡々然也とあり幡々は毛詩菁伯傳に猶翩々也と見え幢幡共に其形狀より名づけたるなり

○朱雀幡、原本雀み雀に作る閣本曾本淀本及類史紀略に據て改む淀本紀略幡を幢に作る白虎幡亦同じ

○備矣、略記備の上に始の字あり

○大安殿、天武紀に見ゆ大極殿を云

○祥瑞、儀制令に凡祥瑞應見若麟鳳龜龍之類依瑞令大瑞隨即表奏上瑞以下並申所司元日以聞とあり

○告朔、太政官式に凡天皇孟月臨軒視朔中務式に視告朔者前一日置版位於大極殿前庭云々とあり天武紀五年に見ゆ

書直大貳粟田朝臣眞人、爲遣唐執節使、左大辨直廣參高橋朝臣笠間爲大使、右兵衛率直廣肆坂合部宿禰大分爲副使、參河守務大肆許勢朝臣祖父爲大位、刑部判事進大壹鴨朝臣吉備麻呂爲中位、山代國相樂郡令追廣肆掃守宿禰阿賀流爲小位、進大參錦部連道麻呂爲大錄、進大肆白猪史阿麻留、无位山於億良爲少錄、○癸卯、直廣壹縣犬養宿禰大侶卒、遣淨廣肆夜氣王等、就第宣詔、贈正廣參、以壬申年功也、○二月丁未、詔始任下物職、○丁巳、釋奠、注釋奠之禮於是始見矣、○己未、遣泉內親王侍於伊勢齋宮、○癸亥、行幸吉野離宮、○丙寅、任勸民官戶籍史等、○庚午、車駕至自吉野宮、○三月丙子、賜宴王親及群臣於東安殿、○戊子、遣追大肆凡海宿禰龜鎌于陸奥治金、○壬辰、令僧弁紀還俗代度一人、賜姓春日倉首名老、授追大壹、○甲午、對馬嶋貢金、建元爲大寶元年、始依新令改制官名位號、親王明冠四階、諸王淨冠十四階、合十八階、諸臣正冠六階、直冠八階、勤冠四階、務冠四階、追冠四階、進冠四階、合三十階、外位始直冠正五位上階、終進冠少初位下階、合二十階、勳位始正冠正三位終

○大伴宿禰御行薨、公卿補任に御行正月五日任大納言、叙正三位同十五日薨年五十六廿日贈正廣貳右大臣云々と見ゆ贈官位の始なり

○難破朝、原本破を波に作る金本閣本に據て改む

○御器膳、御食を食器と共に賜はりしなり

○大射、雜令に凡大射正月中旬親王以下初位以上皆射之と見え太政官式には大射正月十七日とあり

○守民部尚書、守の字或は衍ならむ尚書は後の卿なり凡そ諸省の長官唐にては尚書と稱せしを我國にて大寶令制定の時に卿と稱することに定められしかど其以前には唐制に倣ひて尚書とも稱せしなるべし元明紀にも和銅元年八月攝津大夫從三位高向朝臣麿薨難波朝廷刑部尚書大花上國忍之子也と見えたり

○高橋朝臣笠間、二年八月爲造大安寺司三年十月爲造御竈官副とあるを見れば此人は入唐せざりしなるべし

○右兵衛率、原本率を卒に作る閣本曾本等に據て改む後之を改めて督とす　○坂合部宿禰大分、養老二年十二月紀に爲大使とあり上に云る高橋朝

追冠從八位下階、合十二等、始停賜冠、易以位記、語在年代曆、又服制、親王四品已上、諸王諸臣、一位者皆黑紫、諸王二位以下、諸臣三位以上者皆赤紫、直冠上四階深緋、下四階淺緋、勤冠四階深綠、務冠四階淺綠、追冠四階深縹、進冠四階淺縹、皆漆冠綺帶、白襪、黑革舄、其袴者、直冠以上者皆白縛口袴、勤冠以下者白脛裳、授左大臣正廣貳多治比眞人嶋正二位、大納言正廣參阿倍朝臣御主人正從二位、中納言直大壹石上朝臣麻呂、直廣壹藤原朝臣不比等正三位、直大壹大伴宿禰安麻呂、直廣貳紀朝臣麻呂正從三位、又諸王十四人諸臣百五人、改位號進爵、各有差、以大納言正從二位阿倍朝臣御主人爲右大臣、中納言正三位石上朝臣麻呂、藤原朝臣不比等、正從三位紀朝臣麻呂、並爲大納言、是日罷中納言官、○己亥、丹波國地震、三月、○壬寅、賜右大臣從二位阿倍朝臣御主人、絁五百疋、絲四百絇、布五千段、鍬一萬口、鐵五萬斤、備前備中但馬安藝國田二十町、

臣笠間に代れるなるべし　○大位、位は佑或は佐の誤なるべし下の中位小位の位も同じ　○郡令、欽明紀に見ゆ郡令は卽ち郡領なり　○山於億良、曾本淀本於を上に作る於上何れもウヘと訓ず萬葉集靈異記大神宮儀式帳多度寺資財帳倭名抄の郡鄕等於をウヘと訓る例多し靈龜二年四月紀には山上臣に作り萬葉集亦同じ錄右京皇別山上朝臣大春日朝臣同祖天足彦國忍人命之後とあり　(二月)下物職、持統紀七年四月に監物をオロシモノツカサと訓り監物は職員令中務省に大監物二人掌監察出納請進管鑰とあり出納を監察する官なるが下物とは出すを主としたるなり　○丁巳、紀略丁未に作る水鏡略記同じされど此月甲辰朔なれば丁未は四日にて上と重複す　○釋奠、學令に凡大學國學每年春秋二仲之月上丁釋奠於大聖孔宣父義解に謂釋釋菜也奠奠幣也祀其先聖以示敬道宣父是孔子謚也とあり其式は大學寮式に詳なり注の釋奠云々の十字は後人の攙入なるべし　○泉內親王、天智天皇々女　○行幸、上に一本太上天皇の四字あり　○民官、天武紀に紀朝臣弓張誄民官事とあり民官は民部省なり　(三月)賜宴王親、金本淀本及紀略宴を饗に作り王一に皇に作る　○東安殿、大安殿に對し其東にあるに由て名く　○龐鎌、天武紀朱鳥元年に菖蒲に作る訓通ず　○弁紀、萬葉には弁基に作れり　○春日倉首老、懷風藻には春日藏老とあり　○對馬嶋貢金、大日本史に水鏡一代要記並云對馬始貢白金因建元大寶朝野郡載有對馬貢銀記據聖武紀天平感寶元年陸奥始貢黃金然則是年所貢者白金非黃金とあり天武紀二年白金を貢ること見ゆ併見るべし略記には此下對馬島出白銀郡司等授二階位并賜絁綿布鍬等の廿字あり　○新令、律令撰定の事庚子年七月及是歲八月紀に見ゆ　○親王明冠四階云々、考證に冠猶位所謂明位四階卽一品二品三品四品是爲親王之位淨位十四階卽正從一位正從二位正從三位正從四位上下正從五位上下是爲諸王之位親王一品至四品四階相當承前明位諸王正一位至從五位下十四階相當承前淨位故云親王明冠四位諸王淨冠十四階非言當時仍有明淨等之稱也下皆倣此案至是時諸王既與諸臣同其位號所謂淨冠十四階卽諸王位三十階中之正冠六階直冠八階今特爲明其相當別言之耳非言三十階之外有此十四階也と云り金本閣本階を品に作る　○正冠六階、正從一位、同二位同三位是なり　○直冠八階、原本冠を階に作る曾本淀本に據て改む正從四位上下同五位上下合せて八階　○勤冠四階、正從六位上下合せて四階　○務冠四階、正從七位上下合せて四階　○進冠四階、大少初位上下合せて四階なり　○外位、蒲生氏曰後周宇文氏墓姬周禮制而國號周置六官且改魏之九官曰九命而命有內外內命叙王朝之官外命叙諸侯及州縣官皇朝因之制內位外位蓋自天武始也　○勳位、武功の爵を勳と云蒲生氏云唐六典司勳郎中掌邦國官人之勳級凡勳十二等皇朝之制因之而建勳位自正三位以下唐自正二品則所比崇一等也と　○始停賜冠、考證に按天武紀十一年三月詔親王以下百寮諸人自今以後位冠及襠褶脛裳莫著六月男女始結髮仍著漆沙冠持統紀云三年九月遣石上朝臣麻呂等筑紫給送位記五年二月授官人位記據此停賜冠給位記自天武持統朝然而非昉于此未詳と云り　○年代曆、考證に按扶桑略記敏達六年條引和漢年代曆未知與此同異也と云り　○服制、天武紀十二年持統紀四年並に服制のこと見ゆ　○黑紫、深紫を云　○赤紫、淺紫を云　○漆冠、天武紀に見ゆ　○綺帶、持統紀に見えたり綺は抄布帛部綺蒋魴切韻云似錦而薄者也(於利毛能又一訓加無波太)とあり綺を以て作れる帶なり　○黑革鳥、烏皮舄なり抄裝束部に唐令云諸舄履並烏色舄重皮底履單皮底とあり　○白縛口袴、持統紀に見ゆ　○白脛裳、脛裳は天武紀に見ゆハヽキモと訓ず　○多治比眞人嶋正二位、下文の例に據るに正の上正字を重ぬべし考證に按に上の正は正冠の正下の正は正從の正なり此日官名位號を改むるの始なり故に授くる所の位階の上に冠するに此字を以てし其承前の正冠に相當するを明にす下みな此に倣へと云り　○御主人、本居翁云美宇志と訓むべし　○罷中紋言官、考證に中納言未詳置何代案持統紀有中納言三輪高市麻呂天平勝寶五年三月巨勢朝臣奈氏麻呂傳云淡海朝中納言大雲比登之子也蓋天智天皇時置是官至是罷之故令不載至慶雲二年四月又置とあり　○三月、原本月を日に作る金本閣本に據て改む　○絢、賦役令義解に絲十六兩曰絢とあり　○段、類史に端に作る　○鐵、卽ち鐵の字なり五經文字相承けて鐵に作る

(四月)月讀神、神名式に山城國葛野郡葛野坐月讀神社(名神大月次新嘗)と見え今同郡松尾村大字松室に坐ます金本閣本淀本讀の字なし　○樺井神、神名式に山城國綴喜郡樺井月神社(大月次新嘗)山城志に今在水主神社傍稱曰川上神祠其故趾村西北、今久世郡寺田村大字水主に坐ます　○木嶋神、神名式に山城國葛野郡木嶋坐天照御魂神社(名神大月次相嘗新嘗)今同郡大秦村大字大秦に坐す　○波都賀志神、神名式に山城國乙訓郡羽束師坐高御產日神社(大月次新嘗)今同郡羽束師村大字志水に坐す　○右大弁、弁は卽ち辨の字なり狩谷氏云上野國多胡郡和銅四年碑靈異記寬平大安寺起等用此字と　○親王、考證云下疑脫諸王二字　○下毛野朝臣、毛は紀略に據て補ふ　○大通事、通事は通譯なり推古紀十五年に出づ

○夏四月甲辰朔、日有蝕之、○丙午、勑、山背國葛野郡月讀神、樺井神、木嶋神、波都賀志神等神稻、自今以後、給中臣氏、○庚戌、遣右大弁從四位下下毛野朝臣古麻呂等三人、始講新令、親王諸臣百官人等就而習之、○癸丑、遣唐大通事大津造廣人賜垂水君姓、○乙卯、遣唐使等拜朝、○戊午、奉幣帛于諸社、祈雨于名山大川、罷田領委國司巡撿、○五月癸酉朔、太政官處分、王臣五位已上上日、本司月終移式部、然後式部抄錄、申送太政官、○丁丑、令群臣五位已上、出走馬、天皇臨觀焉、○己卯、入唐使粟田朝臣眞人授節刀、勑、一位已下、賜休暇、不得過十五日、唯大納言已上、不在聽限、○己亥、始改勤位已下之號、內外有位六位已下者、進階一級、○六月壬寅朔、令正七位下道君首名、說僧尼令于大安寺、○癸卯、正五位上忌部宿禰色布知卒、詔贈從四位上、以壬申年功也、始補內舍人九十人、於太政官列見、○己酉、勑、凡其庶務、一依新令、又國宰郡司、貯置大稅、必須如法、如有闕怠隨事科斷、是日、遣使七道宣告依新令爲政、及給大租之狀、并頒付新印樣、○壬子、以正五位上波多朝臣牟胡閇、從五

○大津造、系詳ならず
○垂水君、豐城入彦命四世孫賀表乃眞稚命の後（錄左京皇別）內藤氏云垂水大津自ら別姓なれば蓋し本垂水氏故ありて大津造を冒しけるが今其本姓に復せしなるべし
○大川、原本川を山に作る紀略に據て改む　○田領、卽ち田令なり令領相通ず　○上日、出勤日なり式部式に每月二日正月三日諸司各計前月上日造瀧令主典申送省とあり　○出走馬、太政官式に凡五月五日天皇觀騎射并走馬弁及史等撿挍諸事所司設御座於武德殿是日內外群官皆著菖蒲鬘諸司各供其職と見え次に走馬を進るに就ての制も見ゆ　○節刀、軍防令義解云凡節者以氈牛尾爲之使者所權也今以刀劍代之故曰節刀と
○賜休暇云々、假寧令云凡在京諸司每六日並給休假一日（中略）五月八月給田假分爲兩番各々十五日其風土異宜種收不等通隨便給とあり十五日とあるは田假なるべし　（六月）大安寺、大和國添上郡にあり聖德太子の建立なり大和志に大安廢寺在大安寺村とあり　○忌部宿禰色布知、天武紀に色弗に作る貞觀十一年紀に神祇大祐正六位上忌部宿禰高善改忌部爲齋部と見えたり　○從四位上、一本上を下に作る　○內舍人、軍防令云凡五位以上子孫年廿一以上見無役任者每年京國官司勘撿知實限十二月一日并身送式部申太政官撿簡性識聰敏儀容可取充內舍人　○列見、公事根源に上卿辨少納言外記史など參りて太政官にて行へる公事なり六位以下の藝能あるものをえらびて式部兵部の二省より率して參れるを上卿のそれをめしよせて器量容儀をみる也同補注に列置而撰見之意也と云　○大租、下文二年二月丙辰諸國大租驛起稻及義倉并兵器數文始送于辨官と見ゆ大租は大稅に同じ卽ち正稅なり　○新印樣、公式令に內印方三寸外印方二寸半諸司印方二寸二分諸國印方二寸とある是なり　○牟胡閇、本紀一に胡を後に作る　○造藥師寺司、藥師寺は二年戊戌十月紀に見ゆ　○王親、金本閣本親を臣に作る　○西高殿、二年正月紀に宴群臣於西閣と見ゆるに同じ　○時雨、爾雅釋天に時雨曰澍とあり澍ぎて萬物を生ずるを云　○四畿內、大和山城河內及攝津なり　○太上天皇、持統天皇なり正統記に太上天皇本朝には昔其例なし此天皇よりぞ太上號は侍りける云々と見えたり

位上許曾倍朝臣陽麻呂、任造藥師寺司、○丁巳、引王親及侍臣、宴於西高殿、賜御器膳并帛各有差、○丙寅、以時雨不降、令四畿內祈雨焉、免當年調、○庚午、太上天皇幸吉野離宮、

（七月）行封時賜、狩谷氏云時恐特字
○村國小依、天武紀に村國連男依に作る此氏姓氏錄に載せず
○當麻公國見、考證に按に國見姓己亥年十月紀書當麻眞人此云當麻公者蓋論功行封在賜姓前仍舉當時之稱以示其實耳以下諸人並皆倣此と云り
○大侶、天武紀に大伴に作る
○小君、天武壬申紀に朴井連雄君に作り同五年紀物部連雄君に作る
○書首尼麻呂、天武紀根摩呂に、慶雲四年四月紀禰麻呂に作る
○黃文造大伴、天武紀に黃書造に作る
○大伴連馬來田、天武紀望多に作る
○神麻加牟陀君兒首、天武紀三輪君子首或は大三輪眞上田子人君に作る
○一十人、原本十一人に作る金本閣本に據て改む
○和爾部臣君手、元年丁酉九月紀に丸部臣君手とあるに據て部の下に君の字を補ふ
○依令、祿令に凡五位以上以功食封者其身亡者大功減半傳三世上功減三分之二傳二世中功減四分之三傳子下功不傳とあり
○皇大妃、公式令義解に天子母居妃位者爲皇太妃とあり阿閉皇女なり
○多治比眞人嶋麿、扶桑略記公卿補任に年七十八

○秋七月辛巳、車駕至自吉野離宮、○壬辰、勅、親王已下、准其官位賜食封、又壬申年功臣、隨功第亦賜食封、並各有差、又勅、先朝論功行封時、賜村國小依百二十戶、當麻公國見縣犬養連大侶、榎井連小君、書直知德、書首尼麻呂、黃文造大伴、大伴連馬來田、大伴連御行、阿倍普勢臣御主人、神麻加牟陀君兒首一十人各一百戶、若櫻部臣五百瀨、佐伯連大目、牟宜都君比呂、和爾部臣君手四人各八十戶、凡十五人賞雖各異、而同居中第、宜依令四分之一傳子、又皇大妃、內親王、及女王、嬪封各有差、是日、左大臣正二位多治比眞人嶋麿、詔、遣右少弁從五位下波多朝臣廣足、治部少輔從五位下大宅朝臣金弓等、監護喪事、又遣三品刑部親王、正二位石上朝臣麻呂、就第弔賻之、正五位下路眞人大人爲公卿之誄、從七位下下毛野朝臣石代爲百官之誄、大臣宣化天皇之玄孫、多治比王之子也、○戊戌、太政官處分、造宮官准職、造大安藥師二寺官准寮、造塔丈六二官准司焉、凡選任之人、奏任以上者、以名籍送太政官、判任者、式部銓擬而送之、又功臣封、應傳子、若無子勿傳、但養兄弟子爲子者聽傳、其傳封之人亦無子、聽更立養子而轉授之、其計世葉、一同正子、但以嫡孫爲繼、不得傳封、又五位以上子、依蔭出身、以兄弟子爲養子聽叙位、其以嫡孫爲繼不得也、又畫工及主計主稅竿師雅樂諸師如此之類、准官判任、

とあり左大臣に任ぜられしは扶桑略記に四年八月廿六日とす補任亦同じ　○正二位石上、三月甲午紀及二年八月紀に據るに二は三の誤なり　○爲公卿之誄、誄の事推古紀廿年に見ゆ　○多治比王之子、三代實錄貞觀八年二月廿一日丹墀眞人貞峰の上表に宣化天皇之皇子加美惠波皇子生二十市王一十市王生二多治比古王一此王生産之夕忽多治比花飛二浮湯沐釜一以二斯冥感一名二多治比古王一成長之後固執二謙退一奏請求レ姓因賜二姓多治比公一便以名爲レ姓存二其舊志一と見ゆ　○選任、原本選を選に作る紀略に據て改む　○奏任、選叙令に凡任レ官大納言以上左右大辨八省卿五衛督彈正尹大宰帥勅任餘官奏任義解に謂內外諸司主典以上其郡領軍毅亦爲二奏任一也とあり　○判任、同令に主政主帳及家令等判任義解に謂依二軍防令一內舍人亦爲二判任一其文學才伎長上亦同とあり　○功臣封云々、上文壬辰の注に見ゆ　○養子、戶令に凡無子者聽レ養二四等以上親於二昭穆一合者一卽經二本屬一除附とあり　○依蔭出身、親王諸王及諸臣五位以上のもの其蔭に依て嫡子庶子共に相當の位階に叙せらるゝを云其制選叙令に詳なり

《八月》僧惠耀、金本惠を慧に作る　○並令、令は略記に據て補ふ　○姓錄名兄麻呂、考證に神龜元年五月賜二姓羽林連一案養老三年正月紀及萬葉集錄作レ角角古音祿詳見二通雅一又案天智紀載韓人角福牟以閑二於陰陽一授二小山上一而養老三年正月紀書二陰陽角兄麻呂一則兄麻呂蓋福牟之後襲二祖業一者也とあり　○以淨御原朝廷云々、天武紀十年二月詔朕今更欲下定二律令一造二法式一上八月造二法式一と見ゆ廷は原本庭に作る曾本淀本に據て改む　○志我山寺、拾芥抄に崇福寺近江國志賀郡號二志賀寺一天智天皇建とあり　○庚午年、天智天皇九年なり同年より起算するに

○八月壬寅、勅僧惠耀信成、東樓、並令二還俗一復二本姓一、代度各一人、惠耀姓錄、名兄麻呂、信成姓高、名金藏、東樓姓王、名中文、○癸卯、遣二三品刑部親王、正三位藤原朝臣不比等、從四位下下毛野朝臣古麻呂、從五位下伊吉連博德、伊余部連馬養等一撰二定律令一、於是始成、大略以二淨御原朝廷一爲准正、仍賜二祿有レ差、○甲辰、太政官處分、近江國志我山寺封、起二庚午年一計滿二三十歲一、觀世音寺筑紫尼寺封、起二大寶元年一計滿二五歲一、並停止之、皆准レ封施レ物、又齋宮司准レ寮、屬官准二長上一爲、○丁未、先是、遣二大倭國忍海郡人三田首五瀨於對馬嶋一、治二成黃金一、至是、詔授二五瀨正六位上一、賜二封五十戶、田十町、并絁綿布鍬、仍免二雜戶之名一、對馬嶋司及郡司、主典已上、進二位一階、其出レ金郡司者二階、獲レ金人家部宮道授二正八位上一、并賜二絁綿布鍬一、復二

昨年にて三十年に滿てり故に滿三十年と云原本午を子に作る曾本淀本に據て改む　○觀世音寺、筑前續風土記に三笠郡にあり普門山清水寺といふと見え今同國筑紫郡水城村に屬し太宰府趾の東二丁にあり　○滿五歲並停止、祿令に凡寺不レ在二食封之例一若以二別勅權封者一不拘二此令一（注・權謂二五年以下一）とあり　○齋宮司云々、齋宮は神龜四年に初て寮官を任じ其後廢置定制なし此時には齋宮司と稱し未だ寮たらず故に寮に准じて屬官を長上に准ぜられたり　○三田首、寶龜元年五月紀に三田毗登家麻呂等四人賜二姓道田連一と見ゆ　○黃金、考證に按是年所レ貢白金非二黃金一也此據二五瀨所二建言一故曰二黃金一耳　○家部宮道、神護景雲二年六月備前國赤坂郡人家部大水美作國勝田郡人家部國持等六人賜二姓石野連一と見え錄左京諸蕃石野連百濟國人近速古王孫憶賴福留之後也とあり　○大臣子云々、田令に凡應二給一功田一者父祖未レ請及未レ足而身亡者給二其子孫一とあり　○（注）注、以下二十五字傍注なること明なり　○五位已下皆參大藏云々、大藏省にて季祿を賜ふ事大藏式に見ゆ三代格延曆十一年十一月十九日勅例賜二位祿季祿一者諸五位以上自參二大藏省一受若不レ參者彈正糺之と見え後には五位以上も大藏省に參りて受くる事に定められ其事彈正式にも見ゆ　○明法博士、新令を講ずるに就て之を置かる令外官なり天平二年三月格明法博士を定めて正七位下の官とす　○六道、靈龜元年五月紀及養老三年九月紀に見ゆ　○皇親云々、祿令に凡皇親年十三以上皆給二時服一料一　○紀伊國、紀略紀伊の下等の字あり　○調忌寸老人正五位上、原本上の字なし類史及紀略に據て補ふ　○預撰、金本閣本預を豫に作る預豫相通ず

其戶終レ身、百姓三年、又贈右大臣大伴宿禰御行首遣二五瀨一治レ金、因賜二大臣子封百戶、田四十町一、注年代曆曰、於後五瀨之詐欺發露、知下贈右大臣爲二五瀨一所レ誤也、」撰令所處分、職事官人賜レ祿之日、五位已下、皆參二大藏一受二其祿一、若不レ然者、彈正糺察焉、○戊申、遣二明法博士於六道、除二西海道一講二新令一、○己酉、皇親年滿者、不論官不、皆入二賜祿之額一、○甲寅、播磨、淡路、紀伊三國言、大風潮漲、田園損傷、遣レ使巡二監農桑一存二問百姓一、又遣二使於河內、攝津、紀伊國一、營造行宮、兼造二御船三十八艘、豫備二水行一也、○辛酉、參河、遠江、相摸、近江、信濃、越前、佐渡、但馬、伯耆、出雲、備前、安藝、周防、長門、紀伊、讃岐、伊豫、十七國蝗大風、壞二百姓廬舍、損二秋稼一、詔、贈二從五位下一調忌寸老人正五位上、以預レ撰二律令一也、○丙寅、廢二高安城、其舍屋雜儲物、移二貯于大倭、河內二國一、令二諸國加二差衛士一配二衛門府一焉、

(九月)天皇幸紀伊國、萬葉九に大寶元年辛丑冬十月太上天皇大行天皇幸紀伊國時歌十三首を載す太上天皇は持統天皇を申し大行天皇は文武天皇を申奉れるなるべし大行とは崩御後未だ諡を奉らぬ程の稱なれば之を編したる時は未だ御諡號を奉らざりし故に大行天皇と記し奉れるならむ然らば此度の紀伊の行幸は持統天皇と文武天皇と御二柱なりしを紀には太上天皇を略して天皇をのみ記し奉れるならむ

(十月)武漏温泉、齊明紀に牟婁温湯とあり通證に紀伊國牟婁郡湯峯の湯なりとすれど南紀名勝志に牟漏温湯崎村白良濱中有温泉數個所曰走湯者在村西三町許土人稱佐伎乃湯是也按牟漏郡中有温泉數箇所不他所傳稱臨幸之事然則謂此所温泉曰牟婁湯乎と云り　○曲赦、文獻通考に晉武帝泰始五年曲赦交阯九眞日南五歲刑と見えまた宋朝赦宥之制云々有釋雜罪至死者其恩霈之及有止於京城兩京兩路一路數州一州之地者則謂之曲赦と云大赦に對し一部曲の罪を赦すを云　(十一月)老疾、戶令義解に六十以上爲老癈疾爲疾とあり　○造大幣司、大幣とは神祇に供する幣物なり神祇令義解に見ゆ　○彌努王、彌努は美濃又は三野に作れり　○引田朝臣、阿倍氏と同祖なり慶雲元年十月及和銅五年十一月改めて阿倍朝臣を賜ふこと見ゆ　○令彈正臺、淀本及紀略令を命に作り金本閣本曾本にはなし　○朝廷、原本廷を庭に作る淀本曾本に據て改む　(十二月)帑、袋に同じ抄調度部行旅具に囊蔣魴切韻云袋(音代字亦作帑布久路)公式令に其隨身者仍以袋盛とあり　○五位以上婦、衣服令に

○九月(庚午朔)戊寅(九)、遣使諸國、巡省産業、賑恤百姓、○丁亥(十八)、天皇幸紀伊國、○冬十月(癸子朔)丁未(八)、車駕至武漏温泉、○戊申(九)、從官幷國郡司等、進階幷賜衣衾、及國内高年給稻各有差、勿收當年租調幷正稅利、唯武漏郡本利並免、曲赦罪人、○戊午(十九)、車駕自紀伊至、○己未(二十)、免從駕諸國騎士當年調庸、及擔夫田租、○十一月(己巳朔)壬申(四)、大赦天下、但盜人者不在赦限、老疾及僧尼賜物、各有差、○丙子(八)、始任造大幣司、以正五位下彌努王、從五位下引田朝臣爾閑爲長官、○丁丑(九)、令彈正臺巡察畿内、○乙酉(十七)、太政官處分、承前有恩赦罪之日例、率罪人等、集於朝廷、自今以後、不得更然、赦令已降、令所司放之、○十二月(己亥朔)戊申(十)、賜諸王卿等帑樣、○癸丑(十五)、制、五位以上婦不得著夫服色、但朝會之日聽著得色已下、○乙丑(廿七)、大伯内親王薨、天武天皇之皇女也、○是年、夫人藤原氏誕皇子(聖武)也、

【二年】禮服、衣服令に所謂禮服なり大祀大嘗元日則服之とあり　○朝服、同令に朝服朝廷公事則服之とあり　○杠谷樹、新撰字鏡に杠谷樹比々良木抄草木部に本草云黃芩(比々良岐)楊氏漢語抄云杠谷樹(杠音江和名同上)とあり記景行の段に比比羅木之八尋矛とあるも同じ原本杠を杜に作る金本閣本等に據て改む　○賀陁驛家、紀伊國海部郡にあり今の海草郡加太町なり兵部式に紀伊國驛馬萩原賀太各八疋とあり　○五帝太平樂、帝は常の誤なるべし五常樂は唐樂平調の曲名なり抄音樂部には五聖樂に作る太平樂も唐樂にして抄には道調曲とせり出時曲謂之朝少子武昌樂也と注せり　○善往、略記善住に作る　○辨照、同弁昭に作る　○僧照、同僧昭に作る　(二月)大幣、上に見ゆ外命婦夫服色以下任服彈正式云婦人得著夫服色但節會之日不在此例此と異なり服蘇芳以下諸色之義然作位色非也　○大伯内親王、天武紀に大來に作り、齊明紀に大伯に作る　○聽著得色已下、山田以文氏云得色以下者假令著紫人婦得に坐ます　○夫人藤原氏、不比等の女　○皇子、聖武天皇

二年春正月(壬寅)己巳朔、天皇御大極殿、受朝、親王及大納言已上始著禮服、諸王臣已下着朝服、○丙子(八)、造宮職獻杠谷樹長八尋、(俗曰比比良木)、○戊寅(十)、始置紀伊國賀陁驛家、○癸未(十五)、宴群臣於西閣、奏五帝太平樂、極歡而罷、賜物有差、○乙酉(十七)、以從三位大伴宿禰安麻呂爲式部卿、正五位下美努王爲左京大夫、正五位上布勢臣耳麻呂爲攝津大夫、從五位下當麻眞人橘爲齋宮頭、從四位上大神朝臣高市麻呂爲長門守、正六位上息長眞人子老、丹比間人宿禰足嶋、並授從五位下、○癸巳(廿五)、詔以智淵法師爲僧正、善往法師爲大僧都、辨照法師爲少僧都、僧照法師爲律師、○二月戊戌朔、始頒新律於天下、○庚戌(十三)、越後國疫、遣醫藥療之、是日、爲班大幣、馳驛追諸國國造等入京、○丙辰(十九)、諸國大租、驛起稻、及義倉、幷兵器數文、始送于辨官、○丁巳(二十)、任諸國國師、○己未(廿二)、歌斐國獻梓弓五百張、以充大宰府、是日、分遷伊太祁曾、大屋都比賣、都麻都比賣三神社、○乙丑(廿八)、諸國司

○追諸國國造等、考證に追猶召也とあり當時諸社の祭祀は國造專ら奉仕せしが故に之を召して幣帛を班たれしなり
○大租、上に出づ
○驛起稻、和銅二年六月紀に令二諸國進一驛起稻帳一、天平元年四月紀に爲レ造二山陽道諸國驛家一充二驛起稻五萬束一と見え厩牧令に馬有二闕失者一卽以二驛稻市替一とあり驛起稻とは驛の用途に充る稻なり
○義倉、賦役令に凡一位以下及百姓雜色人等皆取二戶粟一以爲二義倉一義解に分レ富賑レ貧其情合レ義故曰二義倉一とあり
○國師、諸國に每國公に置く法師の意なり延曆二年十月紀其數を定めて大國師一人少國師一人中下國は各國師一人を任することに定め同十一年之を改めて講師と稱すること弘仁十三年三月の官符に見ゆ
○歌斐國、甲斐國なり
○梓弓、抄草木部に梓孫愼曰梓(音子阿都佐)木名楸之屬也とあり弓材に用ふる梓は俗に赤芽柏(アカメカシ)と稱する木にて眞弓と云も之をもて作れるものにて同じ木なりと云
○伊太祁曾、神名式に紀伊國名草郡伊太祁曾神社(名神大月次相嘗新嘗)とあり今海草郡西山東村大字伊太祁曾にあり五十猛命を祀れり
○大屋都比賣、同式に大屋都比賣神社(名神大月次新嘗)とあり今同郡川永村大字宇田森にあり大屋都姫命を祀る
○都麻都比賣、同式に都麻都比賣神社(名神大月次新嘗)とあり今同郡東山東村大字平尾にあり抓津姫命を祀る
○給鑰、金本閣本及紀略鑰を鎰に作る、抄居處部門戶具に鑰音藥今按俗人印鑰之處用鎰字非也とあれど箋注に按龍龕手鑑云鑰正鎰俗蓋鑰作鎰者後世譌字也とあり(三月)隱伎、原本伎を吉に作る諸本に據て改む　○度量、原本量を置に作る類史及紀略に據て改む　○子首、養老二年正月紀、三年閏七月紀に子人に作る　○二槻離宮、齊明紀二年九月造二觀田身嶺上兩槻樹邊一曰二兩槻宮一と見ゆ是なり其處に云り　○越中國四郡、地理志料に蓋久比國造所部也と云　○多伎郡、民部式多藝に作る　○張、此下に金本郡の字あり　○給人物亦銓字蓋銓詮音近字樣亦相涉致譌也と云るに據て改む　(四月)禁祭賀茂神云々、二年三月にも此禁ありたり　○神馬、治部式祥瑞に大瑞とす　○僧隆觀、大寶三年十月戊僧隆觀還俗本姓金名財沙門幸甚子也頗涉藝術知二算曆一と見ゆ　○八尋梓根、八尋とは其長さをいひネは添へて云るなり　○大神宮、原本大を太に作る諸本等に據て改む　○國造記、狩谷氏云舊事紀所載國造本紀蓋此等之類　○筑紫七國、大隅薩摩は此時未だ置れねば此二國を除けば七國なり大隅の建國は和銅六年四月、薩摩の建國は詳ならざるも和銅二年六月紀に薩摩多禰兩國司と見ゆれば其以前なるべし　○采女、仁德紀、安閑紀及孝德紀等に見ゆ後宮職員令に貢二采女一者郡少領以上姉妹及女形容端正者皆申二中務省一奏聞とあり天平十四年五月に采女者自今以後每年一人貢二進之一と定めらる　○兵衞、軍防令に凡兵衞國司簡二郡司子弟强幹便一於弓馬一者一郡別一人貢之若貢二采女一郡不レ在貢二兵衞之例一とあり　(五月)五世王、繼嗣令に自二親王一五世雖得二王名一不レ在二皇親之限一とあるを慶雲三年五月五世之王已絕二皇親之籍一遂入二諸臣之例一顧二念親々之恩一不レ絕二絕籍之痛一自今以後五世之王在二皇親之限一と改めらる　○特給坐席、刑部式に凡五世以上犯レ罪應推者皆設二床席一とあり原本席を席に作る今金本淀本に據る席は席の俗字　○與所分、考證に所疑當作處　○令參議朝政、當時は未だ正官にあらずして之を正官とするは天平三年八月式部卿藤原宇合を擢用せられしを始とす　○海犬養門、拾芥抄宮城部或書云延曆十二年六月庚午令二諸國造一新宮諸門一若狹越中二國造安嘉

等始給レ鑰而罷、(先是、別有二稅司主鑰一、至レ是始給二國司一焉)、○三月壬申(五)、因幡伯耆隱伎三國、蝗損二禾稼一、○乙亥(八)、始頒二度量于天下諸國一、○戊寅(十一)、正五位下中臣朝臣意美麻呂、從五位下忌部宿禰子首、從六位下中臣朝臣石木、忌部宿禰狛麻呂、正七位下菅生朝臣國梓、從七位下巫部宿禰博士、正八位上忌部宿禰名代、並進二位一階一、○己卯(十七)、鎭二大安殿一大祓、天皇御二新宮一正殿一齋戒、惣頒二幣帛於畿內及七道諸社一、○甲申(廿三)、令二大倭國一繕治二槻離宮一、分二越中國四郡一屬二越後國一、○庚寅(廿七)、美濃國多伎郡民七百十六口、遷二于近江國蒲生郡一、○甲午(三十)、信濃國獻二梓弓一千二十張一、以充二大宰府一、○丁酉(三十)、聽二大宰府專銓擬所部國掾已下及郡司等一、○夏四月庚子(三)、禁祭賀茂神日、徒衆會集、執レ仗騎射、唯當國之人不レ在二禁限一、○乙巳(八)、飛驛國獻二神馬一、大赦天下、唯盜人不レ在二赦限一、其國司目已上、出レ瑞郡大領者、進二位各一階一、賜レ祿有レ差、百姓賜二復三年一、獲レ瑞僧隆觀免レ罪入レ京(流僧幸甚之子也)、又普賜二親王以下畿內有位者物一、免二諸國今年田租一、并減二庸之半一、○丁未(十)、從七位下秦忌寸廣庭獻二杠谷樹八尋梓根一、遣二使者一奉二于伊勢大神宮一、○庚戌(十三)、詔、定二諸國國造之氏一、其名具二國造記一、○壬子(十五)、令二筑紫七國及越後國一簡點采女兵衞貢レ之、但陸奥國勿レ貢、○五月辛未(五)、勅、若五世王自有二辭訟一、須二受理一者、特給二坐席一而與二所分一、○丁亥(廿)、勅、從三位大伴宿禰安麻呂、正四位下粟田朝臣眞人、從四位上高向朝臣麻呂、從四位下下毛野朝臣古麻呂、小野朝臣毛野、令レ參二議朝政一、○六月壬寅(六)、復二大倭國吉野宇知二郡百姓一、○癸卯(七)、上野國疫、給レ藥救レ之、○庚申(廿四)、以二從三位大伴宿禰安麻呂一爲二兵部卿一、○甲子(廿八)、震二海犬養門一、○乙丑(廿九)、遣唐使等去年從二筑紫一而入レ海、風浪暴險(ニハカニノ)、不レ得二渡海一、至レ是乃發、

門海犬甘氏也とあり海犬甘氏が負擔して造れる門なれば海犬甘門と呼びしを安嘉の文字を充てしなるべし　○乃發、原本乃を及に作る紀略に據て改む

（七月）火雷神、神名式に山城國乙訓郡乙訓坐火雷神社（名神大月次新嘗）と見え同郡乙訓村大字井之内にあり大山咋命を祀る

○大幣、祈年の幣帛を云○月次幣、神祇令に季夏月次祭、義解に謂於神祇官祭與祈年祭同如庶人宅祭（季冬亦同じ）とあり六月十二月に行はれ月次の幣帛に預るは三百四座なり

○新令、紀略及類史令を律に作る

○神人大、錄河内神別、和泉雜姓に並に神人あり同氏なるべし、大は原本太に作る金本閣本等に據て改む

○八蹄馬、蹄は抄毛郡部に蒼頡篇云蹄比都米畜足下也と見え八蹄あるを云

（八月）丙申、此下朔の字を脫せしなるべし

○薩摩多禰、多禰は既に上に見え種子嶋なり當時薩摩に屬す故に薩摩の多禰と云薩摩を一國とする事は養老元年二月紀に見えたるが上文四月庚戌條に筑紫七國とあれば此時薩摩は未だ一國たりしにはあらざるべし原本禰を檝に作る金本閣本曾本に據て改む

○造大安寺司、上に見ゆ

○震倭建命墓、景行天皇四十年紀に見え伊勢國能褒野を始め三處にあり通證には倭琴彈原陵なりと云へどいづれとも定め難し

○五衛府、左右兵衛左右衛士府と衛門府となり

○大神宮服料、神祇令に神衣祭義解に謂伊勢神宮祭此神服部氏等齋戒潔清以參河赤引神調糸織作神衣又麻績連等績麻以織敷和衣供神明故曰神衣とあり金本閣本及類史料を新に作る新は俗字

（九月）告朔文、百官の去月の上日を記したるを云太政官式に見ゆ

○乙丑、九月朔乙丑なれば此月更に乙丑あるべからず乙は己の誤なるべし

○不所、或云倒置すべし

（十月）大宰、原本大を太に作る諸本に據て改む

○秋七月己巳（丙寅朔四）有勅斷親王乘馬入宮門、○癸酉（八）、詔、伊勢大神宮封物者、是神御之物、宜准供神事、勿令濫穢、又在山背國乙訓郡火雷神、每旱祈雨、頻有徵驗、宜入大幣及月次幣例、○乙亥（十）、詔、令內外文武官讀習新令、美濃國大野郡人神人（ミワヒト）大獻八蹄馬、給稻一千束、○丙子（十一）、天皇幸吉野離宮、○乙未（三十）、始講律、是日、赦天下罪人、○八月丙申、薩摩多禰、隔化逆命、於是發兵征討、遂挍戶置吏焉、授出雲狛從五位下、○己亥（四）、以正五位上高橋朝臣笠間、爲造大安寺司、○庚子（五）、駿河下總二國大風、壞百姓廬舍、損禾稼、○癸卯（八）、震倭建命墓、遣使祭之、○戊申（十三）、有勅、五衛府使部、始准兵衛給祿、○辛亥（十六）、以正三位石上朝臣麻呂爲大宰帥、○癸亥（廿八）、勅伊勢大神宮服料用神戶調、○九月乙丑朔、日有蝕之、○戊寅（十四）、制、諸司告朔文者、主典以上送辨官、官惣納中務省、討薩摩隼人軍士、授勳各有差、○辛巳（十七）、駿河、伊豆、下總、備中、阿波五國飢、遣使存恤、○癸未（十九）、遣使於伊賀、伊勢、美濃、尾張、三河五國、營造行宮、○乙酉（廿一）、從五位下出雲狛賜臣姓、○丁亥（廿三）、大赦天下、○乙丑（廿五）、詔、甲子（天智三年）年定氏上時、不所載氏、令被賜姓者、自伊美吉（イミキ）以上、並悉令申、○冬十月乙未朔、從四位下路眞人登美卒、○丁酉（三）、先是征薩摩隼人時、禱祈大宰所部神九處、實賴神威、遂平荒賊、爰奉幣帛、以賽其禱（カヘリマフシス）焉、唱更國司等（今薩摩國也）言、於國內要害之地、建柵置戍守之（ラムト）、許焉、鎭祭諸神、爲將幸參河國也、○甲辰（十）、太上天皇幸參河國、令諸國無出今年田租、○乙巳（十一）、近江國獻嘉禾異畝同穗、○戊申（十四）、頒下律令于天下諸國、○乙卯（廿一）、詔、上自曾祖、下至玄孫、奕世孝順者、擧戶給復、表旌門閭、以爲義家（ト）焉、○十一月丙子（十三）、行幸尾張國、尾治（ヲハリ）連若子麻呂、牛麻呂、賜姓宿禰、國守從五位下多治比眞人水守封一十戶、○庚辰（十七）、行至美濃國、授不破郡大領宮勝木實（ヲノミ）外從五位下、國守從五位上石河朝臣子老封一十戶、○乙酉（廿二）、行至伊勢、國守從五位上佐伯宿禰石湯賜封一十戶、○丁亥（廿四）、至伊賀國、行所經過尾張、美濃、伊勢、伊賀等國郡司及百姓、叙位賜祿各有差、○戊子（廿五）、車駕至自參河、免從駕騎士（ガ）調、○十二月甲午（癸巳朔二）、勅曰、九月九日（天武忌日）、十二月三日（天智忌日）、先帝忌日也、諸司當是日宜爲廢務焉、○戊戌（六）、星晝見、○壬寅（十）、始開美濃

○唱更、注に今薩摩國也とあり文字の出典は史記の吳王濞の傳に卒踐更輒與平賈とある注に正義曰踐更若今唱更行更者也とあるに據れり卒の踐更とは漢書昭帝紀の注に更有三品一有二卒更一有二踐更一有二過更一古者正卒無常人皆當迭爲之一月一更是爲卒更貧者欲得顧更錢(顧は雇也)者次直者出錢顧之是爲踐更也天下人皆直戍邊三日亦名爲更律所謂繇戍也諸不行者出錢三百入官官以給戍者是爲過更也とありされば卒更も踐更過更も何れも邊境を戍る者の稱にて唱更行更も亦同じ者なれば薩摩の如く邊境を守る人を云るがもとなり考證にはハヤヒトと訓べしとあれど伴氏は字音のまゝに讀べしといはれたり　○幸參河國、稻なり天武紀八年八月縵造忍勝獻嘉禾異畝同穎と見えたり　○表旌門閭、賦役令に凡孝子順孫義夫節婦志行聞於國郡者申太政官奏聞表其門閭と見えたり　○令諸國云々、此に諸國とあるは車駕所歷の諸國なるべし　○嘉禾、瑞同籍悉免課役有精誠通感者別加優賞義解に謂於其門及里門築堆立牓題云孝子門若里也とあり　(十一月)國守云々、大寶三年七月紀に從五位下多治比眞人水守爲尾張守とあれば國守の二字は誤なるべし　○宮勝、姓氏錄に載せずされど同書諸蕃に勝、及上勝、不破勝、茨田勝、秦勝等見え右京諸蕃に不破勝百濟國人淳武止等之後也とあれば宮勝は勝、不破勝の同族なるべし　○從五位上、佐伯宿禰類史上を下に作る　○賜封、類史賜の字なし　(十二月)先帝忌日廢務、廢務とは諸司執務せざるを云儀制令に國忌日皇帝不視事一日注に謂先帝崩日依別式合廢務者とあり　○岐蘇山道、和銅六年七月紀に美濃信濃二國之堺徑道險阻往還艱難仍通吉蘇路同七年閏二月紀に賜美濃守笠朝臣麻呂封七十戸田六町以通吉蘇路也と見ゆ岐蘇は當時美濃國に屬しけるが元慶三年九月信濃國に入れられたり　○金光明經、開元釋敎目錄に金光明經四卷北涼三藏曇無讖譯とあり　○民忌寸、姓氏錄に見えず延曆四年六月紀に據るに坂上大忌寸と同祖なり　○四大寺、大安藥師元興弘福寺なり　○廢大祓、神祇令に六月十二月晦日大祓とあり諒闇に依て之を廢せらる　○東西文部、神祇令義解に謂東漢文直西漢文首也とあり都賀直の後文直は世々倭に居る依て倭文直といひ王仁の後文首世々河內に居る依て河內文首と云其大和は都の東にあり河內は西にあるゆゑ以て文直を東文と云ひ文首を西文と云ふ又並稱して東西文部といふ義訓なり　○解除如常、賀茂眞淵翁云文部の解除は漢土の風を傳へたるものにて皇國の事にあらず是を以て諒闇といへども廢せざるなり

國岐蘇山道、○乙巳、太上天皇不豫、大赦天下、度一百人出家、令四畿內講金光明經、○甲寅、太上天皇崩、遺詔、勿素服擧哀、內外文武官聳務如常、喪葬之事務從儉約、○乙卯、以二品穗積親王、從四位上犬上王、正五位下路眞人大人、從五位下佐伯宿禰百足、黃文連本實、爲作殯宮司、三品刑部親王、從四位下廣瀨王、從五位上引田朝臣宿奈麻呂、從五位下民忌寸比良夫爲造大殿垣司、○丁巳、設齋於四大寺、○辛酉、殯于西殿、○壬戌、廢大祓、但東西文部解除如常、

續日本紀卷第二

【大寶三年】第卌二、曾本淀本此三字なし　○廢朝、西宮記に廢朝諸司政如常但天皇不臨朝云々とあり　○房前、懷風藻に房を總に作る　○東海道、以下七道の名正しく此に始て見ゆ　○冤枉、原本枉を抂に作る闕本に據て改む抂は枉の俗字　○弘福、川原寺なり孝德紀に出づ　○薩飡、原本飡を韓に作る前後の例に據て改む下同じ新羅第八等官なり紀下附錄を見よ　○級飡、原本飡を韓に作る前後の例に據て改む新羅第九等の官　○赴國王喪、三國史記に據るに大寶二年七月孝昭王の薨ぜしを云赴は訃なり　○主禮、職員令に內禮司主禮六人掌分察非違とあり　○蠲其課役、課役を免ずること賦役令に詳なり　○知太政官事、職原抄に准大臣者文武天皇大寶三年正月三品刑部親王爲知太政官事又聖武朝太

續日本紀卷第三

起大寶三年正月盡慶雲四年六月

從四位下行民部大輔兼左兵衛督皇太子學士臣菅野朝臣眞道等奉　勅撰

天之眞宗豐祖父天皇　文武天皇　第卌二

(癸卯)三年春正月癸亥朔、廢朝、親王已下百官人等拜太上天皇殯宮也、○甲子、遣正六位下藤原朝臣房前于東海道、從六位上多治比眞人三宅麻呂于東山道、從七位上高向朝臣大足于北陸道、從七位下波多眞人余射于山陰道、正八位上穗積朝臣老于山陽道、從七位上小野朝臣馬養于南海道、正七位上大伴宿禰大沼田于西海道、道別錄事一人、巡省政績、申理冤枉、○丁卯、奉爲太上天皇、設齋于大安、藥師、元興、弘福四寺、○辛未、新羅國遣薩飡金福護、級飡金孝元等、來赴國王喪也、是日制、主禮六人、元以大舍人爲之、宜准斯例、蠲其課役、○壬午、詔三品刑部親王知太政官事、○二月丁未、詔、從四位下下毛野朝臣古麻呂等四人、預定

政大臣高市親王二男參議從三位大藏卿鈴鹿王知太政官事是濫觴云々とあり知太政官事とは太政大臣となすには德望未だ至らざる故に暫く太政大臣に准じて後日の撰を待給ふものなり准太政大臣さいふが如し

(二月)丁未、狩谷氏云丁當作乙三日也

○定律令、元年八月及庚子年八月の條等に見えたり

○伊吉連、原本連の字なし類史及紀略に據て補ふ

○封五十戶、堀本五の上百の字ありと云

○封戶止身、祿令に凡五位以上以功食封者云々下功不傳

○田傳一世、田令に凡功田下功傳子とあり

○茨田足嶋、此人の連姓を賜りしこと既に卷一の二年八月紀に見ゆ蓋重出

○七七、釋氏要覽に人亡每至七日營齋追薦謂之累七又云齋七とあり、紀略に此下日の字あり

○圓大寺、正月五日の條に見ゆ

○四天王、持國、增長、廣目、毘沙門の四天王を云、此寺の事崇峻紀に見ゆ

○大宰史生、職員令に大宰府史生廿人とあり、原本大を太に作る金本閣本に據て改む下同じ

(三月)功田二十町、古麻呂の功田は前に賜ふ所と合せて卅町なり

○大般若經、六百卷唐三藏玄奘法師譯

○依令云々、選叙令に凡國博士醫師者並於部內取用若無者得於傍國通取とあるを云

○溫故知新、論語爲政に溫故而知新可以爲師矣とあるに據れり

○若傍國無人云々、元明紀和銅元年四月の條に諸國博士醫師自朝補遣者云々とあるは卽ちかゝる場合を云へり

○選擬、選の字疑くは詮の譌なり

○若當郡云々、二年三月の條を參考すべし

○義淵法師、釋家初例抄に興福寺僧義淵爲僧正自凡位直任僧正初例也とあり

(四月)高麗若光、姓氏錄考證に此氏は高麗王の後にて高麗朝臣(好古王七世孫延興王の後)の族なるべし賜王姓とあれど姓とは異なり氏人ものに見えずと云り

○和氣坂本賜君姓、錄右京皇別に別公、和泉皇別に和氣公とあると同族にて日本武尊の後なり

○被略爲奴婢者云々、戶令に凡良人家人被壓略充賤云々とあり

(閏四月)難波館、推古紀十六年に難波高麗館、舒明紀二年に三韓館とあるに同じ

○寡君、原本寡を宣に作る紀略に據て改む

○阿倍朝臣御主人蕘、持統紀元年正月の條に布勢朝臣御主人と見ゆ公卿補任に御主人本姓布勢、麻呂古臣男持統元年正月爲納言後改布勢爲阿倍朝臣蕘年六十九とあり

(五月)倉垣連、考證に慶雲四

律令、宜議功賞、於是古麻呂及從五位下伊吉連博德、並賜田十町封五十戶、贈正五位上調忌寸老人之男、田十町封百戶、從五位下伊余部連馬養之男、田六町封百戶、其封戶止身、田傳一世、○丙申、從七位下茨田足嶋、衣縫造孔子、並賜連姓、○癸卯、是日當太上天皇七七、遣使四大寺及四天王山田等三十三寺、設齋焉、大宰史生更加十員、○三月戊辰、賜從四位下下毛野朝臣古麻呂功田二十町、○辛未、詔、四大寺讀大般若經一度、一百人、○丁丑、下制曰、依令、國博士於部內及傍國取用、然溫故知新、希有其人、若傍國無人、採用則申省、然後省選擬、更請處分、又有才堪郡司、若當郡有三等已上親者、聽任比郡、○戊寅、信濃、上野二國疫、給藥療之、○乙酉、以義淵法師爲僧正、○夏四月癸巳、奉爲太上天皇、設百日齋於御在所、○乙未、從五位下高麗若光賜王姓、○辛亥、從七位下和氣坂本賜君姓、○戊午、安藝國被略爲奴婢者二百餘人、免從本籍、○閏四月辛酉朔、大赦天下、饗新羅客于難波館、詔曰、新羅國使薩飡金福護表云、寡君不幸、自去秋疾、以今春薨、永辭聖朝、朕思其蕃君、雖居異域、至於覆育、允同愛子、雖壽命有終、人倫大期、而自聞此言、哀感已甚、可差使發遣弔賻、其福護等、遙涉蒼波、能遂使旨、朕矜其辛勤、宜賜以布帛、是日、右大臣從二位阿倍朝臣御主人蕘、遣正三位石上朝臣麻呂等、弔賻之、○五月壬辰、金福護等還蕃、正七位上倉垣連子人、高祖根猪以來子孫、正七位上私小田、從七位上私比都自長嶋、及昆弟等皆訴、得免雜戶、○癸巳、流來新羅人付福護等、還本鄉、○己亥、令紀伊國奈我、名草二郡、停布調、獻絲、但阿提、飯高、牟漏三郡獻銀也、○丙午、相模國疫、給藥救之、○六月乙丑、以從四位上大神朝臣高市麻呂爲左京大夫、從五位下大伴宿禰男人爲大倭守、從五位上引田朝臣廣目、爲齋宮頭兼伊勢守、

年正月紀云椋垣直子人賜連姓此云連迫書也　○子孫、此下恐くは脱文あらむ　○私、敏達紀六年二月の條に私部を置くこと見ゆ私部の略稱なり　○雜戸、圖書寮に紙戸、內藏寮に百濟戸、主船司に船戸、主鷹司に鷹戸ある類にして諸司に屬して各其用を勤る人民なり戸令に凡戸籍總寫三通二通申送太政官一通留國其雜戸陵戸籍則更寫一通各送本司とあるにて諸司に屬することを知るべし其種類多く種々ある故に雜戸と云　○奈我、民部式倭名抄に那賀に作る　○阿提、靈異記に安諦に作る卽ち今の在田郡なり日本後紀大同元年七月の條參看すべし　○飯高、民部式倭名抄に日高に作る

（七月）庚午年籍、庚午は天智天皇九年なり天智紀に九年二月造戸籍とある卽是なり

○多治比眞人水守、此人既に尾張國守たること二年十一月の條に見えたり

○舉賢良方正之士、所謂野に遺賢なからしめむとなり

（八月）作番直軍團云々、此事慶雲元年六月（四〇頁）に詳なり

○一同散位、散位は位ありて官なきを云其選叙の法は選叙令に凡散位若見官無闕雖有闕而才識秋七月甲午、詔曰、籍帳之設、國家大信、逐時變更、詐僞必起、宜以庚午年籍爲定、更無改易、以從五位上大石王爲河內守、正五位下黃文連大伴爲山背守、從五位下多治比眞人水守爲尾張守、從五位下引田朝臣祖父爲武藏守、正五位上上毛野朝臣男足爲下總守、正五位下猪名眞人石前爲備前守、以災異頻見年穀不登、詔減京畿及大宰府管內諸國調半、并免天下之庸、又詔五位已上、舉賢良方正之士、○壬寅、令四大寺讀金光明經、○丙午、近江國山火自焚、遣使祈雨于名山大川、○壬子、贈從五位下民忌寸大火正五位上、正六位上高田首新家從五位上、並遣使弔賻、以壬申年功也、○八月辛酉、以從五位上百濟王良虞爲伊豫守、○甲子、大宰府請有勳位者作番直軍團、考滿之日送於式部、一同散位、永預選叙、許之、○九月辛卯、賜四品志紀親王近江國鐵穴、

○相當者六位以下分番上下每有闕各依本位量才任用其經八考者八考中進一階云々と見ゆ

（九月）志紀親王、天智紀七年二月に施基に作る　○近江國鐵穴、聖武紀天平十四年十二月に令近江國禁斷有勢之家專貪鐵穴貧賤之民不得採用また淳仁紀天平寶字六年二月には賜大師藤原惠美朝臣押勝近江國淺井高嶋二郡鐵穴各一處と見えたり　○法蓮、養老五年六月紀にも褒賞せられし事見ゆ宇佐の人にて彌勒寺初代の別當たり　○四十町、曾本に四を五に作る

（十月）穗積親王、天武天皇々子蘇我赤兄の女大蕤娘の御腹なり天武紀二年に見ゆ　○御裝長官、考證に所謂裝束司也案踐祚大嘗祭及行幸等亦任裝束司見太政官式とあり　○政人、判官なり倭名抄職官部に神祇曰祐省曰官云々皆万豆利古止比止とあり

○庚戌、以從五位下波多朝臣廣足爲遣新羅大使、○癸丑、施僧法蓮豐前國野四十町、褒醫術也、○冬十月丁卯、任太上天皇御葬司、以二品穗積親王爲御裝長官、從四位下廣瀨王、正五位下石川朝臣宮麻呂、從五位下猪名眞人大村爲副、政人四人、史二人、四品志紀親王爲造御竈長官、從四位上息長王、正五位上高橋朝臣笠間、正五位下土師宿禰馬手爲副、政人四人、史四人、○甲戌、僧隆觀還俗、本姓金、名財、沙門幸甚子也、頗涉藝術、兼知算曆、○癸未、天皇御小安殿、詔賜遣新羅使波多朝臣廣足、額田人足、各衾一領、衣一襲、又賜新羅王錦二匹、絁四十匹、○十一月癸卯、太政官處分、巡察使所記諸國郡司等有治能者、式部宜依令稱擧、有過失者、刑部依律推斷、○十二月甲子、始皇親五世、王、五位已上子、年滿二十一已上者、錄其歷名、申送式部省、○己巳、以正五位下路眞人大人爲衞士督、○癸酉、從四位上當麻眞人智德率諸王諸臣、奉誄太上天皇、諡曰大倭根子天之廣野日女尊、是日、火葬於飛鳥岡、○壬午、合葬於大內山陵、

○造御竈長官、御火葬なれば其御竈を造る長官なり　○正五位上、曾本淀本正を從に作り金本閣本には此字闕く　○小安殿、金本曾本淀本に小字なし、紀略大に作る是なるに似たれど姑く原本に據る　○衾、抄裝束部に衾說文云衾(和名布須万)大被也四聲字苑云被衾別名也　○衣一襲、衣は同云野王案在上曰衣在下曰裳惣謂之服也また襲は史記音義云衣之單複相具謂之襲(和名加左禰爾雅注云襲猶重也とあり　(十二月)刑部、原本刑を邢に作る金本曾本に據て改む　(十二月)年滿二十一已上者云々、選叙令に凡授位者皆限年廿五以上唯以蔭出身皆限年廿一以上、軍防令に凡五位以上子孫年廿一以上見無役任者云々限十二月一日并身送式部申太政官云々とあり叙位任官の調査の爲なり　○率諸王、原本率を卒に作る類史に據て改む　○大倭根子云々、御諡號の意持統紀に注す　○飛鳥岡、大和國高市郡　○大內山陵、天武天皇御陵、高市郡高市村大字野口にあり

【慶雲元年】座、原本坐に作る類史に據て改む
○榻、抄車具部に唐韻云榻(吐盍反和名之知)床也とあり
○大市王、天平十一年正月紀に无位大市王見ゆ別人なり
○倭王、和銅五年正月紀に无位倭王、天平寶字三年十一月紀に從五位下和王見ゆ是皆別人なり
○垂麻呂、原本垂を乘に作る類史並に和銅元年三月丙午紀に據て改む
○枚夫、和銅三年四月紀に比良夫に作る
○太朝臣、天武紀十三年十一月に多朝臣に作る
○釋加、原本釋を釈に作り金本閣本曾本に尺に作る省文なり
○三品新田部親王、既に淨廣貳たり三品に降るべき理なし、恐らくは二品の誤ならむ

(甲辰)慶雲元年春正月丁亥朔、天皇御大極殿受朝、五位已上座始設榻焉、○癸巳、詔以大納言從二位石上朝臣麻呂爲右大臣、无位長屋王授正四位上、无位大市王、手嶋王、氣多王、夜須王、倭王、宇太王、成會王、並授從四位下、從六位上高橋朝臣若麻呂、從六位下若犬養宿禰檳榔、正六位上穗積朝臣山守、巨勢朝臣久須比、大神朝臣狛麻呂、佐伯宿禰垂麻呂、從六位下阿曇宿禰虫名、從六位上采女朝臣枚夫、正六位下太朝臣安麻呂、從六位上阿倍朝臣首名、從六位下田口朝臣益人、正六位下笠朝臣麻呂、從六位上石上朝臣豐庭、從六位下大伴宿禰道足、曾禰連足人、正六位上文忌寸釋加、從六位下秦忌寸百足、正六位上佐太忌寸老、漆部造道麻呂、上村主大石、米多君北助、王敬受、從六位上多治比眞人三宅麻呂、正六位上臺忌寸八嶋、並從五位下、○丁酉、二品長親王、舍人親王、

○石川夫人、天武紀朱鳥元年に出づ蘇我赤兄大臣女大蕤娘なり
○聽連任、原本連の字なし金本閣本に據て補ふ
○始停百官跪伏之禮、按に天武十一年九月勅して跪禮倭國禮を止め難波朝廷の立禮を用ひ給ひしかど舊慣を改むることは容易ならずして實行せられざる故に此詔を發して嚴禁し給ひしにはあらざるか四年十二月辛卯の條を參考すべし
(二月)大宮主、臨時祭式に凡宮主取卜部堪事者任之とあり神祇官の卜部中より任ずる例なり大宮主とは大は中宮東宮の宮主に對する稱、宮主は卜術を以て主として其宮に奉仕する由の名なり蒲生氏曰宮主置未詳其始一と
○長上例、從來は番上な

穗積親王、三品刑部親王、益封各二百戶、三品新田部親王、四品志紀親王、各一百戶、右大臣從二位石上朝臣麻呂二千一百七十戶、大納言從二位藤原朝臣不比等八百戶、自餘三位已下、五位已上十四人各有差、○壬寅、詔御名部內親王、石川夫人、益封各一百戶、○戊申、伊勢國多氣度會二郡少領已上者、聽連任三等已上親、○辛亥、始停百官跪伏之禮、○二月丙辰朔、日有蝕之、○癸亥、神祇官大宮主入長上例、○乙亥、從五位上村主百濟、改賜阿刀連、○三月甲寅、信濃國疫、給藥療之、○夏四月甲子、令鍛冶司鑄諸國印、○庚午、以信濃國獻弓一千四百張、充大宰府、○甲戌、讚岐國飢、賑恤之、○壬午、備中、備後、安藝、阿波四國苗損、並加賑恤、○五月甲午、備前國獻神馬、西樓上慶雲見、詔大赦天下、改元爲慶雲元年、高年老疾並加賑恤、又免壬寅年以往大稅、及出神馬郡當年調、又親王諸王百官使部已上、賜祿有差、獻神馬國司、守正五位下猪名眞人石前進位一階、初見慶雲人、式部少丞從七位上小野朝臣馬養三階、並賜絁十疋、絲二十絇、布三十端、鍬四十口、○庚子、武藏國飢、賑恤

りしが是に至て長上の例に預らしめ給ひしなり金本閣本長の下に官の字あるは非なり　○從五位上村主、村の上恐らくは上の字を一字脱す上は氏、村主は尸なれば上の字なくては通ぜず　(四月)鍛冶司、原本冶を治に作る曾本淀本に據て改む抄人倫部に四聲字苑云鍛打金鐵爲器也冶(俗云鍛冶訛也)燒鐵銷鑠也とあり　○諸國印、公式令に諸國印方二寸上京公文及案調物則印とあり　(五月)西樓上、略記水鏡に此上に大極殿の三字あり　○慶雲、治部式に慶雲狀若烟非烟若雲非雲とあり大瑞とす　○使部、神祇官を始め諸省寮司にあり雜事に使役するなり　(六月)諸國兵士云々、軍防令に凡軍團大毅領一千人少毅副領とあり一千人を一團とす之を十番に分ちて教習せしむるなり　○齊整、原本齊を齊に作る金本淀本に據て改む　○隨便、原本便を使に作る神本に據て改む　○斟酌、原本斟を勘に作る諸本に據て改む　○折當兩考、上直すること三年を經ば准へ折(〇)ぎて兩考に當つべしとなり　○滿之年、考證に滿上疑脫考字とあり　○木連理、治部式に下瑞とす

之○六月丁巳、勅、諸國兵士、團別分爲十番、每番十日、教習武藝、必使齊整、令條以外、不得雜使、其有關須守者、隨便斟酌、令足守備、○己未、令諸國勳七等以下身無官位者、聽直軍團續勞、上經三年、折當兩考、滿之年送式部、選同散位之例、其身材强幹須堪時務者、國司商量充使之、年限考第、一准所任之例、○乙丑、河內國古市郡人高屋連藥女一產三男、賜絁二疋、綿二屯、布四端、○己巳、阿波國獻木連理、○丙子、奉幣祈雨于諸社、

(七月)粟田朝臣眞人云々、眞人が唐に遣はされたること大寶元年正月に見ゆ唐書東夷傳に長安元年其王文武立改元曰大寶遣朝臣眞人粟田一貢方物朝臣眞人者猶唐尚書也冠進德冠云々眞人好學能屬文進止有容武后宴之麟德殿授司膳卿還之とあり　○楚州鹽城縣、唐書地理志に淮南道楚州淮陰郡鹽城縣あり　○永淳二年、天武天皇十二年に當る　○天皇太帝、唐高宗を云弘道元年十二月崩　○皇太后、則天武后なり高宗晚年病に罹す天下の事一に武后に附す號を進て天后と云帝崩じて中宗卽位、天后を皇太后と稱す太后帝を廢して廬陵王を爲し自ら朝に臨み因て國號を改めて周と號し自ら聖神皇帝と稱し武三子を以て太子とす狄仁傑の言を以て唐嗣を復するを得たり　○函開、紀略に函を承に作る　○君子國、山海經後漢書淮南子等に見ゆ　○太淨、原本太を大に作る紀略に據て改む　○白鷺、抄羽族部に爾雅集注云鷺(和名都波久良女)白脰小鳥也とありツバクラは鳴聲を以て名づくメはムレの約　○白烏、治部式に太陽之精也とあり中瑞とす　○公廨祿、公廨は官衙な

秋七月甲申朔、正四位下粟田朝臣眞人自唐國至、初至唐時、有人來問曰、何處使人、答曰、日本國使、我使反問曰、此是何州界、答曰、是大周楚州鹽城縣界也、更問、先是大唐、今稱大周、國號緣何改稱、答曰、永淳二年、天皇太帝崩、皇太后登位、稱號聖神皇帝、國號大周、問答略了、唐人謂我使曰、亟聞、海東有大倭國、謂之君子國、人民豐樂、禮義敦行、今看使人儀容太淨、豈不信乎、語畢而去、○丙戌、左京職獻白鷺、下總國獻白烏、○壬辰、以時雨不降、遣使祈雨於諸社、○庚子、公廨祿給式部省大學散位等寮、○壬寅、詔、京師高年八十已上者、咸加賑恤、○甲辰、奉幣帛于住吉社、○乙巳、贈從五位上坂合部宿禰唐正五位下、右大臣從二位阿倍朝臣御主人功封百戶四分之一、傳子從五位上廣庭、贈從五位上高田新家首功封四十戶四分之一、傳子无位首名、○八月丙辰、遣新羅使從五位上波多朝臣廣足等至自新羅、○戊午、伊勢伊賀二國蝗、○辛巳、周防國大風、拔樹傷秋稼、○冬十月丁巳、有詔、以水旱失時、年穀不稔、免課役并當年田租、○辛酉、粟田朝臣眞人等拜朝、正六位上幡文通爲遣新羅大使、○戊辰、幡文通賜造姓、○十一月癸巳、設太上天皇百七齋于諸寺、○庚寅、遣從五位上忌部宿禰子首、供幣帛鳳凰鏡窠子錦于伊勢大神宮、○丙申、改從四位下引田朝臣宿奈麻呂姓、賜阿倍朝臣、賜正四位下粟田朝臣眞人、大倭國田二十町穀一千斛、以奉使絕域也、○壬寅、始

定藤原宮地、宅入宮中百姓一千五百五烟、賜布有差、○十二月辛酉、供幣帛于諸社、○辛未、大宰府言、去秋大風、拔樹傷年穀、○是年夏、伊賀伊豆二國疫、並給醫藥療之、

り官衙の雜費は諸國にある公田の賃租を太政官に送り之を以て其費に充つる制なるが式部大學散位等の祿を公廨稻を以て賜はりしなるべし、類史には祿の字なし

○住吉社、攝津國住吉郡住吉坐神社なり奉幣は何に因れるか詳ならず　○坂合部宿禰、考證云庚子年五月與刑部親王等撰定律令とあり其功勞に因れるか　○高田新家首、大寶三年七月壬子に高田首新家と見ゆ姓を名の後に記したるは特例なり　(十月)幡文通、金本通を道に作る幡文造は錄左京蕃別に大崗忌寸同祖出自魏文帝之後安貴公とあり　(十一月)癸巳、此條當に庚寅の下にあるべきなり　○百七齋、考證に案大寶三年四月癸巳奉爲太上天皇設百日齋疑以是日干支與彼同重出且百日誤作百七歟と云ひ私記に武曰自崩至此七百日也とあれどいかゞあらむ　○鳳凰鏡、背面の摸樣によりて名づく原本鳳凰鏡に作る金本曾本及類史紀略に據て改む　○窠子錦、織文によりて名づく織部式に一窠錦二窠錦四窠錦五窠錦等の名見ゆ皆窠子錦なるべし　○始定藤原宮地、藤原宮に遷居せられたること持統紀八年十二月の條に見えたり今藤原宮を定められたることを記して遷都のこと見えず恐くは誤

【慶雲二年】

(三月)倉橋離宮、崇峻紀卽位前紀に倉梯に作る大和國十市郡倉橋村にあり　○豐國女王卒、系詳ならず　(四月)榮色、禮記王制に雖有凶旱水溢民無菜色集註に飢而食菜則色病故云菜色と見えたり　○擧稅、出擧せし稅を云　○官員令、卽ち職員令なり此にかくあるに據れば養老刪定の日に職員令と改められしなるべし

(乙巳)二年春正月丙申、賜宴文武百寮于朝堂、○庚子、无位安八萬王授從四位下、○三月癸未、車駕幸倉橋離宮、○丙戌、正四位下豐國女王卒、○夏四月壬子、詔曰、朕以菲薄之躬、託于王公之上、不能德感上天、仁及黎庶、遂令陰陽錯謬、水旱失時、年穀不登、民多菜色、每念於此、惻怛於心、宜令五大寺讀金光明經、爲救民苦、天下諸國、勿收今年擧稅之利、并減庸半、○甲寅、遣使巡省天下諸國、○庚申、賜三品刑部親王越前國野一百町、○丙寅、勅、依官員令、大納言四人、職掌既比大臣、官位亦超諸卿、朕顧念之、任重事密、充員難滿、宜廢省二員爲定兩人、更置中納言三人、以補大納言不足、其職掌、敷奏宣旨、待問參議、其官位料祿准令、商量施行、太政官議奏、其職近大納言、事關機密、官位料祿、不可便輕、請其位擬正四位上官、別封二百戶、資人三十人、奏可之、先是、諸國采女肩巾田、依令停之、至是復舊焉、○辛未、天皇御大極殿、以正四位下粟田朝臣眞人、高向朝臣麻呂、從四位上阿倍朝臣宿奈麻呂三人、爲中納言、從四位上中臣朝臣意美麻呂爲左大辨、從四位下息長眞人老爲右大辨、從四位上下毛野朝臣古麻呂爲兵部卿、從四位下巨勢朝臣麻呂爲民部卿、給大宰府飛驛鈴八口、傳符十枚、長門國鈴二口、○五月丙戌、三品忍壁親王薨、遣使監護喪事、天武天皇之第九皇子也、○丁亥、以正五位下大伴宿禰手拍、爲尾張守、○癸卯、幡文造通等自新羅至、○六月乙亥、奉幣帛于諸社、以祈雨焉、○丙子、太政官奏、比日亢旱、田園燋卷、雖久雩祈、未蒙嘉澍、請遣京畿內淨行僧等祈雨、及罷出市廛、閉塞南門、奏可之、○秋七月丙申、大納言正三位紀朝臣麻呂薨、近江朝御史大夫贈正三位大人之子也、○丙午、大倭國大風、損壞百姓廬舍、○八月戊午、詔曰、陰陽失

○朕顧念之、原本に顧字なし曆運記に據て補ふ　○中納言、大寶元年二月之制廢す是に至て再び之を置けり　○待問參議、集解に侍從獻替參議庶事と見ゆ　○請其位、原本に位を任に作る集解に據て改む　○正四位上官、金本閣本等に官の字なし　○肩巾田、原本に巾を甲に作る諸本に據て改む考證に天武紀云十一年三月詔膳夫采女肩巾並莫服肩巾又曰領巾和名抄領巾婦人項上飾也日本紀私記云比禮卽此按肩巾婦人服飾置田以供采女資用名曰肩巾田猶今俗言化粧料之類也民部式凡賃采女郡各置養田三町亦此類とあり　○給大宰府云々、諸國に鈴を給すること公式令に見え大宰府に給する數は廿口とあり此に記すところは常數の外別に給する數なり　○飛驛鈴八口傳符十枚、職員令に少納言掌奏宣小事請進鈴印傳符進付飛驛函鈴云々とあり公式令に凡給驛傳馬皆

依鈴印符剋數一其驛鈴傳符還到三日內送納と見えたり

（五月）忍壁親王、上文四月庚申に忍壁を刑部に作る

（六月）元旱、原本元を兀に作る考證に據て改む

○燋卷、百穀燋枯して葉悉くに捲くか云

○嘉澍、澍は字書に時雨澍生萬物也又借作霑濡滋植意とあり

○罷出市廛云々、祈雨の爲なり孝極紀元年七月（紀下一五一頁）に見ゆ

（七月）御史大夫、大納言なり天智紀十年に見ゆ

○贈正三位、原本に贈の字なし考證に據て補ふ

（九月）八咫烏社、神名式に大和國宇陀郡八咫烏神社鍬靫とあり大和志に在鷹塚村と見ゆ

（十一月）正四位上、和銅二年正月紀上を下に作る

○諸王臣、原本に王の字なし諸本に據て補ふ

○先是五位云々、此事大寶元年八月の條に出づ

○位祿、祿令に凡在京文武職事及大宰壹岐對馬皆依官位給祿云々とあり

度、炎旱彌旬、百姓飢荒、或陷罪網、宜大赦天下、與民更新、死罪已下、罪無輕重、咸赦除之、老病鰥寡、惸獨不能自存者、量加賑恤、其八虐常赦所不免者、不在赦限、又免諸國調之半、又授遣唐使粟田朝臣眞人從三位、其使下人等、進位賜物各有差、以從三位大伴宿禰安麻呂爲大納言、從四位下美努王爲攝津大夫、○九月壬午、詔二品穗積親王、知太政官事、○丙戌、置八咫烏社于大倭國宇太郡祭之、○丁酉、以從五位上當麻眞人櫻井爲伊勢守、○癸卯、越前國獻赤烏、國司并出瑞郡司等進位一階、百姓給復一年、獲瑞人完人臣國持授從八位下、並賜絁綿布鍬各有差、○冬十月壬申、詔遣使於五道、除山陽西海道、賑恤高年老疾鰥寡惸獨、并免當年調之半、○丙子、新羅貢調使一吉飡金儒吉等來獻、○十一月己卯、以正四位上小野朝臣毛野爲中務卿、○庚辰、從五位下當麻眞人楯爲齋宮頭、有詔、加親王諸王臣食封各有差、先是五位有食封、至是代以位祿也、○己丑、徵發諸國騎兵、爲迎新羅使也、以正五位上紀朝臣古麻呂爲騎兵大將軍、○甲辰、以大納言從三位大伴宿禰安麻呂爲兼大宰帥、從四

○騎兵大將軍、諸國の騎兵を徵發するにつき古麻呂を以て其大將軍とせられしなり

（十二月）權施、原本に權を擁に作る考證に據て改む

○天下婦女云々、此事天武紀十一年十一月同十三年四月の條並に朱鳥元年七月の條等に詳なり神部齋宮宮人は巫祝の類老嫗は女年四十以上の者を云

○髻髮、抄形體部に唐韵云髻（音計毛斗々利）鬟也また鬢髮の條に野王案髮（音發加美）首上長毛也とあり

○正四位上葛野王、原本に上を下に作る紀略に據て改む王は弘文天皇の長子、傳は懷風藻に見ゆ

○正六位上三國眞人、原本正を從に作る金本閣本等に據て改む

○狛朝臣秋麻呂、元明紀和銅元年三月丙午に阿倍狛朝臣秋麻呂に作る

○田口朝臣廣麻呂、原本廣の字なし諸本に據て補ふ

○二十、類史なし

【慶雲三年】諸方樂、諸蕃の樂なり

位下石川朝臣宮麻呂爲大貳、○十二月乙卯、都下諸寺權施食封各有差、○乙丑、令天下婦女、自非神部齋宮宮人及老嫗、皆髻髮、語在前紀、是重制也、○丙寅、正四位上葛野王卒、○癸酉、无位山前王授從四位下、丹波王、阿刀王、並從五位下、正六位上三國眞人人足、藤原朝臣武智麻呂、正六位下多治比眞人夜部、佐味朝臣笠麻呂、藤原朝臣房前、從六位上中臣朝臣石木、狛朝臣秋麻呂、坂本朝臣阿曾麻呂、多治比眞人縣守、阿倍朝臣安麻呂、從六位下波多朝臣廣麻呂、佐伯宿禰男、阿倍朝臣眞君、田口朝臣廣麻呂、巨勢朝臣子祖父、紀朝臣男人、正七位上大伴宿禰大沼田、正六位上坂合部宿禰三田麻呂、從六位下縣犬養宿禰筑紫、正六位上坂上忌寸忍熊、船連秦勝、從六位下美努連淨麻呂、並從五位下、是日、新羅使金儒吉等入京、○是年、諸國二十飢疫、並加醫藥賑恤之、

三年春正月丙子朔、天皇御大極殿受朝、新羅使金儒吉等在列、朝廷儀衛有異於常、○己卯、新羅使貢調、○壬午、饗金儒吉等于朝堂、奏諸方樂于庭、叙位賜祿各有差、○丁亥、金儒吉等還蕃、賜其王勅書、曰、天皇敬問

○其王、新羅聖德王にて慶雲三年は同王卽位五年なり
○行李、賚暇集に李字訛作レ李字古使字とあり
○土物、原本土か王に作る金一本に據て改む
○大射祿法、此に記す所は大藏式載する所と異同あり
○外院、唐六典兵部に武擧其試用有レ七一曰射長操入中院一爲上入次院一爲次上一入外院一爲次とあり的に三重の圈子あり圈之を院と云院は垣墻なり中院とは今い射的當中の黑星なり
○四位一箭中外院布十端、原本に布の字なし前後の例に據て補ふ
○內院二十端、原本二十の下五の字あり諸本に據て削る
○中皮者、皮は的中の皮を云
○外中內院及皮重中者如上、原本に院の字なし前例に據て補ふ
○勳位者云々、式部式に凡勳位朝參者服二文位服一列二當位次第一若无二文位一著二黃袍一と見ゆ

新羅王使人一吉飡金儒吉、薩飡金今古等至、所獻調物並具之、王有國以還、多歷年歲所貢無虧、行李相屬、欵誠既著、嘉尙無已、春首猶寒、比無恙也、國境之內、當並平安、使人今還、指宣往意、并寄土物如別、○壬辰、定大射祿法、親王二品、諸王臣二位、一箭中外院布二十端、中院二十五端、內院三十端、三品四品三位、一箭中外院布十五端、中院二十端、內院二十五端、四位一箭中外院布十端、中院十五端、內院二十端、五位一箭中外院布六端、中院十二端、內院十六端、其中皮者、一箭同布一端、若外中內院及皮重中者倍之、六位七位、一箭中外院布四端、中院六端、內院八端、八位初位、一箭中外院布三端、中院四端、內院五端、中皮者、一箭布半端、若外中內院、及皮重中者如上、但勳位者不著朝服、立其當位次、○閏正月庚戌、以從五位上猪名眞人大村爲越後守、京畿及紀伊、因幡、參河、駿河等國並疫給醫藥療之、是日、令掃淨諸佛寺并神社、亦索捕盜賊、○戊午、奉新羅調於伊勢神宮及七道諸社、勅、收貯大藏諸國調者、令諸司每色檢校相知、又收貯民部諸國庸中、輕物絁絲綿等類、自今

（閏正月）收貯大藏云々、大藏式に凡受納調庸雜物者國帳至省先可レ納狀申官期月之後廿日以前隨次收納また凡受納出納者先申辨官辨官仰諸司共集然後給納とあり
○檢校、原本校を授に作る金本に據て改む
○禱祈、類史に祈禱に作る
○泉內親王、天智天皇々女聖武紀天平六年二月薨ず、天智紀七年に見ゆ
（二月）大神朝臣、持統紀六年に三輪朝臣に作る
○大花上、孝德紀大化五年所定の第七等
○利金、此人書紀に見えず
○季祿准右大臣、季祿は春夏秋冬の四季に賜ふ祿なり其色目數量式部式に見ゆ
○大舍人、左右大舍人寮に各八百人あり令義解に謂大舍人是供奉之人とあり分番宿直して雜事に供奉す
○食封之列、從來食封は三位に賜はりしも四位以上に賜ふことに改められしなり原本に列を例に作

以後、收於大藏、而支度年料、分充民部也、○乙丑、勅令禱祈神祇、由天下疫病也、○癸酉、泉內親王參于伊勢大神宮、○二月庚辰、左京大夫從四位上大神朝臣高市麻呂卒、以壬申年功、詔贈從三位、大花上利金之子也、○辛巳、知太政官事二品穗積親王、季祿准右大臣給之、○戊子、以從五位下阿倍朝臣首名爲大宰少貳、山背國相樂郡女鴨首形名三產六兒、初產二男、次產二女、後產二男、其初產二男、有詔爲大舍人、○庚寅、河內、攝津、出雲、安藝、紀伊、讃岐、伊豫七國飢、並賑恤之、詔曰、准令、三位以上已在食封之列、四位以下寔有位祿之物、又四位有飛蓋之貴、五位無冠蓋之重、不應有蓋、无蓋同在位祿之列、故四位宜入食封之限、又案令、諸王諸臣位封、自正一位三百戶差降、止從三位、一百戶、冠位已高、食封何薄、宜正一位六百戶、差降止從四位八十戶、又制七條事、准令、諸長上官、遷代、皆以六考爲限、餘色得選、色別加二考、以十二考爲選限、百官得選之限太遠、宜色別減二考、各定選限、其准令、藉蔭入選、雖有出身之

る諸本に據て改む
○飛蓋、儀制令に凡蓋三位以上紺四位縹とあり抄調度部服玩具に華蓋兼名苑云華蓋(岐沼加散)黃帝征蚩尤時當帝頭上有五色雲因其形所造也と見ゆ
○正一位六百戶云々、祿令の集解に正一位六百戶從一位五百戶正二位三百戶五十戶從二位三百戶正三位二百五十戶從三位二百戶正四位百戶從四位八十戶とあり
○色別加二考、選叙令義解に凡考選之限都有四科內長上六考內分番八考外長上十考外散位十二考とあり尙此事稱德紀天平寶字八年十一月に詳なり
○出身、其身出でゝ官職に就くを云選叙令に凡授位皆限年廿五以上唯以蔭出身皆限年廿一以上集解に入色年限起從十七也また古記を引きて十七出身起十八盡二十五合八年考滿成選叙位とあり
○未明、原本に明を聞に作る諸本に據て改む
○貢擧、考課令に凡貢人

條、未明預選之式、自今以後、取蔭出身、非因貢擧及別勅處分、並不在常選之限、其准律令、於律雖有除名之人六載之後聽叙之文、令內未載除名之罪限滿以後應叙之式、宜議作應叙之條、其准令、京及畿內人身輸調、於諸國宜罷人身之布輸戶別之調、乃異外邦之民、以優內國之口輸調之式、依一戶之丁制四等之戶輸調多少、議作餘條例、其准令、正丁歲役收庸布二丈六尺、當欲輕歲役之庸、息人民之乏、並宜減半、其大宰所部、皆免收庸、若公作之役、不足傭力者、商量作安穩條例、永爲法式、其准令、一位以下、及百姓雜色人等、皆取戶粟以爲義倉、是義倉之物、給養窮民、預爲儲備、今取貧戶之物、還給乏家之人、於理不安、自今以後、取中々以上戶之粟、以爲義倉、必給窮乏、不得他用、若官人私犯一斗以上、卽日解官、隨贓決罰、其准令、五世之王、雖得王名、不在皇親之限、今五世之王、雖有王名、已絕皇親之籍、遂入諸臣之例、顧念親親之恩、不勝絕籍之痛、自今以後、五世之王、在皇親之限、其承嫡者相承爲王、自餘如令、其七
○丙申、授船、號佐伯從五位下、入唐執節使從三位粟田朝臣眞人之所乘者也
○丁酉、車駕幸

皆本部長官貢送太政官若无長官次官貢其人隨朝集使赴集至日引見辨官卽付式部云々其大學舉人具狀申太政官與諸國貢人同試とあり
○除名、名例律に凡除名者官位勳位悉除課役從本色六載之後聽叙とあり
○聽叙之文、原本文を又に作る諸本に據て改む
○除名之罪、原本に名を目に作る諸本に據て改む
○身輸調、孝德紀大化二年に出づ
○(注)於諸國減半、賦役令に凡調絹絁絲綿布云々正丁一人布二丈六尺並二丁成端京及畿內一丈三尺とあり
○人身之布、人々其身に就て收むる布を云原本に人を入に作る諸本に據て改む
○外邦、畿外の國を云
○四等之戶、田令集解に格文を載せて一戶之內八丁以上爲大戶六丁爲上戶四丁爲中戶二丁爲下戶一丁不在計例也とあり
○議作餘條例、金本に議の字なく閣本に餘の字なし
○正丁歲役、賦役令に凡正丁歲役十日若須收庸者二丈六尺須留役者滿卅日租調俱免通正役並不得過卅日とあり
○皇親、繼嗣令に凡皇兄弟皇子皆爲親王云々自親王五世雖得王名不在皇親之限とあるを寬にして五世王は皇親とせられしなり令制上々戶より下々戶まで九等に分ち等級に應じて上々戶は二石下々戶は一斗を收めしめたるを改て中下戶以下を除外することに定められしなり
○皇親之籍、籍は名籍なり職員令に正親正掌皇親名籍事とあり
○船號佐伯、原本に號を首に作る金本閣本に據て改む
○(注)入唐云々、考證に以下十九字正文此爲分行小字非是とあり
○內野、二年二月紀に幸宇智郡とあるに同じ
○始著淺紫、衣服令に諸王一位深紫衣二位以下五位以上並淺紫衣とあり
○强幹人、考課令義解に幹は强也とあり
○祈年、神祇令に仲春祈年祭、義解に祈猶禱也欲令歲災不作時令順度卽於神祇官祭之故曰祈年とあり
○(注)神祇官記、卽ち神名帳なり

內野、○己亥、五世王朝服、依格始著淺紫、○庚子、京及畿內盜賊滋起、因差强幹人、悉令逐捕焉、是日、甲斐信濃越中但馬土佐等國一十九社始入祈年幣帛例、其神名具神祇官記

○三月丙辰、右京人日置須太賣、一產三男、賜衣粮并乳母、○丁巳、詔曰、夫禮者、天地經義、人倫鎔範也、道德仁義、因禮乃弘、教訓正俗、待禮而成、比者、諸司容儀多違禮義、加以男女无別、晝夜相會、又如聞、京城內外多有穢嗅、良由所司不存撿察、自今以後、兩省五府、並遣官人及衞士、嚴加捉搦、隨事科決、若不合與罪者、錄狀上聞、又詔曰、軒冕之群、受代耕、

(三月)禮者天地經義、左傳昭二十五年に子大叔曰夫禮天之經也地之義也民之行也天地之經而民實則之とあり
○人倫、原本に倫を俗に作る諸本に據て改む
○道德仁義云々、禮記曲禮に道德仁義非禮不成敎訓正俗非禮不備とあり
○穢嗅、字鏡に嗅嗅同、

許敕、居久二反、加久、又久佐之とあり
○良由、原本に由を田に作る諸本に據て改む
○兩省、式部兵部なり
○五府、五衛府なり
○軒冕之群、字書に軒は車廂也冕は冠之前後垂旒者也とあり玉冠を載き車に乘る官位高き人を云
○代耕、禮記王制に諸侯之下士視上農夫祿足以代其耕也中士倍下士上士倍中士云々とあり官吏は農民が代て耕す所の祿を受くるを云
○有秩之類、秩祿ある者を云
○召伯云々、毛詩召南甘棠に見ゆ召伯は百姓を煩勞せしめざらむが爲に甘棠の下にやどり休息して男女の訟をきゝし故に國人其德化を思ひ其樹を敬したるなり
○公休云々、史記循吏列傳に公儀休食ㇾ茹而美拔其園葵而棄ㇾ之云々欲ㇾ令農士工女安所ㇾ讎其貨乎と見え民と利を爭はざるをほめたるなり
○仍奪、原本に奪を棄に作る俗字なり
（六月）興射女王、系詳

之祿有秩之類、無妨於民農、故召伯所以憩甘棠、公休由其拔園葵、頃者、王公諸臣多占山澤、不事耕種、競懷貪婪、空妨地利、若有百姓採柴草者、仍奪其器、令大辛苦、加以被賜地、實止有一二畝、由是踰峯跨谷、浪爲境界、自今以後、不得更然、但氐々祖墓及百姓宅邊、栽樹爲林、并周二三十許步、不在禁限、○夏四月壬寅、河內、出雲、備前、安藝、淡路、讃岐、伊豫等國飢疫、遣使賑恤之、○五月丁巳、河內國石川郡人河邊朝臣乙麻呂獻白鳩、賜絁五疋、絲十絇、布二十端、鍬二十口、正稅三百束、○六月癸酉朔、日有蝕之、○丙子、令京畿祈雨于名山大川、○丙申、從四位下與射女王卒、○秋七月壬子、以從四位上巨勢朝臣太益須爲式部卿、○辛酉、以從五位下笠朝臣麻呂爲美濃守、○乙丑、丹波、但馬、二國山災、遣使奉幣帛于神祇、卽雷聲忽應、不撲自滅、大倭國宇智郡狹嶺山火、撲滅之、○戊辰、以從五位下阿倍朝臣眞君爲大倭守、○己巳、周防國守從七位下引田朝臣秋庭等獻白鹿、諸國飢、遣使於六道、除西海道、並賑恤之、大宰府言、所部九國三嶋亢旱大風、拔樹損稼、遣使巡省、因免被災尤甚者調役、○八月

（七月）狹嶺山火、狹嶺山は大和志に宇智郡大深村（今坂合部村大字）にありと見ゆ原本に狹を狹に作る諸本に據て改む類史火を災に作る
○九國、大隅國を置きしは和銅六年なれば此に九國とあるは追書せるなり
○三嶋、壹岐對馬多禰なり
○亢旱、原本亢を冗に作る金本に據て改む
（八月）美努連、原本努を弩に作る二年十二月癸酉の條に據て改む
（九月）始定田租法、田令に段租稻二束二把町租稻廿二束、義解に束稻舂得米五升也とあり格文を以て一段の租を七升五合一町の租を七斗五升と定められしなり租稅志に慶雲三年九月廿日の格に田租令以前の束を取て令內の把に擬すれば令條の段租其實猶益す云々宜しく段の租一束五把町の租一十五束を收むべしとあるを引きて試に令前の大升を以て令の二束二把の米を量るに七升六合三勺八撮有奇を得令前の束五把ならず

甲戌、越前國言、山災不止、遣使奉幣部內、神救之、○壬辰、以從五位下美努連淨麻呂爲遣新羅大使、○庚子、遣三品田形內親王、侍于伊勢大神宮、○九月甲辰、以從五位下坂合部宿禰三田麻呂爲三河守、○丙辰、遣使七道、始定田租法、町十五束、及點役丁、○丙寅、行幸難波、○冬十月壬午、還宮、攝津國造從七位上凡河內忌寸石麻呂、山背國造外從八位上山背忌寸品遲、從八位上難波忌寸濱足、從七位下三宅忌寸大目、合四人、各進位一階、○乙酉、從駕諸國騎兵六百六十人、皆免庸調并戶內田租、○十一月癸卯、賜新羅國王勅書曰、天皇敬問新羅國王、朕以虛薄、謬承景運、慚無練石之才、徒奉握鏡之任、日旰忘飡、翼翼之懷愈積、宵分輟寢、業々之想彌深、冀覃覆載之仁、遐被寰區之表、況王世居國境、撫寧人民、深秉並舟之至誠、長脩朝貢之厚禮、庶磐石開基、騰茂響於麗岫、維城作固、振芳規於鴈池、國內安樂、風俗淳和、寒氣嚴切、比如何也、今故遣大使從五位下美努連淨麻呂、副使從六位下對馬連堅石等、指宣往意、更不多及、○戊申、從五位下大市王爲伊勢守、○十二月辛未朔、

に較ぶれば一合三勺八撮有奇を増す令前の十五束は令條の廿一束六把に當れり因て更に租法を折裏施行せむと謂ふに在りと云り

(十月)攝津國造云々、凡河内忌寸石麻呂以下四人何れも地方の名族たるを以て特に叙位ありしなるべし　(十一月)練石之才、淮南子覽冥訓に女媧練二五色石一以補二蒼天一とあり　○握鏡、帝範の序に啓二金鏡一而握二金樞一、藝文類聚云把二神珠一握二金鏡一擊二天鼓一撞二地鐘一皆喩二人君總攬乾綱一之意一とあり　○翼翼之懷、毛詩大雅に小心翼々、傳に翼々恭也とあり恭謙なるを云　○業々之想、尚書皐陶謨に兢々業々、爾雅釋訓に業々危也とあり危ぶみ恐れて戒慎するを云　○並舟、古事記仲哀天皇の段に雙船不乾船腹一また持統紀に新羅並舳不干艤奉仕之國とも見えたり之に據て記せるなるべし　○磐石、漢書文帝紀に高帝王二子弟一犬牙相制所謂磐石之宗也とあり　○齋岫、下の鴈池と相對す　○繼體紀元年に見ゆ　○鴈池、宋詳　○嚴切、原本切を功に作る諸本に據て改む　○從五位下大市王、慶雲元年正月紀に无位大市王授二從四位下一とあり五は四の誤なるべし　(十二月)令天下脫脛裳云々、持統紀朱鳥元年七月の條に男夫著二脛裳一と見えしを禁じて一に白袴を著せしめられしなり考證に按衣服令白袴一品以下初位以上皆通用之一卽此然依二紀文一令條所載疑亦係養老追改也とあり　○土牛、陰陽式に土牛童子等像大寒日前夜半時立二於諸門一立春之日前夜半時乃撤とあり陽明待賢門には青色美福朱雀門には赤色談天藻壁門には白色安嘉偉鑒門には黑色郁芳皇嘉殿富達智の四門に一は黃色の土牛を立つるなり　○大儺、儺は年中の疫氣をはらふなり字書に驅レ疫也とあり鬼やらひとも云

日有レ蝕之、○丙子、遣二四品多紀内親王、參二于伊勢大神宮一、○己卯、有レ勅、令二天下一脫二脛裳一、一著二白袴一、是年、天下諸國疫疾、百姓多死、始作二土牛一大儺、

【慶雲四年】正月、此下恐くは脫文あらむ　○乙亥、干支を推すに正月庚子朔にて乙亥なし二月は庚午朔にて乙亥は六日なり　○議遷都事、元明紀和銅三年三月都を平城に遷せること見ゆ　○椋垣直、原本椋を掠に作る和銅二年正月紀に據て改む　○授成選人等位、大日本史注に據二年中行事公事根源一列見權輿于此一とあり

四年春正月、乙亥、因二諸國疫一、遣レ使大祓、○戊子、詔二諸王臣五位已上一議二遷都事一也、○辛卯、主税寮助從六位上椋垣直子人賜二連姓一、○甲午、天皇御二大極殿一、詔授二成選人等位一、親王已下五位已上男女、一百十人各有レ差、又授二无位直見王一、從六位上紀朝臣諸人、從六位下高向朝臣色夫智、小治田朝臣安麻呂、小治田朝臣宅持、上毛野朝臣堅身、正七位下高橋朝臣上麻呂、從六位下中臣朝臣人足、平群朝臣安麻呂、正六位上高志連

○直見王、系詳ならず　○國寬忌寸、原本に忌寸を尋の一字に作る掖齋の說に據て改む聖武紀神龜二年閏正月の國寬忌寸勝麻呂は卽ち其同姓なり　○並授、授恐くは衍なるべし

(三月)巨勢朝臣邑治、考證に邑治大寶元年與二栗田朝臣眞人等一入唐凡經二六年一而歸且繼爲二大位一此書二副使一者蓋大使高橋朝臣笠間罷不レ往唐副使坂合部宿禰大分代レ之邑治又代二大分一爲二副使一也とあり　○從四位上下毛野朝臣、原本上を下に作る二年四月の條に據て改む　○下毛野川内朝臣、下野國河内郡あり此地に因て改むるか　○印牧駒犢、牧にある駒犢二歲に至れば每年九月國司牧長と共に檢印して籍簿を作りしこと厩牧令左馬寮式等に詳なり　(四月)日並知皇子命、持統紀三年四月に注せり　○國忌、先皇崩御の日を云　○藤原朝臣、不比等なり

村君、國寬忌寸八嶋、幡文造通、並授二從五位下一、○三月庚子、遣唐副使從五位下巨勢朝臣邑治等自二唐國一至、○庚申、從四位上下毛野朝臣古麻呂、請二改下毛野朝臣石代姓爲中下毛野川内朝臣一、許レ之、○甲子、給鐵印于攝津伊勢等二十三國、使印牧駒犢、○夏四月庚辰、以二日並知皇子命薨日一、始入二國忌一、○壬午、詔曰、天皇詔旨勅久、汝藤原朝臣乃仕奉狀者今乃未爾不在、掛母畏支天皇御世御世仕奉而、今母又朕卿止爲而、以二明淨心一而、朕乎助奉仕奉事乃、重支勞支事乎、所念坐御意坐爾依而、多利麻比豆夜夜、彌賜門婆、忌忍事爾似事乎志奈母常勞彌重彌所念坐久止宣、又難波大宮御宇掛母畏支天皇命乃、汝父藤原大臣乃仕奉賈流狀乎婆、建内宿禰命乃仕奉賈流事止同事叙止勅而、治賜慈賜賈利、是以令文所載多流乎跡止爲而、隨令長遠久、始今而次次被賜將往物叙止、食封五千戶賜久止勅命聞、宣辭而不受、減二三千戶一、賜二二千戶一、一千戶傳二于子孫一、又詔益封親王已下四位已上、及内親王、諸王嬪命婦等、各有レ差、○丙申、天下疫飢、詔加二賑恤一、但丹波、出雲、石見三國尤甚、奉二幣帛一於諸社一、又令

○重支勞支事、解に重支はやむことなく重く大きなる意勞支は俗に苦勞なる事といふ意なり
○多利麻比呂、解に利は知の誤にて立廻なるべし不比等の功勞を賞せむと御心をつけて其機を窺ひ給ふを云
○夜夜彌、漸看なり速に行はずして事のさまを見つゝあるを云
○忌忍事爾云々、忌憚りて忍びて默止し居るを云か
○難波大宮云々、孝德天皇を申奉る
○藤原大臣、鎌足なり大臣はオホオミと訓むぞ古言なる
○仕奉賈流、賈は覇の誤なるべし下同じ
○五千戸、食封は祿令に太政大臣三千戸左右大臣二千戸とあるを此は特に五千戸賜へるなり同令に凡令條之外若有特封及增一者並依別勅とあるに據られしなり
○賜二千戸一千戸、稱德紀天平神護元年四月の條に據るに一千戸の三字は疑らくは衍
○山田史御方、持統紀に

京畿及諸國寺讀經焉、賜正六位下山田史御方布鍬鹽穀、優學士也、
○五月己亥、兵部省始錄五衛府五位以上朝參及上日、申送太政官、○乙巳、以正五位下多治比眞人水守爲河內守、○壬子、給從五位下巨勢朝臣邑治、從七位上賀茂朝臣吉備麻呂、從八位下伊吉連古麻呂等、絁綿布鍬幷穀、各有差、並以奉使絕域也、○癸丑、美濃國言、村國連等志賣一產三女、賜穀四十斛、乳母一人、○戊午、畿內霖雨損苗、遣使賑儉之、○癸亥、讃岐國那賀郡錦部刀良、陸奥國信太郡生王五百足、筑後國山門郡許勢部形見等、各賜衣一襲及鹽穀、初救百濟也、官軍不利、刀良等被唐兵虜、沒作官戶、歷四十餘年、乃免、刀良至是遇我使粟田朝臣眞人等、隨而歸朝、憐其勤苦有此賜也、○乙丑、從五位下美努連淨麻呂、及學問僧義法、義基、惣集、慈定、淨達等至自新羅、○六月丁卯朔、日有蝕之、○辛巳、天皇崩、遺詔、擧哀三日、凶服一月、○壬午、以三品志紀親王、正四位下犬上王、正四位上小野朝臣毛野、從五位上佐伯宿禰百足、黃文連本實等、供奉殯宮事、擧哀著服、一依遺詔行之、自初七至七七、於四大寺設齋焉、○冬十月丁卯、以二品新田部親王、從四位上阿倍朝臣宿奈麻呂、從四位下佐伯宿禰太麻呂、從五位下紀朝臣男人、爲造御竈司、從四位上下毛野朝臣古麻呂、正五位上土師宿禰馬手、正五位下民忌寸比良夫、從五位上石上朝臣豐庭、從五位下藤原朝臣房前、爲造山陵司、正四位下犬上王、從五位上采女朝臣枚夫、多治比眞人三宅麻呂、從五位下黃文連本實、米多君北助、爲御裝司、○十一月丙午、從四位上當麻眞人智德、率誄人奉誄、謚曰倭根子豐祖父天皇、卽日火葬於檜隈安古山陵、

御形、萬葉に三方に作る懷風藻に大學頭從五位下山田史三方とあり詩三首を載せたり
(五月)伊吉連古麻呂、懷風藻に從五位上上總守伊支連古麻呂とあり
○賑儉、紀略賑を振に作る儉は貸の古字
○刀良、原本刀を力に作る諸本に據て改む
○生王、類史に壬生に作る
○初救百濟、天智二年紀に百濟を救ふこと見ゆ今に至る迄四十五年を經たり
○官戶、唐六典に凡反逆相坐沒其家爲官奴婢一免爲番戶再免爲雜戶三免爲良人皆因赦宥所及則免之、注に諸律令格式有言官戶者是番戶之總號非謂別有一色とあり
(六月)天皇崩、大日本史に天皇崩年二十五、注に年據懷風藻水鏡一代要記神皇正統記愚管抄とあり ○黃文連本實、大寶二年十二月及下文に據るに黃上恐くは從五位下の四字を脫す (十月)從四位上下毛野朝臣、原本正四位下に作る三月庚申の條及和銅元年三月同年七月紀に據て改む (十一月)倭根子豐祖父天皇、一代要記に天津足根大父天皇とあり ○二十日、四年十一月紀に甲寅に作る ○檜隈安古山陵、諸陵式に檜前安古岡上陵藤原宮御宇文武天皇在大和國高市郡陵墓要覽に同郡阪合村大字栗原とあり 略記に山陵高三丈方一町と見ゆ

續日本紀卷第三

【慶雲四年】阿閇皇女、或は阿倍又安倍に作る　○宗我嬪、天智紀に蘇我山田石川麻呂大臣女姪娘生御名部皇女與阿陪皇女と見ゆ　○石川麻呂大臣、孝德天皇の御代に右大臣となる大化改新の元勳の一人なりしが弟日向の讒に由て自殺す、元慶七年十二月石川朝臣木村言、始祖大臣武内宿禰男宗我石川生於河内國石川別業故以石川爲名賜宗我大家爲居云々と見え石川氏の由來明なり　○東樓、大極殿の東樓蒼龍樓卽ち左近陣を云　○督率、原本率を卒に作る紀略に據て改む督率は五衞府の長官なり衞士衞

續日本紀卷第四

起慶雲四年七月盡和銅二年十二月

從四位下行民部大輔兼左兵衞督皇太子學士臣菅野朝臣眞道等奉　勅撰

日本根子天津御代豐國成姬天皇　元明天皇　第卌三

日本根子天津御代豐國成姬天皇、小名阿閇、皇女、天命開別天皇之第四皇女也、母曰宗我嬪蘇我山田石川麻呂大臣之女也、適日並知皇子尊生天之眞宗豐祖父天皇、慶雲三年十一月豐祖父天皇不豫、始有禪位之志、天皇謙讓、固辭不受、四年六月、豐祖父天皇崩、○庚寅、天皇御東樓、詔召八省卿及五衞督率等、告以依遺詔攝萬機之狀、○秋七月壬子、天皇卽位於大極殿、詔曰、現神八洲御宇倭根子天皇詔旨勅命、親王諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞宣、關母威岐藤原宮御宇倭根子天皇丁酉八月此食國天下之業、日並所知皇太子之嫡子、今御宇豆留天皇授賜而、並

門に督と云ひ兵衛に率と云

（七月）壬子、十七日なれば此の條下の辛丑の次に叙すべし

○天皇卽位、大日本史注に愚管抄歷代皇記爲六月十五日蓋以帝崩受遺詔之日爲卽位之日と云り

○現神八洲御宇云々、文武天皇卽位詔（二頁）に注せり

○關母威岐、原本關を開に作る淀本に據て改む下同じ關字をカケと訓むは關係の意なりカケマクのマクはムの延語にて言の葉にかけむも恐れ多しとの意

○丁酉、持統天皇十一年にて卽ち文武天皇の元年なり

○日並所知皇太子、原本所の字なし諸本に據て補ふ

○今御宇豆留天皇、文武天皇に坐せり

○並坐、此時持統天皇は太上天皇に坐しゝが文武天皇と並び坐して天下の大政を見そなはし給ふ由なり

○近江大津宮御宇、天智天皇に坐せり

○不改常典、此の句解にカハルマジキツネノノリと字の如く訓めり所謂近江朝廷の令を制定して永世の法を立てられしを云

○敷賜霸留、敷き施し給ふを云

○受被賜坐、持統天皇も文武天皇も次々に其常典を承はりて政ごち給ふとなり

○衆受被賜云々、親王王諸臣百官天下公民諸なり

○仕奉利豆羅久止、衆の仕へ奉るとなりツラクはツルの延語

○詔命、元明天皇の詔命なり

○我王朕子天皇、文武天皇を申す

○勞坐、原本の訓イタハリマスを解にツカラシクマスと訓むべしと云り

○日嗣、原本嗣を嗣に作る嗣は嗣の俗字なり今諸本に據て改む

○大命爾坐世云々、原本坐世の世を母に作る他の例に據て改む、大命に坐世の句解し難きも解に坐世は令隨（マセ）の意なりと云り天皇の大命のまに〳〵天位にまし〳〵て天下を治め給へと讓り給へりとなり　○治可賜止、上の天日嗣者とあるは此に係れり　○答曰、元明天皇のなり　○遍多、解にタビマネクと訓べしと云り　○日重、日の字を原本曰に作るは誤なれば改む　○受賜、元明天皇躬自らの御詞なり　○重位爾、爾は乎とあるべき語呂なるを爾とせるは此頃の用ひざまなるべし　○天地心乎、天津神國津神

坐而、此天下乎治賜比諸賜岐、是者關母威岐、近江大津宮御宇大倭根子天皇乃與天地一共、長、與日月共、遠、不改常典止、立賜比敷賜霸留法乎、受被賜坐而行賜事止、衆受被賜而、恐美仕奉利豆羅久止詔命乎、衆聞宣、如是仕奉侍爾、去年十一月爾、威加母我王朕子天皇乃詔豆羅久、朕御身勞坐故、暇間得而御病欲治、此乃天豆日嗣之位者、大命爾坐世、大坐坐而治可賜止、讓賜命乎、受被賜坐而、答曰豆羅久、朕者不堪止辭白而、受不坐在間爾、遍多久日重而讓賜倍婆、勞美威美、今年六月十五日爾、詔命者受賜止白奈賀羅、此重位爾繼坐事乎奈母、天地心乎勞重美畏坐左久止詔命、衆聞宣、故是以親王始而、王臣百官人等乃、淨明心以而、彌務爾彌結爾、阿奈奈比奉輔佐奉牟事爾依而志、此食國天下之政事者、平長將在止奈母所念坐、又天地之共、長遠不改常典止立賜霸留食國法母、傾事無久動事无久渡將去止奈母所念行左久止詔命、衆聞宣、遠皇祖御世乎始而天皇御世御世、天豆日嗣止高御座爾坐而、此食國天下乎、撫賜比慈賜事者、辭立不在、人祖乃意能賀弱兒乎養治事乃如久、治賜比慈賜來業止奈母、隨神所念行須、是以先豆天下公民之上乎慈賜久、大赦天下、自慶雲四年七月十七日昧爽以前大辟罪以下、罪無輕重、已發覺未發覺、咸赦除之、其八虐之內已殺訖、及强盜竊盜、常赦不免者、並不在赦例、前後流人非反逆緣坐、及移鄕者、並宜放還、亡命山澤、挾藏軍器、百日不首、復罪如初、給侍高年百歲以上、賜粍二斛、九十以上一斛五斗、八十以上一斛、八位以上、級別加布一端、五位以上不在此例、僧尼准八位以上、各施粍布、賑恤鰥寡惸獨、不能自存者、人別賜粍一斛、京師、畿內、及大宰所部、諸國今年、調、天下、諸國今年田租復賜久止詔天皇大命乎、衆聞宣、○庚子、有事于大內山陵、○辛丑、遣使於大宰府、授南嶋人位、賜物各有差、○丙辰、始置授刀舍人寮、

の御心とあるべきを字の如く支那風の天地の心と書けるなり　○阿奈奈比奉、輔佐(タス)け奉ると同意の語なり解に倭名抄造作具に麻柱(アナ、ヒ)あり此は今の世の足代(アシ、ロ)と云もの、如しとを云は足荷(アシニナヒ)の義なるべしその如く臣の下に在て君を輔持するを云也と云り　○依而志、原本志を者に誤れるを改む　○渡將去、御世々々を經行くを云　○遠皇祖云々、此上に又の字あらまほしと云　○養治、ヒタスは日足にて兒を育つるを云　○辭立、辭は事なり常に異なりて殊なることをするを云　○人祖、人の父母の意　○弱兒、幼稚き兒を云　○昧爽、夜明けを云　○不免者、例に據るに不の上に所の字を脫す　○流人、原本流を諸に作る紀略に據て改む　○反逆緣坐、名例律に反逆緣坐流、疏に謂ゆ緣坐反逆に得流罪者とあり　○移鄉、賊盜律に殺人應死會赦免者移鄉若群盜共殺止移下手者及頭首六人とあり後世の所拂なり　○亡命山澤、山林澤池に逃隱るゝを云　○挾藏軍器、養老元年十一月詔に藏禁兵器とあり　○給侍、戶令に凡年八十及篤疾給侍一人、九十二人、百歲五人とあるを云　○粗、原本粗に作る紀略に據て改む　○庚子、及辛丑の二條壬子の條の上に移すべし　○大內山陵、天武天皇山陵を云　○南嶋、文武紀三年八月に見ゆ　○授刀舍人寮、職官志に此不載其官員和銅元年三月以小野馬養爲帶劍長官亦其次官以下不載養老四年正月置授刀舍人寮醫師一員是已五年十二月令授刀寮及五衞府各設鉦鼓一面作將軍之號令習兵士之耳目蓋授刀舍人寮或略稱授刀寮又其稱帶劍義同授刀此臨時所置是以其官若無定名亦不有定員也とあり

(八月)水手等云々、賦役令集解に靈龜三年十一月八日官符を載せて遣大唐國水手已上彼家徭役事正身一戶方已免不及別考とあり

(九月)氏長、氏上なり文武丁酉年閏十二月紀に云り

(十月)文忌寸禰麻呂、原本禰を彌に作る天武紀に根麻麻呂大寶元年七月紀に尼麻呂、古京遺文に禰麻呂とあるに據て改む古京遺文に壬申年將軍左衞士府督正四位上文禰麻呂忌寸慶雲四年次丁未九月廿一日卒とあり、狩谷氏云此云十月壬子卒者疑史筆之誤但正四位上是

丙寅朔　八月辛巳十六、入唐副使從五位下巨勢朝臣邑治等、進位有差、從七位上鴨朝臣吉備麻呂授從五位下、水手等給復十年、○丙申朔九月丁未十二、正五位下大神朝臣安麻呂爲氏長、○冬十月乙丑朔戊子廿四、從四位下文忌寸禰麻呂卒、遣使宣詔、贈正四位上、並賻絁布、以壬申年功也、○十一月乙未朔丙申、賑恤志摩國、以從五位下安倍朝臣眞君爲越後守、○甲寅廿、葬倭根子豐祖父天皇于安古山陵、○戊午廿四、彈正尹從四位下衣縫王卒、○十二月乙丑朔、日有蝕之、○戊辰廿四、伊豫國疫、給藥療之、○辛卯廿七、詔曰、凡爲政之道、以禮爲先、无禮言亂、言亂失旨、往年有詔、停跪伏之禮、今聞、內外廳前、皆不嚴肅、進退无禮、陳答失度、則所在官司不恪其次、自忘禮節之所致也、宜自今以後、嚴加糺彈、革其弊俗、使靡淳風、

(十一月)阿倍朝臣眞君、此人を越後守と爲すこと和銅元年三月紀に見えたり　○豐祖父、金本閣本及紀略等祖を大に作る　○安古山陵、奈良縣高市郡坂合村大字栗原　○衣縫王卒、持統紀七年に造京司衣縫王と見えたれど系詳ならず　(十二月)停跪伏之禮、往年とは慶雲元年正月を云

贈位靈龜二年四月紀天平寶字元年十二月紀亦並云贈正四位上可以證誌曰不曰贈者蓋書人之誤其爲左衞士督史不載乃缺文也と云

和銅元年(戊申)春正月乙巳十一、武藏國秩父郡獻和銅、詔曰、現神御宇倭根子天皇詔旨勅命乎、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞宣、高天原與利天降坐志、天皇御世乎始而、中今爾至麻氏爾、天皇御世御世、天豆日嗣高御座爾坐而、治賜慈賜來、食國天下之業止奈毋、隨神所念行佐久止詔命乎、衆聞宣、如是治賜慈賜來留天豆日嗣之業、今皇朕御世爾當而坐者、天地之心乎勞彌重彌辱彌恐彌坐爾、聞看食國中乃東方武藏國爾、自然作成和銅出在止奏而獻焉、此物者、天坐神地坐祇乃相于豆奈比奉福波倍奉事爾依而、顯久出多留寶爾在羅之止奈毋、神隨所念行須、是以天地之神乃顯奉瑞寶爾依而、御世年號改賜換賜波久止詔命乎、衆聞宣、故改慶雲五年而和銅元年爲而、御

【和銅元年】和銅、熟銅なり鍛煉を經たるを云銅鑛に對して云り　○高天原與利天降坐志天皇、邇々藝命を申奉る金本閣本與利を由の一字に作る　○天豆日嗣、解に此下に止と讀付べし前詔後詔天豆日嗣止高御座爾坐而とある例也と云　○慈賜來、解云末に出でたる御慈の件々を詔給はむ爲に先づかくは詔給ふなり　○食國天下之業、天下を治め給ふ天皇の大御業の義　○隨神、金本閣本等に神隨とあり　○天豆日嗣之業、此下に止の字を置きて訓むべし　○皇朕、天皇の御親ら詔ふ言

○勞彌重彌辱彌恐彌、こゝの辱彌は恐れ憚る意にて耻づる意も添ひて俗に恐多い勿體ないなどと云に當れり
○出在、イデタリと訓べしタリに在字を訓ること例多し
○相于豆奈比、神の受納し給ふを云、相は添ひたる語、于豆はうるはしくめでたきを云、奈比は活きを助くる語なり
○御世年號、ミヨノナと訓べし次々の詔の例に據る
○慶命詔久、次の冠位云々の文卽ち御命なり
○冠位、冠はカヾフリと訓べし此時は已に冠を賜ふに代へて位記を以てすることに改りたれど宣命などにはなほ如此歴史的の名目を以て冠位と宣ふなり
○治賜、冠位を上げ給ふを云
○軍器、金本閣本曾本禁書に作る
○諸國々郡司、々は原本之に作る誤なること明なれば改む
○當郡、和銅の出でし秩父郡を云

世年號止定賜、是以天下爾慶命詔久、冠位上可賜人人治賜、大赦天下、自和銅元年正月十一日昧爽以前、大辟罪已下、罪无輕重、已發覺未發覺、繫囚見徒、咸赦除之、其犯八虐、故殺人謀殺人已殺、賊盜常赦所不免者、不在赦限、亡命山澤、挾藏軍器、百日不首、復罪如初、高年、百姓、百歳以上、賜粟三斛、九十以上二斛、八十以上一斛、孝子順孫、義夫節婦、表其門閭、優復三年、鰥寡惸獨不能自存者、賜粟一斛、賜百官人等祿各有差、諸國々郡司加位一階、其正六位上以上不在進限、免武藏國今年庸當郡調庸詔天皇命乎衆聞宣、是日、授四品志貴親王三品、從二位石上朝臣麻呂、從二位藤原朝臣不比等、並正二位正四位上高向朝臣麻呂、從三位、正六位上阿閉朝臣大神、正六位下川邊朝臣母知、笠朝臣吉麻呂、小野朝臣馬養、從六位上上毛野朝臣廣人、多治比眞人廣成、從六位下大伴宿禰宿奈麻呂、正六位上阿刀宿禰智德、高庄子、買文會、從六位下日下部宿禰老、津嶋朝臣堅石、无位上金元、並從五位下、○二月甲戌、始置催鑄錢司、以從五位上多治比眞人三宅麻呂任之、讃岐國疫、給藥療之、○戊寅、詔曰、朕祗奉上玄、君臨宇內、以非薄之德、處紫宮之尊、常以爲作之者勞、居之者逸、遷都之事、必未遑也、而王公大臣咸言、往古已降、至于近代、揆日瞻星、起宮室之基、卜世相土、建帝皇之邑、定鼎之基永固、無窮之業斯在、衆議難忍、詞情深切、然則京師者、百官之府、四海所歸、唯朕一人、獨逸豫、苟利於物、其可遠乎、昔殷王五遷、受中興之號、周后三定、致太平之稱、安以遷其久安宅、方今平城之地、四禽叶圖、三山作鎭、龜筮並從、宜建都邑、宜其營搆資、須隨事條奏、亦待秋收後、令造路橋、子來之義勿致勞擾、制度之宜、合後不加、

○調庸、庸の字は紀略に據て補ふ
○高庄子、神龜元年五月紀に賜正八位上高正勝姓三笠連と見ゆ(姓氏錄には御笠連に作る)正勝は其の子孫なるべし
○買文會、內藤氏云買疑買字之譌、養老五年正月紀に買受君あり錄右京諸蕃にも見ゆ
○日下部、金本閣本日下を早の一字に作る
○金上元、元は原本无に作る二年十一月紀に據て改む

(二月)催鑄錢司、紀略に催の字なし
○上玄、天を云文選甘泉賦に惟漢十祀將郊上玄とあり
○紫宮、皇位を云
○揆日瞻星以定東西南北とあり
○卜世相土、卜世は左傳に成王鼎於郟鄏卜世三十世年七百天所命也とあり相土は晉書周覆傳に未若相土遷宅以享永祚とあり
○定鼎之基永固、原本永は定の下にあり金本閣本等に據て改む
○獨逸豫、逸は安逸、豫は安樂なり考證に一本獨の上に豈の字ありと云
○其可遠乎、考證云遠疑違字之譌
○殷王五遷、尙書盤庚に出づ湯王より盤庚に至るまで五たび國都を徙せるを云
○周后三定、三定は豐邑、鎬京、洛邑の三所に都を定めしを云
○安以遷云々、こゝも脫文あるべし安宅は毛詩小雅に雖則劬勞其究安宅とあるに據る
○四禽叶圖、所謂四神相應の地を云
○三山作鎭、三山は香久山畝傍山耳梨山を云
○龜筮並從、尙書洪範に龜從筮從とあるに據る
○宜其營搆資、鴨本宜を且に作ると云宜恐くは衍ならむ
○令造、令は原本合に作る紀略に據て改む
○子來之義、毛詩大雅に經始靈臺經之營之庶民攻之不日成之經始勿亟庶民子來とあるに據れり

(三月)山背備前二國、類史に山背備後備前三國

○三月乙未、山背備前二國疫、給藥療之、○丙午、以從四位上中臣朝

に作る

○正三位大伴宿禰云々、内藤氏云按慶雲二年八月戊午大伴安麻呂爲大納言時從三位蓋曾罷而再任乎爲正三位无所見又按一代要記云和銅元年二月十二日叙正三位公卿補任又同又案慶雲二年八月爲大納言蓋爲中納言之誤と云

○百濟王遠寶、王は文武四年庚子十月紀に據て補ふ

○左兵衞率、職員令には督とあれどこゝには率の字を用ひ天平寶字に至て督と爲せりされば大寶の制率の字を用ひ後衞門衞士と同じく督を用ひしなるべし

○大麻呂、原本大を太に作る曾本淀本及下文に據て改む

○美努連、金本閣本努を弩に作る

○阿倍狛朝臣、慶雲二年十一月紀には狛朝臣に作り阿倍の二字なし

○笠朝臣麻呂、此人美濃守になれること慶雲三年七月紀に見ゆ

○阿倍朝臣眞君、此人越後守になれること慶雲四年十一月紀に見ゆ

○多益首、三年六月紀に多益須とあり

臣意美麻呂爲神祇伯、右大臣正二位石上朝臣麻呂爲左大臣、大納言正二位藤原朝臣不比等爲右大臣、正三位大伴宿禰安麻呂爲大納言、正四位上小野朝臣毛野、從四位上阿倍朝臣宿奈麻呂、從四位上中臣朝臣意美麻呂、並爲中納言、從四位上巨勢朝臣麻呂爲左大弁、從四位下石川朝臣宮麻呂爲右大弁、從四位上下毛野朝臣古麻呂爲式部卿、從四位下彌努王爲治部卿、從四位下多治比眞人池守爲民部卿、從四位下息長眞人老爲兵部卿、從四位上竹田王爲刑部卿、從四位上廣瀨王爲大藏卿、正四位下犬上王爲宮內卿、正五位上大伴宿禰手拍爲造宮卿、正五位下大石王爲彈正尹、從四位下布勢朝臣耳麻呂爲左京大夫、正五位上猪名眞人石前爲右京大夫、從五位上大伴宿禰男人爲衞門督、正五位上百濟王遠寶爲左衞士督、從五位上巨勢朝臣久須比爲右衞士督、從五位上佐伯宿禰垂麻呂爲左兵衞率、從五位下高向朝臣色夫知爲右兵衞率、從三位高向朝臣麻呂爲攝津大夫、從五位下佐伯宿禰男爲大倭守、正五位下石川朝臣石足爲河內守、從五位下坂合部宿禰三田麻呂爲山背守、正五位下大宅朝臣金弓爲伊勢守、從四位下佐伯宿禰大麻呂爲尾張守、從五位下美努連淨麻呂爲遠江守、從五位上上毛野朝臣安麻呂爲上總守、從五位下賀茂朝臣吉備麻呂爲下總守、從五位下阿倍狛朝臣秋麻呂爲常陸守、正五位下多治比眞人水守爲近江守、從五位上笠朝臣麻呂爲美濃守、從五位下小治田朝臣宅持爲信濃守、從五位上田口朝臣益人爲上野守、正五位下當麻眞人櫻井爲武藏守、從五位下多治比眞人廣成爲下野守、從四位下上毛野朝臣小足爲陸奥守、從五位下高志連村君爲越前守、從五位下阿倍朝臣眞君爲越後守、從五位上大神朝臣狛麻呂爲丹波守、正五位下忌部宿禰子首爲出雲守、正五位上巨勢朝臣邑治爲播磨守、從四位下百濟王南典爲備前守、從五位上多治比眞人吉備爲備中守、正五位上佐伯宿禰麻呂爲備後守、從五位上引田朝臣爾閑爲長門守、從五位上大伴宿禰道足爲讃岐守、從五位上久米朝臣尾張麻呂爲伊豫守、從三位粟田朝臣眞人爲大宰帥、從四位上巨勢朝臣多益首爲大貳、○乙卯、勅、大宰府、

帥大貳、并三關及尾張守等、始給儉仗、其員、帥八人、大貳及尾張守四人、三關國守二人、其考選事力及公廨田、並准史生、以從五位下鴨朝臣吉備麻呂爲玄蕃頭、從五位上佐伯宿禰百足爲下總守、○丙辰、以從五位下小野朝臣馬養爲帶劍寮長官、○庚申、美濃國安八郡人國造千代妻如是女、一産三男、給稻四百束、乳母一人、

○三關、鈴鹿、不破、愛發なり　○儉仗、在外官吏を護衛する人を云、字書に儉は侍從也仗は兵器總名とあり兵器を執て侍從する意唐書に儉從の外に儉人儉卒の名も見ゆ養老二年五月紀に禁三三關及大宰府陸奥國儉仗取白丁式部式に凡大宰帥大貳并陸奥出羽按察使及守等儉仗者申太政官補之不得輒取白丁若情願以子補之者聽取一人但身不赴任者不給之とあり　○事力、文獻通考に唐諸親王府屬並給士力と見ゆ士力卽ち事力なり大宰府及國司等に賜はる職分田を耕さしむる人を云軍防令に大宰及國司並給事力帥廿人大貳十四人少貳十人大監少監等各六人大工少判事等各四人令史三人史生二人大國守八人上國守大國介七人中國守上國介六人下國守大上國掾五人中國掾大上國目四人中下國目三人史生二人一年一替皆取上等戶內丁並不得收庸また賦役令に凡舍人防人帳內資人事力云々在役並免課役とあり　○帶劍寮、卽ち上の授刀舍人寮なり　○國造、古事記開化天皇の段に神大根王者三野國之本巢國造之祖とあり國造本紀三野前國造春日率川朝皇子彥坐王子八爪命定賜國造とあり八爪命は八爪入日子命にて神大根王の一名なり

(四月)貢人、令制大學國學より考試を經て出身する道を之を貢擧と云而して大學より出すを擧人といひ國學より出すを貢人と云　○位子、五位以上の人の子又は孫其父祖の蔭に依て出身するを蔭子孫といひ之に對して六位以下の人の子の特別に登用せらるゝを位子と云石原氏曰

○夏四月己巳、授无位村王從五位下、○癸酉、制、貢人位子、无考之日、浪入常選、白丁冒名、預貢人例、此色且多、是由式部不察之過、今宜按覆撿實申知、其式部史生已上、若能知罪自首者免其罪、終隱執不首者准律科罪、亦其位子、准令、嫡子唯得貢用、庶子不合、今卽兼用、此亦式部違令、若其庶子、雖授位記、皆追還本色、但其才堪時務、欲從貢人例者聽之、又諸國博士醫師等、自朝遣補者、考選一准史生例、考第各從本色、若取土人及傍國者、並依令條、又諸位子貢人堪貢名籍、皆令本部案記、臨用、式部乃下本部追召之、○壬午、從四位下栁本朝臣佐留卒、○五月壬寅、始行銀錢、○庚戌、給近江守儉仗二人、○庚申、長門國言、甘露降、○辛酉、從四位下美努王卒、○六月丙戌、三品但馬內親王薨、天武天皇之皇女也、○己丑、詔爲天下太平百姓安寧、令都下諸寺轉經焉、

○考選一准史生例、史生を叙するには八考を以てすること選叙令に見ゆ　○考第各從本色、考は功過行能を考校するをいひ第は等級なり等級を定めそれにあてはめて上中下の等級を定むるを考第と云、國博士醫師准効驗多少云々と見ゆ　○栁本朝臣佐留、此人歌聖柿本人麻呂にあらざるかといふ說あり天武紀十年十二月には佐留を援の一字に作る　(五月)銀錢、大日本史注に顯宗紀粟斛銀錢一文天武十二年四月詔自今以後必用銅錢莫用銀錢然則先是既有銀錢據天武二年對島始出白金顯宗紀所謂銀錢蓋異域所貢而至是始鑄之也と云　○給近江守、原本守を國に作る紀略に據て改む　○甘露、天武紀七年に見ゆ　○美努王、原本努を弩に作る紀略及上文に據て改む錄左京皇別橘朝臣の條に敏達天皇々子難波皇子男贈從二位栗隈王男治部卿從四位下美努王と見えて敏達天皇の曾孫なり　(六月)詔爲天下云々、大日本史注云年中行事曰是年十月十七日勅旨起今年一年別一度讀大般若經是爲季讀經始二代要記曰是年二月始修季御讀經然本書不載云々

(七月)始置史生、令制內藏寮に史生なかりしを此時に至りて始て置かれしなり　○喜慰于懷、金本閣本曾本喜を憙に作る憙は喜に同じ于は原本干に作る閣本曾本淀本に據て改む　○垂拱、尙書武成に出づ

○秋七月丁酉、內藏寮始置史生四員、但馬伯耆二國疫、給藥療之、○甲辰、隱岐國霖雨大風、遣使賑恤之、○乙巳、召二品穗積親王、左大臣石上朝臣麻呂、右大臣藤原朝臣不比等、大納言大伴宿禰安麻呂、中納言小野朝臣毛野、阿倍朝臣宿奈麻呂、中臣朝臣意美麻呂、左大弁巨勢

垂衣拱手の略、字書に言天子之無爲而治天下也とあり
○宜如此意、考證に如は知の誤なるべしと云
○勑力、考證云勑當依一本作効或曰疑勤字之譌
○齊整、原本齋整に作る金本に據て改む
○忠淨、忠清に同じ
○因授、原本授下に紀伊國名草郡旦來鄕壬戌歲戸籍の十四字あり考證に以下十四字與前後文不屬蓋錯簡也云々伴信友曰古人多寫書於故紙背疑舊寫此書於戸籍紙背者後人傳寫戸籍之文羼入于此也未知果然否と云り、壬戌は天智天皇元年なり考證の說の如く前後の文と接續せず攙入なること明なれば削る
○銅錢、和銅開珍の文ある錢なり、泉貨鑑に按ズルニ此錢徑リ八分重サ一錢一分面文循讀和銅開珍ト云文字製作唐ノ開元錢ニナラフ今世在コト最モ多シと云リ
(九月)左右京職各六員、始て置くなり
○丙申、是月庚申朔なれば丙申なし長曆を以て推すに丙申は閏八月七日なり疑らくは此上に閏八月の三字を脫せるか
○衣標口闕云々、標は字書に袖端也とあり拾芥抄所載寶龜六年の格に袖口濶五位以上一尺爲限六位以下八寸、彈正式には衣袖口濶無問高下同作二尺二寸已下とあり考證に或曰奈良朝衣服用大尺延喜時用小尺則格所載與式共實大抵相同也と云り
○標口空小、狩谷氏云空疑窄字之譌
○高向朝臣麻呂薨、天武紀十年十二月に初て見ゆ大寶二年五月朝政に參議せしめられ慶雲二年三月中納言、和銅元年三月攝津大夫となる
○刑部尙書、尙書は卽ち卿なり大寶元年正月紀に見ゆ
○國忍、書紀に見えず
(九月)安八万王、万の字は慶雲二年正月紀に據て補ふ
○菅原、大和志に添下郡菅原村あり今生駒郡伏見村大字菅原なり
○岡田離宮、四年四月紀

朝臣麻呂、式部卿下毛野朝臣古麻呂等於御前勑曰、卿等情存公平、率先百寮、朕聞之喜慰于懷、思由卿等如此、百官爲本、至天下平民、垂拱開衿、長久平好、又卿等子子孫孫、各保榮命、相繼供奉、宜如此意各自努力、又召神祇官大副、太政官少弁、八省少輔以上、侍從、彈正、弼以上、及武官職事五位勑曰、汝王臣等、爲諸司本由汝等勑力、諸司人等須齊整、朕聞忠淨守臣子之業、遂受榮貴、貪濁失臣子之道、必被罪辱、是天地之恒理、君臣之明鏡、故汝等知此意、各守所職、勿有怠緩、能堪時務者、必擧而進、亂失官事者、必无隱諱、因授從四位上阿倍朝臣宿奈麻呂正四位上、從四位上下毛野朝臣古麻呂、中臣朝臣意美麻呂、巨勢朝臣麻呂、並正四位下、文武職事五位已上、及女官賜祿各有差、○丙午、有詔、京師僧尼、及百姓等、年八十以上賜粟、百年二斛、九十一斛五斗、八十一斛、○丙辰、令近江國鑄銅錢、○八月己巳、始行銅錢、○庚辰、兵部省更加史生六員、通前十六人、左右京職各六員、主計寮四員、通前十人、○丙申、制、自今以後、衣標口闕、八寸已上、一尺已下、隨人大小爲之、又衣領得接作、但不得標口空小、衣領細狹、○丁酉、攝津大夫從三位高向朝臣麻呂薨、難波朝廷刑部尙書大花上國忍之子也、○九月壬戌、以從四位下安八万王爲治部卿、從四位下息長眞人老爲左京大夫、正五位上大神朝臣安麻呂爲攝津大夫、○壬申、行幸菅原、○戊寅、巡幸平城、觀其地形、○庚辰、行幸山背國相樂郡岡田離宮、賜行所經國司目以上、袍袴各一領、造行宮郡司祿各有差、并免百姓調、特給賀茂、久仁二里戶稻卅束、○乙酉、至春日離宮、大倭國添上下二郡勿出今年調、○丙戌、車駕還宮、越後國言、新建出羽郡許之、○戊子、以正四位上阿倍朝臣宿奈麻呂、從四位下多治比眞人池守爲造平城京司、長官、從五位下中臣朝臣人足、小野朝臣廣人、小野朝臣馬養等爲次官、從五位下坂上忌寸忍熊爲大匠、判官七人、主典四人、○冬十月庚寅、遣宮內卿正四位下犬上王、奉幣帛于伊勢、大神宮、以告營平城宮之狀也、○十一月己未朔、日有蝕之、○乙丑、遷菅原地民九十餘家、給布穀、○己卯、大嘗、遠江但馬二國供奉其事、○辛巳、宴五位以上于內殿、奏諸方樂於庭、賜祿各有差、○癸未、賜宴職事、六位

に始置山背國相樂郡岡田驛と見ゆ山城志に離宮廢趾在賀茂郷北村とあり　○賀茂久仁二里、賀茂は山城國相樂郡にあり今も加茂村と稱す、久仁も同郡なり今の木津村是なりと云　○春日離宮、大和國添上郡にあり舊趾は詳ならず　○出羽郡、五年九月置出羽國とあるに據れば當時の地域は頗る廣かりしこと推して知べし　○造平城京司、原本京を宮に作る金本閣本曾本及紀略に據て改む　(十一月)遠江、略記近江に作る　○設賜、黑川春村云設は訖の誤なるべしと淀イ本には無と注す　(十二月)鎭祭、持統紀五年十月遣使者鎭祭新益京六年五月遣淨廣肆難波王鎭祭藤原宮と見え臨時祭式に新宮地を鎭むる祭を載す後世の地鎭祭なり

以下設賜絁各一疋、○乙酉、神祇官及遠江、但馬二國、郡司、并國人、男女、惣一千八百五十四人、叙位賜祿各有差、○十二月癸巳、鎭祭平城宮地、

【和銅二年】正四位下小野朝臣、元年三月紀及慶雲二年十一月紀同四年六月紀に正四位上に作るに據るべし

○長目、原本目を自に作る六年四月紀に據て改む　○調連淡海、天武紀に調首淡海に作る萬葉亦同じ　○椋垣忌寸子人、慶雲四年正月紀に椋垣直子人賜連姓とあり然るに此に忌寸とあるは後改め賜ひしなるべし　○兼濟、字書に兼は并也濟は利用也又益也又贖救也又相助也とあり官民を并せ益するを云　○居先、居は忠友云按恐民字之誤かと

二年春正月丙寅、授正四位上阿倍朝臣宿奈麻呂、正四位下小野朝臣毛野、並從三位、正五位上大伴宿禰手拍、大神朝臣安麻呂、土師宿禰馬手、正五位下多治比眞人水守、並從四位下、正六位下上毛野朝臣荒馬、正六位上土師宿禰甥、從六位上大伴宿禰牛養、從六位下笠朝臣長目、大春日朝臣赤兄、穗積朝臣老、正六位上調連淡海、正六位下椋垣忌寸子人、正六位上大私造虎、並從五位下、○戊寅、下總國疫、給藥療之、○壬午、詔、國家爲政、兼濟居先、去虛就實、其理然矣、向者頒銀錢、以代前錢、又銅錢並行、比奸盜逐利、私作濫鑄、紛亂公錢、自今以後、私鑄銀錢者、其身沒官、財入告人、行濫逐利者、加杖二百、加役常徒、知情不告者、各與

○前錢、金本閣本及紀略錢を銀に作る　○逐利、原本逐を遂に作る考證に據て改む下同じ　○私鑄云々、四年十月紀勅云凡私鑄錢者斬從者沒官云々と見えなほ寶龜十一年十一月紀及三代格に詳なり　○常徒、狩谷氏云常恐當字、當徒とは徒罪に處すべき罪なり

(二月)戊子、此下に朔の字を脫せり　○觀世音寺、大寶元年八月、養老七年二月、及天平十七年十一月紀に出づ　○五十許人、類史五千人に作る　○乃逐閑月、閑月は農事に暇ある月なり軍防令に凡城隍崩壞云々逐閑月修と見ゆる是なり令抄に閑月とは正月二月三月十月十一月十二月を謂ふと見えたり原本乃を及に逐を遂に作る乃は類史に據り、逐は今に據て改む　○長田郡、抄國郡部に遠江國長上(長乃加美)長下(准上)とあり長上長下の二郡とせるなり今の濱名郡是なり

(三月)野心、左傳宣四

同罪、○二月戊子、詔曰、筑紫觀世音寺、淡海大津宮、御宇天皇奉爲後岡本宮御宇天皇誓願所基也、雖累年代、迄今未了、宜大宰商量充駈使丁五十許人、乃逐閑月、差發人夫、專加撿挍、早令營作、○丁未、遠江國長田郡、地界廣遠、民居遙隔、往還不便、辛苦極多、於是分爲二郡焉、○三月辛酉、隱岐國飢、賑恤之、○壬戌、陸奥越後二國、蝦夷、野心難馴、屢害良民、於是遣使徵發遠江、駿河、甲斐、信濃、上野、越前、越中等國、以左大弁正四位下巨勢朝臣麻呂爲陸奥鎭東將軍、民部大輔正五位下佐伯宿禰石湯爲征越後蝦夷將軍、內藏頭從五位下紀朝臣諸人爲副將軍、出自兩道征伐、因授節刀并軍令、○辛未、取海陸兩道、喚新羅使金信福等、○庚辰、初置造雜物法用司、以從五位上采女朝臣枚夫、多治比眞人三宅麻呂、從五位下舟連甚勝、笠朝臣吉麻呂爲之、○甲申、制、凡交關雜物、其物價銀錢四文已上、卽用銀錢、其價三文已下、皆用銅錢、○夏四月丁亥朔、日有蝕之、○壬寅、從四位下上毛野朝臣男足卒、○五月庚申、筑前國宗形郡、大領外從五位下宗形朝臣等抒授外從五位上尾張國愛知郡、

年譜曰狼子野心
○鎮東將軍、蒲生氏云蝦夷不馴服叛無常在古冠邊也命將征之而未建將軍之號其有將軍之號蓋起自此と云り
○節刀、軍防令に凡大將出征皆授節刀義解に謂凡節者以毛牛尾爲之使者所權也今以刀劔（蓋劔字）代之故曰節刀云々とあり
○法用司、六年十月紀に板屋司注に蓋改法用司爲板屋司也とあり
○甚勝、慶雲二年十二月紀に秦勝に作る
○銀錢四文、養老五年正月紀に令天下百姓以銀錢一當銅錢廿五以銀一兩當一百錢行用之とあり是に據れば銀錢四文とは卽ち銀一兩なり
（四月）上毛野朝臣男足、文武紀四年十月に上毛野朝臣小足と見え吉備總領たり大寶三年七月下總守和銅元年三月陸奥守
（五月）等抒、原本抒を拂に作る諸本に據て改む
○賜國王云々、大藏式に賜蕃客例新羅王絁廿五疋絲一百絇綿一百五十屯並以白布裹束とあり此

大領外從六位上尾張宿禰乎己志外從五位下、○乙亥、河內、攝津、山背、伊豆、甲斐五國、連雨損苗、是日、新羅使金信福等貢方物、○壬午、宴金信福等於朝堂、賜祿各有差、并賜國王絹廿疋、美濃絁卅疋、絲二百絇、綿一百五十屯、是日、右大臣藤原朝臣不比等、引新羅使於弁官廳內、語曰、新羅國使、自古入朝、然未曾與執政大臣談話、而今日披晤者、欲結二國之好成、往來之親也、使人等卽避座而拜、復座而對曰、使等、本國卑下之人也、然受王臣教、得入聖朝、適從下風、幸甚難言、況引升榻上、親對威顏、仰承恩教、伏深欣懼、○六月丙戌、金信福等還國、○甲午、上總越中、二國疫、給藥療之、○辛丑、遣使雩于畿內、○乙巳、令諸國進驛起稻帳、筑前、國御笠郡、大領正七位下宗形部堅牛、賜益城連姓、嶋郡、少領從七位上中臣部、加比、中臣志斐連姓、○辛亥、紀伊國疫、給藥療之、○癸丑、散位正四位下犬上王卒、從七位下殖栗物部、名代、賜姓殖栗連、勅、自大宰卒已下至于品官、事力半減、唯薩摩多禰兩國、司、及國師僧等、不在減例、

と同じからず原本王を主に作る紀略に據て改む　○美濃絁、賦役令に美濃絁六尺五寸八丁成匹とあり普通の絁よりは良質なり　○恩敎、原本恩を思に作る略記に據て改む　○避座、原本座を坐に作る略記に據て改む下同じ座を避くるは敬意を表するなり
（六月）丙戌、此下に朔の字あるべし
○驛起稻、大寶二年二月紀に注す　○宗形部、出自詳ならず宗形氏の部民より出しならむ、四年閏六月紀に宗形部加麻麻伎、萬葉十六に宗像郡百姓宗形部津麻呂見ゆ　○益城連、肥後國益城郡益城鄕あり是に由あるか　○嶋郡、嶋は民部式志麻、倭名抄に志摩とあり六年の制に郡鄕名著好字とありしに據て文字を改めしなり　○中臣志斐連、淀本此上に賜の字あり　○犬上王、大寶二年十二月紀に始て見え元年三月宮內卿となる　○勅自大宰卒云々一事力半減、靈龜二年八月紀參照すべし卒は卽ち率の字なり　○品官、延曆二年二月廿二日官符に大宰府綿十萬屯宜簡差主典已上幹了者期月貢上不得妄差品官以致稽留とあり字書に官之入流品者也一品至九品皆是とあり總て有位の官を云事力は大宰率以下諸令史まで悉く之を給はるに依て合せて品官と云たゞ史生は官位の相當なき故に此中には加はらざるべし　○事力、元年三月（六六頁）に注す　○多禰、原本禰を彌に作る淀本に據て改む多禰は卽ち多禰なり

（七月）出羽柵、羽前國西田川郡最上川の邊にありしなるべし始め蝦夷の西上を拒ぎて皇化を東北に及ぼさむが爲に沼垂柵を越後に置き尙北に進みて出羽柵を置かれしが天平五年十二月之を秋田村高清水岡に徙されたりこれ後に秋田城となりて東の鎭守府と相對するに至れり
（八月）廢銀錢、原本廢を癈に作る金本淀本に據て改む
（九月）將領、式部式上に凡修理職長上工木工五人云々將領廿二人並預考とあり將領は字書に猶言將帥とあり工匠の頭たる人を云

○秋七月乙卯朔、以從五位上上毛野朝臣安麻呂爲陸奥守、令諸國運送兵器於出羽柵、爲征蝦狄也、○丁卯、令越前、越中、越後、佐渡四國、船一百艘送于征狄所、○八月乙酉、廢銀錢、一行銅錢、太政官處分、河內、鑄錢司官屬、賜祿考選、一准寮焉、○戊申、征蝦夷將軍正五位下佐伯宿禰石湯、副將軍從五位下紀朝臣諸人、事畢入朝、召見特加優寵、○辛亥、車駕幸平城宮、免從駕京畿、兵衞戶、雜徭、○九月乙卯、授大倭守從五位下佐伯宿禰男從五位上、造宮大丞從六位下臺忌寸宿奈麻呂從五位下、是日、車駕巡撫新京百姓焉、○丁巳、賜造宮將領已上物有差、○戊午、車駕至自平城、○乙丑、賜征狄將軍等祿各有差、○己卯、遠江、駿河、甲

○關剗、職員令三關國掌關剗及關契事、義解に依律關者檢判之處剗者塹柵之所とあり

(十月)考選文、太政官式に凡諸司及畿內國司長上考選文者十月一日進弁官訖同日弁惣計造目申太政官卽下式部兵部、式部式上に凡考選文者太政官長上番上並作符下省云々凡諸司考選文送官及式部兵部者五位以上長官次官將送若不在者臨時聽處分とあり考選文とは凡そ內外の文武官初位以上每年當司の長官其屬官卽ち次官以下の一年中の功過行能を考へ其優劣を詮議して九等に定め八月卅日までに挍定し京官畿內の官人は十月一日に考文を太政官に申送る(外國は十一月一日に朝集使に附して申送る)其考文卽ち考選文なり

○便令、便は更の誤なるべしと云

斐、常陸、信濃、上野、陸奥、越前、越中、越後等國士、經征役五十日已上者、賜復一年、遣從五位下藤原朝臣房前于東海東山二道、檢察關剗、巡省風俗、仍賜伊勢守正五位下大宅朝臣金弓、尾張守從四位下佐伯宿禰大麻呂、近江守從四位下多治比眞人水守、美濃守從五位上笠朝臣麻呂、當國田各一十町、穀二百斛、衣一襲、美其政績也、○冬十月癸未朔、日有蝕之、○甲申、制、凡內外諸司考選文、先進弁官、處分之訖、還附本司、便令申送式部兵部、○庚寅、備後國葦田郡甲努村、相去郡家、山谷阻遠、百姓往還、煩費太多、仍割品遲郡三里、絲葦田郡、建郡於甲努村、○癸巳、勑造平城京司、若彼墳隴、見發掘者、隨卽埋斂、勿使露棄、普加祭酹、以慰幽魂、○丙申、禁制、畿內及近江國百姓、不畏法律、容隱浮浪及逃亡仕丁等、私以駈使、由是多在彼、不還本鄕本主、非獨百姓違慢法令、亦是國司不加懲肅、害蠹公私、莫過斯弊、自今以後、不得更然、宜令曉示所部、檢括、十一月三十日使盡、仍卽申報、符到五日內、无問逃亡隱藏、並令自首、限外不首、依律科罪、若有知情故隱、與逃亡同罪、不得官

○品遲郡、民部式に品治に作る抄同じ

○絲、金本絲に閣本絲に作る絲は糸の字にて干祿字書に絲俗隷正と見ゆ

○建郡於甲努村、是卽ち甲努郡なり民部式には甲奴とあり倭名抄甲努に作る建郡於の三字は金本曾本淀本に據て補ふ

○造平城京司、原本京を宮に作る諸本及紀略に據て改む

○墳隴、字書に墳は墓之封土隆起者、隴は塋に同じ塋は冢也とあり原本隴を瀧に作る金本閣本淀本に據て改む

○祭酹、字書に酹は以酒祭地也とあり酒を地にそゝぎて神靈を祭るを云

○畿內及近江國百姓云々、養老元年五月紀詔曰率土百姓云々とあるを參考すべし

○檢括、原本括を挍に作る金本閣本曾本に據て改む檢括は字書に言盡取其物とあり

○符到、原本符を府に作る諸本に據て改む

○依律科罪、唐捕亡律云當蔭贖、國司不糺者、依法科附、○戊申、薩摩隼人郡司已下一百八十八人入朝、徵諸國騎兵五百人、以備威儀也、○庚戌、詔曰、比者、遷都易邑、搖動百姓、雖加鎭撫、未能安堵、每念於此、朕甚愍焉、宜當年調租並悉免之、○十一月甲寅、以從三位長屋王爲宮內卿、從五位上田口朝臣益人爲右兵衞率、從五位下高向朝臣色夫智爲山背守、從五位下平群朝臣安麻呂爲上野守、從五位下金上元爲伯耆守、正五位下阿倍朝臣廣庭爲伊豫守、○十二月丁亥、車駕幸平城宮、○壬寅、式部卿大將軍正四位下下毛野朝臣古麻呂卒、

諸部内容ニ止他界逃亡浮浪ニ者一人里正笞四十四人加ニ一等一とあり
○官當、名例律に犯ニ私罪一以ル官當ル徒者一品以下三位以上以ニ一官一當ニ徒三年一とあり
○蔭贖、吏學指南に藉ニ親蔭一而收ル銅贖ル罪所ル謂藉ニ蔭親屬一也と見ゆ
(十一月)右兵衛率、原本率を卒に作る前例に據て改む
○平群朝臣、原本平を手に作る淀本に據て改む
○大將軍、考證に十一月薩摩隼人入朝徵ニ諸國騎兵一以備ニ威儀一古麻呂蓋爲ニ騎兵大將軍一歟未詳と云り
○下毛野朝臣古麻呂卒、孝德紀三年十月に初て見え文武紀四年六月刑部親王以下と共に律令撰定の命を受け、大寶二年撰定の功に據て功田十町を賜はれり、又同年五月朝政に參議せしめらる

續日本紀卷第四

【和銅三年】左將軍、蕃夷朝貢の時は左右將軍を任命して儀衛に備ふるを例とす七年十一月紀にも見ゆ
○旅人、神龜元年二月紀に多比等に作る
○皇城門、朱雀門を云宮城の正門なり
○葛木王、長屋王の御子なり橘諸兄を始め葛城王とも葛木王とも云しかどそれとは別なり
○授位者云々、式部式上に凡六位以上授ニ五位一者頓除ニ前考一但不ル除ニ當年上日一又凡據ル才被ル叙者有位成選之日通ニ計前勞一无位者頓除ニ前考一若加級不ル及ニ選階一者聽ル從ニ一高一其別勅授ル位者聽ル通ニ計前勞一と見ゆ

續日本紀卷第五

起和銅三年正月盡五年十二月

從四位下行民部大輔兼左兵衛督皇太子學士臣菅野朝臣眞道等奉　勅撰

元明天皇　第卌三

日本根子天津御代豐國成姫天皇

三年春正月壬子朔、天皇御ニ大極殿一受ル朝、隼人蝦夷等亦在ル列、左將軍正五位上大伴宿禰旅人、副將軍從五位下穗積朝臣老、右將軍正五位下佐伯宿禰石湯、副將軍從五位下小野朝臣馬養等、於ニ皇城門一外朱雀路、東西分頭、陳ニ列騎兵一、引ニ隼人蝦夷等一而進、○戊午、授ニ无位門部王、葛木王、從六位上神社忌寸河内、並從五位下、○壬戌、制、授ル位者不ル得ル通ニ計前考一、散位從四位下高橋朝臣笠間卒、○甲子、授ニ无位鈴鹿王、交部王、並從四位下、正六位上吉野連久治良、黃文連益、田邊史比良夫、刀利康嗣正六位下大倭忌寸五百足、山田史御方、從六位上路眞人麻呂、押海連人成、車持朝臣益、下毛野朝臣人並從五位下、○丙寅、大宰府獻ニ銅錢一、○

○高橋朝臣笠間卒、笠間は大寶元年正月に遣唐大使同二年八月造大安寺司となれり　○交部王、靈龜二年八月紀に六人部王とあるに同じく交は六人の訛なるべし　○刀利康嗣、懷風藻に大學博士刀利康嗣とあり詩一首を載す天平寶字五年三月紀に百濟國人刀利甲斐麻呂等七人賜丘上連と見えたれど姓氏錄に載せず出自詳ならず、之と同氏ならば百濟人なり　○押海連、一に忍海連に作る　○下毛野朝臣人、校齋云人字可疑、淀本は人を位に作り金本はイ扁のみ存して旁缺けたりされば人は誤なること明なり　○大宰府、原本大を太に作る諸本に據て改む下同じ　○重閣門、抄居處部に閣音各今案俗謂朱雀門爲重閣是とあり亦古本拾芥抄にも見ゆ蓋延曆遷都以後重閣門を改て朱雀門と稱せしなり　○從五位已上、從の字恐くは衍なり

丁卯、天皇御重閣門、賜宴文武百官并隼人蝦夷、奏諸方樂、從五位已上賜衣一襲、隼人蝦夷等、亦授位賜祿各有差、○戊寅、播磨國獻銅錢、日向國貢采女、薩摩國貢舍人、○庚辰、日向隼人曾君細麻呂、教喻荒俗馴服、聖化詔授外從五位下、○二月壬辰、信濃國疫、給藥救之、○庚戌、初充守山戶、令禁伐諸山木、○三月戊午、制、輙取畿外人、用帳內資人、自今以去、不得更然、待官處分、而後充之、○辛酉、始遷都于平城、以左大臣正二位石上朝臣麻呂爲留守、○夏四月辛巳朔、日有蝕之、○辛丑、陸奥蝦夷等請賜君姓同於編戶、許之、○壬寅、奉幣帛于諸社、祈雨于名山大川、○癸卯、以從三位長屋王爲式部卿、從四從下多治比眞人縣守爲宮內卿、從四位下多治比眞人水守爲右京大夫、從五位上采女朝臣比良夫爲近江守、從五位上佐太忌寸老爲丹波守、從五位下山田史御方爲周防守、○己酉、參河遠江美濃三國飢、並加賑恤、○五月戊午、以從五位下大伴宿禰牛養爲遠江守、○六月辛巳、大宰大貳從四位上巨勢朝臣多益須卒、○秋七月丙辰、左大臣、舍人正八位下牟佐村主相摸

○曾君、天平十二年十月紀に隼人贈唹君多理志佐見え、同十三年閏三月紀に曾乃君多理志佐に作る、共に大隅國囎唹郡に因れる氏なるべし　(二月)初充守山戶、應神紀に見えたる山守部なり初充とあれど一時罷められしを復置かれたるなるべし　(三月)轍取畿外人云々、帳內は親王に朝廷より附置かるゝものにて朝廷の舍人に同じく資人は一位以下五位以上の人に附置かるゝものにて親王家の帳內に同じ其員數は軍防令に詳なり、四年五月紀に先是禁取畿外人充帳內資人とあり、和銅三年三月藤原宮より寧樂宮に遷り坐しゝ由見えたり　○始遷都于平城、天智紀七年二月に阿倍皇女及有天下居于藤原宮移都于乃樂と見え萬葉一にも和銅三年三月藤原宮より寧樂宮に遷り坐しゝ由見えたり　○爲留守、舊都の留守長官とせられしなるべし　(四月)同於編戶、靈龜元年十月紀には爲編戶民とあり內地の民と同じく戶籍に編入するを云天平二年正月、寶字二年六月紀にも此に類すること見えたり　○多治比眞人縣守、原本縣の上に大の字あり曾本淀イ本に據て削る大日本史注云推前後文位階誤且衍大字疑錯簡也狩谷氏云按四年四月庚寅紀云宮內卿從四位下多治比眞人水守卒據此大縣守恐水守之訛水守爲左京大夫或是池守之誤とあり　(六月)巨勢朝臣多益須卒、多の字は紀略に據て補ふ持統紀朱鳥元年十月に始て見え、慶雲三年七月式部卿に、和銅元年三月大宰大貳となる、懷風藻にも其名見ゆ　(七月)左大臣舍人、左大臣は石上麻呂、舍人は皇子に賜りて侍給せしめらるゝこと常にて臣下に賜しことは見えずされど特例もありしにや或は職分の資人を云しにもあるべし尙考ふべし　○牟佐村主相摸依、依は閣本辰に作る誤脫あるべし　○賀辭、新都を賀するなるべし　(十月)正六位上黃文連、大寶三年七月紀に已に正五位下とあれば正六位上は正五位下の誤なるべし

依、文武百官因奏賀辭、賜祿各有差、京裏百姓、戶給穀一斛、相摸進位二階、賜絁一十匹、布廿端、○九月乙丑、禁天下銀錢、○冬十月戊寅朔、日有蝕之、○辛卯、正六位上黃文連大伴卒、詔贈正四位下、并弔賻之、以壬申年功也、

【和銅四年】都亭驛、都は郵の誤なるべしと云都亭の文字は後漢書張綱傳に出で注に都城之亭也とありて意通ぜず郵亭は漢書黃霸傳の注に傳送文書所止之處、亭は字書に道路設舍所以停集行人也　○岡田驛、山城志に在漢制十里一亭とあり

四年春正月丁未、始置都亭、驛山背國相樂郡、岡田、驛、綴喜郡、山本、驛、河內國交野郡楠葉驛、攝津國嶋上郡大原、驛、嶋下郡殖村、驛、伊賀國阿閇郡新家驛、○二月辛丑、從四位下土師宿禰馬手卒、○三月辛亥、伊勢國人磯部祖父、高志二人、賜姓渡相神主、割上野國甘良郡織裳、韓級、矢田、

北村ニとあり今相樂郡加茂村大字北是なり　○山本驛、抄國郡部に山城國綴喜郡山本郷見ゆ今同郡三山木村大字三山木なり簡城の普賢寺谷の谷口にして八幡より木幡に通ずる路に衝る　○楠葉驛、抄國郡部に河内國交野郡葛葉郷見ゆ今北河内郡樟葉村大字楠葉あり　○大原驛、攝津志に嶋上郡原川東西中古謂之大原莊とあれど今詳ならず或は三島郡（舊嶋上郡を含む）島本村櫻井驛ならむと云　○殖村驛、詳ならねど攝津志嶋上郡に上野村あり今三島郡春日村の大字なり　○新家驛、抄國郡部に阿拜郡新居郷とある是なるべし今阿山郡新居村あり古への新家驛新居河原は新居村大字東の地なり後世驛家は其西一里餘に移る鳥ケ原驛是なりと云　（二月）土師宿禰馬手卒、文武紀二年正月に始て見ゆ此人任官の事所見なし　（三月）磯部祖父云々、磯部は又石部に作り舊姓神主なりしが天智天皇庚午年籍に誤て石部の姓を賈ひて貫せしを此に至て舊姓に復し始て渡相神主を賜はりしなり度會神主は天村雲命の孫天日別命一名天日鷲命の後なり（豐受宮禰宜補任神名秘書）○甘良郡云々、甘良は民部式並倭名抄に甘樂とあり織裳は抄に織裳（於利毛）韓級は辛科（加良之奈）矢田は八田（やた）大家は大家（おほやケ）とあり、○武美、抄に綠野郡武美（ムミ）　○山等、抄に山宗（也末奈）とあれば山の下宗の字ゝ脫せしか或は等は宗の誤なるべし、古京遺文に建多胡郡弁官符を載す其文に弁官符上野國片岡郡綠野郡甘良郡井三郡内三百戸郡成給羊成多胡郡和銅四年三月九日甲寅とあり甲寅は九日なり紀に辛亥卽ち六日とす追記の誤なるべし給羊の二字は解し難し

（四月）叙文武百寮成選者位、成選とは位を叙するには文武百官の上日を計算し其勤勞を考へて之を叙するを制なるが選は其功過を考へて選擇する意而して其選に入りしものは卽ち成選者なり式に之を選成れる人と云、二月十一日列見の時の成選短冊を式部兵部の二省より持て參れるを四月七日に大臣奏聞す其式を擬階奏と云、大日本史注に據ニ年中行事公事根源擬階奏蓋權輿于此ニと云り　○中臣朝臣意美麻呂、中臣朝臣の四字は曾本及本朝月令に據て補ふ麻呂は原本麿に作る金本曾本に據て改む　○難波麻呂、原本麻呂を麿に作る金イ本に據て改む　○武智麻呂、原本麻呂を麿に作る金イ本に據て改む　○必登、七年十一月紀に人の一字に作る　○正七位上高橋朝臣、曾本正を從に作る本朝月令には正七位下とす　○袁志比、原本袁を表に作る掖齋の說に據て改む　養老四年正月紀には于志比とあり　○鍛師連、文武紀庚子年六月に鍛造大角、元正紀養老四年正月に鍛冶造に作り前後何れも造なれば連は造の誤なるべし　○置始連秋山、曾本秋の下一字空白とし、月令に置初連秋山、神龜三年正月紀にも置始連秋山と見えたる事に據て補ふ　○多治比眞人水守、三年四月紀に多治比眞人縣守とあるは此水守の誤なるべし　○賀茂祭日、類史及紀略賀茂の下に神の字あり

○夏四月丙子朔、日有蝕之、○庚辰、大倭佐渡二國飢、並加賑給、○壬午、詔叙文武百寮成選者位、從五位上熊凝王、長田王、並授正五位下、正四位下中臣朝臣意美麻呂、巨勢朝臣麻呂、並正四位上、從四位上石川朝臣宮麻呂正四位下、從四位下息長眞人老從四位上、正五位上猪名眞人石前、路眞人大人、大伴宿禰旅人、從五位上石上朝臣豐庭、並從四位下、正五位下忌部宿禰子首、阿倍朝臣廣庭、石川朝臣難波麻呂、石川朝臣石足、大宅朝臣金弓、太朝臣安麻呂、多治比眞人三宅麻呂、從五位

大家、綠野郡武美、片岡郡、山等六郷、別置多胡郡、

上笠朝臣麻呂、並正五位上、從五位上多治比眞人吉提、多治比眞人吉備、上毛野朝臣安麻呂、佐伯宿禰百足、阿倍朝臣船守、采女朝臣比良夫、阿倍朝臣首名、大神朝臣狛麻呂、曾禰連足人、並正五位下、從五位下藤原朝臣武智麻呂、藤原朝臣房前、巨勢朝臣子祖父、多治比眞人縣守、縣犬養宿禰筑紫、小治田朝臣安麻呂、中臣朝臣人足、平群朝臣安麻呂、並從五位上、正六位下池田朝臣子首、石川朝臣足人、從六位上阿倍朝臣駿河、從六位下粟田朝臣必登、正七位上中臣朝臣東人、正七位上高橋朝臣毛人、正六位上民忌寸袁志比、黃文連備、鍛師連大隅、道君首名、從六位上置始連秋山、並從五位下、○甲申、大倭國芳野郡、始置大少領各一人、主政二人、主帳一人、○庚寅、宮內卿、從四位下多治比眞人水守卒、○乙未、詔賀茂祭日、自今以後、國司每年親臨檢察焉、○五月辛亥、制、帳內資人、雖名入式部、不在豫選之限、既叙位記者、許之、職分不在此例、唯聽帳內三分之一、資人四分之一、其雖叙位、逗留方便、違主失禮、卽追其位、還之本貫、若得他處位者、不退焉、或本主亡者、不得豫選、皆還本色、但

欲廻入者聽、以外如令、尾張國疫、給醫藥療之、○乙卯、從四位下當麻眞人智得卒、○己未、以穀六升當錢一文、令百姓交開各得其利、先是、禁取幾外人充帳內資人、至是始許之、○六月乙未、詔曰、去年霖雨、麥穗既傷、今夏冗旱、稻苗殆損、憐此蒼生、仰彼雲漢、今見膏雨、有勝衆瑞、宜黎元同悅、共賀天心、仍賜文武百寮物有差、○閏六月丙午、始五位已上卒者、卽日申送弁官、○丁巳、遣挑文師于諸國、始教習織錦綾、○甲子、宗形部加麻麻伎賜姓穴太連、○乙丑、中納言正四位上兼神祇伯中臣朝臣意美麿卒、

○秋七月甲戌朔、詔曰、張設律令、年月已久矣、然纔行一二、不能悉行、良由諸司怠慢不存恪勤、遂使名充員數、空廢政事、若有違犯而相隱

(五月)豫選、豫は預に同じ　○位記、狩谷氏云記字衍なり　○職分、軍防令に資人不得取內八位以上子、唯充職分者、聽、式部式に凡外散位六位勳七等以下情願者聽充帳內及職分資人、とあり、職分とは資人に位分職分の別あり一位以下五位以上其位によりて給はるを位分資人大納言以上其職によりて給ふを職分資人と云　○不退焉、狩谷氏云退疑くは逐字或は追字の譌　○本主亡者云々、七年六月紀に太政官處分職分資人若本主亡并以理去官者不限年遠近並留省焉と見えたり　○從四位下當麻眞人、大寶三年十二月紀及慶雲四年十一月紀に據るに從四位上に改むべし　○智得、紀略智德に作る　○交開、開は關の俗字淀本曾本開に作る　○先是、三年三月紀に見たえり　(六月)麥穗、類史に麥を麥に作る麥は麥の俗字なり　○冗旱、冗は亢の字なり亢旱は旱の甚だしきをいふ　○稻苗、原本苗を田に作る類史に據て改む　○雲漢、毛詩大雅雲漢の篇あり雲漢とは天河を云　(閏六月)五位已上、喪葬令に五位以上身喪並奏卒外記毎日勘錄來月二日送於弁官とあるを改められしなり　○挑文師、職員令に織部司挑文師四人掌挑錦綾羅等文挑文生八人とあり　○意美麿、持統紀或は臣麻呂に作る尊卑分脈に在任卅六年左大臣(又作左大辨)神祇伯祭主中納言正四位上意美麿大織冠爲猶子不比等以前相續家業と見ゆ

(七月)張設律令云々、令は大寶元年三月、律は同二年二月に之を天下に頒たれしより已に十年に至れるも未だ十分に實行せられざるを云　○遂使、考證云遂疑當作遂　○考第、原本第を弟に作る金本曾本淀本に據て改む　○狛部宿禰奈賣、紀略奈の字なし　○尾張守、原本守の上に國の字あり紀略に據て削る　○從四位下、原本四を五に作る紀略に據て改む

(八月)酒部君、景行記に神櫛王木國之酒部阿比古宇陁酒部之祖、姓氏錄にも酒部公は同王の後とす　○庚寅年籍、庚寅は持統天皇の四年なり

(九月)衞士、令制衞門府と衞士府とにあり衞門府に屬するものは諸門の禁衞に當り其數延曆四年には四百人あり左右衞士府に屬するものは宮掖(義解に掖とは正門の傍の小門を云とあり)を禁衞す同じく廿四年に各六百人左右合せて千二百人ありしを各百人を減じ衞門府に屬するものは七十人を減ぜられたり何れも諸國の軍團より上番せし

考第者、以重罪之、無有所原、○戊寅、山背國相樂郡狛部宿禰奈賣、一產三男、賜絁二疋、綿二屯、布四端、稻二百束、乳母一人、○壬午、尾張守從四位下勳四等佐伯宿禰大麻呂卒、○八月丙午、酒部君大田、粳麿、石隅三人、依庚寅年籍、賜鴨部姓、○九月癸酉朔、日有蝕之、○甲戌、詔曰、凡衞士者、非常之設、不虞之備、必須勇健應堪爲兵、而悉皆尪弱、亦不習武藝、徒有其名、而不能爲益、如臨大事、何堪機要、傳不云乎、不教人戰、是謂棄之、自今以後、專委長官、簡點勇敢便武之人、每年代易焉、○丙子、勑、頃聞諸國役民、勞於造都、奔亡猶多、雖禁不止、今宮垣未成、防守不備、宜權立軍營、禁守兵庫、因以從四位下石上朝臣豐庭、從五位下紀朝臣男人、粟田朝臣必登等、爲將軍、○冬十月甲子、勑、依品位始定祿法、職事二品二位、各絁卅匹、絲一百絇、錢二千文、王三位絁廿匹、錢一千文、臣三位絁十匹、錢一千文、王四位絁六匹、錢三百文、五位絁四匹、錢二百文、六位七位各絁二匹、錢卅文、八位初位絁一匹、錢廿文、番上大舍人、帶劍舍人、兵衞、史生、省掌、召使、門部、物部、主師等、並絲二絇、錢十文、女亦准此、又詔曰、夫錢

めちる軍防令に凡兵士向レ京者名二衛士一とある是なり　○不教人戰云々、論語子路に以二不教民一戰是謂レ棄レ之ととあり　○奔亡、原本亡を已に作る金本閣本曾本に據て改む

（十月）始定祿法、令と同じからず新錢を鑄むが爲に此法を定めしなるべし祿令を參考すべし　○匹、原本疋に作る金本曾本に據て改む下同じ　○帶劍舍人、授刀舍人を云慶雲四年七月紀に見ゆ　○兵衛、職員令に左兵衛府兵衛四百人とあり左右合せて八百人なり　○召使、太政官式に凡太政官幷左右弁官史生召使等每年一人除二諸國主典一、式部式に太政官召使者省取散位年卅九以下有容儀云々とあり　○門部、衛門府に二百人あり　○物部、衛門府に三十人其他囚獄司東西市司等にあり　○主師、軍防令義解に主師者隊正以上校尉以下也

之爲レ用、所下以通二財貨一易有无上也、當今百姓、尙迷二習俗一、未レ解二其理一、僅雖賣買、猶無二蓄錢者一、隨二其多少一、節級授レ位、其從六位以下、蓄レ錢有二一十貫以上一者、進二位一階一叙、廿貫以上進二二階一叙、初位以下、每レ有二五貫一進二一階一叙、大初位上若初位、進入二從八位下一、以二一十貫一爲二入限一、其五位以上及正六位、有二十貫以上一者、臨時聽レ勑、或借二他錢一而欺爲官者、其錢沒官、身徒一年、與者同レ罪、夫申二蓄錢狀一者、今年十二月內、錄二狀幷錢一申送、訖、太政官議奏、令レ出二蓄錢一、勑、有レ進二位階一、家存二蓄錢之心一、人成二遂縊之趣一、恐望レ利百姓或多盜鑄、於レ律私鑄、猶レ輕二罪法一、故權立二重刑一、禁斷未然、凡私鑄錢者、斬、從者沒官、家口皆流、五保知而不レ告者同罪、不レ知情者減二五等一、罪之、其錢雖レ用、悔過自首減二罪一等、或未レ用自首免レ罪、雖二容隱人一、知之不レ告者與同罪、或告者同二前首法一、○十一月甲戌、蓄錢人等始叙レ位焉、○辛卯、從六位下菅生朝臣大麿、正七位上高橋朝臣男足、並授從五位下、○壬辰、詔曰、諸國大稅三年之間、借儲給レ之、勿レ收二其利一、又賜レ畿內百姓年八十以上、及孤獨不レ能自存者、衣服食物、又出舉私稻者、自今以後、不レ得レ過二半利一、餘者如レ令、○十二月

とあり隊正は五十人長校尉は二百人長なり庶人の弓馬に便ならむ人を取て之に充つ　○隨其多少、考證に按隨上當增二蓄錢者三字一　○節級授位、蓄錢の多少に依て等級を設け位を授くるを云　○欺爲、狩谷校本に爲與僞通と云　○成遂縊之趣、考證云遂恐逐字之譌、縊は字書に謂錢貫也とあり錢をば錢貫（ゼニサシ）に貫きて充たしむるを逐縊と云上句と同じく蓄錢の心を助長するを云

壬寅、大初位上丹波史千足等八人、僞造外印、假與人位、流二信濃國一、以從五位下葛木王、補二馬寮監一、○丙午、詔曰、親王已下、及豪强之家、多占二山野一、妨二百姓業一、自今以來、嚴加二禁斷一、但有應レ墾開空閑地者、宜下經二國司一、然後聽レ官處分、○壬子、從五位下狛朝臣秋麿言、本姓是阿倍也、但當二石村池邊宮御宇聖朝一、秋麻呂二世祖比等古臣、使二高麗國一、因卽號レ狛、實非眞姓、請復二本姓一、許之、○庚申、又制蓄錢叙位之法、无位七貫、白丁十貫、並爲二入限一、以外如レ前、

○於律云々、從來の刑罰は輕に失するを云　○私鑄錢者斬、天平勝寶五年の制に一等を降して遠流に處すべしと云ること寶龜十一年十一月紀に見えたり　○五保、戶令に凡戶皆五家相保一人爲レ長以相檢察勿レ造二非違一、又云凡戶逃走者令二五保追訪一とあり後世の五人組の權輿なり（十一月）詔曰、紀略曰の字なし　○借儲、曾本淀本儲を貸に作る儲正しくは儲に作るべし儲は貸の字なり　○出擧私稻、雜令に以二私稻一出擧者任二私契一官不レ爲レ理仍以二一年一爲レ斷不レ得レ過二一倍一とあり出擧とは他人に稻を貸して其利稻を收むるを云令に一倍に過ぐるを得ずとありしを半減せられしなり（十二月）僞造外印、外印は公式令に外印方二寸半六位以下位記及太政官文案則印とあり　○流信濃國、唐詐僞律に諸僞寫官文書印者流二千里とあり　○空閑地、閑は類史に據て補ふ　○比等古臣、用明紀に見えず

【和銅五年】轉塡溝瀆、孟子の凶年飢歲君之民老弱轉乎溝壑の語より出づ飢餓して堀溝に落て命を失ふを云瀆は壑の譌體なり　○如有死者云々、賦役令に凡丁匠赴レ役身死者給

（壬子）五年春正月乙酉、詔曰、諸國役民、還レ鄕之日、食粮絕乏、多饉二道路一、轉塡溝瀆、其類不レ少、國司等宜勤加撫養、量賑恤、如有死者、且加埋葬、錄二其姓名一、報二本屬一也、○戊子、授二无位上道王、大野王、倭王、並從四位下、无位額田部

棺在道亡者所在國司以官物作給並於路途埋殯立牌并告本貫云々とあり

○倭王、此王に從四位下を授くること慶雲元年正月紀に見ゆ重出に似たり

○佐伯禰宜麿、曾本伯の下に宿の字あり元年三月紀に佐伯宿禰麻呂とあり之に據れば宜は衍なり又曾本麿を麻呂の二字に作る

○從五位下紀朝臣、原本從五位下の四字なし男人は慶雲二年十二月癸酉從五位下を授けられ同四年十月紀和銅四年八月紀にも從五位下と見えたれば之に據て補ふ

○麿、曾本麻呂の二字に作る下同じ

○大伴宿禰奈麿、宿奈の二字は和銅元年正月紀寶龜元年五月紀に據て補ふ

○後部王、天武紀に後部王博阿于見え神龜三年閏正月紀に後部王越見ゆ後部王とは高麗の後部より歸化せしに因れるなるべし錄左京諸蕃に後部高麗國長王周之後也とあり書紀卷下附錄を參考すべし

王、壹志王、田中王、並從五位下、正五位上佐伯禰宜麿、巨勢朝臣祖父、並從四位下、從五位上穗積朝臣山守、巨勢朝臣久須比、大伴宿禰道足、佐太忌寸老、並正五位下、從五位下紀朝臣男人、笠朝臣吉麿、多治比眞人廣成、大伴宿禰宿奈麿、並從五位上、從六位上大神朝臣忍人、鴨朝臣堅麿、正六位上佐伯宿禰果安、小治田朝臣月足、正六位下額田首人足、從六位下後部王、同並從五位下、○壬辰、廢河內國高安烽、始置高見烽、及大倭國春日烽、以通平城也、○二月戊午、詔賜京畿高年鰥寡惸獨者、絁綿米鹽各有差、高年僧尼亦同施焉、○三月戊子、美濃國獻木連理并白鴈、○夏四月丁巳、詔、先是郡司主政主帳者、國司便任、申送名帳、隨而處分、事有率法、自今以後、宜見其正身、准式試練、然後補任、應請官裁、○五月壬申、駿河國疫、給藥療之、○癸酉、禁六位已下以白銅及銀鈒革帶、○辛巳、詔曰、諸國大稅、三年賑貸者、本爲恤濟百姓、窮乏、今國郡司及里長等、緣此、恩借、妄生方便、害政蠹民、莫斯爲甚、如顧潤身、枉收利者、以重論之、罪在不赦、○甲申、初定國司巡行并遷代時、給粮馬脚夫之法、語、

○高安烽、大寶元年八月高安城を廢し是に至りて烽を廢せしなり高安城及烽のこと既に云り

○高見烽、今河內國中河內郡孔舍衞村生駒山の南峯上なりといひ傳へたり平城京を一瞰するに一目に遮るものなき地なり

○大倭、金本閣本等大和に作る

○春日烽、大和志に烽火山在添上郡鹿野苑東所謂春野烽卽此とあり今同郡東市村大字鹿野に鉢伏山と云あり烽を置きし所なりと云ひ傳ふ

(二月)鰥寡、原本寡を寡に作る金本曾本及類史に據て改む

(三月)戊子、紀略戊寅に作る

○白鴈、紀略は白鷹に作る

(四月)見其正身云々、式部式に凡郡司有闕國司銓擬歷名附朝集使申上其身正月內集省若二月以後參者隨返却正身とは其本人を云

(五月)六位已下云々、靈龜元年九月紀に禁文武百寮六位以下用虎豹羆皮及金銀鈒鞍具并橫具別式、太政官奏偁、郡司有能繁殖戶口、增益調庸、勸課農桑、人少遺乏、禁斷逋逃、肅清盜賊、籍帳皆實、戶口無遺、割斷合理、獄訟無寃、在職匪懈、立身清愼、其一居官貪濁、處事不平、職用既闕、公務不舉、侵沒百姓、請託公施、肆行姦猾、以求名官、田疇不開、減闕租調、籍帳多虛、口丁無實、逋逃在境、畋遊無度、其二又百姓精務農桑、產業日長、助養窮乏、存活獨惸、孝悌聞閭、材識堪幹、其三若有郡司及百姓准上三條有合三勾以上者、國司具狀、附朝集使、擧聞、奏可之、○乙酉、詔諸司、主典以上、并諸國朝集使等曰、制法以來、年月淹久、未熟律令、多有過失、自今以後、若有違令者、卽准其犯、依律科斷、其彈正者、月別三度、巡察諸司、糺正非違、若有廢闕者、仍具事狀、移送式部省、日勘問、又國司因公事入京者、宜差堪知其事者充使、使人亦宜問知事狀、并惣知在任以來年別狀迹、隨問辨答、不得礙滯、若有不盡者、所由官人及使人、並准上科斷、自今以後、每年遣巡察使、撿挍國內豐儉得失、宜使者至日、意存公平、直告莫隱、若有經問發覺者、科斷如前、凡國司、每年實錄官人等功過行能并景迹、皆附考狀、申送式部

刀帶端ニ但朝會日用者許ヒシと見え、なほ衣服令、彈正式等に詳なり　○賑貸、金本閣本貸を僦に作る　○里長、戸令に凡戸以五十戸爲里毎里置長一人とあり　○初定國司云々、田令集解外官新至條に和銅五年の格を載せて國司巡行部内に將從次官以上三人判官以下二人史生一人並食公廨日米二升酒一升史生酒八合將從一人米一升五合と見え、遷代のことは政事要略に詳なり　○太政官奏偁云々、三代格に載する養老三年七月の格及延曆五年四月の官奏、大同四年九月の官符等を合せ見るべし、偁は稱の本字なり　○遺乏、考證に遺當依堀本作貫按貫俗作遺與遺字樣相涉致誤也と云り　○割斷、原本割を制に作る金本曾本淀本に據て改む　○清愼、原本愼を情に作る類史及三代格に據て改む　○公施、三代格公行に作る　○合三勾、原本合を令に勾を句に作る諸本に據て改む三勾は三事といふが如し　○其彈正云々、彈正式に見ゆ　○所由、字書に所由は州郡の官也と云　○凡國司云々、考課令に凡國司毎年量郡司行能功過立四等功第云々毎年國司皆考對定訖具記附朝集使送省とあり　○景迹、考課令義解に景像也、猶言狀迹也とあり　○位記印、公式令に五位以上位記内印六位以下位記外印とあり　○請於太政官下諸國符、原本符を府に作る類史及紀略に據て改む太政官式に凡太政官下諸司諸國符隨事請内外印云々とあり

省、省宜勘會巡察所見、○丙申、太政官處分、凡位記印者、請於太政官、下諸國、符印者申於弁官、○六月乙巳、地震、

（七月）支狐、治部式に支狐神獸也とあり　○駿河、原本河を川に作る諸本に據て改む　○始織綾錦、四年閏六月遣挑文師于諸國始教習織錦綾と見えたり其結果なるべし　○樂浪河内、神龜元年五月紀に樂浪河内賜姓高丘連と見え、神護景雲二年六月高丘宿禰比良麻呂傳に祖沙門詠近江朝歳次癸亥自百濟歸化云々と見え姓氏錄にも出でたり　○造正倉、原本造を建に作る淀本曾本及類史に據て改む正倉は官より諸國郡に置て正稅の穎穀等を納るゝ倉なり　○十四、原本十を一に作る類史に據て改む

（八月）郡稻、賦役令義解に割置田租以充雜用是爲郡稻也云々、凡官稻之源出自田租即分爲三二曰大稅二曰粃穀三曰郡稻也と見ゆ

（九月）詔曰、紀略に曰の字なし　○家原音那、家原は姓氏錄に見えず六年六月紀に家原河内等三人並に賜連姓と見え文德實錄齊衡二年八月家原連氏主云々等賜宿禰三代實錄貞觀二年十一月紀家原氏主云々等賜姓朝臣と見えたれど氏主の父富依は已の系を後漢光武帝より出づといひ子は宣化天皇第二の皇子より出づといひ父子の言ふ所異なれば出自何れかを別き難し、金本淀本曾本那を郡に作る下同じ　○右大臣、金本閣本右を左に作る　○舊者、淀イ本及紀略者を老に作る　○阿直敬、阿直は記應神

○秋七月壬午、伊賀國獻玄狐、令伊勢、尾張、參河、駿河、伊豆、近江、越前、丹波、但馬、因幡、伯耆、出雲、播磨、備前、備中、備後、安藝、紀伊、阿波、伊豫、讃岐等、廿一國、始織綾錦、○甲申、播磨國大目從八位上樂浪河内、勤造正倉、能効功績、進位一階、賜絁十匹、布卅端、○八月庚子、太政官處分、諸國之郡稻乏少、給用之日有致廢闕、宜准國大小、割取大稅、以充郡稻、相通出擧所息之利、隨即充用、事須取足、勿令乏少、但割配本數、不令減損、自今以後、永爲恒例、○庚申、行幸高安城、○九月己巳、詔曰、故左大臣正二位多治比眞人嶋之妻、家原音那、贈右大臣從二位大伴宿禰御行之妻、紀朝臣音那、並以夫存之日、相勸爲國之道、夫亡之後、固守同墳之意、朕思彼貞節、感歎之深、宜此二人各賜邑五十戸、其家原音那加賜連姓、又詔曰、朕聞、舊者相傳云、子年者穀實不宜、而天地垂祐、今茲大稔、古賢王有言、祥瑞之美、無以加豐年、況復伊賀國司阿直敬等所獻黑狐、卽合上瑞、其文云、王者治致太平、則見、思與衆庶共、此歡慶、宜大赦天下、其强竊二盜、常赦所不免者、並不在赦限、但私鑄錢者、降罪一等、其伊賀國司目已上、進位一階、出瑞郡免庸、獲瑞人戸給復三年、又天下諸國今年田租、并大和河内山背三國調、並原免之、○庚午、授正六位上阿直敬從四位下、○辛巳、觀成法師爲大僧都、弁通法師爲少僧都、觀智法師爲律師、○乙酉、以從五位下道君首名、爲遣新羅大使、○己丑、太政官議奏曰、建國辟疆、武功所貴、設官撫民、文教所崇、其北道蝦狄、遠憑阻險、實縱狂心、屢驚邊境、自官軍雷擊、凶賊霧消、狄部晏然、皇民無擾、誠望便乘時機、遂置一國、式樹司宰、永鎭百姓、奏可之、於是始置出羽國、○乙未、禁取三

の段に阿知吉師者阿直史等之祖と見え天武紀十二年十月阿直史賜レ姓曰レ連と見ゆ、敬は名なり
○大和、天平勝寶元年大倭を大和に改む（字類抄に據る）此に大和とあるは追書せるなるべし下亦同じ
○阿直敬從四位下、四は恐くは五の誤なるべし官位相當らざればなり
○觀成、釋家初例抄大僧都直任例に見ゆ
○辟疆、辟は關と通ず
○始置出羽國、元年九月越後國に新に出羽郡を建て是に至て國となせるなり拾芥抄に是年始て陸奥の二郡を割て出羽國を置くとあれど先づ越後國の出羽郡を國に昇せ出羽郡田川郡及飽海郡の三郡を管せしめ後下文の陸奥國最上置賜二郡を割きて之に隷けしにて主として今の羽前國を建てられ次々に今の羽後國までに及べる大國となされしなり
○禁取三關人云々、軍防令に凡帳内資人並不レ得レ取二三關及大宰部内陸奥石城石背越中越後國人一とあり、三關は伊勢國鈴鹿美濃國不破及越前國新發關を云

關人爲帳内資人、○冬十月丁酉朔、割陸奥國最上置賜二郡隷出羽國焉、○癸丑、禁六位已下及官人等服用蘇芳色并賣買、○丙辰、從四位上息長眞人老卒、○甲子、遣新羅使等辭見、○乙丑、詔曰、諸國役夫及運脚者、還鄕之日、粮食乏少、無由得達、宜割郡稻別貯便地、隨役夫到、任令交易、又令行旅人必齎錢爲資、因息重擔之勞、亦知用錢之便、○十一月辛巳、加左右弁官史生各六人、通前十六員、○乙酉、從三位阿倍朝臣宿奈麿言、從五位上引田朝臣邇閇、正七位上引田朝臣東人、從七位上引田朝臣船人、從七位下久努朝臣御田次、少初位下長田朝臣太麻呂、无位長田朝臣多祁留等六人、實是阿倍氏正宗、與宿奈麿無異、但緣居處更成別氏、於理斟酌、良可哀、於今宿奈麿、特蒙天恩、已歸本姓、然此人等未霑聖澤、冀望各正別氏、俱蒙本姓、詔許之、○十二月辛丑、制、諸司人等、衣服之作、或褾狹小、或裾大長、又衽之相過甚淺、行趁之時易開、如此之服、大成無禮、宜令所司嚴加禁止、又无位朝服、自今以後、皆著襴黃衣、襴廣一尺二寸以下、又諸國所送調庸等物、以錢換、宜以錢五文准布一常、○己酉、東西二京始置史生各二員、○丁巳、有司奏、自今以後、公文錯誤、內印著了、事須改正者、少納言宜申官長、然後更奏印之、

（十月）癸丑、原本丑を酉に作る此月丁酉朔なれば癸酉なし淀イ本及紀略に據て改む
○蘇芳色、養老四年四月紀制三位已上妻子及四位五位妻並聽レ服二蘇芳色一とあり抄染色具に蘇敬本草注云蘇枋（音方俗音須方）人用染レ色とあり
○運脚、調庸を運ぶ脚夫なり養老四年三月紀及天平寶字元年十月勅また賦役令に詳なり
（十一月）十一月、原本一を二に作る河海抄に據て改む干支を推すに十月丁酉朔にして辛巳は十一月十六日なり狩谷氏校本亦長屋王文武天皇の御爲に所寫大般若經跋文を引て明かに之を證す
○長田朝臣、養老元年八月紀に安倍朝臣宿奈麻呂言他田臣古萬呂本系同族實非二異姓一云々請賜二安倍他田朝臣一許之、後紀に弘仁三年二月阿倍長田朝臣節麻呂等八人阿倍朝臣を賜はりしこと見え他田長田同訓にて何れも阿倍氏の同族なり

○大麻呂、原本大を大に作る金本淀本曾本に據て改む
○多祁留、原本祁を初に作る諸本に據て改む
○宿奈麿、原本宿の下に禰の字あり曾本淀本に據て削る曾本麿を麻呂に作る
○哀於、於は當に矜に作るべし
○各正別氏、山田以文云正恐止字

（十二月）十二月、原本此上に閏の字あり金本閣本及紀略に據て除く干支を推すに閏十二月にあらざること明かなり蓋上に十一月を十二月とせしより來れる誤なるべし
○相過、狩谷校本に過一作遇と云
○著禰黃衣、禰は抄裝束部に禰衫（須曾豆介乃古呂毛一云奈保之能古路毛）とあり黃衣は卽ち黃袍なり紀略には禰黃衣の三字なし
○調庸等物以錢換、調庸等錢を以て換ふること始て見ゆ養老六年九月紀には令伊賀伊勢等國始輸錢調とあり　○布一常、賦役令義解に布一丈三尺是爲一常とあり　○二京、類史京を市に作る恐くは非　○始置、類史始を加に作るは誤れり、職員令京職に史生なし史生を置くは此に始まれり　○公文錯誤云々、太政官式に見ゆ　○內印、公式令に內印方三寸五位以上位記及下諸國公文則印とあり

續日本紀卷第五

○大輔、原本大を太に作る金本淀本に據て改む

【和銅六年】嘉瓜、考證に瓜疑當作禾、聲近之譌と云
○從四位下、原本下の下に行の字あり紀略に據て削る
○伊福部女王、系未詳
○石川朝臣宮麻呂、宮の字は金本閣本及下文に據て補ふ
○无位門部王、三年正月紀に无位門部王に授從五位下とあれば此に云々とあるは誤か又門は內の誤にて養老五年六月紀內部王爲大判事とある此人ならむとの說あり尙考ふべし
○高安王、天平十一年四月姓大原眞人を賜ふ
○阿倍朝臣廣庭笠朝臣麻

續日本紀卷第六

起和銅六年正月盡靈龜元年八月

從四位下行民部大輔兼左兵衞督皇太子學士臣菅野朝臣眞道等奉　勅撰

元明天皇

日本根子天津御代豐國成姬天皇

六年春正月戊辰（癸丑）、備前國獻白鳩、伯耆國獻嘉瓜、左京職獻稗化爲禾、一莖二穗、○丙子（十二）、從四位下伊福部女王卒、○丁亥（廿三）、授正四位上巨勢朝臣麻呂、正四位下石川朝臣宮麻呂、並從三位、无位門部王從四位下、无位高安王從五位下、正五位上阿倍朝臣廣庭、笠朝臣麻呂、多治比眞人三宅麻呂、藤原朝臣武智麻呂、並從四位下、正六位下巨勢朝臣安麻呂、正七位上石川朝臣君子、從六位下佐伯宿禰沙彌麻呂、正七位上久米朝臣麻呂、正七位下大神朝臣興志、從七位下榎井朝臣廣國、正六位上大藏忌寸老、錦部連道麻呂、伊吉連古麻呂、並從五位下、○二月甲午朔、日有蝕之、○壬子（十九）、始制度量調庸義倉等類五條事、語具別格、○丙辰（廿三）、志摩國

呂、廣以下の五字は金本淀本曾本に據て補ふ
○石川朝臣君子、萬葉三左注云石川朝臣君子號曰二小郎子一とあり君子或は吉彌侯に作れり
○廣國、原本廣を麻に作る八月紀及次々に見えたるに據て改む
○錦部連、諸本錦を綿に作る傍訓及大寶元年正月紀に據て改む

(二月)始制度量云々、格文は田令戸令及賦役令集解に載す
○度量、雜令に凡度地五尺爲レ歩とあるを田令集解に載する和銅六年二月十九日格文には其度レ地以二六尺一爲レ歩とあり集解に令以二五尺一爲レ歩者是高麗法准二今尺一大六尺相當と云
○調庸、賦役令集解所載の格文に其庸布以二二丁成レ段長二丈六尺とあり　○義倉、格文に其資財百貫以上爲二上々戸一六十貫以上爲二上中一四十貫以上爲二上下一廿貫以上爲二中上一十六貫以上爲二中中一十二貫以上爲二中下一八貫以上爲二下上一四貫以上爲二下中一二貫以上爲二下下一也とあり　(三月)性識清廉、選叙令に凡郡司取二性識清廉堪二時務一者一爲二大領少領一とあり　○蓄錢、四年十月紀に見ゆ　○江山遐阻、遐は遠、阻は險なり隔なり、道途遠く隔るを云　○殯路、左傳宣二年注に餓死爲レ殯とあり　○各持一囊錢、五年十月詔令に行旅人必齎レ錢爲レ資因息二重擔之勞一と云も同じ、袋に錢を入れて物資に易ふる用意をせよとなり　○作當爐給、原本爐を廬に作る淀本に據て改む當爐給とは孝德紀大化二年二月詔(紀下一八八頁)に被役之民路頭炊レ飯と見ゆるが如く上古は自ら米を負て途中到る處にて爐を借り飯を炊きて之を食したるを錢を懷中し之にて米を購ひ飯を炊げば大に便利なる故にかくせしめられしなり

(四月)丹波國五郡、加佐、與謝、丹波、竹野、能野郡是なり
○備前國六郡、英多、勝田、苫田(貞觀五年東西二郡に分つ)久米、大庭、眞嶋郡是なり
○肝坏、文武紀肝衝に、倭名抄は肝屬に作る
○贈於、民部式及倭名抄嚮唹に作る
○姶羅、式及抄姶羅に作る
○大和國、原本此上に大隅國の三字あり衍なり金本閣本曾本に據て削る、和は類史倭に作る
○權衡度量、抄稱量具に權衡廣雅云錘謂二之權一(波加利及於毛之兼名苑云錘一名衡(楊氏漢語抄云權衡加良波可利)稱也また漢書律歷志に度者所二以度一長短一量者所二以量一多少一權者所二以稱一物平施一知輕重一とあり
○笠朝臣長目、笠の上に從五位下の四字を補ふべし、金本閣本目を日に作る
○倉垣、金本閣本曾本倉を蒼に作る
○錢衡人物、職員令に式部卿掌二內外文官名帳考課選叙禮儀版位記授二定勳績一論レ功封賞云々事一

疫、給レ藥救レ之、○三月壬子(甲子朔十九)、詔曰、任二郡司少領以上一者、性識清廉、雖レ堪二時務一、而蓄錢乏少、不レ滿二六貫一、自今以後、不レ得二遷任一、又詔、諸國之地、江山遐阻、負擔之輩、久苦二行役一、具備資粮、闕二納貢之恒數一、減損重負、恐殯レ路之不レ少、宜レ各持一囊錢、作二當爐給一、永省二勞費一、往還得レ便、宜下國郡司等、募二豪富家一、置二米路側一、任其賣買、一年之內賣米一百斛以上者、以名奏聞、又賣買田、以レ錢爲レ價、若以他物爲レ價、田并其物共爲二沒官一、或有二糾告者一、則給二告人一、賣及買人並科二違勑罪一、郡司不レ加二檢挍一、違二十事以上一、卽解其任、九事以下、量二降考第一、國司者式部監察、計レ違附レ考、或雖レ非レ用レ錢、而情願二通商一者聽之、

○夏四月乙未(癸巳朔三)、割二丹波國五郡一、始置二丹後國一、割二備前國六郡一、始置二美作國一、割二日向國肝坏、贈於大隅、姶羅四郡一、始置二大隅國一、大和國疫、給レ藥救レ之、○戊申(十六)、頒二下新格并權衡度量於天下諸國一、○己酉(十七)、因二諸寺田記錯誤一、更爲二改正一、一通藏二所司一、一通頒二諸國一、○乙卯(廿三)、授從四位下安八萬王從四位上、正五位下大石王從四位下、從五位上益氣王正五位下、從四位上多治比眞人池守正四位下、正五位上百濟王遠寶從四位下、從五位上大伴宿禰男人正五位上、從五位下賀茂朝臣吉備麻呂正五位下、笠朝臣長目、穗積朝臣老、小野朝臣馬養、調連淡海、倉垣忌寸子首、並從五位上、讚岐國飢、賑恤之、始制、五位以上同位階者、因年長幼、以爲列次、○丁巳(廿五)、制、銓衡人物、黜陟優劣、式部之任、務重二他省一、宜下論二勳績之日、無(キ片ハ)式部長官者、其事勿論(ルズルコト)焉、○五月甲子(癸亥朔)、畿內七道、諸國郡鄉、名著二好字一、其郡內所生、銀銅彩色草木禽獸魚虫等物、具錄二色目一、及土地沃堉、山川原野、名號所由、又古老相傳舊聞異事、載二于史籍一、言上、○己巳(七)、制、夫郡司、大少領、以二終身一爲レ限、非二遷代之任一、而不善國司、情有二愛憎一、以レ非爲レ是、強云致仕、集レ理解却、自今以後、不レ得二更然一、若齒及縱心、氣力尫弱、筋骨

とあり其任他省より重し原本銓を詮に作る紀略に據て改む　○黜陟、原本陟を渉に作る淀本及類史に據て改む　(五月)畿内、畿上に制の字あるべし　○郡郷名著好字、略記には此下に又令作風土記とあり皇代記亦同じ　○郡内、部内の誤なるべし　○波堵、波は沃の俗字　○載于史籍言上、金本閣本史の字なく紀略に于の字なし曾本言の上二字空白、略記に只宜の二字を塡む　○強云致仕、天平六年四月紀禁下跡以二年七十以上人一新擬郡司上とあり七十以上の人の新に任ずるをば禁ぜしも從來其職にあるものは強て致仕せしめざるなり　○集理、鴨本集を奪に作ると云　○縱心、論語爲政に七十而從心所欲不踰矩とあるに據れり、縱疑らくは從の誤か　○發狂言、恐らくは脫字あらむ　○心素、本心といふが如

衰耗、神識迷亂、又久沉重病、起居不漸、發狂言、無益時務、如此之類、披訴心素、歸田養命、於理合聽、宜具得手書、陳牒所司、待報處分、撰擇替補、○癸酉(十一)、相摸、常陸、上野、武藏、下野、五國輸調、元來是布也、自今以後、絁布並進、又令大倭、參河、並獻雲母、伊勢、水銀、相摸、石流黃、白樊石、黃樊石、近江、慈石、美濃、青樊石、飛驒、若狹、並樊石、信濃、石流黃、上野、金青、陸奥、白石英、雲母、石流黃、出雲、黃樊石、讃岐、白樊石、○甲戌(十二)、讃岐、守正五位下大伴宿禰道足等言、部下寒川郡人物部亂等廿六人、庚午(天智九年)以來、並貫良人、但庚寅(持統四年)按籍之時、誤涉飼丁之色、自加覆察、就令自理、支證的然、已得明雪、自厥以來、未附籍貫、故皇子命、宮、撿括飼丁之使、誤認亂等爲飼丁焉、於理斟酌、何足憑據、請從良色、許之、○丁亥(廿五)、始令山背國點乳牛戶五十戶、○癸巳(廿六)六月庚戌(十八)、從七位上家原河内、正八位上家原大直、大初位上首名等三人並賜連姓、○辛亥(十九)、右京人支半于刀、河内國志紀郡人刀母離余叡色奈、並染作暈襇色而獻之、以勞各授從八位下、并賜絁十疋、絲四十絇、布四十端、鹽十籠、穀一百斛、○癸丑(廿一)、始置大膳職史生四員、○乙卯(廿三)、行

○大倭、諸本及紀略倭を和に作る　○雲母、抄珍寶部に本草云雲母(和名岐良々)とあり色彩に依て雲珠雲華雲英雲液雲沙等の名ありキラ〳〵しきより云　○水銀、抄珍寶部に蔣魴地韻云汞(和名美豆加禰)水銀別名也とあり　○石流黃、抄天地部水土類に流黃本草疏云石流黃(和名由乃阿和俗云由王)礬石液也とあり　○白樊石、抄天地部山石類に蘇敬曰礬石(此間云閇尺)有二青礬白礬綠礬黃礬五種一矣　○慈石、抄天地部山石類に本草云慈石吸針(此間云之岐久)と云　○金青、抄圖繪具に本草稽疑云金青者空青之寀也　○白石英、本草和名に白石英一名白玻とあり　○誤涉飼丁之色、飼丁は馬飼なり職員令右馬寮集解に飼丁猶言飼戶とあり　○支證、獄令義解に謂支證者支擧也猶云擧證也とあり　○故皇子命宮、草壁皇子を云　○使、原本便に作る金本閣本淀本に據て改む　○乳牛戶、職員令典藥寮乳戶集解に別記を引て云乳戶五十戶經年役一番輒十丁是爲品部免調及雜徭とあり紀略乳牛の上に飼の字あり　(六月)大直、原本直を眞に作る諸本に據て改む　○首名、此上に家原の二字を脫せるなるべし　○支半于刀、詳ならず　○刀母離、詳ならず　○余叡色奈、考證に余姓叡色奈名、案養老元年正月有二余眞人一、五年正月余秦勝、七年正月余仁軍、天平勝寶元年五月余足人賜二百濟朝臣姓一皆同姓也狩谷氏曰余卽餘字案餘百濟本姓見二東國通鑑一と云　○暈襇色、抄布帛部錦の注に本朝式有二暈襇錦一云々等之名一襇字所出未詳、箋注に按暈襇本彩色之名云々其色各種相間皆橫終幅假令白次レ之以紅次レ之以赤次レ之以紅次レ之以白次レ之以縹次レ之以青次レ之以縹次レ之以白之類漸次濃淡如二日月暈氣雜色相間之狀一故謂二之暈襇一以二後名一錦俗从レ糸とあり　○以勞、以の字は類史に據て補ふ　○布四十端、布四十の三字は閣本淀本及類史に據て補ふ　○甕原離宮、山城志に在二相樂郡瓶原鄕岡崎井平尾二村間一とあり今山城國相樂郡瓶原村なり

幸甕原離宮、○戊午(廿六)、還レ宮、

(七月)勳級、勳には等級あり故に勳級と云ふ　○今討隼賊、此事前に見えず逸せしならむ　○宇太郡、原本宇を守に作る淀本及紀略に據て改む民部式拾芥抄に宇陀に作る　○波坂鄕、抄國郡部に大和國宇陀郡鄕名涙坂奈無佐加、大和志に涙坂鄕已廢存二平井村一とあり今同郡松山町政治村神戶村の何れかならむ　○銅鐸、抄伽藍具に寶鐸四聲字苑云鐸大鈴也とあ

○秋七月丙寅(五)、詔曰、授以勳級(千戌朔)、本據有功、若不優異、何以勸奬、今討隼賊將軍并士卒等、戰陣有功者一千二百八十餘人、並宜隨勞授勳焉、○丁卯(六)、大倭國宇太郡波坂鄕人大初位上村君東人、得銅鐸於長岡野地而獻之、高三尺、口徑一尺、其制異常、音協律呂、勅所司藏之、○戊辰、美濃信濃二國之堺、徑道險阻、往還艱難、仍通吉蘇路、○八月辛丑(十)、從五位下道公首名至自新羅、○乙卯(廿四)、大風、拔木發屋、○丁巳(廿六)、以正五位下大伴

り
○長岡野地、未詳、紀略地の下に中の字あり
○勅所司藏之、雜令に得古器者形製異者悉送官酬直とあり
○美濃信濃云々、大寶二年十二月紀に云へり
○險阻、金本閣本阻を隘に作る
○仍通吉蘇路、萬葉十四に信濃道は今の墾道(ハリミチ)と見え當時始て開きし由を詠めり
○發屋、原本發を廢に作る諸本及紀略に據て改む
○道君首名、原本名の字なし、上文及靈龜元年正月紀に據て補ふ
(九月)大伴宿禰手拍、持統紀元年六月に初て見え慶雲二年五月尾張守となる
○玖左佐村、雄略紀來狹々村に作る神名式攝津國能勢郡久佐々神社あり攝津志に能勢郡宿野村舊名來狹々とあり今豐能郡西郷村大字宿野是なり又春海の說に按能勢郡有雄村(平無良)枳根(木子)二郷見和名抄一本爲是と見ゆ
○請置郡司、原本置を署に作る狩谷校本に據て改む

(十月)諸寺云々、僧尼令に凡僧尼不得私蓄田宅財物及興販出息とあり然るに實行せられぬよりかゝる制の出でしなり、天平十八年三月にも太政官處分凡寺買地律令所禁比年之間占買繁多於理商量深乖憲法宜令京畿內嚴加禁制等と見えたり ○(注)法用司、二年二月紀に見ゆ板屋司を改し年月詳ならず ○起戍、原本戍を戎に作る諸本及紀略に據て改む ○時差專使、考證に時は特の誤なるべしと云軍防令に凡防人至津之間皆令國司親自部領自津發日專使部領付大宰府とあり (十一月)辛酉朔、原本朔を闕く此月辛酉朔なれば例に據て補ふ ○石川紀二嬪、文武元年丁酉八月紀に紀朝臣竈門嬪、石川朝臣刀子娘爲嬪 ○按作磨心、按作は姓氏錄に見えず萬葉三に按作村主あり狩谷氏は鞍作は鞍部と同氏にして司馬達等の子に鞍作鳥見ゆ佛工師を世職の氏族也と云り磨は紀略麻に作る ○獨越、紀略越を超に作る ○雜戶、大寶三年五月紀に見ゆ ○栢原村主、主は金本曾本及紀略に據て補ふ ○大倭國、紀略倭を和に作る ○太政官、原本太を大に作る諸本及紀略に據て改む ○乃官下式部、乃官の二字は諸本及紀略に據て補ふ考課令に諸司の功過は當司長官より太政官に申送れとあるを諸司より弁官に申送し太政官を經て式部に下す事に定められしなり (十二月)丹取、抄國郡部陸奥國の郡名に名取奈止里とあり民部式拾芥抄共に名取に作る丹取名取音通ず今の陸前國名取郡なり ○從三位石川朝臣宮麻呂薨、從三位の三字は紀略に據て補ふ宮麻呂は慶雲二年十一月大宰大貳、和銅元年三月右大弁となる ○近江朝大臣大紫連子、天智紀三年五月大紫蘇我連大臣薨とあり天平寶字六年九月紀には大紫蘇我臣牟羅志に作る ○宮內、類史內の下に省字あり ○己酉、類史此條を十月に係く

宿禰道足、爲彈正尹、從四位下大石王爲攝津大夫、從五位下榎井朝臣廣國爲參河守、從五位下大神朝臣興志爲讃岐守、從五位下道君首名爲筑後守、○九月丁丑(辛酉朔)、造宮卿從四位下大伴宿禰手拍卒、○己卯(十九)、攝津職言、河邊郡玖左佐村、山川遠隔、道路嶮難、由是大寶元年始建館舍、雜務公文、一准郡例、請置郡司、許之、今能勢郡是也、詔、和銅四年已前、公私出舉稻粟未償上者、皆免除之、○辛巳(廿一)、加大藏省史生六員、○冬十月(辛卯朔)、戊戌(八)、制、諸寺多占田野、其數無限、宜自今以後、數過格者、皆還收之、○庚子(十)、板屋司班秩、一准寮焉、蓋改法用司爲板屋司也、○丁巳(廿七)、更加民部史生六員、○戊午(廿八)、詔、防人赴戍、時差專使、由是驛使繁多、人馬並疲、宜遞送發焉、○十一月辛酉朔、伊賀、伊勢、尾張、參河、出羽等國言、大風傷秋稼、調庸並免、但已輸者、以稅給之、○乙丑(五)、貶石川紀二嬪號、不得稱嬪、○丙子(十六)、詔、正七位上按作磨心、能工異才、獨越衆侶、織成錦綾、實稱妙麗、宜磨心子孫免雜戶、賜姓栢原村主、大倭國獻嘉蓮、近江國獻木連理十二株、但馬國獻白雉、太政官處分、凡諸司功過者、皆申送弁官、乃官下式部、○乙酉、權充兵馬司史生四人、○十二月辛卯(廿一)、新建陸奥國丹取郡、○乙未(六)、右大弁從三位石川朝臣宮麻呂薨、近江朝(天智)大臣大紫連子之第五男也、○庚子(十二)、始加中務史生十員、○乙巳(十六)、近江國言、慶雲見、丹波國獻白雉、仍曲赦二國、○己酉(廿)、始加宮內史生十員、

【和銅七年】封租全給、賦役令に凡封戶皆以課戶充調庸全給其田租爲三分二分入官一分給主とあり天平十一年五月の詔を以て此の如く一般に全く給することゝなりぬ
○無位河內王、無位の二字は諸本に據て補ふ天平九年十月及寶龜元年十月紀に見ゆるは別人なり

七年(甲寅)春正月壬戌(三)、二品長親王、舍人親王、新田部親王、三品志貴親王、益「レ」封「ヲ」各二百戶、從三位長屋王一百戶、封租全給、其食封田租全給「フ「ハ」」封主、自「レ」此始矣、○甲子(五)、授「フ」正四位下多治比眞人池守從三位、無位河內王從四位下、无位櫻井王、大伴王、佐爲王、並從五位下、從四位下大神朝臣安麻呂從四位上、正五位上石川朝臣石足、石川朝臣難波麻呂、忌部宿禰

○春日椋首、大寶元年三月僧弁紀還俗賜姓春日倉首名老ニ見えたり
○刑義善、原本義字一字衍れり諸本に據て削る刑は考證に疑荊字之譌と云り神龜元年正月紀に荊軌武、懷風藻に左大史荊助仁見ゆ同族なるべけれど系詳ならず
○吉宜、文武紀四年庚子八月僧惠俊還俗賜姓吉名宜ニ見え神龜元年五月姓吉田連を賜ふ
○津守連道、下文十月丁卯紀及聖武紀に據るに道は通の訛なり
○猪名眞人石前卒、大寶三年七月備前守、和銅三年三月右京大夫となる
○氷高内親王、元正天皇に坐す、内親の二字は淀本及紀略に據て補ふ
○武藏下野五國、原本武藏下野の四字なく五を三に作る諸本に據て補訂す
○欲輸布者、布の下者の字は金本曾本に據て補ふ
○大神朝臣安麻呂卒、持統紀三年二月に判事、慶雲四年九月氏長、和銅元年九月掘津大夫となる又懷風藻に見ゆ

(二月)商布、抄布帛部

子首、正五位下阿倍、朝臣首名、從五位上阿倍、朝臣爾閑、並從四位下、從五位上船、連甚勝正五位下、正六位上春日、椋首老、正六位下引田、朝臣眞人、小治田、朝臣豐足、山上臣憶良、刑義善、吉宜、息長眞人臣足、高向、朝臣大足、從六位上大伴、宿禰山守、菅生、朝臣國益、太宅、朝臣大國、從六位下粟田、朝臣人上、津嶋、朝臣眞鎌、波多、眞人餘射、正七位上津守、連道、並從五位下、○庚午、散位從四位下猪名眞人石前卒、○己卯、益二品氷高内親王食封一千戸、○甲申、令相摸、常陸、上野、武藏、下野五國、始輸絁調但欲輸布者許之、○丙戌、兵部卿從四位上大神朝臣安麻呂卒、○二月己丑朔、日有蝕之、○庚寅、制、以商布二丈六尺爲段、不得用常、如有蓄常布、自擬産業者、今年十二月以前、悉賣用畢、或貯積稍多、出賣不盡者、便納官司、與和價、或限外賣買、沒爲官物、有人糾告、皆賞告者、其帶關國司、商旅過日、審加勘搜、附使言上、上總國言、去京遙遠、貢調極重、請代細布、頗省貧擔、其長六丈、闊二尺二寸、每丁輸二丈、以三人成端、許之、○辛卯、詔曰、人足衣食、共知禮節、身苦貧窮、競爲奸詐、宜令輸絁

に本朝式云商布(多遲)とあり手布(タヅ)の轉と云り調庸に納むる外自用とし又は交易に用ふる布の稱なり
○不得用常、常は一丈三尺を云必ず段とし常を用ふることを禁じたるなり
○擬産業、原本擬を授に作る諸本及類史に據て改む擬は字書に準也とあり
○細布、細布と調布との異同は調布は賦役令に布二丈六尺二丁成端注に端長五丈二尺廣二尺四寸とあるが細布は長六丈廣二尺二寸とあり細布は長さ八尺長きも廣さに於て二寸を減じ每丁二丈を輸し三人を以て端を成すが故に重量に於て約三分の一を減ず故に頗る負擔を減ずと云り但し主計式には細布二丁端を成すとあり後に改まれるなるべし
○三人、狩谷氏は人は丁なるべしと云り閑本三を二に作り金本淀本三人を三丈に作れり
○人足衣食云々、史記管仲傳に倉廩實而知禮節衣食足而知榮辱とあるに據れり　○(注)謂、原本調に作る諸本及紀略に據て改む　○儲備、原本備の字なし諸本に據て補ふ　○大倭、金本閑本等大和に作る下同じ　○令主神祭、崇神紀七年十一月以長尾市爲祭倭大國魂神之主と見ゆ五百足は長尾市の後なれば其祖先より奉仕せし大國魂神の祭を主らしめ給ひしなるべしと考證に云り然らば令主大和神祭とあるべきにさはなくてたゞ神祭とあるは氏神の祭祀

絲綿布調國等、調庸以外、每人儲絲一斤、綿二斤、布六段、謂年十五以上六十五以下者、以資産業、无使苦乏、國郡能加監察、務依數儲備者、加考一等、或里長者、免當年調、若以虛妄顯稱、國郡司卽解見任、里長徵調止掌、○丁酉、以從五位下大倭忌寸五百足爲氏上、令主神祭、○戊戌、詔從六位上紀朝臣清人、正八位下三宅臣藤麻呂、令撰國史、○辛丑、始令出羽國養蠶、○壬寅、遣使于七道、諸國錄囚徒焉、○閏二月戊午朔、賜美濃守從四位下笠朝臣麻呂封七十戸田六町、少掾正七位下門部連御立、大目從八位上山口忌寸兄人、各進位階、匠從六位上伊福部君荒當賜田二町、以通吉蘇路也、○己卯、行幸甕原離宮、○三月丁酉、沙門義法還俗、姓大津連、名意毗登、授從五位下、爲用占術也、○壬寅、隼人昏荒野心、未習憲法、因移豐前國民二百戸、令相勸導也、○乙卯、授從五位下上毛野朝臣廣人、大伴宿禰牛養並從五位上、

の意なるべきか考ふべし　○正八位下、原本此四字なし類史及紀略に據て補ふ　○藤麻呂、類史及紀略勝麻呂に作る　○撰國史、天武紀十二年二月に詔ニ川島皇子忍壁皇子云々一令レ記ニ定帝紀及上古諸事一云々とある後を承けて撰修せしめられしなり（卷上解說を參考すべし）（閏二月）匠從六位上、原本匠を井に作る諸本に據て改む　○伊福部君荒當、錄山城神別に伊福部、大和神別に伊福部宿禰及伊福部連見ゆ、火明命の後なり此に君とあれば異同は詳ならず、紀略君を若に作る　○（三月）丁酉、干支を推すに二月は戊午朔にして丁酉は三月十日なり依て三月の二字を補ふ　○大津連、姓氏錄に見えず系詳ならず　○意毗登、元正紀聖武紀並に首の一字に作る　○昏荒、原本昏を民に作る淀本曾本に據て改む

（四月）小野朝臣毛野薨、慶雲二年十一月中務卿、和銅元年三月中納言となる　○大德冠、紀下附錄に見ゆ　○妹子、推古紀に見ゆ　○毛人、古京遺文に所載の墓志に飛鳥淨御原治ニ天下一天皇御朝任太政官兼刑部大卿位大錦上小野毛人朝臣之墓營造歲次丁丑年十二月上旬卽葬と見ゆ丁丑年は天武天皇六年なり　○二丁、原本丁を町に作る諸本に據て改む　○壬午、干支を推すに次の辛巳と錯置せり壬午は廿六日なり　○租倉、原本倉を食を作る考證に食一本に依て倉に作るべしと云に從て改む　○大小、金本閣本此二字なし　○國司相替云々、交替式に倉庫令を引て凡倉藏及文案孔目官人交替之日並相分付然後放還若數多不レ可ニ移動一者據レ帳分付と云　○徒立虛帳、原本徒を從に作る諸本に據て改む　○肆仟斛、四千石なり公式令に簿帳科雜計贓過所抄牓之類有レ數者爲ニ大字一とある是なり下同じ　○一圖、狩谷校本に云圖恐面

○夏四月辛未（十五）、中納言從三位兼中務卿勳三等小野朝臣毛野薨、小治田朝大德冠妹子之孫、小錦中毛人之子也、○戊寅（廿二）、制、諸國庸綿、丁五兩、但安藝國絲、丁二兩、遠江國絲、三兩、並以二二丁一成ニ屯絇一也、○壬午（廿六）、太政官奏、諸國租倉、大小幷所積數比ニ校文案一、無ニ所錯失一、因レ斯、國司相替之日、依レ帳承付、不ニ更勘驗一、而用多缺少、徒立ニ虛帳一、本無ニ實數一、良由ニ國郡司等不ニ撿校一之所レ致也、自今以後、諸國造倉、率爲ニ三等一、大受ニ肆仟斛一、中參仟斛、小貳仟斛、一定之後、勿レ虛ニ文案一、○辛巳（廿五）、給ニ多禰嶋印一圖一、

○五月丁亥朔、大納言兼大將軍正三位大伴宿禰安麻呂薨、帝深悼之、詔贈ニ從二位一安麻呂、難波朝（孝德）右大臣大紫長德之第六子也、○癸丑（廿七）、土左、大宰帥たり、大將軍たりしこと見えず或は大宰帥の誤か　（六月）若帶日子姓、史に見えず若帶日子は成務天皇の御諱なり　○國造人、詳ならず　○寺人姓、養老七年二月紀に寺人小君等改賜ニ道守臣一姓と見ゆれど異同は決め難し　○職分資人、位分の資人と職分の資人とあり職分資人は官職に依て附せらるゝなり云　○留省、後に留省資人の稱あり天平寶字二年十二月紀に見え續後紀天長十年二月留省无位尾張連豐山と見ゆ　○舛謬、舛は原本殊に作る考證に據て改む舛は字書に相背也錯亂とあり　○南畝、毛詩豳風七月に三之日于耜四之日舉レ趾同ニ我婦子一饁ニ彼南畝一とあるに據りて農事の意に用ひしなり　○田囿、紀略囿を園に作る　○嘉澍、慶雲二年六月（四三頁）紀に注す　○元服、漢書昭帝紀の注に元、首也、冠者、首之

（五月）大伴宿禰安麻呂薨、天武紀元年六月に初見、大寶二年正月式部卿、同六月兵部卿、慶雲二年八月大納言、同十一月兼

國人物部毛蟲咩一ニ産三子一、賜ニ穀四十斛并乳母一、○六月己巳（十四）、若帶日子、姓、爲レ觸ニ國諱一、改因ニ居地一、賜ニ之國造人姓一、除ニ人字一、寺人姓本是物部族也、而庚午（天智九年）年籍、因ニ居地名一、始號ニ寺人一、疑涉ニ賤隸一、故除ニ寺人一、改從ニ本姓一矣、○甲戌、太政官處分、職分資人若本主亡、并以レ理去レ官者、不レ限ニ年遠近一、並留省焉、如本主去レ官亦有ニ復任一、以ニ舊人一充焉、○戊寅（廿三）、詔曰、頃者陰陽舛謬、氣序乖違、南畝方興、膏澤未レ降、百姓田囿、往々損傷、宜以ニ幣帛一、奉ニ諸社一、祈ニ雨于名山大川一、庶致ニ嘉澍一、勿レ虧ニ農桑一、○庚辰（廿五）、皇（聖武）太子加ニ元服一、○癸未（廿八）、大赦天下、自ニ和銅七年六月廿八日午時一已前、大辟罪以下、罪無ニ輕重一、已發覺、未發覺、已結正、未結正、繫囚見徒、沒爲ニ奴婢一、及犯八虐、常赦所レ不レ免者、咸赦ニ除之一、其私鑄錢、及竊盜强盜、並不レ在ニ赦限一、但鑄盜之徒、合ニ死坐一、降ニ罪一等一、諸老人、歲百以上、賜ニ穀伍斛一、九十已上、參斛、八十已上、壹斛、孝子順孫、義夫節婦、表ニ其門閭一、終レ身勿レ事、鰥寡惸獨、篤疾重病之徒、不レ能ニ自存一者、宜レ令ニ所司一量ニ加賑恤一、○甲申（廿九）、從七位下大津造元休、從八位下船人等、並賜ニ連姓一、

所著、故曰元服とあり　○已結正、獄令に所謂獄成るなり云獄案已に成て罪名の定まれるなり　○未結正、已結正に對して罪名の未だ定まらざるものを云　○見徒、徒刑に處せられ現に服役するものを云　○强盜、此二字は金本曾本淀本に據て補ふ　○歳百、紀略百歳に作る　○壹斛、原本斛を石に作る紀略に據て改む　○篤疾云々、戸令に惡疾癲狂二支癈兩目盲如し之類皆爲篤疾とあり紀略には重病の二字なし　○大津造、姓氏錄に見えず原本津を律に作る金本淀本に據て改む

《八月》秋八月、原本秋の字なし例に據て補ふ　○散事五位、散事は職事官に對して執掌する所なきを云　○如應賜祿、原本賜の上に加の字あり如の字なし金本曾本淀本に據て訂す

《九月》濫錢、考證に藤貞幹曰和銅錢一種有銅質黑濁輕小不精者史所謂濫錢卽此と云　○栢原、原本栢を柏に作る金本曾本淀本に據て改む

《十月》發屋、原本發を廢に作る金本及紀略類史に據て改む　○出羽柵戸、二年六月紀に出づ　○兒祖父、父の字は四年四月紀に據て補ふ　○佐伯宿禰、宿禰の二字は曾本淀本及六年正月紀に據て補ふ

《十一月》大倭、金本曾本淀本倭を和に作る　○大倭忌寸、大の字は金本閣本等に據て補ふ

○秋八月乙丑、制、散事五位如應賜祿、自今以後、准職事正六位焉、○九月甲辰、制、自今以後、不得擇錢、若有實知官錢、輙嫌擇者、勑使杖一百、其濫錢者、主客相對破之、卽送市司、○壬子、授正七位上栢原村主磨心從五位下、○冬十月乙卯朔、美濃、武藏、下野、伯耆、播磨、伊豫六國、大風發屋、仍免當年租調、○丙辰、勑割尾張、上野、信濃、越後等國民二百戸、配出羽柵戸、○丁卯、以從四位下石川朝臣難波麻呂爲常陸守、從五位上巨勢朝臣兒祖父爲伊豫守、從五位下津嶋朝臣眞鎌爲伊勢守、從五位上平群朝臣安麻呂爲尾張守、從五位下佐伯宿禰沙彌麻呂爲信濃守、從五位下大宅朝臣大國爲上野守、從五位下津守連通爲美作守、○辛未、造宮省加史生六員、通前十四人、○十一月戊子、大倭國添下郡人大倭忌寸果安、添上郡人奈良許知麻呂、有智郡女日比、信紗、並終身勿事、旌孝義也、果安、孝養父母、友于兄弟、若有人病飢、自賚私粮、巡加看養、登美箭田二鄕、百姓、咸感恩義、敬愛如親、麻呂、立性孝順、與人無恐、嘗被後母讒、不得入父家、絶無怨色、孝養彌篤、信紗、氏直果安妻也、事舅姑以孝聞、夫亡之後、積年守志、自提孩穉、并妾子惣八人、撫養無別、事舅姑、自竭婦禮、爲鄕里之所歎也、○乙未、新羅國遣重阿飡金元靜等二十餘人朝貢、差發畿內七道騎兵合九百九十、爲擬入朝儀衛也、○己亥、遣使迎新羅使於筑紫、○庚戌、從四位下大伴宿禰旅人爲左將軍、從五位上多治比眞人廣成、從五位下久米朝臣麻呂爲副將軍、從四位下石上朝臣豐庭爲右將軍、從五位上上毛野朝臣廣人、從五位下粟田朝臣人上爲副將軍、○十二月戊午、少初位下太朝臣遠建治等、率南嶋奄美、信覺及球美等嶋人五十二人、至自南嶋、○己卯、新羅使入京、遣從六位下布勢朝臣人、正七位上大野朝臣東人、率騎兵一百七十迎於三椅、

○奈良許知麻呂、續後紀承和十年十二月奈良已智豐繼等八人賜姓大瀧宿禰、其先百濟國人也とあり　○有智郡、今の宇智郡なり金本閣本有知に作る　○日比、狩谷氏は曰佐に作るべしといひ內藤氏は疑らくは四比の譌と云り天智紀に四比福夫、神龜元年五月紀に四比忠男見ゆ　○友于兄弟、尙書君陳に出づ　○登美、添下郡にあり西大寺田園目錄に鳥見莊と見ゆ大和志に添下郡鳥貝今曰鳥見莊と云地理志料には鳥貝鳥見を並擧ぐ　○箭田、同じく添下郡にあり倭名抄に矢田と書けり大和志に添下郡鄕名の條に矢田方廢村存と云今生駒郡矢田村片桐村是也　○敬愛、原本愛を受に作る金本閣本に據て改む　○無恐、狩谷校本に恐疑怨、また怒の誤かとも云へり　○怨色、原本恐色に作る考證に據て改む　○孝養、孝は山崎校本に據て補ふ　○氏直果安、狩谷氏は氏疑民字、又按民直果安與大倭忌寸果安別人と云り又一說に直は是の誤にて信紗氏是果安妻也とあるべきなりと云　○孩穉、字書に孩は幼稚也穉は凡人物幼小皆曰穉とあり　○所歎、原本歎を欲に作る諸本に據て改む　○重阿飡、原本阿を河に作る紀略に據て改む重阿飡は新羅第七等の官名　○差發云々、薩摩隼人の入朝、新羅國の朝

貢、唐客の入朝の度に此事あり　○左將軍、三年正月紀に云り　○粟田朝臣人上、上の字は淀本に據て補ふ　(十二月)奄美、今の大島、文武紀に菴美に作る○信覺、南島志に今之八重山嶋、石垣、入表二島之地總稱以爲八重山云々とあり今の石垣島なりと云　○球美、南島志に舊作九米嶋在那覇港及計羅摩嶋西とあり今久米島と稱し那覇の西四十八里に在りと云　○布勢朝臣人、淀本及紀略人の上に巨の字あり　○三椅、寶龜十年四月紀に唐客入京將軍等率騎兵二百蝦夷廿人迎接於京城門外三橋と見えたる三橋に同じきか金本閣本には三を一に作り紀略には椅を埼に作る

【靈龜元年】始加禮服、服の字は諸本及類史紀略に據て補ふ

○鉦皷、鉦と皷となり鉦は樂家に所謂鉦皷にて抄音樂具に鉦皷後漢書云鉦皷之聲(鉦音征俗云常古)兼名苑云鉦一名鐃金皷也とあり皷は鼓(和名都々美)とあり

○白鴿、抄羽族部に本草云鴿(和名伊閇波止)頸短灰色とあり白鴿は全身純白の鴿を云

○盜□人、□は類史に據て補ふ

○三品志紀親王二品、三品の二字は和銅七年正月紀に據り二品の二字は金本閣本等に據て補ふ

○多治比、比の字は淀本に據て補ふ

○藤原朝臣武智麻呂、朝臣の二字は前後の例に據て補ふ

○曾禰連足人、人の字は慶雲元年正月紀及和銅四年四月紀に據て補ふ

靈龜元年(乙卯)春正月甲申朔、天皇御大極殿受朝、皇太子(聖武)始加禮服拜朝、陸奥出羽、蝦夷、并南嶋奄美、夜久、度感、信覺、球美等來朝、各貢方物、其儀朱雀門、左右陣列皷吹騎兵、元會之日、用鉦皷、自是始矣、是日、東方慶雲見、遠江國獻白狐、丹波國獻白鴿、○癸巳、詔曰、今年元日、皇太子始拜朝、瑞雲顯見、宜大赦天下、但犯八虐、私鑄錢、盜□人、常赦所不原者、並不在赦限、內外文武官六位以下、進位一階、又授二品穗積親王一品、三品志紀親王二品、從四位下路眞人大人、巨勢朝臣邑治、大伴宿禰旅人、石上朝臣豐庭、多治比眞人三宅麻呂、百濟王南典、藤原朝臣武智麻呂、並從四位上、正五位上大伴宿禰男人、太朝臣安麻呂、正五位下當麻眞人櫻井、從五位上多治比眞人縣守、藤原朝臣房前、並從四位下、正五位下曾禰連足人、佐伯宿禰百足、百濟王良虞、並正五位上、從五位上笠朝臣吉麻呂、中臣朝臣人足、並正五位下、從五位下臺忌寸少麻呂、道君首名、並從五位上、從六位上下毛野朝臣石代、當麻眞人大名、紀朝臣清人、從六位下土師宿禰豐麻呂、並從五位下、又授二品氷高內親王一品、○甲午、三品泉內親王、四品水主內親王、長谷部內親王、益封各一百戶、○戊戌、蝦夷及南嶋七十七人、授位有差、○己亥、宴百寮主典以上、并新羅使金元靜等于中門、奏諸方、樂、宴訖、賜祿有差、○庚子、賜大射于南闈、新羅使亦在射列、賜綿各有差、○(癸丑朔)二月丙辰、制、尙侍、從四位者、賜祿准典藏焉、○丙寅、從五位下大神朝臣忍人爲氏上、從四位下當麻眞人櫻井卒、○丁丑、勅以三品吉備內親王、男女、皆入皇孫之列焉、○三月壬午朔、車駕幸甕原離宮、○丙申、散位從四位上竹田王卒、○甲辰、金元靜等還蕃、勅大宰府、賜綿五千四百五十斤、船一艘、○丙午、相摸國足上郡人丈部造智積、君子尺麻呂、並表閭里、終身勿事、旌孝行也、

○少麻呂、或は宿奈麻呂に作る

○水主內親王、原本水を氷に作る金本曾本淀本及紀略に據て改む

○長谷部內親王、長谷は天武紀泊瀨に作る萬葉亦同じ

○南闈、字書に闈は宮中之門也とあり南門を云天平十二年正月紀に天皇御天極南門觀天射と見ゆ南の字は金本閣本及紀略に據て補ふ

(二月)尙侍云々、祿令に凡給祿者云々典藏准從四位尙侍准從五位とあるか從四位の尙侍は典藏に准ずることに改められしなり

○當麻眞人櫻井卒、持統紀三年に初見、文武紀慶雲二年八月伊勢守、和銅元年三月武藏守となる

○吉備內親王、草壁皇子の御女にて長屋王の妃となり長屋王の自盡し給ひし時此親王も自ら縊れて薨じ給へり

(三月)竹田王、原本竹を以に作る紀略及和銅元年三月紀に據て改む　○皇孫之列、原本列を例に作る淀本に據て改む　○足上郡、此に初見、天平七年相摸國封戶租交易帳に足上郡岡本鄕見ゆ　○丈部造、錄左京皇別杖部造孝元天皇々子大彥命之後也とあり丈は杖に同じ景雲三年三月紀に陸奧國白河郡人丈部老、安積郡人丈部直繼足其他信夫郡柴田郡會津郡等にも同氏の人見ゆ大彥命の裔の東北に大に繁衍せしことを思ふべし　○君子尺麻呂、君子は神龜元年二月紀

に君子部立花、二年閏二月紀に君子龍麻呂見え寶字元年三月紀に勅改君子爲吉彌侯部とあり吉美侯部は豐城入彦命の後なり　○並表閭里、表は狩谷校本に並下一有表字とあるに據て補ふ

(四月)櫛見山陵、垂仁紀に九十九年天皇崩葬於菅原伏見陵と見え諸陵式に菅原伏見東陵とあり、本居翁の說に伏と櫛と訓相近ければ斯く書けるなるべしと云、考證には一本節に作れるがあればそれならむと云り、今奈良縣生駒郡都迹村大字尼辻にあり　○(注)生目入日子伊佐知天皇、垂仁天皇　○伏見山陵、諸陵式に菅原伏見西陵石上穴穗宮御宇安康天皇在大和國添下郡と見え今奈良縣生駒郡伏見村大字寶來にあり　○(注)穴穗天皇、安康天皇　○直丁、神祇太政の二官を始め諸司にあり令集解職員令神祇官の條に官內に驅使すとあり官衙の雜事に使役するものなり　○改賜、原本改を政に作る淀本閣イ本に據て改む　○阿刀連、阿刀宿禰は左京並山城神別に阿刀連は山城神別に見ゆ石上同祖饒速日命の後　○小治田朝臣、金本に小治田以下の十九字なし脫漏なり　○日下部宿禰老、原本禰の下阿倍の二字あり衍なること明かなり故に削る

○夏四月庚申(壬子朔九)、櫛見山陵(垂仁生目入日子伊佐知天皇之陵也)充守陵三戶(安康)、伏見山陵(穴穗天皇之陵也)四戶、○庚午(十九)、諸直丁經廿年已上者、預考選例、憐其勞也、○癸酉(廿二)、上村主通改賜阿刀連、○丙子(廿五)、詔叙成選人等位、授從三位粟田、朝臣眞人正三位、正五位下長田王、大神朝臣狛麻呂、田口朝臣益人、並正五位上、從五位上小治田朝臣安麻呂、縣犬養宿禰筑紫、平群朝臣安麻呂、並正五位下、從五位下三國眞人人足、佐味朝臣加作麻呂、阿倍朝臣秋麻呂、坂本朝臣阿曾麻呂、日下部宿禰老、阿倍朝臣安麻呂、並從五位上、

○五月辛巳朔、勅諸國朝集使曰、天下百姓、多背本貫、流宕他鄉、規避課役、其浮浪逗留經三月以上者、卽土斷輸調庸、隨當國法、又撫導百姓、勸課農桑、心存字育、能救飢寒、實是國郡之善政也、若有身在公庭、心

(五月)流宕他鄉云々、八月紀に京人流宕畿外云々とあり養老元年五月紀、四年三月紀等參考すべし原本宕を宿に作る山崎校本に據て改む　○土斷、狩谷校本に云一作土考證に云當作土、文獻通考云天下之民不土斷而地著不更版籍而得其虛實通雅云土斷土著也、晉以後流寓者多爲僑戶後行法不便一以土著論之名曰土斷とあるに據て改む　○侵蝉、漢書景帝紀に侵牟萬民とあり注に李奇曰牟食苗根蟲也侵牟食民比之蝉賊也とあり蝉牟通ず　○周行、毛詩小雅鹿鳴の傳に周至、行道也とあり　○過所、釋名に過所、至關津以示也とあり關所通行の手形なり關市令に凡欲度關者皆經本部本司請過所官司撿勘然後判給とあり　○賑貸之、之の字は例に據て補ふ　○運輸調庸云々、賦役令に凡調庸物每年八月中旬起輸近國十月廿日、中國十一月廿日、遠國十二月廿日以前納訖其調糸七月廿日以前輸訖とあり　○要道、原本要を惡に作る狩谷校本惡或作要とあるに據て改む　○海路漕庸云々、賦役令に凡調庸物云々其運脚均

顧私門、妨奪農業、侵蝉萬民、實是國家之大蠹也、宜其勸催產業、資產豐足者爲上等、雖加催勸、衣食短乏者爲中等、田疇荒廢、百姓飢寒、因致死亡者爲下等、十人以上、則解見任、又四民之徒、各有其業、今失職流散、此亦國郡司、教導無方、甚無謂也、有如此類、必加顯戮、自今以後、遣巡察使、分行天下、觀省風俗、宜勸敦德、政庶彼周行、始今諸國、百姓往來、過所、用當國印焉、丹波丹後二國飢、賑貸之、○己丑、始充京職印、○壬辰、伯耆國言、甘露降、○甲午(十四)、詔曰、凡諸國運輸調庸、各有期限、今國司等、怠緩違期、遂妨耕農、運送之民、仍致勞擾、非是國郡之善政、撫養之要道也、自今以後、如有此類、以重論之、又海路漕庸、輒委惷民、或已漂失、或多濕損、是由國司不順先制之所致也、自今以後、不悛改者、節級科罪、所損之物、卽徵國司、又五兵之用、自古尙矣、服强懷柔、咸因武德、今六道、諸國營造器仗、不甚牢固、臨事何用、自今以後、每年貢樣、巡察使出日、細爲挍勘焉、○乙巳(廿五)、從六位下畫師忍勝姓改爲倭畫師、攝津紀伊、武藏、越前、志摩、五國飢、賑貸之、遠江國地震、山崩壅龜玉河、水爲之不

出調庸之家皆國司領送云々とありなほ民部式に見ゆ　○悉民、悉は愚也愚民を云　○悛改、原本悛を換に作る淀本に據て改む　○五兵、字書に弓殳矛戈戟也とあり周禮注に鄭司農云五兵者戈殳戟酋矛夷矛とあり　○六道、七道の中西海を除く、大寶元年八月紀に見ゆ　○毎年貢樣、營繕令に凡營造軍器皆須依樣、義解に謂樣者形制法式也とあり依樣とは見本の通りにするを云　○乙巳、此月辛巳朔なれば乙巳は廿五日なり鴨本乙未に作れりと云、乙未は十五日なりされど類史も乙巳とあれば轍く改めず　○倭畫師、天武紀に倭畫師音檮、天平十七年四月紀に養德畫師楯戸弁麻呂見え神護景雲三年五月紀に倭畫師種麻呂等十八人賜姓大岡忌寸とあり大岡忌寸は錄左京諸蕃に出自魏文帝之後安貴公と見ゆ金本閣本等倭を和に作る　○遠江國、國の字は類史紀略に據て補ふ　○山崩、紀略に壞崩に作る　○龕玉河、原本龕を籠に作る類史紀略に據て改む天平寶字五年七月紀に荒玉川とあり今馬込川と云源を遠江國引佐郡龕玉村に發し南流濱松の東を過ぎて海に入る　○潰流、流の字は類史紀略に據て補ふ　○石田、寶龜元年三月紀に磐田に作り民部式倭名抄亦同じ　○乙亥、干支を推すに此月乙亥なし己亥の誤なるべし己亥は十九日　○更定義倉出粟法、和銅六年二月義倉九等の戶を定め是に又此法を制む故に更定と云此格文は天平寶字二年五月廿九日格文中に見ゆ

流、經數十日、潰流沒數智、長下、石田、三郡民家百七十餘區、并損苗、○乙亥、太政官奏、更定義倉出粟法、分爲九等、語在別格、○壬寅、以從三位巨勢朝臣麻呂爲中納言、從四位上多治比眞人三宅麻呂爲左大弁、從四位上巨勢朝臣邑治爲右大弁、從四位上大伴宿禰旅人爲中務卿、從四位下阿倍朝臣首名爲兵部卿、從四位上阿部朝臣廣庭爲宮內卿、從四位下多治比眞人縣守爲造宮卿、從五位上大伴宿禰宿奈麻呂爲左衞士督、正五位上大神朝臣狛麻呂爲武藏守、從五位上阿倍朝臣安麻呂爲但馬守、從五位下石川朝臣君子爲播磨守、從三位多治比眞人池守爲大宰帥、○丙午、參河國地震、壞正倉四十七、又百姓廬舍、往々陷沒、○庚戌、移相摸、上總、常陸、上野、武藏、下野六國富民千戶、配陸奧焉、

（六月）一品長親王、天武紀二年に次妃大江皇女生長皇子と見ゆ　○都祁山之道、原本祁を祈に作る神名式並臨時祭式に據て改む都祁は山邊郡にあり大和志に長瀨越乃長瀨村名張郡界至白石二里三十三町靈龜元年六月開都祁山之道郎此とあり　○懸像、日月を云像は象なり日月は高く天に懸る故に云　○東皐、文選秋興賦に耕東皐之沃壤兮、注に水田曰皐東者取其春意とあり　○南畝、毛詩豳風七月篇に出づ上に見ゆ　○雲漢之詩、毛詩大雅蕩之什に出づ周宣王旱災に遇て德を修め政を勤て雨を致したるをほめたる詩なり　○漢帝云々、漢書武帝紀天漢元年の注に應劭曰時頻年苦旱故改元爲天漢以祈甘雨とあり　○誰知堯力、論衡に堯時百姓無事有五十之民擊壤於塗觀者曰大哉堯之德也擊壤者曰吾日出作日入而息鑿井而飲耕田而食堯何力於我也とあるに據る　○弘福法隆二寺、弘福寺は川原寺と云高市郡にあり上に出づ法隆寺は推古紀に云り

（七月）地震、地の字は淀本及類史紀略に據て補ふ　○淨人、此下恐くは等の字を脫す　○穗積親王薨、天武紀二年に初見、慶雲二年九月知太政官事となる公卿補任には十三日薨とす　○從四位上石上朝臣、原

○六月甲寅、一品長親王薨、天武天皇第四之皇子也、○庚申、開大倭國都祁山之道、○壬戌、太政官奏、懸像失度、亢旱彌旬、恐東皐不耕、南畝損稼、昔者周王遇旱、有雲漢之詩、漢帝祈雨、興改元之詔、人君之願、載感上天、請奉幣帛、祈於諸社、使民有年、誰知堯力、○癸亥、設齋於弘福法隆二寺、詔遣使奉幣帛于諸社、祈雨于名山大川、於是未經數日、澍雨滂沱、時人以爲、聖德感通所致焉、因賜百官人祿各有差、○丁卯、諸國人廿戶、移附京職、由殖貨也、

○秋七月庚辰朔、日有蝕之、○己丑、地震、行幸甕原離宮、賜從五位下紀朝臣淨人數人穀百石、優學士也、○壬辰、授刀舍人狛造千金、改賜大狛連、○丙午、知太政官事一品穗積親王薨、遣從四位上石上朝臣豐庭、從五位上小野朝臣馬養、監護喪事、天武天皇之第五皇子也、尾張國

本上を下に作る正月癸巳紀に據て改む
○天武天皇之第五皇子、天武紀二年に次夫人蘇我赤兄大臣女大蕤娘生一男二女其一曰穗積皇子
○席田君、姓氏錄に載せず他にも見えず
○席田郡、抄國郡部美濃國郡名席田無之呂太とあり今本巢郡に入れり
(八月)流宕畿外、原本宕を宿に作る金本閣本淀本に據て改む
○頸著三公、原本公を台に作る金本閣本及紀略に據て改む、三公に象れる斑文ありしなるべし
○背負七星、原本背を脊に作る金本及紀略に據て改む七星は北斗星を云其數七あり故に七星と云
○並有離卦、前脚に並に易の離卦に似たる文ありしなるべし
(九月)己卯朔、朔字は例に據て補ふ
○皇親二世云々、養老四年五月の制に皇親服制者以孫王准五位疎親准六位爲とあり二世は卽ち孫王三世以下は疎親なり
○熊皮及金銀、原本熊を羆に作る金本閣本淀本に據て改む和銅五年五月紀に禁六位已下以白銅及銀餝革帶と見えたるを改められしなり、及は紀略に據て補ふ
○横刀鋏、原本鋏を鋏に作る狩谷氏鋏字恐誤或是鋏字莊子說劍篇云韓魏爲鋏と云るに據て改む
○纏造、原本纏を纏に作る纏は纏なり
○乾道統天、易乾卦の彖に大哉乾元、萬物資始、乃統天云々とあり
○馭曆、御曆に同じ隋書牛弘傳に握符御曆有國有家者云々とあり天子日官を置きて曆時を正すを云
○大寶曰位、易の繫辭傳に聖人之大寶曰位とあり
○震極、震は宸に作るべし、宸極は晉書律曆志に聖人擬宸極以運璿璣とありて北極をいひ又天子の尊位に譬へしなり
○揖讓之君、堯舜を云
○干戈之主、殷の湯王周の武王を云
○後昆、子孫の意、尙書仲虺之誥に出づ
○夙夜不怠、毛詩大雅烝

人外從八位上席田君邇近、及新羅人七十四家、貫于美濃國、始建席田郡焉、○八月己未、制、大宰府官人家口、皆免課役、從四位上路眞人大人爲大宰大貳、○甲戌、京人流宕畿外、則貫當國而從事、○丁丑、左京人大初位下高田首久比麻呂獻靈龜、長七寸、闊六寸、左眼白、右眼赤、頸著三公、背負七星、前脚並有離卦、後脚並有一爻、腹下赤白兩點、相次八字、○九月己卯朔詔、皇親二世准五位、三世以下准六位、禁文武百寮六位以下用虎豹熊皮、及金銀餝鞍具并横刀帶端、但朝會日用者許之、婦女依父夫蔭服用、亦聽之、凡横刀鋏者、以絲纏造、勿用素木、令脆焉、○庚辰、天皇禪位于氷高內親王、詔曰、乾道統天、文明於是馭曆、大寶曰位、震極所以居尊、昔者揖讓之君、旁求歷試、干戈之主、繼體承基、貽厥後昆、克隆鼎祚、朕君臨天下、撫育黎元、蒙上天之保休、賴祖宗之遺慶、海內晏靜、區夏安寧、然而兢々之志、夙夜不怠、翼々之情、日愼一日、憂勞庶政、九載于茲、今精華漸衰、耄期斯倦、深求閑逸、高踏風雲、釋累遺塵、將同脫屣、因以此神器、欲讓皇太子、而年齒幼稚、未離深宮、庶務多端、一日萬機、一品氷高內親王、早叶祥符、夙彰德音、天縱寬仁、沉靜婉孌、華夏載佇、謳訟知歸、今傳皇帝位於內親王、公卿百寮、宜悉祗奉以稱朕意焉、

民篇に夙夜匪解とあり
○翼々之情、同大雅烝民篇に小心翼々、箋に翼々然恭敬とあり
○日愼一日、淮南子人間訓に出づ
○耄期斯倦、尙書大禹謨に耄期倦于勤、傳に八十九十曰耄百年曰期頤言已年老厭倦萬幾云々とあり
○脫屣、漢書郊祀志注に屣小履、脫屣者言其便易無所顧也とあり孟子盡心篇に舜視棄天下猶棄敝蹝也とも見ゆ
○一日萬機、尙書皐陶謨に出づ
○祥符、原本符を府に作る金本及紀略に據て改む
○天縱、文武紀卽位前紀（一頁）に出づ
○婉孌、孌は孌に同じ毛詩曹風候人篇に婉兮孌兮、傳に婉少貌孌好貌とあり
○載佇、山崎校本佇を仰に作るに從ふべし
○諷訟知歸、孟子萬章に堯崩舜避堯之子於南河之南訟獄者不之堯之子而之舜謳歌者不謳堯之子而謳歌舜節略とあるに據る
○皇帝位、紀略に帝の字なし
○稱朕意焉、東大寺要錄焉を矣に作る
○卷第六、金本に卷の字なし

續日本紀卷第六

【靈龜元年】日並知皇子尊之皇女、一代要記に文武天皇同母の御姉とあり
○言必典禮、字書に典は法也禮は體也得其事體也とあり言語必ず法ありて事體を得るを云
（九月）詔曰、文武天皇並元明天皇卽位の詔は古言を以てせられしが此に至て漢文を以てせられ其內容も甚簡明にして祥瑞に因て改元の事を述べられしに過ぎず從來に比して大いに異なる所あるを知るべし
○天表嘉瑞、紀略天を大に作る
○賜施、字書に賜は賜也與也施は惠也與也とありてタマモノの意
○天下諸社、紀略天を已

續日本紀卷第七

起靈龜元年九月盡養老元年十二月

從四位下行民部大輔兼左兵衞督皇太子學士臣菅野朝臣眞道等奉　勑撰

元正天皇　第卌四

日本根子高瑞淨足姬天皇

日本根子高瑞淨足姬天皇、天淳中原瀛眞人天皇之孫、日並知皇子尊之皇女也、天皇神識沉深、言必典禮、○九月庚辰、受禪、卽位于大極殿、詔曰、朕欽承禪命、不敢推讓、履祚登極、欲保社稷、粤得左京職所貢瑞龜、臨位之初、天表嘉瑞、天地貺施、不可不酬、其改和銅八年、爲靈龜元年、大辟罪已下、罪無輕重、已發覺、未發覺、已結正、未結正、繫囚見徒、咸從赦除、但謀殺々訖、私鑄錢、强竊二盜、及常赦所不原者、並不在赦限、親王已下及百官人、并京畿諸寺僧尼、天下諸社祝部等、賜物各有差、高年鰥寡孤獨疾病之徒、不能自存者、量加賑恤、孝子順孫、義夫節婦、表其門閭、終身勿事、免天下今年之租、又五位已上子孫、年廿已上者、宜授蔭位、

に作る
○孤獨疾病、原本獨疾に作る淀本に據て補ふ紀略には孤獨疾疹に作る
○蔭位、五位以上の人の子又は孫たるもの其父祖の蔭に依て位を賜ふを蔭位と云
(十月)貨食、字書に貨は財也、食は殖也所以自生殖也とあり
○刑錯、漢書武帝紀に詔曰周之成康刑錯不用とあるより出づ刑名あれども之に觸るゝ人なく措て用ひざるを云
○産術、原本産を彥に作る淀本及三代格に據て改む生産の道を云
○耨水澤之種、水田に稻を作ることのみに專ら心を走らせ力を盡すを云
○陸田之利、陸田は畠なり麥粟等を作ることを云
養老三年九月紀に詔給天下民戸陸田一町以上二十町以下輸地子段粟三升と見ゆ
○澇旱、字書に澇は亦作潦とあり潦は路上流水也一曰積水と注す旱は不雨也とあり
○百姓懈懶、懶は金本閣本等に據て補ふ三代格に

獲瑞人大初位下高田首久比麻呂、賜從六位上、并絁廿疋、綿四十屯、布八十端、稻二千束、○冬十月乙卯、詔曰、國家隆泰、要在富民、富民之本、務從貨食、故男勤耕耘、女脩紝織、家有衣食之饒、人生廉耻之心、刑錯之化爰興、太平之風可致、凡厥吏民、豈不勗歟、今諸國百姓未盡産術、唯趣水澤之種、不知陸田之利、或遭澇旱、更無餘穀、秋稼若罷、多致饑饉、此乃非唯百姓懈懶、固由國司不存教導、宜令百姓兼種麥禾、男夫一人二段、凡粟之爲物、支久不敗、於諸穀中、最是精好、宜以此狀遍告天下、盡力耕種、莫失時候、自餘雜穀、任力課之、若有百姓輸粟轉稻者、聽之、○丁丑、陸奥蝦夷第三等邑良志別君宇蘇彌奈等言、親族死亡子孫數人、常恐被狄徒抄略、乎、請於香河村、造建郡家、爲編戸民、永保安堵、又蝦夷須賀君古麻比留等言、先祖以來貢獻昆布、常採此地、年時不闕、今國府郭下、相去道遠、往還累旬、甚多辛苦、請於閇村、便建郡家、同於百姓、共率親族、永不云闕貢、並許之、○十二月己酉朔、日有蝕之、○己未、常陸國久慈郡人占部御蔭女一産三男、給粮并乳母一人、

は百姓懈懶忘業とあり　○敎導、金本閣本等導を道に作る　○佰姓、佰は卽ち百の字なり紀略百に作る　○麥禾、麥を粟とも云　○第三等、蝦夷の爵は一二を以て等級を定む寶龜九年六月紀に第二等伊治公呰麻呂、類聚國史に延曆十一年十一月陸奥俘爾散南公阿波蘇宇漢米公隱賀並授爵第一等と見え式部式にも凡諸夷入朝給祿者第一等絁六疋と見えたり　○邑良志別君、後紀弘仁二年七月紀に出羽國奏邑良志閇村降俘吉彌侯部都留岐申云々と見ゆ其地詳ならねど邑良志別君とあるは地名を以て姓氏とせしなるべし宇蘇彌奈は名なり　○香河村、原本河を阿に作る金本閣本淀本に據て改む香河は今陸前國登米郡石森村大字加賀野卽是なるべし此に郡家を建つとあれば當時香河郡と稱せしを後に登米郡と改めしならむ　○須賀君、須賀は地名に據れるなり復軒雜纂に閇村の地は昆布を採るとあれば海邊なりしなり奥州の海にて昆布あるは金華山以北なりとす牡鹿郡中なるべし奥州方言に洲沙の地をスカと云蝦夷の名の須賀君も海邊に因あるかと云されど牡鹿郡には須賀と云る地名聞えず陸中國下閇伊郡には小本村の隣村に須賀村あり或は此地に據るか考ふべし　○昆布、抄榮蔬部に昆布本草云昆布(比呂米一云衣比須女)味鹹寒無毒生東海とあり　○國府、陸奥國府は倭名抄に宮城郡と見ゆれど此時には石城石背分國以前(分國は養老六年五月)なりしかば當時の國府は信夫郡なるべしと云　○閇村、後紀弘仁二年七月紀に幣伊村とあるに同じきか陸奥國閇伊郡是なりとの說あれど閇伊郡は延喜式に見えざれば閇伊郡なりとも斷定すべからず紀略には閇を閑に作る閑村ならむには空閑の意にて論議を要せず尙よく考ふべし　(十二月)占部、天平十八年三月紀常陸國鹿嶋郡中臣部二十烟占部五烟賜中臣鹿嶋連之姓と見え萬葉廿常陸國茨城郡占部小龍及那賀郡占部廣方見ゆ

【靈龜二年】授從三位長屋王云々、長以下十字原本なし諸本に據て補ふ

(二月)大隅媛嶋、安閑紀二年九月勅宣放牛於難波大隅與媛嶋松原と見ゆ、大隅は今の大阪市東淀川區南北西大道町媛嶋は西淀川區姬島町是なり攝津志に媛嶋は西成郡蕚嶋村なりと云るを本居翁は難波古圖を按ずるに姬嶋九條嶋西に在り今勘助嶋と稱ふ蕚嶋とあるは誤なるべしと云

○二年春正月戊寅朔、廢朝、雨也、宴五位已上於朝堂、○辛巳、地震、○壬午、授從三位長屋王正三位、正五位上長田王、佐伯宿禰百足並從四位下、正六位上猪名眞人法麻呂、多治比眞人廣足、大伴宿禰祖父麻呂、小野朝臣牛養、土師宿禰大麻呂、美努連岡麻呂、並從五位下、○二月己酉、令攝津國罷大隅媛嶋二牧、聽佰姓佃食之、○丁巳、出雲國國造外正七位上出雲臣果安、齋竟奏神賀事、神祇大副中臣朝臣人足、以其詞奏聞、是日、百官齋焉、自果安至祝部、一百一十餘人、進位賜祿各有差、○三月癸卯、割河內國和泉日根兩郡、令供珍努宮、

○奏神賀事、太政官式に凡出雲國造國司依例銓擬言上卽於太政官補任如レ任諸國郡司云々還國一年齎畢國司率國造入朝奏神壽詞とあり神賀事卽ち神壽詞なり其詞は祝詞式に出づ　○一百一十餘人、原本十を千に作る諸本に據て改む　(三月)珍努宮、允恭紀八年宮室を河內茅渟に造り衣通郎姬をして居らしむ九年二月幸茅渟宮とあり天平十六年十月紀には太上天皇行幸珍努離宮と見ゆ和泉志に茅渟宮舊趾在日根郡上郷中村とあり今泉南郡上之郷村なり原本宮を官に作る紀略に據て改む

(四月)贈少紫、少は小に通ず小紫は大化五年所定冠位十九階の第六等　○贈大紫星川臣麻呂、原本紫を雲に作る天武紀に九年正月小錦中星川臣麿卒以壬申年功贈大紫位とあるに據て改む　○贈大錦下、大錦下其他の冠位は紀下附錄に見ゆ　○宇佐伎、天武紀兎の一字に作り寶字元年紀亦同じ　○贈大錦下文直成覺、金本閣本等に大の字缺く蓋後人の妄に塡るもの寶字元年紀贈小錦下に作るされば大は小の誤なるべし　○禰麻呂、原本禰を彌に作る宮本に據て改む　○黃文連、原本黃を昔に作る淀本に據て改む　○大鳥、此上に恐くは河內國の三字を脫す　○置和泉監、類史に和泉國を置くとありされど五月充和泉監卽六月置和泉監史生三人とあり天平十三年八月紀に和泉監并河內國とあれば此時未だ國と稱せざること明なり　○勤加、此二字は諸本に據て補ふ　○字育、字書に字は愛也とあり　○肅清、考課令に强濟諸事肅清所部爲國司之最とあり　○撫養乖方、同令に凡國郡司撫育有方戶口增益者各准見戶爲十分論加二分云々若撫養乖方戶口減損者各准增戶法亦減一分降一等云々とあり　○計帳、戶令に凡造計帳每年六月卅日以前申送太政官尙ほ賦役令民部式に見えたり　○以制所委、考證云制疑副字之譌　○從五位上坂本朝臣、原本上を下に作るを元年四月紀に據て改む　○大足、養老四年正月紀に大足とあれば何れとも定め難し

○夏四月癸丑(八)、詔(スラク)、壬申(ノ)年、功臣贈少紫村國連小依(ガ)息從六位下志我麻呂、贈大紫星川(ホシカハノ)臣麻呂息從七位上黑麻呂、贈大錦下坂上(サカノウヘノ)直熊毛、息正六位下宗大、贈小錦上置始連宇佐伎(オキソメノウサギノ)息正八位下虫麻呂、贈大錦下文直成覺、息從七位上古麻呂、贈直大壹文、忌寸知德、息從七位上鹽麻呂、贈直大壹丸部(ワニベノ)臣君手、息從六位上大石、贈正四位上文、忌寸禰麻呂、息正七位下馬養、贈正四位下黃文、連大伴、息從七位上粳麻呂、贈從五位上尾張、宿禰大隅、息正八位下稻置等一十人、賜(ニフ)田(ヲ)各有差、○戊午(十三)、雨(フレリ)霰、○甲子(十九)、割(テ)大鳥和泉日根三郡、始置(メテ)和泉監焉、○乙丑(廿)、詔曰(ノ)、凡貢調脚夫、入京之日、所司親臨(マノアタリミテ)、察其備儲、若有國司勤加勸課、能合上制、則與(ヘヨ)字育和惠(ニノ)、肅清(スルノ)所部之寀、不存教喩、事有闕乏、則居撫養乖方、境內荒蕪之科、依其功過、必從黜陟、又比年計帳、具言如功、推勘物數、足以掩身、然入京人夫、衣服破弊、菜色猶多、空著公帳、徒延聲譽、務爲欺謾、以邀其課、國郡司如此、朕將何任、自今以去、宜恤民隱、以制所委、仍錄部內豐儉農桑增益言上、○壬申(廿七)、以從四位下大野王爲彈正尹、從五位上坂本朝臣阿曾麻呂爲參河守、從五位下高向朝臣大足爲下總守、從五位下榎井朝臣廣國爲丹波守、從五位下山上臣憶良爲伯耆守、正五位下船連秦勝爲出雲守、從五位下巨勢朝臣安麻呂爲備後守、從五位下當麻眞人大名爲伊豫守、

○五月己丑(十四)、制(スラク)、諸國軍團大少毅、不得連任(スルヲ)郡領三等以上親也、其先已任訖(ニジラバ)、轉補(セヨ)他國、○庚寅(十五)、詔曰(ノタク)、崇飭(スルハ)法藏、肅敬(ヲ)爲本、營修(スルハ)佛廟、清淨(ヲ)爲先、今聞、諸國寺家、多不如法、或草堂始闢、爭求額題、幢幡僅施、卽訴田畝、或房舍不脩、馬牛群聚、門庭荒廢、荆棘彌生、遂使無上尊像、永蒙塵穢、甚深法藏、不免風雨、多歷年代、絕無構成、於事斟量、極乖崇敬、今故併兼

○門庭、類史庭を屋に作る
○永蒙塵穢、永蒙の二字は金本閣本及類史に據て補ふ
○併兼數寺、佛寺併合の事養老五年五月紀及天平七年六月紀等に見ゆ
○檀越、祖庭事苑五に檀那此云施者越謂度越彼岸とあり施主と云に同じ
○部内、原本部を郡に作る類史及藤原家傳に據て改む
○附使、原本使を便に作る金本閣本及類史に據て改む
○莫住、原本住を任に作る金本閣本及類史に據て改む
○諠擾、原本諠を誼に作る淀本及類史に據て改む
○不得、三代格得を聽に作る
○部内、原本部を郡に作る類史に據て改む
○壇區、淀本壇を疆に作る疆壇同じ
○匡正、原本匡を目に作る曾本淀本及類史に據て改む
○始置高麗郡、抄國郡部に武藏國郡名高麗古末とあり後入間郡に併せらる始の字は紀略に據て補ふ
○置戍、原本買成に作る淀イ本に據て改む
○隼人、原本隼を進に作る閣イ本に據て改む
○限六年相替、職員令義解に隼人者分番上下以一年爲限とあり
○元興寺、崇峻紀推古紀に見ゆ元高市郡飛鳥に在りて飛鳥寺又法興寺と呼びしを平城京に徙せしなり大和志に元興寺町に在り云々と見え今奈良市三條通猿澤池の南四町四方は其舊趾にして興福寺と相對せり
○丙申、原本申を午に作る諸本に據て改む
○遵奉、原本遵を道に作る諸本に據て改む

《七月》阿倍朝臣爾閑、大寶元年十一月紀並に和銅元年三月引田朝臣爾閑とあると同人なり
《八月》事力、和銅元年三月紀(六六頁)に注す
○十七日符、和銅二年六

數寺合成一區庶幾同力共造更興頽法諸國司等宜明告國師衆僧及檀越等條錄部内寺家可合并財物附使奏聞又聞諸國寺家堂塔雖成僧尼莫住禮佛無聞檀越子孫惣攝田畝專養妻子不供衆僧因作諍訟諠擾國郡自今以後嚴加禁斷其所有財物田園並須國師衆僧及國司檀越等相對檢校分明案記充用之日共判出付不得依舊檀越等專制近江國守從四位上藤原朝臣武智麻呂言部内諸寺多割墐區無不造脩虛上名籍觀其如此更無異量所有田園自欲專利若不匡正恐致滅法臣等商量人能弘道先哲格言闡揚佛法聖朝上願方今人情稍薄釋教陵遲非獨近江餘國亦爾望遍下諸國革弊還淳更張弛綱仰稱聖願許之○辛卯以駿河甲斐相摸上總下總常陸下野七國高麗人千七百九十九人遷于武藏國始置高麗郡焉大宰府言豐後伊豫二國之界從來置戍不許往還但高下尊卑不須別宜五位以上差使往還不在禁限又薩摩大隅二國貢隼人已經八歲道路遙隔去來不便或父母老疾或妻子單貧請限六年相替並許之始徙建元興寺于左京六條四坊○丙申勅大宰府佰姓家有藏白鐍先加禁斷然不遵奉隱藏賣買是以鑄錢惡黨多肆奸詐連及之徒陷罪不少宜嚴加禁制無更使然若有白鐍搜求納於官司○丁酉制大學典藥生等業未成立妄求薦舉如是之徒自今以去不得補任國博士及醫師○癸卯充僧綱及和泉監印弓五千三百七十四張充大宰府○六月辛亥正七位上馬史伊麻呂等獻新羅國紫驃馬二疋高五尺五寸○甲子美濃守從四位下笠朝臣麻呂爲兼尾張守○乙丑制王臣五位已上以散位六位已下欲充資家者人別六人已下聽之○丁卯始置和泉監史生三人

○紫驃馬、抄牛馬部に說文云驃漢語抄云驃馬白鹿毛也赤驃馬赤鹿毛也黃馬同上黃白馬也新撰字鏡に驃赤久利介とあり　○五尺五寸、五寸の二字は紀略に據て補ふ金本閣本等五丈五尺に作るは非なり　○資家、考證に資人家令なりと云

○秋七月庚子(甲戌朔)、從四位下阿倍朝臣爾閑卒、○八月壬子(甲辰朔)、大宰府言、帥以下事力依和銅二年六月十七日符各減半給綿自此以來駈使丁乏凡諸屬官並爲辛苦請停綿給丁欲得存濟許之○甲寅、二品志貴親王

月紀に癸丑勅自二大宰一率二以下至二于品官一事力半減とあり癸丑は廿八日なればこと異れり原本符を府に作る諸本に據て改む

○二品志貴親王薨、志貴親王は日本紀及下文に施基或は芝基に作る天智天皇の皇子にして光仁天皇の御父に坐す、考證に大日本史注云光仁紀寶龜二年始設二田原天皇八月九日忌齋一是月甲辰朔九日壬子十一日甲寅蓋九日薨而十一日奏之也と云り

○遣、山崎校本に據て補ふに作る狩谷校本に據て改む

元年歸不二再往一唐書所載粟田者蓋縣守也養老元年當二唐開元五年一與二所謂開元初合一云

仲麻呂唐書亦以二仲麻呂一爲二是時副使一蓋安麻呂仲麻呂同姓名字亦相涉致二此混淆一也按仲麻呂天平十一年十一月紀及寶龜十年四月紀並書二學生一又據僧顯昭古今集抄引二國史一仲麻呂年十六中選爲二遣唐留學一則非二副使一明矣と云

○大錄事、大の字は金本闕本等に據て補ふ

（九月）山背甲作、鎧作韓鍛治等の雜戸を免されて公民とされしこと養老六年三月及天平勝寶四年二月紀等に見ゆ山背甲作は蓋山城國綴喜郡甲作郷に住居して其業に從事せしなるべし

○客姓、姓氏錄に載せず天平十八年九月紀に客君狛麻呂見え續後紀に嘉祥二年正月山城國愛宕郡人

○遣二從四位下六人部王、正五位下縣犬養宿禰筑紫、監二護喪事一親王、天智天皇第七之皇子也、寶龜元年、追尊稱御春日宮天皇、○癸亥、備中國淺口郡犬養部鴈手、昔配二飛鳥寺燒鹽戸一、誤入二賤例一、至是遂訴免之、是日、以二從四位下多治比眞人縣守一爲二遣唐押使一、從五位上阿倍朝臣安麻呂爲二大使一、正六位下藤原朝臣馬養爲二副使一、大判官一人、少判官二人、大錄事二人、少錄事二人、○己巳、授二正六位下藤原朝臣馬養從五位下一、

○追尊稱御春日宮天皇、寶龜元年十一月なり　○賤例、例は列の誤なるべし賤列は賤民の列なり　○遂訴、原本訴を許

○多治比眞人縣守、大日本史注に新唐書日本傳曰開元初粟田復朝請一從二諸儒一授レ經云々據レ史粟田眞人大寶二年如レ唐慶雲

○九月丙子、以二從五位下大伴宿禰山守一、代爲二遣唐大使一、○癸巳、正七位上山背甲作客小友等廿一人、訴免二雜戸一、除二山背甲作四字一、改賜二客姓一、○乙未、從三位中納言巨勢朝臣萬呂言、建二出羽國一、已經二數年一、吏民少稀、狄徒未レ馴、其地膏腴、田野廣寬、請令隨近國民、遷於出羽國、教喻狂狄、兼保地利、許之、因以陸奥國置賜、最上二郡、及信濃、上野、越前、越後、四國、百姓各百戸、隸二出羽國一焉、以二從四位下太朝臣安麻呂一爲二氏長一、○冬十月壬戌、以二從四位下長田王一爲二近江守一、重禁二內外諸司、薄紗朝服、六位以下、羅幞頭、其武官人者、朝服之袋、儲而勿レ著、及幞頭後脚莫レ過二三寸一、○十一月乙亥、以二正五位下夜氣王一爲二備前守一、○辛卯、大嘗、親王已下及百官人等、賜二祿有一差、由機遠江、須機但馬、國郡司二人進位一階、○閏十一月癸卯朔、日有レ蝕之、

○陸奥國云々、國字は山崎校本に據て補ふ狩谷氏曰和銅五年十月丁酉朔紀云割二陸奥國最上置賜二郡一隸二出羽國一焉此又云恐有誤

○信濃云々、又云　見二養老元年二月紀一重複有レ誤

（十月）內外諸司、諸本外の下に記の字あり恐くは衍

○薄紗朝服、紗は抄布帛部に四聲字苑云紗（俗云レ射）似絹太輕薄也とあり朝服に之を用ふるを禁ぜられしなり

○羅幞頭、羅は抄布帛部に唐韻云羅（此間云良一名蟬翼）綺羅亦網羅也とあり孝德紀にウスモノ天武紀持統紀にウスハタとあり同裝束部に辨色立成云幞頭（賀宇布利幞音僕今按楊氏漢語抄說同、唐令等亦用之）とあり幞頭と稱するは字書に幞は帕也帕也廣韻幞頭周武帝所レ製裁二幅中一出二四脚一以幞頭乃名焉とあり六位以下羅幞頭を禁ずることは彈正式に凡除二禮服并參議已上半臂五位已上幞頭一之外不レ得レ著レ羅とあり、原本幞を幞に作る此字倭名抄其他に見えず山崎校本に據て改む

○養老元年春正月乙巳、授二從三位阿倍朝臣宿奈麻呂一正三位、從四位上安八萬王一正四位下、無位酒部王、坂合部王、智努王、御原王、並從四位下、從五位下高安王、門部王、葛木王、並從五位上、從四位下石川朝臣難波麻呂從四位上、正五位上百濟王良虞從四位下、正五位下中臣朝臣人足正五位上、從五位上大伴宿禰宿奈麻呂、穗積朝臣老、多治比眞人廣

【養老元年】酒部王、系詳ならず

○坂合部王、紹運錄境部王とあり天武天皇々子長親王の子

○智努王、同じく長親王の子天平勝寶四年五月文室眞人の姓を賜り後名を淨三と改む

○御原王、紹運錄に御原王（正三中務卿）とあり天武天皇々子舍人親王の息

○高安王、長親王の子川内王の息
○門部王、同上
○葛木王、天武天皇々子
高市皇子の子長屋王の息
○大伴宿禰宿奈麻呂、宿奈の二字は金本閣本等に據て補ふ
○大藏忌寸、原本寸の下に伎の字あり衍なれば削る
○余眞人、原本眞一字衍れり故に削る
○伊部王、系詳ならず
○縣犬養橘宿禰三千代、和銅元年十一月廿五日橘宿禰の姓を賜はりしこと天平八年十一月紀葛城王等上表に見ゆ　○巨勢朝臣麻呂、慶雲二年四月に民部卿、和銅元年三月に右大弁、靈龜元年五月に中納言となる又公卿補任に見ゆ　○大海、書紀に見えず　○志丹、孝德紀二年三月巨勢臣紫檀に作り天武紀十四年三月辛檀努に作る

成、小野朝臣馬養、紀朝臣男人、並正五位下、從五位下賀茂朝臣堅麻呂從五位上、正六位上佐伯宿禰虫麻呂、大藏忌寸國足、余眞人、從六位上朝來直賀須夜、並從五位下、○戊申、授无位伊部王從五位下、又授從四位上縣犬養橘宿禰三千代從三位、○己未、中納言從三位巨勢朝臣麻呂薨、小治田朝小德大海之孫、飛鳥朝京職直大參志丹之子也、

○二月壬申朔、遣唐使祠神祇於蓋山之南、○辛巳、賜大宰帥從三位多治比眞人池守、綾一十疋、絹廿疋、絁卅疋、綿三百屯、布一百端、褒善政也、○壬午、天皇幸難波宮、○丙戌、自難波至和泉宮、○己丑、和泉監正七位上堅部使主石前、進位一階、工匠役夫、賜物有差、○庚寅、車駕還至竹原井頓宮、○辛卯、河內攝津二國、并造行宮司、及專當郡司、大少穀等、賜祿各有差、卽日還宮、○甲午、遣唐使等拜朝、○丙申、制曰、除造宮省之外、令外諸司、判官例無大少、官品宜准令員、判官一人之例、又依

(二月)神祇、臨時祭式に遣蕃國使一時祭云々右擬發使者惣祭天神地祇於郊野とあり
○蓋山、大和志に春日山在南都東一名蓋山とあり舊址は同書に天神祠在南都天滿町東養老元年二月遣唐使祀神祇於蓋山之南
○和泉宮、和泉志に趾在和泉郡府中村とあり今泉北郡國府村大字府中なるべし
○堅部使主、姓氏錄に載せず孝德紀に狛堅部子麻呂稱德紀に堅部使主人主あり又堅部氏靈異記に見ゆ同氏なるべし細井貞雄は堅部は加多曾部と訓むべし姓氏錄に堅祖氏あり百濟人堅祖爲智之後也とあり堅部は蓋此の部曲なりと云り
○竹原井、寶龜二年二月紀に車駕取龍田道還到竹原井行宮と見ゆ河內志に在大縣郡高井田村とあり今中河內郡堅下村大字萬井田あり此地なるべし
○專當郡司、郡の字は紀略に據て補ふ
○判官一人、考證に一人の二字疑衍と云
○依令云々、祿令義解に謂若高官之日少而卑官之日滿者乃從高給也とあり
(三月)罷朝、儀制令に右大臣以上若散一位喪皇帝不視事三日とあり
○并贈從一位、并の字は紀略に據て補ふ
○誄、誄のことは大寶元年七月紀に云り　○物部目、雄略紀に物部連目爲大連と見ゆ　○衛部、考證に未考とあり衛は禁衛の衛ならむ、部は金本閣本等此字なく空白とすされば後人の妄に補ひたるにて疑はし　○大華上、大化五年紀に見ゆ　○宇麻乃、舊事紀に馬古連公とあり乃は古又は子の誤なるべし水本宇麻子に作り公卿補任宇麻呂に作る　○節刀、大寶元年五月紀(二一一頁)に注す　○才伎別勅、祿令に以別勅才伎長上諸司者云々とあり才伎長上の者を云

令、一人帶數官者、祿從多處給、雖高官无上日若滿卑官、上日者、祿從多處、○丁酉、以信濃、上野、越前、越後四國百姓各一百戶、配出羽柵戶焉、○三月癸卯、左大臣正二位石上朝臣麻呂薨、帝深悼惜焉、爲之罷朝、詔遣式部卿正三位長屋王、左大辨從四位上多治比眞人三宅麻呂、就第弔賻之、并贈從一位、右少辨從五位上上毛野朝臣廣人爲太政官之誄、式部少輔正五位下穗積朝臣老爲五位已上之誄、兵部大丞正六位上當麻眞人東人爲六位已下之誄、百姓追慕、無不痛惜焉、大臣、泊瀨朝倉朝庭大連物部目之後、難波朝衛部大華上宇麻乃之子也、○己酉、遣唐押使從四位下多治比眞人縣守賜節刀、○乙丑、制、令外諸司、史生等、一季賜祿、降當司主典祿一等、是當少初位官祿、自非才伎別勅、一同此例也、

○夏四月乙亥、遣久勢女王侍于伊勢大神宮、從官賜祿各有差、是日發

(四月)從官、隨從の官人なり齋宮式云凡齋內親

王臨行預定監送使參議一人或以中納言充之辨一人史一人六位以下官人一人とあり其他に齋宮寮の官人あり　○發入云々、齋王と定められし皇女が野宮の潔齋期を終へて京を出發し伊勢神宮に參入し給ふを云　○丙戌、十七日なり癸未の次に入るべし　○調庸斤兩及云々、賦役令に見えたるを更に改定められしなるべし　○髡髮、字書に髮は鬢の俗字也、髡は鬄髮也とあり　○道服、僧服を云　○桑門、沙門に同じ釋氏要覽に沙門秦譯云勤行謂勤修善法行趣涅槃也、或云沙門那或云桑門とあり　○姦冗、考證に冗當作宄と云　○三綱、上座、寺主、都維那なり　○午前云々、正午以前托鉢することを許し食物以外の衣服等は乞ふを許さずとなり　○行基、天平勝寶元年二月紀及元亨釋書に傳あり　○零疊街衢、字書に零は落也疊は重也とあり道路に多く重なり出合ひて列次なく前後混亂するを云　○合搆朋黨、黨類を招寄せて謀を合するを云原本合を令に作る諸本及紀略に據て改む　○焚剝指臂、僧尼令に凡僧尼不レ得焚レ身捨レ身云々とあり體を傷け命を滅す事を禁ずるなり指を焚くは指を燈として身を燒くなり臂を剝ぐは臂の皮を剝ぎて經を寫すを云　○歷門假說、同令に凡僧尼等令レ俗人付其經像歷門教化とあり百日苦使とあり財物を得むと欲し殊更に俗人に經及佛像を付與し門毎に說廻るを云假說は令に災祥を假說し、語國家に及ぶとあり流言假說して衆を迷はすを云　○詐稱聖道、聖道とは同令義解に謂四果聖人之道也(釋に一、預流果二、一流果三、不還果四、羅漢果也)また集解に聖道謂佛聖之道也とあり聖道に非ることを說きて詐て聖道と稱するを云　○四民、士農工商なり　○持神咒、令集解に持咒謂經之咒也、道術符禁、謂道士法也とあり　○以敕病徒、以の字諸本に據て補ふ　○病人之家、原本之を令に作る狩谷校本に令恐之字と云に據て改む　○巫術、巫者の方術なり　○西朝、西の朝集堂を云　○大倭守、原本大を太に作る金本曾本に據て改む　○從四位下、二年正月紀に據るに正五位下の誤

入、百官送至京城外而還、以從五位下猪名眞人法麻呂爲齋宮頭、○丙戌、祈雨于畿內、○癸未、太政官奏、定調庸斤兩及長短之法、語在別式、○壬辰、詔曰、置職任能、所以教導愚民、設法立制、由其禁斷姦非、頃者百姓乖違法律、恣任其情、剪髮髡鬢、輙著道服、貌似桑門、情挾姦盜、詐僞所以生姦冗自斯起、一也、凡僧尼、寂居寺家、受教傳道、准令云、其有乞食者、三綱連署、午前捧鉢告乞、不得因此更乞餘物、方今小僧行基、并弟子等、零疊街衢、妄說罪福、合搆朋黨、焚剝指臂、歷門假說、强乞餘物、詐稱聖道、妖惑百姓、道俗擾亂、四民棄業、進違釋教、退犯法令、二也、僧尼依佛道、持神咒以救病徒、施湯藥而療痼病、於令聽之、方今僧尼輙向病人之家、詐禱幻惑之情、戾執巫術、逆占吉凶、恐脅耄穉、稍致有求、道俗無別、終生奸亂、三也、如有重病應救、請淨行者、經告僧綱、三綱連署、期日令赴、不得因茲逗留延日、實由主司不加嚴斷、致有此弊、自今以後、不得更然、布告村里、勤加禁止、○甲午、天皇御西朝、大隅薩摩二國、隼人等、奏風俗歌儛、授位賜祿各有差、○乙未、以從五位上上毛野朝臣廣人爲大倭守、從四位下賀茂朝臣吉備麻呂爲河內守、

○五月辛丑、制、諸國織綾、以六丁成疋、○丁未、令上總信濃二國始貢絁調、○丙辰、詔曰、率土百姓、浮浪四方、規避課役、遂仕王臣、或望資人、或求得度、王臣不經本屬、私自駈使、囑請國郡、遂成其志、因茲流宕天下、不歸鄉里、若有斯輩、輙私容止者、揆狀科罪、並如律令、又依令、僧尼取年十六已下不輸庸調者、聽爲童子、而非經國郡、不得輙取、又少丁已上、不須聽之、○辛酉、以大計帳、四季帳、六年見丁帳、青苗簿、輸租帳等、式頒下於七道諸國、○乙丑、以從四位下大伴宿禰男人爲長門守、○六月己巳朔、右京職言、素性仁斯一產三女、賜衣粮并乳母一人、自四月不雨、至于是月、

(五月)辛丑、原本丑の下日の字あり類史紀略に據て削る　○織綾以六丁成疋、主計式上に凡諸國輸調二色綾十丁成疋云々並上絲國七丁成疋中絲國六丁成疋絁絲國五丁成疋とありて細別す　○流宕、原本宕を宿に作る諸本に據て改む　○容止、敕し止むるを云　○聽爲童子、僧尼令に凡僧聽近親鄉里取信心童子供侍とあり年十七各還本色とあるを云　○少丁、戶令に十六以下爲少とあり　○大計帳、民部式に凡京職諸國大帳者毎至班田之年五歲已下男女顯注年紀とあり其式主計式

に見ゆ大帳卽ち計帳なり　○四季帳、民部式に凡式部治部等入色之徒應徵免課役季帳者四孟月十六日各申官官符并帳下省省更勘辨每國造符至後孟月申官行下とあり四季帳とは課役を免ぜらるゝものゝ名を書したる帳なり　○六年見丁帳、戸令に凡戸籍六年一造とあり見丁帳は見在の正丁及中男以上の名を書したる帳を云　○青苗簿、一に苗帳と云唐六典に凡三公以下每年別據已受田及借荒等具所種頃畝造青苗簿申尚書省とあり其名之に據れり簿式は主税式に詳なり簿は原本薄に作る淀本に據て改む　○輸租帳、卽ち租帳なり其式主税式に詳なり　(六月)右京職、紀略に左京職に作る　○素性、詳ならず紀略素姓に類史索姓に作る

(七月)史生、金本閣本等生の字を説す　○辨正、天平元年十月紀に弁淨二年十月紀に辨靜に作る僧綱補任に弁正三論宗春日氏東大寺造畢之後住と見ゆ　○神叡、今昔物語元亨釋書に傳あり　○紀朝臣清人云々、靈龜元年七月紀に已に載す重出なるべし

(八月)他田臣、原本他を池に作る狩谷氏の説に據て改む下同じ、狩谷氏云池田恐他田之誤安倍他田並大彦命之後、池田朝臣豐城入彦命之後、並見姓氏錄非同族也

(九月)少麻呂、和銅二年七月紀に宿奈麻呂に作る　○河内忌寸、錄河内國諸蕃に見ゆ鑿氏と同族なれば此に引けるなるべし　○岡本姓、倭名抄に河内國交野郡岡本郷あり是に因りて請ひしなるべし姓氏錄には載せず　○觀望、曾本淀本及紀略觀を親に作る　○淡海、琵琶湖を云　○行在所、後漢書光武紀の注に天子以四海爲家故謂所居爲行在所と也　○信濃、原本信を倍に作る金本閣本等に據て改む　○當耆郡、民部式及倭名抄多藝に作る今養老郡となれり　○覽多度山美泉、養老瀧なり多度山は養老村大字白石にあり、今養老山と云地誌提要に瀧の高七丈餘幅貳間計とあり覽の字は閣本及類史紀略に據て補ふ今度の行幸につきて十訓抄七、著聞集八等に載する所あり參看すべし　○賜從駕五位以上物、紀略賜は物の字の上にあり　○依智、民部式愛智に作り倭名抄亦同じ　○務義、民部式武義に作り倭名抄拾芥抄武藝に作る今武儀郡と云　○志我、民部式滋賀に作り倭名抄亦同じ

○秋七月己未(戊戌朔)、加左右京職史生各四員、○庚申、以沙門辨正爲少僧都、神叡爲律師、賜從五位下紀朝臣清人穀一百斛、優學士也、○八月庚午(戊辰朔)、正三位安部朝臣宿奈麻呂言、正七位上他田臣萬呂、本系同族、實非異姓、追尋親道、理須改正、請賜安倍他田朝臣姓、許之、○甲戌、遣從五位下多治比眞人廣足於美濃國造行宮、○九月癸卯(丁酉朔)、從五位上臺忌寸少麻呂言、因居命氏、從來恒例、是以河内忌寸因邑被氏、其類不一、請少麻呂率諸子弟改換臺氏、蒙賜岡本姓、許之、○丁未、天皇行幸美濃國、○戊申(十二)、行至近江國、觀望淡海山陰道、伯耆以來、山陽道備後以來、南海道讃岐以來、諸國司等詣行在所、奏土風歌儛、○甲寅(十七)、至美濃國、東海道相摸以來、東山道信濃以來、北陸道越中以來、諸國司等詣行在所、奏風俗之雜伎、○丙辰(廿)、幸當耆郡、覽多度山美泉、賜從駕五位已上物、各有差、○戊午(廿二)、賜從駕主典已上及美濃國司等物、有差、郡領已下雜色四十一人、進位一階、又免不破當耆二郡今年田租、及方縣務義二郡百姓供行宮者租、○癸亥(廿七)、還至近江國、賜從駕五位已上、及近江國司等物、各有差、郡領已下雜色四十餘人、進位一階、又免志我、依智二郡今年田租、及供行宮百姓之租、○甲子(廿八)、車駕還宮、○冬十月戊寅(丁卯朔)、正三位阿倍朝臣宿奈麻呂、正四位下安八萬王、從四位下酒部王、坂合部王、智努王、御原王、百濟王良虞、中臣朝臣人足等、益封各有差、○丁亥(廿一)、以從四位下藤原朝臣房前參議朝政、

○十一月丁酉朔、日有蝕之、○甲辰(八)、高麗百濟二國士卒遭本國亂、投於聖化、朝廷憐其絶域、給復終身、又遣唐使水手已上一房傜役咸免、又九等戸以賤多少勿長、准財爲定矣、○丙午(十)、賜故左大臣從一位石上朝臣麻呂第、絁一百疋、絲四百絇、白綿一千斤、布二百端、○癸丑(十七)、天皇臨

(十一月)本國亂、天智紀に詳なり　○朝廷、原本廷を庭に作る金本閣本等に據て改む　○給復終身、賦役令集解所引の官符に外蕃免課役事高麗百濟敗時投化至于終身課役俱免と見ゆ

○一房僑役咸免、賦役令集解に載する官符に遣唐使事正身一房僑役已免不レ及二別房一と見ゆ房とは古の戸籍は一戸にて頗る大家族のものあり戸中に數房ありたり故に一房のみを免じ他房に及ばずと云り戸と房との區別は東大寺文書に見ゆる戸籍輸租帳等にて明なり

○九等戸、和銅六年二月紀に出づ上々戸より下々戸に至る九等なり

○以賤多少勿長、考證云賤謂二奴婢一也一本作レ賦誤、堀氏曰勿一本作レ幼、元融按幼字一體作レ勿與レ勿字形相涉而譌也集解載官符二云九等戸奴婢事依二長幼一立二平估一仍爲二正價一可レ證と云るが如く賤卽ち奴婢の人數の多少長幼等を以て財に准じて等級を定むるを云

○從一位、伴信友云三月癸卯紀に依らば從の上疑くは贈字脫せしなるべし

○臨軒、古今類書纂要に臨軒天子坐レ朝也又曰二臨御一曰二臨朝一とあり玉座に卽かせ給ふことなり

○皮膚、原本膚を虜に作る金本闕本等に據て改む

○甚有其驗、甚有の二字は金本闕本等に據て補ふ

○白髮反黑、反は變の借字又は省字なること率を卒、辨を弁に作れるが如し

○光武時云々、後漢書光武紀に中元元年是夏京師醴泉湧出飲之者固疾皆瘉惟眇蹇者不レ瘳と見ゆ

○皆愈、原本皆を平に作る諸本に據て改む

○符瑞書、考證に隨書經籍志、唐書藝文志並不レ載案唐志有二顧野王符瑞圖十卷一疑是也と云

○醴泉、持統紀七年十一月遣二沙門法員等一試飲近江國益須郡醴泉一又八年三月詔にも見ゆ、治部式に醴泉美泉也其味美甘狀如二醴酒一とあり大瑞なり

○庸虛、原本庸を痛に作る金本淀本及紀略に據て改む

○一石五斗、原本石を斛に作る金本闕本曾本等に據て改む

○癸丑、前に已に出づ衍ならむ

○介、諸本及紀略に據て補ふ

○麻呂、懷風藻に萬里に

軒、詔曰、朕以今年九月、到二美濃國一不破行宮一、留連數日、因覽當者郡多度山美泉、自盥手面、皮膚如レ滑、亦洗痛處、無レ不二除愈一、在朕之躬、甚有二其驗一、又就而飲二浴之一者、或白髮反レ黑、或頹髮更生、或闇目如レ明、自餘痼疾、咸皆平愈、昔聞、後漢光武時、醴泉出、飲之者、痼疾皆愈、符瑞書曰、醴泉者美泉、可二以養一レ老、蓋水之精也、寔惟美泉、卽合二大瑞一、朕雖二庸虛一、何違二天貺一、可レ大二赦天下一、改二靈龜三年一、爲二養老元年一、天下老人年八十已上、授二位一階一、若至二五位一、不レ在二授限一、百歲已上者、賜二絁三疋、綿三屯、布四端、粟二石、九十已上者、絁二疋、綿二屯、布三端、粟一石五斗、八十已上者、絁一疋、綿一屯、布二端、粟一石、僧尼亦准二此例一、孝子順孫、義夫節婦、表二其門閭一、終レ身勿レ事、鰥寡惸獨疾病之徒、不レ能自存者、量加賑恤、仍令二長官親自慰問一、加二給湯藥一、亡命山澤、藏二禁兵器一、百日不レ首、復レ罪如レ初、又美濃國司、及當者郡司等、加二位一階一、又復二當者郡來年調庸一、餘郡庸、賜二百官人物一各有レ差、女官亦同、癸丑授二美濃守從四位下笠朝臣麻呂從四位上一、介正六位下藤原朝臣麻呂從五位下、○戊午、詔曰、國輸二絹絁一、貴賤有レ差、長短不レ等、或輸二絹一丈九尺一、或輸二絁一丈一尺一、長者直貴、短者直賤、事須二安穩一、理應二均輸一、絲有二精麁一、賦無二貴賤一、不レ可二以一槩一、强二貴賤之理一、布雖レ有レ端、稍有レ不レ便、宜レ隨二便用一、更定二端限一、所司宜レ量二一丁輸物一、作二安穩條例一、自今以後、宜レ錯二百姓副物、及中男正調一、其應レ供二官主用料等物一、所司宜レ支二度年別用度一、並隨二鄉土所出一、付レ國、役二中男一進、若中男不レ足者、卽以折役雜徭、於是太政官議奏、精麁絹絁長短廣闊之法、語在二格中一、○丁巳、車駕幸二和泉離宮一、免二河內國今年調一、賜二國司祿一、有レ差、○十二月壬申、太政官處分、始授二五位一、及從二外任一、遷二京官一者、會賜レ祿日、仍入二賜例一、○丁亥、令二美濃國一、立春、曉挹二醴泉一而貢、於京都一、爲二醴酒一也、

作る萬里麻呂古訓相通ず　○戊午、下の丁巳の次に置くべし是月丁酉朔なれば戊午は廿二日なり　○絲有精麁、諸本絲を熊に作る三代格に據て改む　○賦無貴賤、原本賦を賤に作る諸本に據て改む　○更定端限、賦役令集解に此年十二月二日の格を載せて調布長肆丈貳尺闊貳尺肆寸一丁輸貳丈捌尺庸布壹丈肆尺并肆丈貳尺卽以爲端常陸曝布以三丁成兩端上總細布長貳丈壹尺以二丁成端望多布長壹丈肆尺以三丁成端其輸絁鄕及上總常陸者以二丁之庸成段又云庸布布輸一人一丈四尺以二丁之庸布成段とあり按に格文は二日に、此詔は廿二日に發せられしなるべし　○宜量、三代格量の上に商字あり　○百姓副物、三代格に百姓の下人身の二字あり副物の事は孝德紀に凡調副物鹽貲亦隨鄕土所出と見え賦役令に其調副物正丁一人紫三兩云々とあり　○中男不足者云々、中男とは戶令に廿以下爲中とあり十六歲以上二十歲までを云三代格に若有不足中男之功者卽以折役人夫之雜徭とあり　○以折役雜徭、原本折を料に作り金本斷に作る格及集解に據て改む　○精麁絹絁、原本絹の下に麁絹の二字あり金本曾本に據て削る　○丁巳、戊午の上に在るべし　(十二月)立春曉云々、考證に主水式を引て云後世立春供若水儀疑權輿于此と云り

續日本紀卷第七

(二月)外散位、位に內位外位の別あり外位にて職掌なきを外散位と云　(三月)並爲中納言、並の字は上文の例に據て補ふ　(四月)佐伯宿禰百足、

【養老二年】廣湍王正四位下、正以下四字は淀本及六年正月紀に據て補ふ　○正五位下賀茂朝臣、元年五月紀に從四位下とあり何れか誤なるべし　○三阿麻呂、狩谷校本云阿一本作河又一作珂

續日本紀卷第八

起養老二年正月盡五年十二月

從四位下行民部大輔兼左兵衞督皇太子學士臣菅野朝臣眞道等奉　勅撰

日本根子高瑞淨足姬天皇　元正天皇中

二年春正月庚子、詔授二品舍人親王一品、從四位上廣湍王正四位下、(戊午)(丙申朔)(五)

无位大井王從五位下、從四位下忌部宿禰子人、阿倍朝臣廣庭、並從四位上、正五位下賀茂朝臣吉備麻呂從四位下、正五位下穗積朝臣老、紀宿禰賀佐麻呂、久米朝臣三阿麻呂、當麻眞人東人、高橋朝臣安麻呂、巨勢朝臣足人、縣犬養宿禰石足、大伴宿禰首、村國連志賀麻呂、王仲文、並從五位下、○二月壬申、行幸美濃國醴泉、○甲申、從駕百寮、至于輿丁、賜絁布錢有差、○己丑、行所經至美濃、尾張、伊賀、伊勢等國郡司、及外散位已上、授位賜祿各有差、○三月戊戌、車駕自美濃至、○乙巳、以正三位長(二月)(廿四)(七)(西賓朔)(廿四)(丙申朔)(十九)

大寶二年紀に始見、和銅元年下總守となる　○乙亥、原本丙辰に作る干支を推すに此月丙辰なし丙辰は三月廿一日なり淀本及紀略に據て改む乙亥は十一日なり　○條、原本修に作る、修は條の誤なれば改む　○兼治肥後國、續後紀承和二年正月紀に首名の孫廣道に姓當道朝臣を賜ふこと見え其文中に和銅年中肥後守道君首名治迹有レ聲永存遺愛とあり　○雞肫、肫は純に同じ字書に純本作レ豚豕子也或作レ肫とあり　○皆有章程、雞豚の飼育に就ても規程の整頓せるを云　○曲盡事宜、原本曲を典に作る淀本に據て改む　○勘當、律令の正條に勘へ當てゝ正邪を決するを云孝德紀並に天平寶字七年十月紀及軍防令彈正式等に見ゆ　○味生池、肥後國志に味生池飽田郡池上村池邊寺ノ前ヨリ今ノ池上村新村ノ邊ニ續キタル田地ノ中ニ往古ハ大ナル池アリ是ヲ味生ノ池ト云とあり　○溫給、ゆるやかに足るを云　○稱首、神龜二年九月詔に騰レ茂飛レ英欝爲稱首と見ゆ、稱首とは先づ第一に其名を擧ぐるを云　○及卒、懷風藻に年五十六とあり　三代實錄貞觀七年十一月詔贈首名從四位下と見ゆ　○百姓祠之、三才圖會に明神、在所不分明、祭神道君首名とあるは何に據て書けるか肥後國志には國中ニ所々大明神ト稱スル小祠

屋王、安倍朝臣宿奈麻呂、並爲大納言、從三位多治比眞人池守、從四位上巨勢朝臣祖父、大伴宿禰旅人、並爲中納言、○乙卯、以少納言正五位下小野朝臣馬養、爲遣新羅大使、○夏四月乙丑朔、從四位下佐伯宿禰百足卒、○乙亥、筑後守正五位下道君首名卒、首名少治律令、曉習吏職、和銅末、出爲筑後守、兼治肥後國、勸人生業、爲制條教、耕營頃畝樹菓菜、下及雞肫、皆有章程、曲盡事宜、既而時案行、如有不遵教者、隨加勸當、始者老少竊怨罵之、及收其實、莫不悅服、一兩年間、國中化之、又興築陂池、以廣溉灌、肥後味生池、及筑後往々陂池、皆是也、由是人蒙其利、于今溫給、皆首名之力焉、故言吏事者、咸以爲稱首、及卒百姓祠之、○癸酉、太政官處分、凡主政主帳者、官之判補、出身灼然、而以理解任、更從白丁、前勞徒廢、後苦實多、於義商量、其違道理、宜依出身之法、雖解見任、猶上國府、令續其勞、內外散位、仍免雜徭、

《五月》能登國、天平十三年十二月越中國に併せ寶字元年五月又分立す　○安房國、同上　○割陸奥國、原本陸奥を常陸に作る狩谷氏は常陸一本作陸奥令御抄引亦作陸奥可レ從といひ令抄に陸奥國之石城云々とあるに據て改む　○石城云々、古事記に道奥石城國造見え舊事紀に道奥菊多國造及阿尺、染羽、浮田、信夫、白河、石背、石城等の國造見ゆ後之を廢して郡とし陸奥國に隷けたるを明治の御代に至て更に磐城岩代國を置かる　○亘理、原本白理に作る淀本に據て改む　○常陸國之菊多、原本に常陸國之の四字なし金本閣本及令抄に據て補ふ　○多珂、原本珂を阿に作る諸本に據て改む　○伊豫國、原本豫を與に作る諸本に據て改む　○迄遠、字書に迄は迂の本字とあり　○墺出、狩谷氏云出一本作里又一作土　○禁三關云々、始て儉仗を給ふこと和銅元年三月紀に見ゆ　○大宰、原本大を太に作る諸本に據て改む下同じ　○石上朝臣豐庭卒、慶雲元年紀に始見、和銅四年九月將軍同十一月右將軍となる

《六月》先是減庸、慶雲三年五月紀に見ゆ

アリ里俗田神ナリト云とあり首名とは別なるべし　○官之判補、選叙令に凡任官云々主政主帳及家令等判任舍人史生使部伴部帳內資人等式部判補とあり官は太政官を云　○出身灼然、任用の法は令に明かなるを云、身の字は諸本に據て補ふ　○其違道理、狩谷氏云其恐甚誤　○令續其勞、慶雲元年六月紀に出づ　○雜徭、庸役の外に雜事に使役するを云、賦役令に令條外雜徭者每人均使摠不得過六十日とあり義解に徭訓役凡調庸之外國中諸事不論大小摠爲雜徭と見ゆ

○五月甲午朔、日有蝕之、○乙未、割越前國之羽咋、能登、鳳至、珠洲四郡、始置能登國、割上總國之平群、安房、朝夷、長狹四郡、置安房國、割陸奥國之石城、標葉、行方、宇太、亘理、常陸國之菊多六郡、置石城國、割白河、石背、會津、安積、信夫五郡、置石背國、割常陸國多珂郡之鄕二百一十烟、名曰菊多郡、屬石背國焉、○庚子、土左國言、公私使直指土左、而其道經伊豫國、行程迄遠、山谷險難、但阿波國境出相接、往還甚易、請就此國、以爲通路、許之、○甲辰、禁三關及大宰陸奥等國司、傔仗取白丁、○丙辰、遣新羅使等辭見、○庚申、定衞士數、國別有差、○癸亥、從四位上石上朝臣豐庭卒、○六月丁卯、令大宰所部之國、輸庸同於諸國、先是減庸、至是復舊焉、始置大炊寮史生四員、

（八月）乙亥、類史百九十風俗部蝦夷條に養老二年八月乙亥（十四日）甲申（廿五日）と載せ本文缺く乙亥以下二十二字は扶桑略記に據て補ふ

（九月）九月庚戌、干支を推すに八月庚戌なし九月は壬辰朔にて庚戌は十九日なり故に九月の二字を補ふ

○法興寺、元興寺の一名なり之を遷すこと靈龜二年五月紀に云り

（十月）請益、論語に出づ、己れ教を受けて更に請ふ所あるを云

○後進之領袖、晉書裴秀傳に出づ字書に衣之提挈必在領袖一故以喩人之能提挈其下者とあり

○名臘、臘は臘の俗字なり雜令義解に臘猶年也年終有臘故稱年爲臘言僧尼夏月安居乃得一臘一と見え錄名臘一とは生年を錄せずして名と臘年卽ち法歳を錄するを云

○五宗、華嚴、法相、三論、倶舍、成實を云

○三藏、釋氏要覽に經、律、論謂之三藏一又佛藏、菩薩藏、聲聞藏名三藏一藏者攝也謂攝一人攝一法故とあり

○辯談、原本辯を辨に作る金本に據て改む

○該達、金本曾本淀本該を核に作る

○皆得其道、原本道を宗に作る諸本に據て改む

○表章智德、金本閣本曾本章の字なく表の上に崇の字あり

○燕石、荀子に宋之愚人得燕石藏之以爲寶周客聞而往觀掩口笑曰此燕石也

○楚璞、原本璞を撲に作る諸本に據て改む韓非子に楚人和氏得玉璞楚山中とあり燕石に對して優れたる玉を云

○虞韶、韶は虞舜の樂也とあり舜の時代の美はしき音樂を云

○鄭音、鄭國之音、謂淫聲也とあり

○不雜聲曲、原本雜を新に作る諸本に據て改む

○將須、金イ本閣イ本淀本等須を使に作る

○象德定水、象德は大德を象に喩へたるなり定水は大藏法數に定者禪定也、金剛經注に禪定卽是清淨心也とあり清淨なる水を云

○波澄、狩谷氏云波一作清

○龍智惠燭、龍智は象德と同じく智識のすぐれたるを龍に喩へたるなり惠燭は神龜四年十二月勅に僧正義淵法師云々盛扇玄風於四方一照惠炬於三界一とある惠炬と同じく惠みの燭の意定水と相對して云り

○芳照聞於朝聽、朝廷に奏聞するを云

○金口、釋迦の言を云

○玉條、法律を云

○能叶清議、原本議を誠に作る金本閣本に據て改む

○練行、僧尼令義解に練者陶練也言陶練情性一以求解脫一也とあり

○入山、同令に凡僧尼有禪行修道一意樂寂靜不交於俗欲求山居服餌者三綱連署在京經玄蕃在外者三綱經國郡勘實並錄申官とあり

○山河之清、原本河を阿に作る淀本に據て改む

○雜煙、考證云按煙卽燻字古人或省作煙猶鼎作鼐鼎作鼐之類

○煙霧之彩、風色の麗はしきを云

○是色告、訛誤あるべし意義通ぜず

○秋八月甲戌（壬戌朔十三）、齋宮寮公文、始用印焉、○乙亥（十四）、出羽并渡嶋蝦夷八十七人來、貢馬千疋、則授位祿、○九月庚戌（壬辰朔十九）、以從四位上藤原朝臣武智麻呂、爲式部卿、正五位上穗積朝臣老爲大輔、從五位下中臣朝臣東人爲少輔、從五位下波多眞人與射爲員外少輔、○甲寅（廿三）、遷法興寺於新京、○冬十月（辛酉朔十）庚午、太政官告僧綱曰、智鑒冠時、衆所推讓、可爲法門之師範者、宜舉其人、顯表高德、又有請益無倦、繼踵於師、材堪後進之領袖者、亦錄名臘、舉而牒之、五宗之學、三藏之教、論討有異、辯談不同、自能該達宗義、最稱宗師、每宗舉人並錄、次德根有性分、業亦麁細、宜隨性分、皆令就學、凡諸僧徒、勿使浮遊、或講論衆理、學習諸義、或唱誦經文、修道禪行、各令分業、皆得其道、表章智德、顯紀行能、所以燕石楚璞、各分明輝、虞韶鄭音、不雜聲曲、將須象德定水、瀾波澄於法襟、龍智惠燭、芳照聞於朝聽、加以、法師非法、還墜佛教、是金口之所深誡、道人違道、輒輕皇憲、亦玉條之所重禁、僧綱宜廻靜鑒、能叶清議、其居非精舍、行乖練行、任意入山、輒造菴窟、混濁山河之清、雜燻煙霧之彩、又經曰、是色告穢雜市里、情雖遂於和光、形無別于窮乞、如斯之輩、愼加禁喩、○庚辰（二十）、大宰府言、遣唐使從四位下多治比眞人縣守來歸、

○十一月（辛卯朔十一）壬寅、彗星守月、○癸丑（廿二）、始差畿內兵士、守衛宮城、○十二月（庚申朔十二）丙寅、詔曰、朕虔承寶位、仰憑霄搆、君臨天下、四年于茲、上則昊穹、下字黎庶、庸愚之民、自挂疎網、有司之法、賞于常憲、每念於此、朕甚愍焉、思欲廣開至道、遐扇淳風、爲惡之徒、感深仁以遷善、有犯之輩、遵令軌以靡風、但自昔及今、雜言大赦、唯該小罪、八虐不霑、朕恭奉爲太上天皇、思降非常之澤、可大赦天下、養老二年十二月七日子時已前、大辟罪已

（十一月）霄搆、魏書廣陵王羽傳仰摹乾構一君臨萬宇一とあり霄搆は乾構に同じ字書に霄は天空之境也構は架屋也また廈屋也とあり

○昊穹、昊は文選注に天也とあり穹は爾雅に穹蒼蒼天也注に天形穹隆、其色蒼々、故名とあれば同じく天の意なり

○挂疎網、法令に觸るゝを云

○眞于常憲、法律を以て處分するを云金本閣本に

常を當に作る
○該小罪、金本闕本に該を詫に作る
○前年大使、大寶元年正月粟田眞人遣唐執節使となり坂合部大分副使となり翌年出發せしを云大寶二年より今年まで十七年に及べり

【養老三年】春正月、春は類史紀略に據て補ふ
○廢朝、原本なし諸本及類史紀略に據て補ふ
○獨底船、詳ならず、考證には蓋獨木船也と云
○賛引皇太子也、賛引は字書に賛は導也、引も同じく導也とありて御先導するを云、類史に也の字なし
○拜見、拜謁に同じ
○從四位上路眞人、原本上を下に作る金本淀本曾本に據て改む
○邑治、原本邑を色に作る前後の例に據て改む
○石川朝臣難波麻呂、原本石を原に作る元年正月紀に據て改む
○吉智首、懐風藻に見ゆ

下、罪无輕重、繫囚見徒、私鑄錢、并盜人、及八虐、常赦所不原、咸赦除之、其廢疾之徒、不能自存、量加賑恤、仍令長官親自慰問、兼給湯藥、僧尼亦同、布告天下、知朕意焉、○壬申、多治比眞人縣守等自唐國至、○甲戌、進節刀、此度使人、略無闕亡、前年大使從五位上坂合部宿禰大分、亦隨而來歸、

（己未）三年春正月庚寅朔、廢朝、大風也、以舶二艘、獨底船十艘、充大宰府、○辛卯、天皇御大極殿受朝、從四位上藤原朝臣武智麻呂、從四位下多治比眞人縣守二人、賛引皇太子（聖武）也、○己亥、入唐使等拜見、皆著唐國所授朝服、○壬寅、授從四位上路眞人大人、巨勢朝臣邑治、石川朝臣難波麻呂、大伴宿禰旅人、多治比眞人三宅麻呂、藤原朝臣武智麻呂、從四位下多治比眞人縣守、並正四位下、從四位下阿倍朝臣首名、石川朝臣石足、藤原朝臣房前、並從四位上、正五位下小治田朝臣安麻呂、縣犬養宿禰筑紫、大伴宿禰山守、藤原朝臣馬養、並正五位上、從五位上坂合部宿禰大分、阿倍朝臣安麻呂、並正五位下、正六位上三野眞人三嶋、吉智首、

神龜元年五月吉智首に姓吉田連を賜ふと見え姓氏錄智須に作る卽ち此なり
○角兄麻呂、角は字書に角音祿續通志に漢商山四皓有角里先生或作角里、後漢有角里若叔と見え支那にて古くより姓氏に此字を用ひしなり兄麻呂は大寶元年八月紀に勅僧惠耀還俗惠耀姓錄名兄麻呂、神龜元年五月紀に從五位下錄兄麻呂に姓羽林連を賜ふと見ゆ ○酒部連、姓氏錄に酒部公と見ゆ景行天皇々子神櫛別命の後なり ○板持連、狩谷氏云按五月癸卯紀云板茂史內麿等賜連姓此豫云連恐誤姓氏錄河內國板茂連伊吉連同祖楊雍之後也とあり ○堅魚、神龜元年十一月紀勝男に三年正月紀勝雄に作る ○馬養、原本馬を鳥に作る諸本に據て改む

角兄麻呂、正六位下大野朝臣東人、小野朝臣老、酒部連相武、從六位上板持連內麻呂、從六位下石上朝臣堅魚、佐伯宿禰馬養、大宅朝臣小國、笠朝臣御室、並從五位下、○乙巳、正四位下安八萬王卒、

（庚申朝）○二月壬戌、初令天下百姓右襟、職事主典已上把笏、其五位以上牙笏、散位亦聽把笏、六位已下木笏、○甲子、正三位粟田朝臣眞人薨、○己巳、遣新羅使正五位下小野朝臣馬養等來歸、○庚午、行幸和泉宮、○丙子、車駕還宮、○（庚寅朝）三月辛卯、始置造藥師寺司史生二人、○乙卯、地震、

（二月）右襟、谷川氏の說に曰く之に據るに左衽の邦たること知るべしといひ藤井高尙氏は推古天皇以來服色制度一に唐樣に模し是に至りて初めて天下の百姓をして襟を右にせしむ思ふに曩時の制は獨官人以上に止まり未だ民庶に及ばざるかと云り歷朝服飾考に天平勝寶四年東大寺大佛開眼の時著用せし衣服の中に左衽の服ありとて其圖を揭げ以て風俗の容易に改まらざることを知るべしと云るを見れば此後も尙左衽の風は存せしなるべし ○把笏、笏は抄服玩具に笏四聲字苑云笏(音忽俗云尺)手板長一尺六寸闊三寸厚五分也とあり把笏に就ては式部式に凡內外諸司史生云々並把笏と見え衣服令に規定ある人は勿論なれど其以外の人々には特に之を把ることを許さざるなり ○牙笏、衣服令に一品以下五位以上牙笏六位已下木笏とあり此と同じ、彈正式に凡五位以上通用牙笏白木笏前詘後直、六位以下官人用木前挫後方とありて位階に依て其制を異にす ○粟田朝臣眞人、公卿補任に大寶二年五月參議、慶雲二年四月中納言、八月從三位、和銅元年三月兼大宰帥とあり

（己未朝）○夏四月丁卯、秦朝元、賜忌寸姓、○乙酉、制、諸大少毅、量其任、與主政同、自今以後、爲判官任、○丙戌、分志摩國塔志郡五鄕、始置佐藝郡、

大穀一人掌撿校兵士充備戎具調習弓馬簡閱陳列事少穀二人掌同大穀とあり　○爲判官任、考證に疑當作爲官判任と云　○塔志郡、塔志は民部式荅志に作り倭名抄拾芥抄同じ　○佐藝郡、地理志料に佐藝者埼也謂斗出海中也徵之本書荅志領六鄕英虞領八鄕而佐藝郡他無所見除英虞郡外無地可充之者蓋本州元一郡至是始爲二郡名曰佐藝郡後改稱英虞郡也と云

（五月）四十人、紀略世人に作る　○巨勢斐太臣、錄右京皇別に巨勢槻田朝臣雄柄宿禰四世孫稻茂臣之後とあり次に巨勢斐太臣見え巨勢槻田同氏とあり　○中臣習宜連、錄右京皇別に中臣習宜朝臣神饒速日命孫味瓊杵田命之後也とあり習宜は姓氏錄考證に大和菅原鄕の地名なるべしスゲと訓べしと云り　○中臣熊凝連、姓氏錄中臣習宜朝臣の次に中臣熊凝朝臣同上とあり熊凝は平群郡の地名　○文部、原本二人部に作る狩谷校本に一本作文部四年六月紀可證とあるに據て改む　○板持史、上に見ゆ　○平群女王、原本群を郡に作る金本淀本に據て改む　○穀、字書に百穀之總名、實也、廣韻に俗の穀字倭名抄に穀和名毛美とあり

○五月己丑朔、日有蝕之、○乙未、新羅貢調使級飡金長言等四十人來朝、○癸卯、無位紀臣龍麻呂等十八人、從七位上巨勢斐太臣大男等二人、從八位上中臣習宜連笠麻呂等四人、從六位上中臣熊凝連古麻呂等七人、從八位下榎井連抬麻呂、並賜朝臣姓、大初位下若湯坐連家主、正八位下阿刀連人足等三人、並賜宿禰姓、无位文部此人等二人、賜文忌寸姓、從五位下板持史內麻呂等十九人、賜連姓、○辛亥、制定諸國貢調短絹狹絁、麁狹絹、美濃狹絁之法、各長六丈、濶一尺九寸、○六月丁卯、皇太子始聽朝政焉、○庚午、從四位上平群女王卒、○辛未、初令諸國、史生主政主帳大少穀把笏焉、○癸酉、制、穀之爲物、經年不腐、自今以後、稅及雜稻、必爲穀而收之、○丙子、令神祇官宮主、左右大舍人寮、別勑長上、畫工司、畫師、雅樂寮、諸師、造宮省、主計寮、主稅寮、笙師、典藥寮、乳長上、左右衞士府、醫師、左右馬寮、馬醫等、始把笏焉、從四位下但馬女王卒、

○別勑長上、選叙令に以別勑及伎術直諸司長上者考限叙法並同職事とあり　○主稅寮、金本閣本曾本寮の字なし　○笏師、原本笏を笏に作る金本曾本淀本に據て改む笏は算に同じ　○乳長上、三代格弘仁十一年二月廿七日官符に難波長柄豐前宮御宇（孝德）天皇御世大山上和藥使主福常習取乳術始授此職云々、類史淳和天皇天長二年四月改乳長上爲乳師とあり　○但馬女王、原本但を借に作る淀本に據て改む

（七月）拔出司、考證に仁和三年七月廿六日丁酉御樂宸殿覽相撲廿七日戊戌云々然後擇拔喚其名令相撲焉、案拔出簡拔雄俊之謂後世廿九日拔出著爲永式然此云初置拔出司者蓋謂置相撲司恐非廿九日拔出之義也とあり　○賀茂役君、文武天皇己亥年五月紀（九頁）に注す參看すべし　○按察使、三代格七に具に事條を載す　○宇合、靈龜二年六月紀馬養に作る

○臣足、考證に臣一本作巨と云

○秋七月辛卯、初置拔出司、○丙申、遷東海、東山、北陸、三道民二百戶、配出羽柵焉、○庚子、從六位上賀茂役首石穗、正六位下千羽三千石等一百六十人、賜賀茂役君姓、始置按察使、令伊勢國守從五位上門部王、管伊賀、志摩二國、遠江國守正五位上大伴宿禰山守、管駿河、伊豆、甲斐三國、常陸國守正五位上藤原朝臣宇合、管安房、上總、下總三國、美濃國守從四位上笠朝臣麻呂、管尾張、參河、信濃三國、武藏國守正四位下多治比眞人縣守、管相摸、上野、下野三國、越前國守正五位下多治比眞人廣成、管能登、越中、越後三國、丹波國守正五位下小野朝臣馬養、管丹後、但馬、因幡三國、出雲國守從五位下息長眞人臣足、管伯耆、石見二國、播磨國守從四位下鴨朝臣吉備麻呂、管備前、美作、備中、淡路四國、伊豫國守從五位上高安王、管阿波、讃岐、土左三國、備後國守正五位下大伴宿

○侵漁、原本漁を滄に作る諸本に據て改む

○聲教、尚書に謂ニ天子之聲威文教一也と見ゆ

○路眞人大人卒、文武紀三年に始見、靈龜元年八月大宰大貳となる

（閏七月）騾馬、原本驛馬に作る紀略に據て改む

○賜國王、賜の字は金本闕本及紀略に據て補ふ

○廣成、原本成を氏に作る紀略及下文に據て改む

○忌部宿禰子人卒、天武紀元年に始見、慶雲三年三月出雲守となる

（八月）別勅云々、式部式に凡令稱ニ初任一者是无祿任ニ有祿一其有祿遷ニ有祿者不入ニ初任之例一但別勅才伎長ニ上諸司一者任ニ職事官一與ニ初任一同とあり

○貢與初任同、考證に貢疑當レ作レ祿不卽有ニ脫文一と云り

○白猪史、原本史の字なし上文に據て補ふ

（九月）攝官、天平三年十一月勲官を置かる卽攝官に同じ蒲生氏職官志に攝官亦猶ニ按察一以ニ王畿一特立ニ其名一也と云り　○地子、田令に凡諸國公田皆國司隨ニ鄕土估價一賃租其價送ニ太政官一以充ニ雜用一とあり賃租卽ち地子なり　○段粟三升、田令に段租稻二束二

禰宿奈麻呂、管ニ安藝、周防二國一、其所レ管國司、若有ニ非違及侵漁一百姓、則按察使親自巡省、量レ狀黜陟、其徒罪以下斷決、流罪以上錄レ狀奏上、若有ニ聲教條修、部內肅淸、具記ニ善最一、言上、○乙巳、大宰大貳正四位下路眞人大人卒、○丙午、補ニ按察使典、○閏七月癸亥、新羅使人等獻ニ調物幷騾馬牡牝各一疋一、○丁卯、賜ニ宴於金長言等一、賜ニ國王及長言等祿一有レ差、是日、以ニ大外記從六位下白猪史廣成一爲ニ遣新羅使一、○辛未、散位從四位上忌部宿禰子人卒、○癸酉、金長言等還蕃、○丁丑、石城國始置ニ驛家一十處、○甲申、賜ニ無位紀臣廣前朝臣姓一、○八月己丑、有司處分、別勅才伎長上者、任ニ職事一貢、與ニ初任一同、○癸巳、遣新羅使白猪史廣成等拜辭、○九月癸亥、以ニ正四位下多治比眞人三宅麻呂一爲ニ河內國攝官一、正四位下巨勢朝臣邑治、爲ニ攝津國攝官一、正四位下大伴宿禰旅人爲ニ山背國攝官一、○丁丑、詔、給ニ天下民戶、陸田一町以上二十町以下、輸ニ地子一段粟三升也、六道諸國遭レ旱飢荒、開ニ義倉一賑恤之、○辛巳、始置ニ衞門府醫師一人、

（十月）大和、考證云和疑倭字

○腹太、同云未レ考

○改爲葛、爲の字は金本曾本に據て補ふ考證云葛下猶有ニ脫文一

○大少毅、金本闕本淀本少を小に作る

○雖由行、狩谷氏云疑有ニ脫字一

○降至、原本至を于に作る諸本に據て改む

○改張、狩谷氏は恐弛張之譌と云

○連改、連は曾本淀本無に作る闕イ本に每に作るは無の訛なるべし

○年齒猶稚、聖武天皇は文武天皇大寶元年御降誕、此に十九歲に成給ふ

○翼贊之功、原本羽翼之功に作る諸本に據て訂す

○況乃、金本闕本等乃を及に作る

○百世松桂云々、毛詩大雅に本支百世とあるに據れり

○合於昭穆、昭穆は宗廟の制にて禮記祭統篇に昭穆者所ニ以別ニ父子遠近長把、義解に束稻舂得ニ米五升一也とあるに比すれば輕し、主稅式に凡公田獲稻上田五百束云々地子各依ニ田品令一輸ニ五分之一一云々とあり此は水田の地子なり　○六道諸國、國の字は金本闕本等に據て補ふ　○始置云々、職員令に衞門府醫師一人とあり職官志に據ニ紀文令條所載疑所追筆一と云り

○冬十月癸巳、大和國人腹太得麻呂姓改爲レ葛、○戊戌、減ニ定京畿及七道諸國軍團、并大少毅兵士等數一、有レ差、但志摩若狹、淡路三國兵士並停、○辛丑、詔曰、開闢已來、法令尙矣、君臣定レ位、運有レ所レ屬、洎ニ于中古一、雖ニ由行一、未レ彰ニ綱目一、降至ニ近江之世一、改張悉備、迄ニ於藤原之朝一、頗有增損、由行連改、以爲恒法、由是稽ニ遠祖之正典一、考ニ列代之皇綱一、承ニ纂洪緒一、此皇太子也、然年齒猶稚、未レ閑ニ政道一、但以握ニ鳳曆一而登ニ極、御ニ龍圖一以臨レ機者、猶資ニ輔佐之才一、乃致ニ太平一、必由ニ翼贊之功一、始有レ安レ運、況乃、舍人新田部親王、百世松桂本枝合ニ於昭穆一、萬雉城石、維磐重ニ乎國家一、理須レ吐ニ納淸直一、能輔ニ洪胤一、資ニ扶仁義一、信翼ニ幼齡一、然則太平之治可レ期、隆泰之運應レ致、可不レ愼哉、今二親王、宗室年長、在レ朕既重、實加ニ褒賞一、深須ニ旌異一、然崇レ德之道、既有ニ舊貫一、貴レ親之理、豈無ニ於今一、其賜一品舍人親王、內舍人二人、大舍人四人、衞士卅人、益ニ封八百戶一、通レ前二千戶、二品新田部親王、內舍人二

幼親疏之序一而無亂也とあり大祖より數へて昭ならば昭、穆ならば穆と同じ昭穆の列に祀らるべき順位にあるを合於昭穆一と云

○萬雉城石云々、周禮冬官考工記匠人に王宮門阿之制五雉、左傳隱元年に都城過二百雉一と見え、注に一雉之墻長三丈高一丈とあり萬雉は城の高大なるを云ひ其城の石の大磐石なるが如くにして國家に重ぜらるとなり　金本閣本淀本維磐を維盤に作る　○信翼、狩谷氏云信恐倍字之譌　○可不愼哉、金本曾本愼の下に者の字あり　○舊貫、舊き慣例を云○五百戸、百の字は金本閣本曾本に據て補ふ

人、大舍人四人、衛士廿人、益二封五百戸一、通二前一千五百戸一、其舍人以供左右雜使、衛士以充二行路防禦一、於戲欽哉、以副二朕意一焉、凡在二卿等一、並宜聞知、

○十一月乙卯朔、詔二僧綱一曰、朕聞、優能崇智、有國者所先、勸善獎學、爲君者所務、於俗既有、於道宜然、神叡法師、幼而卓絶、道性夙成、撫翼法林、濡鱗定水、不踐安遠之講肆、學達三空、未漱澄什之言河、智周二諦一、由是服膺請業者已知實歸、函丈挹教者悉成宗匠、道慈法師、遠涉蒼波、覈異聞於絶境、遐遊赤縣、研妙機於秘記、參跡象龍、振英秦漢、並以戒珠如懷滿月、慧水若寫滄溟、儻使天下桑門智行如此者、豈不殖善根之福田渡苦海之寶筏、朕每嘉歎、不能已也、宜施食封各五十戸、並標揚優賞、用彰有德、○辛酉、少初位上朝妻子手人龍麻呂賜海語連姓、除雜戸、

(十一月)優能、原本能を鈍に作る、類史に據て改む

○撫翼法林、法林は法の林なり定水と對句とす

○濡鱗定水、定水は禪定の水なり上に注す

○安遠、道安と慧遠と二人の高僧なり、共に高僧傳に見ゆ

○三空、一我空、二法空、三俱空と金剛經刊定記に見ゆ

○澄什、伽跋澄と鳩摩羅什と二人の高僧なり

○言河、原本河を阿に作る類史及淀本傍注に據て改む

○二諦、眞俗の二諦なり

○已知實歸、原本知を智に作る諸本及類史に據て改む、考證に王巾頭陀寺碑文云道勝之韻虛往實歸、李善注莊子曰常季問二於仲尼一曰王駘兀者也與夫子一中分魯一立不敎坐不議虛而往實而歸とあり　○函丈、講席を云禮記曲禮に席間函丈、注に函猶容也講問宜相對容丈足以指畫也とあり　○遠涉蒼波、道慈は大寶元年渡唐、養老二年歸朝す　○赤縣、史記孟軻傳に中國名曰赤縣神州とあり支那を云　○秘記、元亨釋書碩師に作る　○參跡、原本參を奈に作る類史及略記に據て改む　○象龍、高僧を云　○振英秦漢、原本振英を旅莫に作る淀本及類史に據て改む、秦漢は赤縣と對句同じく支那を云　○戒珠、法華經倩進修靜戒に猶護明珠一とあり　○滿月、簡文帝釋迦佛像銘滿月爲面青蓮在眸とあり　○慧水、智慧能く煩惱の垢を洗ふを以て水に喩ふ　○若寫滄溟、原本溟を濱に作る閣本に據て改む　○朝妻子手人、手は原本に午とあり考證に據て改む子は衍なるべし手人は工生物故名福田一とあり　○喜歎、原本歎を歡に作る類史に據て改む　○雜戸號、金本閣本に號の字なし　○河內手人、四年六月紀(一五〇頁)に河內手人刀子作廣麻呂改賜下村主姓一免雜戸號一と見ゆ　○不下譯、不の字衍なるべし、持統紀九年(紀下三四二頁)に下譯語諸田見ゆ

○十二月乙酉、充二式部、治部、民部、兵部、刑部、大藏、宮內、春宮、印各一面一、○戊子、始制二定婦女衣服樣一、○庚寅、始以二外六位內外初位、及勳七等子年廿以上一、爲二位分資人一、八年一替、又五位已上家、補二事業防閤伏身一、自是始矣、○戊戌、停備後國安那郡、茨城、葦田郡、常城一、

(十二月)治部、治部の二字は金本閣本淀本に據て補ふ

○位分資人、職分資人に對して云

○八年一替、選叙令に凡叙二舍人一云々帳內資人一並以二八考一爲限とあり

○事業、字書に事は使也奉也とありて貴人の家に事へて其業を執る人を云、主計式に事業藥生云々の下に衛士仕丁事力爲見不輸一と見えて事力とは別なり　○防閤、諸本閣を閤に作る六年閏四月紀及神龜五年三月紀に據て改む防閤は六典に見え貴人の護衛に備ふる人を云神龜五年三月紀參考すべし　○伏身、文獻通考に唐調露元年九月職事五品以上准舊給二伏身一とあり防閤と同じく隨身の類なり　○安那郡、郡の字は閣本曾本に據て補ふ、安閑紀に阿娜國、國造本紀に吉備穴國造あり　○茨城、詳ならず地理志料拔屋鄉の條に高山寺本作二枚原一枚恐榎字之譌云々茨卽榎原也開合音異耳、今備中後月郡有二井原町井原村一或其地とあり　○常城、

葦田郡都禰郷あり、常卽ち都禰或は是歟

【養老四年】公驗、古へ俗人の初て僧尼となる時に治部省より授けらるゝ證書なり令には之を告牒と云、僧尼令義解に告牒者僧尼得度公驗也とあり
○宿奈麻呂、宿の字は上文に據て補ふ
○牛養、原本牛を午に作る諸本に據て改む
○中臣朝臣東人、東人以下六字は諸本に據て補ふ
○君子、原本若子に作る十月戊子紀に據て改む
○虫麻呂、虫の字は五年正月壬子、同甲戌紀に據て補ふ
○高向朝臣人足、靈龜二年四月壬申紀に大足に作る
○巨勢朝臣眞人、眞人以下五字は金本閣本淀本に據て補ふ
○紀朝臣麻呂、金本曾本淀本麻路に作る
○熒惑、火星の別名なり
○渡嶋、北海道なり齊明紀(紀下二一〇頁)に注す
持統紀に越渡嶋に作る
○津輕、齊明紀に注す
○諸君鞍男、錄山城皇別に村公大足彥國押人命之後也とあり和銅六年七月紀に村君東人見ゆ語近し考ふべし
○靺鞨、多賀城碑に去靺鞨國界三千里、五代史に渤海本號靺鞨高麗之別種也云々、又曰黑水靺鞨、本號勿吉當後魏時見中國其國東至海南界高麗西接突厥北鄰室韋蓋肅愼氏之地也とあり今の朝鮮北部より沿海州にかけて國をなせる種族なり飲明紀五年肅愼(紀下五五頁)を見るべし
○阿倍朝臣宿奈麻呂、持統紀八年に始見、慶雲二年四月中納言養老二年三月大納言となる
○比羅夫、大宰帥大錦たること書紀に載せず

(炎申)四年春正月甲寅朔、大宰府獻白鳩、宴親王及近臣於殿上、極歡而罷、賜物有差、○丁巳、始授僧尼公驗、○甲子、授正五位下大伴宿禰宿奈麻呂、大伴宿禰道足、多治比眞人廣成、並正五位上、從五位上三國眞人人足、阿倍朝臣秋麻呂、佐味朝臣加佐麻呂、上毛野朝臣廣人、大伴宿禰牛養、並正五位下、從五位下民忌寸子志比、車持朝臣益、阿倍朝臣駿河、山田史三方、忍海連人成、榎井朝臣廣國、中臣朝臣東人、粟田朝臣人上、鍛冶造大隅、石川朝臣君子、並從五位上、正六位上佐伯宿禰智連、猪名眞人石楯、下毛野朝臣虫麻呂、美乃眞人廣道、高向朝臣人足、石川朝臣夫子、多治比眞人占部、縣犬養宿禰石次、當麻眞人老、阿倍朝臣若足、巨勢朝臣眞人、紀朝臣麻呂、正六位下田中朝臣稻敷、並從五位下、是日、白虹南北竟天、○庚午、熒惑逆行、○丙子、遣渡嶋津輕津司從七位上諸君鞍男等六人於靺鞨國、觀其風俗、○庚辰、始置授刀舍人寮醫師一人、大納言正三位阿倍朝臣宿奈麻呂薨、後岡本朝筑紫大宰帥大錦上比羅夫之子也、

○二月乙酉、令檢校造器二司、造釋奠器、充大膳職大炊寮、○戊戌、夜地動、○壬子、大宰府奏言、隼人反殺大隅國守陽侯史麻呂、○三月丙辰、以中納言正四位下大伴宿禰旅人、爲征隼人持節大將軍、授刀助從五位下笠朝臣御室、民部少輔從五位下巨勢朝臣眞人爲副將軍、○癸亥、勑度三百二十人出家、○甲子、有勑、特加右大臣正二位藤原朝臣不比等授刀資人三十人、○己巳、太政官奏、比來百姓例多乏少、至於公私不辨者衆、若不矜量、家道難存、望請、比年之間、令諸國每年春初出稅貸與百姓、繼其產業、至秋熟後、依數徵納、其稻旣不息利、令當年納足、不得延引、數有逋懸、又除租稅外、公稻擬充國用、一槩無利、恐其頓絕、望請、令諸國每年出擧十束、取利三束、仍令當年本利俱納、又百姓、

○擬充國用、原本擬を授に作る金本閣本曾本に據て改む
○無利、無の字は諸本に據て補ふ
○頓絶、絶は閣本に據て補ふ金本曾本淀本純に作るは頓の訛、頓絶とは利子を收めずして出擧すれば漸く本稲を失ひてゆきつまるを云
○取利三束、六年閏四月太政官奏、公私出擧取利十分之三、天平勝寶六年九月勅、正稅之利擧十取三とあり是なり
○廿二日、原本二の字なし諸本及類史に據て補ふ
○不得過半倍者、原本者を而に作る諸本及類史に據て改む
○令其子姪、令は諸本今に作る類史に據て改む
○半倍、類史此下に奏可之の三字あるは末文に奏可之とあるを採て文を成せるなり
○二年六月四日案内、此事前文に載せず
○進脚、賦役令に其運脚均出庸調之家皆國司領送とあり
○奬資、原本奬を將に作る金本閣本曾本等に據て

之間、負稲者多、緣無可還頻經歲月、若致切徵、因即迸散、望請、限養老二年以前、無論公私、皆從放免、庶使貧乏百姓各存家業、又謹檢和銅四年十一月廿二日勅、出擧私稲者、自今以後、不得過半倍者、比來出擧多不依法、若臨時徵索、無稲可償者、令其子姪易名重擧、依此奸計、取利過本、積習成俗、深非道理、望請、其稲雖經多年、仍不過半倍、又檢養老二年六月四日案内云、庸調運脚者、量路程遠近、運物輕重、均出戸内、脚奬資　行人勞費者、據案、唯言運送庸調脚直、自餘雜物送京、未有處分、但百姓運物入京、事了即令早還、爲無歸國程粮、在路極難艱辛、望請、在京貯備官物、每因公事送物還、准程給粮、庶免飢弊、早還本土、又無知佰姓不閑條章、規避徭役、多有逃亡、涉歷他鄉、積歲忘歸、其中縱有悔過、還本貫者、緣其家業散失、無由存濟、望請、逃經六年以上、能悔過歸者、給復一年、繼其産業、奏可之、改按察使典號記事、○乙亥、按察使向京、及巡行屬國之日、乘傳給食、因給常陸國十尅、遠江國七尅、伊豆出雲二國鈴各二、

改む字書に奬は助也資は給也とあり　○脚直、民部式に凡調庸及中男作物、送京差正丁充運脚餘出脚直以資とあり諸本直を盡に作る恐くは非
○自餘、閣本自を日に作る恐くは非なり　○但百姓云々、和銅五年十月乙丑紀(九〇頁)に云り　○稊難艱辛、難の字は諸本に據て補ふ　○無知佰姓、靈龜元年五月紀に引けり金本閣本佰を伯に作る百佰伯相通ず　○奏可之、享祿本三代格亦官符を載せて三月十七日とす　○給食、其數量主稅式に詳なり　○十尅、狩谷氏云尅當に作刻　○二國、考證に此下亦當に言刻數恐脫文と云り

(四月)蘇芳色、原本色を也に作る狩谷氏の說に據て改む、彈正式に凡蘇芳色者親王以下參議以上非參議三位及嫡妻女子并孫王並聽著用とあり此と異れり
(五月)王孫、考證に孫王卽二世疎親卽三世以下諸王是也とあり王孫は孫王の顚倒せるなるべし彈正式に衣服色親王者著紫以下孫王准五位諸王准六位とあり
○葛井連、延曆十年正月更に宿禰姓を賜ふ
○白紙、關市令義解に直於白紙錄之不點朱印故曰錄白也とあり
○年料、民部式載する所の年料春米、租春米、別納租穀、別貢雜物等の類なるべし　○養物、神護二年五月紀に始令七道諸國采女養物不論存亡並全輪采女司と見え三代格延曆廿四年三月二日官符にも見ゆ養物とは資物の謂なり　○尺樣、尺の見本なり　○修日本紀、弘仁私記序に日本紀舍人親王及太朝臣安麻呂等奉勅所撰也、書籍目錄に日本書紀三十卷舍人親王撰從神代至持統凡四十代とあり　○系圖一卷、釋日本紀に收むる帝皇系圖卽是なりと云

○夏四月庚戌(廿九)、制、三位已上妻子、及四位五位妻、並聽服蘇芳色、○五月辛酉(九)、制、皇親服制者、以王孫准五位、疎親准六位焉、○壬戌(十)、改白猪史氏賜葛井連姓、○癸酉(廿一)、太政官奏、諸司下國小事之類、以白紙行下、於理不穩、更請內印、恐煩聖聽、望請、自今以後、文武百官下諸國符、自非大事、差逃走衞士仕丁替、及催年料廻殘物、并兵衞采女養物等類事、便以太政官印印之、奏可之、頒尺樣于諸國、先是一品舍人親王奉勅、修日本紀、至是功成、奏上紀卅卷系圖一卷、○乙亥(廿三)、給伊豆駿河伯耆國三尅鈴各一、

○六月壬辰(十一)、文部黑麻呂等十一人賜文忌寸姓、○戊戌(十七)、詔曰、蠻夷爲害、

文部氏は三年五月紀（一四〇頁）に出づ　○黒麻呂、金本閣本黒を星に作る　○漢命五将云々、漢宣帝本始二年秋御史大夫田廣明以下五人を将軍とし兵十五萬騎を率ゐて匈奴を擊たしめたるを云　○驕胡、匈奴を云、原本驕を矯に作る山崎校本に據て改む　○周勞再駕云々、左傳襄三十一年に文王伐崇再駕而降爲臣とあるを云　○西隅小賊云々、二月隼人反して大隅國守陽胡史麻呂を殺せしを云、原本小を等に作る紀略に據て改む等の略體小と相似たるより誤れるなるべし　○怙亂、原本怙を恰に作る閣本に據て改む　○手人、原本午人に作る手の誤なること明なれば改む　○下村主、錄左京諸蕃に下村主後漢光武帝七世孫愼近王之後也とあり　○丈部路忌寸、天平寶字八年十月紀に丈部路忌寸並倉見ゆ、金本閣本等丈を大に作るは非なり　○同言曰、原本曰を内に作る考證に據て改む　○配沒遠方、原本配は請の下にあり沒を役に作る金本閣本淀本に據て改む下同じ又官を宮に作る金本閣本淀本に據て改む　○發遣、遣の字は類史に據て補ふ

自古有之、漢命五將、驕胡臣服、周勞再駕、荒俗來王、今西隅小賊、怙亂逆化、屢害良民、因遣持節將軍正四位下中納言兼中務卿大伴宿禰旅人、誅罰其罪、盡彼巢居、治兵率衆、剪掃兇徒、酋帥面縛、請命下吏、寇黨叩頭、爭靡敦風、然將軍暴露原野、久延旬月、時屬盛熱、豈無艱苦、使使慰問、宜念忠勤、○甲辰、始置神祇官史生四員、○戊申、河内國若江郡人正八位上河内手人刀子作廣麻呂、改賜下村主姓、免雜戸號、○己酉、漆部司令史從八位上丈部路忌寸石勝、直丁秦犬麻呂坐盜司漆、並斷流罪、於是石勝男祖父麻呂年十二、安頭麻呂年九、乙麻呂七、同言曰、父石勝爲養己等、盜用司漆、緣其所犯、配沒遠方、祖父麻呂等爲慰父情冒死上陳、請兄弟三人沒爲官奴、贖父重罪、詔曰、人稟五常、仁義斯重、士有百行、孝敬爲先、今祖父麻呂等、沒身爲奴、贖父犯罪、欲存骨肉、理在矜愍、宜依所請爲官奴、卽免父石勝罪、但犬麻呂依刑部斷、發遣配處、

（七月）杪士、景行紀（紀上一四九頁）に挾杪をカヂトリと訓ぜり仲哀紀持統紀同じ抄舟車部に舵唐韻云舵正船尾也或作柁和語云太以之今案舟人呼挾杪爲舵師是とあり　○從良、官奴を免じて良民と爲すを云

（八月）正二位、紀略二を三に作る　○疥疾、釋名に疹診也有結氣可得診見也、疾は病也患也とあり病患の診見し得べきものを云疥は疹の俗字　○漸留、王儉褚淵碑文に景命不永大漸彌留と見え、病の重態に陷るを云　○繫、原本囚を因に作る諸本に據て改む　○官戸、戸令及賊盜律に據るに家人奴婢が主及主の五等以上の親に姦して生む所の男女、又謀反大逆者父子を官に沒したるを云、戸令に官奴婢年六十以上及癈疾若被配沒令爲戸者並爲官戸至年七十六以上並放爲良とありて奴婢より官戸とし官戸より良民とする規定なりき

○秋七月甲寅、賜征西將軍已下至于杪士物各有差、○壬申、免祖父麻呂安頭麻呂等從良、○八月辛巳朔、右大臣正二位藤原朝臣不比等病、賜度卅人、詔曰、右大臣正二位藤原朝臣疥疾漸留、寢膳不安、朕見疲勞、惻隱於心、思其平復、計無所出、宜大赦天下、以救所患、養老四年八月一日午時以前、大辟罪已下、罪無輕重、已發覺、未發覺、已結正、未結正、繫囚見徒、私鑄錢、及盜人、并八虐、常赦所不免、咸悉赦除、其癈疾之徒、不能自存者、量加賑恤、因令長官親自慰問、量給湯藥、勤從寬優、僧尼亦同之、○壬午、令都下四十八寺、一日一夜讀藥師經、免官戸十一人爲良、除奴婢一十人從官戸、爲救右大臣病也、○壬辰、勑、征隼人持節將軍大伴宿禰旅人、宜且入京、但副將軍已下者、隼人未平、宜留而已屯焉、○癸未、詔、治部省奏、授公驗僧尼多有濫吹、唯成學業者、一十五人、宜授公驗、自餘停之、是日、右大臣正二位藤原朝臣不比等薨、帝深悼惜焉、爲之廢朝、擧哀內寢、特有優勑、弔賻之禮、異于群臣、大臣、近江朝內大臣大織冠鎌足之第二子也、○甲申、詔以舍人親王爲知太政官事、新田部親王

○十一人、狩谷氏云一十人に作るべしと
○奴婢、奴婢には官私の別あり官の奴婢は謀反大逆人の家の奴婢を官に没したるを云
○壬辰、考證に十二日壬辰當叙丁亥下とあり　○持節將軍、持節以下隼人に至る二十三字原本なし金本曾本淀本に據て補ふ　○留而已屯、已恐くは衍　○濫吹、濫に吹擧するを云　○内大臣、職原抄に孝德天皇御宇以中臣鎌子連始爲内臣天智朝擧爲内大臣此時位在左右大臣上とあり　○諸請内印、原本請の字なし金本閣本に據て補ふ太政官式に凡請内印文作二通一通奏進一通施行とあり

爲知五衛及授刀舍人事、○丁亥、詔、諸請内印、自今以後、應作兩本、一本進内、一本施行、

○下毛野、此下疑くは川内の二字を脱す
○從五位上阿倍朝臣、原本上を下に作る正月甲子紀に據て改む
（九月）正五位下、原本下を上に作る正月甲子紀に據て改む
（十月）是人、二年正月紀是人に作る
○君子、原本若子に作る上文及下文に據て改む
○高向朝臣、原本向の字なし靈龜二年四月紀（一一九頁）に據て補ふ
○益、原本盜に作る正月甲子紀及和銅三年紀に據て改む
○攝津守、考證云守疑當作亮

○九月庚戌朔、日有蝕之、○辛未、諸國申官公文、始乘驛言上、○丁丑、陸奥國奏言、蝦夷反亂、殺按察使正五位上上毛野朝臣廣人、○戊寅、以播磨按察使正四位下多治比眞人縣守爲持節征夷將軍、左京亮從五位下下毛野朝臣石代爲副將軍、軍監三人、軍曹二人、以從五位上阿倍朝臣駿河爲持節鎮狄將軍、軍監二人、軍曹二人、卽日授節刀、○冬十月戊子、以從四位上石川朝臣石足爲左大弁、從四位上笠朝臣麻呂爲右大弁、從五位上中臣朝臣東人爲右中弁、從五位下小野朝臣老爲右少弁、從五位下大伴宿禰祖父麻呂爲式部少輔、從五位下巨勢朝臣是人爲員外少輔、從五位上石川朝臣君子爲兵部大輔、正五位上大伴宿禰道足爲民部大輔、從五位下高向朝臣大足爲少輔、從五位上車持朝臣益爲主税頭、從五位上鍛冶造大隅爲刑部少輔、從五位下阿倍朝臣若足爲大藏少輔、從五位下高橋朝臣安麻呂爲宮内少輔、從五位下當麻眞人老爲造宮少輔、從五位下縣犬養宿禰石次爲彈正弼、從五位下大宅朝臣大國爲攝津守、從五位下高向朝臣人足爲尾張守、從五位上忍海連人成爲安木守、○丙申、始置養民、造器、及造興福寺佛殿、三司、○壬寅、詔遣大納言正三位長屋王、中納言正四位下大伴宿禰旅人、就右大臣第宣詔、贈太政大臣正一位、○十一月丙辰、南嶋人二百卅二人、授位各有差、懷遠人也、○甲戌、勑陸奥、石背、石城三國調庸并租、減□之、唯遠江、常陸、美濃、武藏、越前、出羽、六國者、免征卒及廝馬從等、調庸并房戸租、○乙亥、河内國堅下堅上二郡、更號大縣郡、○十二月己亥、詔除春宮坊少屬少初位上朝妻金作大歲、同族河麻呂二人、并男女雜戸、籍賜大歲池上君姓、河麻呂河合君姓、○癸卯、詔曰、釋典之道、教在甚深、轉經唱禮、先傳恒規、理合遵承、不須輙改、比者、或僧尼自出方法、妄作別音、

○安木守、安木卽ち安藝
○養民、養民司は天平寶字四年六月紀に見ゆ
○造器、二月乙酉（一四七頁）に撿挍造器司見ゆ
○興福寺、奈良にあり、大和志に興福寺、和銅三年三月藤丞相不比等建于和州平城梨原厩坂故名厩坂寺又名山階寺、初以在山州山階也とあり
○右大臣第、原本第を弟に作る金本閣本等に據て改む
○贈太政大臣正一位、補任此下に諡曰文忠公食封資人並如全生とあり（十一月）南嶋、上（一〇頁）に出づ
○甲戌、以下四十八字類史八十三に據て補ふ
○堅下堅上、狩谷氏按河内國大縣郡有賀美鄕安宿郡有資母鄕蓋是堅上堅下乎並見和名抄と云り今中河内郡に堅上村堅下村あり
○大歲、原本大藏に作る上文及天平十九年正月紀に據て改む
○池上君、姓氏錄に載せず
○河合君、錄左京皇別に川合公上毛野同氏とあれ

ど同氏なるか詳ならず
○釋典、紀略釋尊に作る
○理合遵承、三代格合を事に作る
○恐汗法門、原本汗を汗に作る金イ本に據て改む三代格濫に作る
○漢沙門、考證に漢は唐と云が如しとあり
○道榮、元亨釋書に傳あり
○餘音、類史延曆十二年四月丙子制に自今以後、年分度者、非習漢音勿令得度、とあり
【養老五年】致敬、敬禮を致すを云儀制令に凡元日不得拜親王以下唯親戚及家令以下不在禁限若非元日有應致敬者四位拜一位五位拜三位六位拜四位七位拜五位以外任隨私禮と見ゆ
○到人、金本閣本曾本到を官に作る
○多治比眞人三宅麻呂、多治比眞人の五字は上文に據て補ふ
○藤原朝臣馬養、原本に上朝馬養とあるは誤脫あること明なり淀本に小野朝臣馬養に作り考證には藤原朝臣馬養とす小野馬養にては位階合はず故に考證に據て補訂す
○吳肅胡明、神龜元年五月辛未紀に賜從五位下吳肅胡明御立連と見ゆ
○百村、一本に村は枝に作ると云
○鹽屋連吉麻呂、錄河內皇別に鹽屋連武內宿禰男葛城曾都比古命之後也とあり吉麻呂は考證に或作古麻呂又作土麻呂依類聚國史懷風藻及令義解序作古麻呂爲正とあれど義解序には見えず懷風藻にも兩樣に書せり故に姑く舊に據る
○退朝之後、後の字は諸本に據て補ふ
○國士、史記刺客傳に見ゆ字書に謂四一國之內所共推爲才士也とあり
○退食自公、毛詩國風召南に出づ自公退食ともあり公務を勤め訖て食事をするを云
○康哉之歌、尙書虞書益稷に乃賡載歌曰、元首明哉、股肱良哉、庶事康哉とあるを云
○斯在、原本斯を期に作る諸本及類史に據て改む
○斯崇、原本斯を期に作る諸本及紀略に據て改む

遂使後生之輩積習成俗不肯變正恐汗法門從是始乎宜依漢沙門道榮學問僧勝曉等轉經唱禮餘音並停之

五年春正月戊申朔武藏上野二國並獻赤烏甲斐國獻白狐尾張國言小鳥生大鳥○己酉制諸司官人於本司次官以上致敬常所聽許自今以後不得更然若違此旨一人到卿門者到人解官同僚降考○庚戌雷○壬子授正三位長屋王從二位正四位下巨勢朝臣祖父大伴宿禰旅人藤原朝臣武智麻呂從四位上藤原朝臣房前並從三位從四位下六人部王從四位上從五位上高安王門部王葛木王並正五位下從五位下櫻井王佐爲王並從五位上正四位下多治比眞人縣守多治比眞人三宅麻呂正五位上藤原朝臣馬養並正四位上從五位下藤原朝臣麻呂從四位上從五位下下毛野朝臣虫麻呂吳肅胡明並從五位上以大納言從二位長屋王爲右大臣從三位多治比眞人池守爲大納言從三位藤原朝臣武智麻呂爲中納言又授從三位縣犬養橘宿禰三千代正三位○庚午詔從五位上佐爲王從五位下伊部王正五位

上紀朝臣男人日下部宿禰老從五位上山田史三方從五位下山上臣憶良朝來直賀須夜紀朝臣清人正六位上越智直廣江船連大魚山口忌寸田主正六位下樂浪河內從六位下大宅朝臣兼麻呂正七位上土師宿禰百村從七位下鹽屋連吉麻呂刀利宣令等退朝之後令侍東宮爲○辛未地震○壬申亦震○甲戌詔曰至公無私國士之常風以忠事君臣子之恒道爲當須各勤所職退食自公康哉之歌不遠隆平之基斯在災異消上休徵叶下宜文武庶僚自今以去若有風雨雷震之異各存極言忠正之志又詔曰文人武士國家所重醫卜方術古今斯崇宜擢於百僚之內優遊學業堪爲師範者特加賞賜勸勵後生因賜明經第一博士從五位上鍛冶造大隅正六位上越智直廣江各絁廿疋絲廿絇布卅端鍬廿口第二博士正七位上背奈公行文調忌寸古麻呂從七位上額田首千足明法正六位上箭集宿禰虫万呂從七位下鹽屋連吉麻呂文章從五位上山田史御方從五位下紀朝臣清人下毛野朝臣虫麻呂正六位下樂浪河內各絁十五疋絲十五絇布卅端鍬廿口笒術